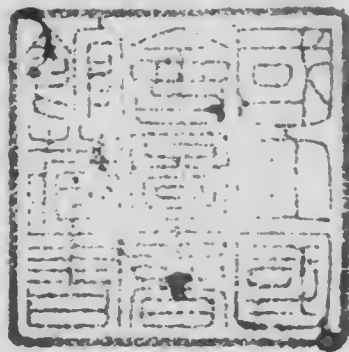


日本國家主義運動史

木下 半治 著



294593

序

一、歐洲にいよいよ大戦が勃發した。これは、單に英國の「民主主義」とドイツの「國民社會主義」との争闘ではない。問題はもつと深いところにある。だがこの戦争でドイツが勝てば國家主義が一層の勢力を得、英國が勝利すれば、民主主義思想が若干盛り返すであらうことは事實だ。しかし、後者の場合でも、一九一九年當時の如き、空漠たるデモクラシーの氾濫を來たすことは、先づないとみてよい。何となれば、國家主義といふものは、今日及び今後の世界を貫く普遍的動向であり、いはゆる獨裁主義國家といはず民主主義國家といはず、その經濟的地盤の狭小化により國內政治としては國家主義化せざるを得ない必然をもつてゐるからだ。そしてこのことは、その國の有つ憲法的機構乃至は國際的態勢とは一應別箇の問題なのである。

一、日本の政治（及び經濟）が、一九三一年頃より國家主義的傾向を濃厚にし來たり、支那事變勃發以來、殊にそれが顯著となつたことは、人の知るところである。しかしながら、それは、滿洲事變

乃至は支那事變を俟つて、始めてさうなつたのではない。その因るところや深く、その來たるところや遠いのである。本書は、さゝやかなるものながら、その間の事情を明かにした積りである。

、本書は、日本國家主義運動史の客觀的な叙述であり、その理論的批判は、本書の範圍外のことゝ屬する。舊著の規準も、さうであつたが、本書は、特に嚴密にこの立場を恪守した積りである。従つて日本國家主義各派の指導理論の究明、日本國家主義運動の將來の展望等は一切割愛した。これらは何づれ稿を改めて記述したいと考へてゐる。

一、本書は、日本革新黨の結成並びに發展を以て終はつてゐる。その後の運動の展開、殊にいはゆる新黨運動と國家主義團體との關係、新種國家主義運動としての日本革新農村協議會及び日本農民聯盟の生誕、その他東方會、社大黨及び革農協の合同のイキサツ等々を述べる豫定で最初はゐた。しかし、本書の紙數が意外に尨大となつたため、それらは、遺憾乍ら割愛するのほかはなかつた。これは、將來何らかの形において補足したいと考へてゐる。

一、去る四月十五日、日本國家主義運動のホープ大日本青年黨統領橋本欣五郎大佐が召集解除となつて東都へ歸還した。大陸の實戰中に得た貴重な體驗を基として、大佐がいかなる飛躍的運動を展開

するか、また、青年黨に刺戟せられて國家主義運動全般がいかなる展開を示すか、文字通り重大なる時局と相俟つて興深きを覺える。

二、最後に、本書の記述に當つて、多くの友人に資料の提示を受け、また多くの先輩の著書、團體機關紙等から示唆を得た。一々名を挙げないが、こゝに一括して厚く謝意を表する次第である。

昭和十四年九月

著 者 識

日本國家主義運動史

目次

序 文

第一章 日本國家主義運動前史

第一節 先驅者時代

一 近代日本國家の生誕

二 全體主義運動の先驅的存在としての玄洋社

三 黑 龍 會

四 浪 人 會

第二節 歐洲大戰による社會的變動

一 近代的勞働者運動の勃興

二 國民主義團體の對內的轉向

目 次

一 序 文 一
二 第一章 日本國家主義運動前史 一
三 第一節 先驅者時代 一
四 一 近代日本國家の生誕 一
五 二 全體主義運動の先驅的存在としての玄洋社 三
六 三 黑 龍 會 七
七 四 浪 人 會 一〇
八 第二節 歐洲大戰による社會的變動 一
九 一 近代的勞働者運動の勃興 三
一〇 二 國民主義團體の對內的轉向 五

第二章 近代的國家主義への行進

第一節 國民社會主義運動の生誕

三大日本國粹會	六
四關東國粹會	九
五大和民勞會	二
六赤化防止團その他の活動	三
七和製黑シャツ黨Ⅱ大日本正義團	九
八愛國社の存在	三
一革新的要求の提示	五
二老壯會の歴史的意義	六
三猶存社の運動	四〇
四猶存社の傍系團體	四
五白狼會	四

六 行地社の足跡……………四八

七 左翼陣營よりの轉向者の先驅——高島素之の地位……………五二

八 經綸學盟……………五四

九 建國會の活動とその衰退……………五五

第二節 恐慌の進化と國家主義の昂揚……………五九

一 恐慌と合理化……………五九

二 國家主義團體の叢出……………六一

三 全國的國民主義黨統成の企圖……………六四

四 國家主義團體の統一運動……………八一

第三章 滿洲事變による社會的大轉換……………九一

第一節 滿洲事變と新政治勢力の擡頭……………九二

一 滿洲事變前の國內情勢……………九二

二 軍人と政治……………九三

三 神武會の創立	六
四 在郷軍人政治團體の發展	一〇〇
五 國本社の活動	一二一
六 金鷄學院の存在	一二五
七 國維會と所謂新官僚の動き	一二七
八 愛國的學生團體について	一二九
第二節 血盟團事件	一二五—一二三
一 個人的テロの頻發	一二五
二 血盟五人男の存在	一二七
三 井上日召の人物	一三〇
四 血盟團事件の公判	一三三
第三節 五・一五事件	一三四—一三五
一 大事件の勃發	一三四
二 五・一五事件の計劃	一三六

三	五・一五事件のイデオロギー	一四〇
四	五・一五事件の影響	一四七
五	農民決死隊と愛郷塾	一四九
六	五・一五事件の處理	一五二
第四節	無產政黨の轉向	一五六—一六二

一	近代的國家主義と大衆組織	一五六
二	社會民衆黨の分裂	一五八
三	全國勞農大衆黨の動搖	一七三
四	日本國民社會黨準備會の運動	一八二
五	新黨結成綜合準備會の決裂と日本國家社會黨の結成	一八八
六	新日本國民同盟の創立	一九二
七	最右翼陣營よりの轉向者	一九六
第四章	昂揚より沈滞へ	一九三—二〇四

第一節 國家社會主義運動の退潮……………二〇二—二〇九

一 客觀情勢の變化……………二〇三

二 日本國家社會黨の分裂……………二〇六

三 日本勞働同盟の成立とその分裂……………二〇九

四 國民協會の設立と青年日本同盟の結成……………二一四

五 新日本國民同盟の內紛……………二一七

第二節 神兵隊事件……………二二〇—二二四

一 事件の概要……………二二〇

二 大日本生産黨への打撃……………二二三

第五章 運動再建への努力……………二二五—二三三

第一節 國家主義團體の統一の企圖……………二三五—二三六

一 國難打開聯合協議會……………二三五

二 國體擁護聯合會の組織……………二三六

三	自治農民協議會の活動	二二〇
四	日本國家社會主義全國協議會	二二三
五	愛國運動一致協議會	二二七

第二章 民間國家主義團體の沈滞と政治の底流 二四〇—二五三

一	大日本國家社會黨の成立	二四〇
二	勤勞日本黨の結成	二四六
三	青年日本同盟の分裂	二四九
四	昭和神聖會の出現	二五一
五	維新懇話會に現はれたる統一への動き	二五五
六	陸軍パンフレットその他	二五七

第六章 一一・一二六事件を中心として 二六五—二九〇

第一節	一一・一二六事件前の情勢	二六五—二九〇
一	機關說排撃と國體明徴運動	二六五

二 永田事件	二七〇
三 神武會の解散と中核組織論・大衆的組織論の對立	二七一
四 事件直前に於ける愛國團體の勢力	二八三
第二節 二・二六事件の經緯	二九一—三九五
一 事件の勃發	二九一
二 事件發生の理由	二九四
三 叛亂將校のイデオロギー	二九七
四 占據部隊中央部の動靜	二九九
五 鎮壓の過程	三〇三
第三節 二・二六事件の處置	三〇六—三三五
一 直接關係者の處分	三〇六
二 副次的關係者の處分	三一二
三 廣田內閣の成立難と事件に關聯する肅軍人事	三二五

第七章 一一・一二六事件後の國家主義陣營

三三—四六

第一節 統一運動の二潮流

三三—三四

一 事件直後の彈壓

三三

二 二月會の統一運動

三四

三 全愛國團體統一聯盟の成立

三六

四 維新政黨準備會の結成

三四

五 その他の國家主義者の動き

四五

第二節 愛國勞働團體の統一運動

三七—三八

一 愛國勞働組合全國懇話會結成運動の再出發

三七

二 懇話會の組織及び活動

三五

三 政黨問題に關する内部對立

三六

第三節 勞農協議會運動

三三—三七

一 愛國農民戰線統一の提唱

三三

一 關西皇國勞動協議會の成立	三六五
----------------	-----

第四節 國家主義青年分子の統一運動	三七九
-------------------	-----

一 統一運動のイニシヤチーヴ	三七一
----------------	-----

二 關東側の動き	三七二
----------	-----

三 全國的結成なる	三七四
-----------	-----

第五節 三六俱樂部を中心とする運動	三八〇—四六六
-------------------	---------

一 小林順一郎大佐と三六俱樂部	三八〇
-----------------	-----

二 時局協議會成る	四八八
-----------	-----

三 時協反對派「大和聯盟」の結成	四三二
------------------	-----

第八章 支那事變以前の統一運動	四三七—四六六
-----------------	---------

第一節 政局の動搖	四三七—四四五
-----------	---------

一 庶政一新の要求	四三七
-----------	-----

二 宇垣内閣の流産	四四一
-----------	-----

三 林内閣の成立と國家主義團體の支持	四二
第二節 膺徵解散と議會派・反議會派の抗争	四六—四八〇
一 議會派の結束と日本政治革新協議會	四六
二 反議會派の奮起と純正維新共同青年隊の運動	四八
三 總選舉戦における議會派・反議會派の對立	四九—五一
第三節 近衛内閣の出現	四六一—四七〇
一 近衛内閣の本質と國家主義團體の態度	四六一
二 非議會派の態度	四六二
三 議會派の態度	四六七
第四節 時協對政改革の對立の公然化	四七一—四七五
一 對立の激化と橋本派の調停	四七一
二 全日本維新團體協同聖戰政黨排撃同盟の結成	四七二
三 青年層の批判	四七四
第五節 日本革新黨の成立	四七六—四八六

第九章 支那事變と愛國運動

四八七—五七

第一節 事變による激動

四八七—五〇〇

一 蘆溝橋事件突發

四八七

二 國家主義團體の奮起

四八八

三 思想戰の強調人民戰線打倒期成同盟の活動

四九八

第二節 無產團體の轉向

五〇一—五二三

一 轉向の客觀的必然性

五〇一

二 社大黨の急轉向

五〇二

三 勞働團體の動向

五〇六

四 左翼派勞農團體の轉向

五〇九

五 無産團體轉向の實績

五二

第三節

大日本青年黨における變動

五二四—五二

一 大日本産業労働團の結成

五四

二 統領橋本欣五郎大佐の應召出征

五六

三 留守部隊の發展

五二七

第四節

電力國家管理案の登場と國家主義團體の態度

五三一—五元

一 管理案の意義

五三

二 國民大會の開催

五三

三 各愛國團體の支持

五五

第五節

日本革新黨のその後の活動

五四〇—五五七

一 黨組織の整備

五四〇

二 ファイリッピンへのメッセージ

五四一

三 國民總動員法案に對する態度

五四四

目次

目次

一四

四	新黨運動への體勢	五四六
五	近衛内閣の改造と板垣・東條兩將軍への期待	五四九
六	日本革新青年隊の結成	五五一



第一章 國家主義運動前史

第一節 先驅者時代

一 近代日本國家の生誕

今や、日本の政治・經濟・思想・社會の各分野において、ますますその指導的立場を堅固にしつゝあるものは、國家主義である。人は、各々、その好むところに従つて、これを近代的國民主義と呼ぶもよい。また、これを國粹主義といひ、日本主義あるひは皇道主義と稱するも可なりである。この日本の國家主義のイデオロギー的淵源は、その基礎をなす日本の政治的・經濟的組織のそれと同じく、これを明治元年（一八六八年）の明治維新に求めねばならないのである。

明治維新によつて、日本は、地方分權的封建國家から、中央集權的・國民的近代國家となつた。いな、より正確にいへば、然るものたらんとしたのである。従つて、明治維新の變革によつて徳川幕府を倒した新生日本は、一個の近代的・獨立的民族國家としての自己完成に忙しかつた。明

治の變革過程それ自體のスローガンは、人も知る如く、尊王攘夷といふことであつた。その精神は、今日の國家主義即ち近代的國民主義に至るまで、一本の「赤い糸」の如くずつと貫いてゐるのではあるが、その具體的發現形式は、明治新政府成立忽々、早くも變更を受けねばならなかつた。尊王については、變りはない。だが攘夷といふことは、——元來が極めて政策的に産み出されたものともいはれるのであるが——そのまゝ新政權のスローガンとして用ひるわけには行かなかつた。こゝにおいて、尊王攘夷は尊王開國となつたのであるが、このスローガンに窺はれる攘夷主義の修正は、二つの面において現はれた。一つは、その對蹠的な發現ともいふべき、極端なる歐化主義であり、他は、攘夷主義の積極的發展形式たる大陸進出論である。

歐化主義の積極的な表現は、經濟的には西歐的資本主義制度の採擇であり、政治的には西歐的・近代的・立憲的政治制度の採用である。また、その消極的な表現は、いはゆる鹿鳴館時代にみられる盲目的・狂燥的な西歐模倣である。前者の實現のためには、民間において、猛烈なる「自由民権」運動を勃發せしめ、また、後者の餘弊としては、浮薄なる東西混婚による日本人種改良論や、近視眼的條約改正運動が起つた。日本國民主義は、先づこれらの反動として現れた。即ち、國民主義者よりみれば、いふところの自由民権運動なるものは、日本古來の國粹と相

容れぬものであり、殊に鹿鳴館時代に日本社會の上下を掩ふた鼻もちならぬ媚歐主義は、彼等の耐ふるところではなかつた。この積極消極兩方面の歐化主義に對する反感が、維新當時以來の大陸進出論と結びついて、こゝに、日本國民主義のイデオロギー及びその運動がスタートしたのであつた。

二 國家主義運動の先驅的存在としての玄洋社

明治初年における大陸進出論は、種々の事件となつて現はれた。先づ第一に、明治五年（一八七二年）には、韓國即ち朝鮮征討を主張する萩の亂（前原一誠）があり、明治七年（一八七四年）の佐賀の亂も、首魁江藤新平が征韓論に敗れて政府を退いたことが發端となつてゐる。同じ年（明治七年＝一八七四年）には、琉球列島の占領が敢行せられ、また臺灣征伐が行はれてゐる。その翌年、即ち明治八年（一八七五年）には、韓國政府に最後通牒が送られてゐる。

これら一連の出來事のうちに、最も大規模で、日本の上下を震撼せしめたものが、明治十年（一八七七年）の西南戦争である。薩軍の總將西郷隆盛は、豫ねてより猛烈なる大陸進出論者であり、つとに韓國膺懲を強調してゐた。隆盛の急進的な征韓論は、大久保利通らの漸進的自重論の抑

へるところとなり、隆盛は、不平に耐えずして野に下つた。これが、有名なる西南戦争の第一頁である。

西南の役は、たゞに明治初年における最大の擾亂事件たるのみならず、實に今日の日本國民主義運動に直接の關係をもつ最初の出來事であつた。即ち、それは、玄洋社の生誕と深いつながりをもつのである。

日本の國家主義史上に重大なる地位をもつ玄洋社は、明治十年（一一八七七年）に、平岡浩太郎及び頭山滿らによつて九州福岡において創立せられたものである。兩人は、共に、當時明治維新政府に對する不滿を有し、これに公然且つ形式的に協力することを好まなかつたといはれる。殊に、平岡浩太郎は、西郷隆盛の征韓論に共鳴するところがあり、西南役には薩軍に投じたが、後、民黨として活躍した。玄洋社設立の趣旨は、大陸進出の實行にある。その名稱は、玄海灘の波濤を越えて遠くアジア大陸に進出せんとする抱負の表明であり、今日大多數の國家主義團體の中心スローガンの一たる、大亞細亞主義を標榜する最初の有力なる實行團體であつた。

この玄洋社は、日清、日露の兩役、朝鮮問題——なかんづく日韓合併問題、滿洲經略等々において、いはゆる民間志士として多大の活動をなした。しかしながら、その活動の多くは、裏面的

工作であつて、正式の記録として残されてゐるものが、寔に少ない。即ち玄洋社は、その活動により、専ら日本國家の發展に對して、縁の下の力持ち的なる貢獻をなすところがあつたのである。しかし、吾々がいま玄洋社の名を特にこゝに擧げる所以は、玄洋社固有の活動それ自體のためではなく、それは、第一に、現在日本の國民主義團體の多數が直接的・間接的にこの玄洋社から系統を引いてゐるといふことゝ、第二に、玄洋社の創立者の一人たる頭山滿が、第三者には想像し難きほどの信頼を、今日の國民主義團體の間に有し、隱然たる大御所的存在となつてゐるが故である。

玄洋社よりは、多くの國民主義團體が分岐してゐるが、その先頭を切つたものは、明治三十四年（一九〇一年）一月、内田良平によつて創立せられた黒龍會である。内田良平は、頭山滿門下の逸足であつて、黒龍會設立の際、頭山翁はその會員たることを要請せられたが、翁はこの請ひを容れずして、單にその後援を約するに止まつたともいはれる。

次に玄洋社と直接關係をもつた有名なる國民主義團體は、浪人會である。黒龍會及び浪人會については、後述することゝする。

玄洋社と關聯して一寸述べて置かねばならぬのは、吉田三郎の大統社である。吉田三郎は、福

第一章 國家主義運動前史

岡縣の産にして、始め玄洋社に學び、後東京の杉浦重剛の稱好塾に入つた。その間、頭山滿、進藤喜平太、杉浦重剛等の影響を受け、大正十五年（一九二六年）暮、東京に於いて組織したのが東京大統社である。

元來、大統社とは、大阪の新聞記者武井裕が青年を集めて作つた柔道々場（今の洪水會）が發展して大正十三年に創立せられたものである。吉田三郎は一時、後述清水行之助の大作社に身を寄せてゐたが、後、大阪に下り、武井裕を助けてこの大阪の大統社を世話したのであつた。大正十四年、清水行之助らと共に滿洲に渡り、所謂大連遼東新報大來社長事件なるものに關係したが、投獄せられ、出所後滿蒙問題につき深く考ふところあり、玄洋社時代の經驗を喚起して大連に大連大統社を設立した。後、病を得て歸國し、大正十五年東上して東京大統社を組織することゝなつたのである。

東京大統社は、左の如き綱領をもち、大體において大亞細亞主義の團體である。たゞその第三項に國內改革的の意圖の包藏されてゐるのを窺ひ知るのみである。思ふにこれは大行會の清水行之助の影響によるものであらう。

東京大統社綱領

一、大統社は光輝ある我國體宣揚のため決死殉難の志士に依つて結ばれたる血盟なり。

一、大統社は新興日本の機運に副はざる制度、不條理なる制度なる舊惡制度の改廢を期す。

一、大統社は弱小亞細亞民族の大同團結を策し、奪はれたる亞細亞の奪還を期す。

一、大統社は進んで外壓の武裝的鐵鎖を斷ち人種の平等、入國貿易の自由を提唱し世界人類の共存共榮を期す。

二、大統社は一切の行動世俗の毀譽褒貶を顧みず只天の照鑑、審判を待つ。

大統社は、杉浦重剛門下の中野刀水の援助を得て青年の塾教育を始め、中山博道により劍道を彼等に教へ、郷里福岡縣に大統社工業塾を、千葉縣八幡町に大統社農業塾を開く等、多岐なる活動力を示した。

三 黒 龍 會

日本人の耳に親しい黒龍會の名は、いふまでもなく今日の滿・ソ國境を流るゝ黒龍江よりとつたものであつて、大亞細亞主義がその中心的イデオロギーである。明治二十七、八年（一八九四—九五年）の日清戰役後に起つた、かの有名なる露獨佛の三國干涉に憤慨措くところを知らず、

明治三十三年（一九〇〇年）の北清事變の直後に設立せられたものである。首領内田良平のほか、伊東知也、吉倉旺盛、本間九介、葛生修亮、平山周、權藤震二、尾島行昌、秋山長次郎等々の諸豪傑の名が、創立當時に挙げられてゐる。

黑龍會の綱領は左の如くである。――

一、吾人は肇國の宏謨を恢暢して東方文化の大道を闡明し、進んで東西文明の深和を圖り亞細亞民族興隆の指導者たることを期す。

一、吾人は法治主義の形式に偏して人民の自由を束縛し時勢に常識を缺き公私の能率を障礙し憲政の本旨を没却したる百般の宿弊を一洗し以つて天皇主義の妙諦を發揮せんことを期す。

一、吾人は現行制度を改造し外交を振作して海外の發展を圖り、内政を釐革して國民の福利を増進し、社會政策を確立して勞働問題を解決し以つて皇國の基礎を鞏固ならしめんことを期す。

一、吾人は軍人勅諭の精神を奉體して尙武の氣風を振作し、國民皆兵の實を擧げ以つて國防機關を充實せしめんことを期す。

一、吾人は歐米に模倣せる現代教育の根本的改革を圖り國體に淵源せる國民教育の基礎學を建

設し、以つて大和民族の公德良智を向上發達せしめんことを期す。

この綱領の中心は、固より第一項の亞細亞主義と、第二項の天皇主義の高唱にある。第二項に「法治主義の形式」に偏して「人民の自由を束縛」することを排斥してゐるのは、明治政府の官僚主義に嫌焉たる黒龍會の面目躍如たるものありといふべく、第三項の「現行制度の改造」、「社會政策の確立」、「勞資問題の解決」等々の國內改造綱領は、同會が新しき社會的潮流に棹さして近代の國民主義團體たらんとする決意を表示したものであつて、かゝる意味において注目すべき條項である。第四項「武道振作」、「國防充實」は、また實踐方面において黒龍會が重要視せしところである。

しかしながら、黒龍會の本領は、前述の如く表面的に現はれたところよりも、むしろ裏面的な活動にある。黒龍會の前身ともいふべき天佑俠團が明治二十七年（一八〇四年）に韓國において東學黨の亂に参加したのは有名であるが、その後もアナギルドのフィリップス獨立運動、孫文の支那革命運動、日清、日露の兩役、北清事變等々、東亞の風雲を捲き起した大事件には、必ずその裏面に同會系統の志士の活動があり、それは、表面に現はるところ少なく、従つてまた報ひらるゝところも多くなかつたが、日本國家の對外的發展には、かなりの寄與をなした。

黒龍會の名を特にこゝに記する所以は、同會が明治初年に簇生した國家主義團體のうちでも、特に實力を有つてゐたこと、玄洋社の傳統を發展させて多くの國家主義者及び國家主義團體を生んだこと、多くのその類似團體と異なり、多少なりとも國家主義的、近代國民主義的なる綱領を掲げ、「國內改造」と「既成政黨」の打破を叫び、素朴ながらもいはゆる「社會事業」に手を染め、赤坂溜池のあたりに勞働宿泊所や「自由食堂」等を經營して一部勞働者との接近を策したこと、首領内田良平が「最後の御奉公」として大日本生産黨の組織者となつたこと、等々にある。

かくの如く、黒龍會は、その歴史の舊きにも拘はらず、一面において極めて近代的な國家主義的色調を具有してゐた異色ある團體であつたが、その組織方針は、矢張り封建的なる舊套を脱し得ず、結局は、首領内田良平なる個人的傑物を中心とした非大衆的なる集團であつたといへよう。而して、この點は、同時にまた日本の國民主義團體に程度の差こそあれ、共通した特徴でもあつたのである。

四 浪 人 會

浪人會は、玄洋社同人中、福岡縣人に非らざる人士が相集まつて別個に組織したものであつて、

明治四十一年（一九〇八年）の創立に係る。これは、玄洋社の別働隊ともいふべきものであつて、三浦梧樓（觀樹將軍）、頭山滿、佐々木安五郎（蒙古王）、美和作次郎、古島一雄、小川運平、野添宗三（兵庫縣選出代議士）等が、中心人物であつた。その顔振れからみると、犬養毅の國民黨的色彩の強いことが感ぜられる。

浪人會の集まりは、談論風發、まさに一世の偉觀であつたとのことであるが、浪人會がその勇名を雷の如く轟かしたのは、大正初年のデモクラシー勃興の氣運に反對して活動し、なかなづく大正七年秋、當時のデモクラシー運動の中心人物たる帝大教授吉野作造博士と神田南明俱樂部において立會演説を行つたこと、及び當時烏井素川、長谷川如是閑等を集めてデモクラシー派の集窟の如くみられてゐた大阪朝日新聞の自由主義的傾向を憤慨し同社長村山龍平を大阪中之島公園に襲撃・毆打した事件である。吉野博士との立會演説は、同年十二月下旬における黎明會及び東大新人會の二團體創立の端緒となつた。前者は、當時の自由主義者及び民主主義者の大同團結であり、後者は、學生社會科學運動の草分けであつた。かゝる意味においても浪人會は、日本の社會運動に、一個の歴史的地位をもつたのであつた。

第二節 歐洲大戰による社會的變動

一 近代的勞働者運動の勃興

一九一四年—一八八年のヨーロッパ大戰は、日本の政治・經濟・社會及び思想の各方面に對し、異常なる影響を與へた。先づ經濟的にみれば、戰爭による外國商品の輸入杜絶は、嫌應なしに日本産業の「獨立」化を招來した。日本の産業は、輸入外國商品の杜絶によつて生じた間隙を埋めて國內需要に應じたのみならず、交戦中のヨーロッパ各國並びにこれらのヨーロッパ諸國の産業に依存してゐた諸植民地に對して、平和商品並びに軍需資材を供給するためのことを目的とする「國產獎勵」は、日本資本主義の飛躍的な發展を齎らし、日本資本主義はこの時を轉機として、獨占的段階に入つたのであつた。

日本資本主義が發展し、資本の集中及び獨占が行はれ、生産規模が擴張されたことは、日本における近代的勞働者運動勃興の經濟的・物質的素地を形成するものであつた。工場が増設され、多くの人々が工業に吸収せられ、勞働者の數的勢力を偉大なものたらしめたが、物價騰貴による

生活難は、勢ひ彼等を刺戟せざるを得なかつた。一方において、ヨーロッパ大戰の政治的・思想的影響が、日本の民衆の心を洗つた。ヨーロッパ大戰が英・獨兩資本主義國の世界制覇の争ひであつたことは、今日誰も疑はぬ一個の客觀的事實であるが、戦争そのものは、正義・人道の名を以て戰はれた。換言すれば、聯合軍は、この大戰を以て、ドイツの野蠻主義・專制主義に對する英・佛の人道主義・民主主義の聖戰として宣傳したのである。従つて、一九一八年にドイツが刀折れ矢盡きて屈するや、英・佛・米側は、これを以てオートクラシーに對するデモクラシーの勝利であるとなした。この見解は、世界的に承認せられ、日本においても、しかるものとして受けとられた。こゝにおいてか、日本のあらゆる社會層は、戦争後、澎湃として押し寄せてきたデモクラシーの波に、根こそぎに洗はれることゝなつたのである。なかんづく、インテリゲンツィアが、その最も深刻なる影響を受け、次いで都市の勞働者及び農村の農民階級がこれに倣つた。これが即ち日本の近代的勞働者（及び農民）運動勃興の政治的・精神的基礎である。一九一七年（大正六年）のロシア革命が、デモクラシーの洗禮を受けたばかりのインテリゲンツィア、都市勞働者及び地方農民にかなりの影響を與へたことは否定し難い事實であらう。また大正七年（一九一八年）八月の米騒動も、この時代の產物として記録さるべきであらう。

大戰後の日本にあつては、一方において不健全なる成金の風潮が横行すると同時に、他方においては、勞働爭議及び小作爭議が各所に頻發し、勞働組合及び農民組合が續々と組織せられた。また、この時代の歴史的特異性として指摘さるべきは、ソシアリズムと勞働者階級との結合といふことであらう。從來、日本のソシアリズムといへば、一部のルンペン的小ブルジョアのインテリの私有物であり、一般大衆とは赤の他人であつた。明治四十年（一九〇七年）の幸徳事件以後は、特に然りである。しかるに、ヨーロッパ大戰後は、比較的眞摯なるインテリ及び學生層が、デモクラシー及びその發展的延長としてのソシアリズムの理論に捉へられ、彼等が媒介となつて、ソシアリズムが勞働者（及び農民）階級に齎らされた。帝大新人會その他の學生及び智識層の研究團體の組織、大正九年（一九二〇年）における社會主義同盟の成立がその里程標である。また、ソシアリズムそのものも、從來はフランス流のアナルコ・サンディカリズム（左翼系）に非らずんばドイツ社會民主黨流の議會主義的ソシアリズム（右翼系）を意味したが、一九一七年以後は、ロシア流のコミユニズム乃至左翼的マルクシズムが勢力を得ることゝなつたのである。

大戰中における日本資本主義の爛熟とその政治的表現たるデモクラシーの導入とは、日本の上層政治において、大正六年（一九一七年）の原内閣をトップとするいはゆる政黨政治時代を招來

した。永年の間、日本の政治において冷飯を食はせられて來た政黨が華やかなる脚光を浴びて政治の第一線に登場し來たつたのはいゝが、その勢ひの赴くところ、つひに黨人に非らざれば人に非らずといふ風潮を生み、從來の政治の擔當者たる官僚及び軍人は、背景に押しやられた。而して、この風潮の嵩するところ、いはゆる黨弊となつて現はれ、後日の國民主義者奮起の一契機を作つたのであつたが、一方、それは、政治各方面における民主主義化を招來し、普通選舉（大正十三年）陪審法施行等々の諸政策となつた。しかし、同時に勞働者運動取締方法も強化せられ、大正十一年（一九二二年）三月の過激社會運動取締法案の提出、及び大正十三年（一九二四年）の治安維持法の制定は、この方針を表示するものであつた。

二 國民主義團體の對內的轉向

近代的勞働者運動の勃興と、これを抑制せんとする國家的必要とに刺戟されて、この頃には、愛國主義、國粹主義、反社會主義を標榜する團體が、誠に多く組織せられた。從來、大亞細亞主義を主要指導精神とし、専ら日本國家の對外的發展のみを思念してきた國民主義團體は、漸くその眼を對外問題より國內問題に轉じ、社會主義運動の撲滅と勞働運動の抑制とを念願とするに至

つた。これらの團體が等しく掲げたスローガンは、「國粹保存」といふことであつた。その頃組織せられたこの種の團體のうちで有名なるものは、大正七年（一九一八年）四月に組織せられた大正赤心團及び皇道義會、大正八年に組織をみた國粹會關東本部、即ち關東國粹會、同じ大正八年十月に組織の大日本國粹會、同年六月に組織せられた縱横俱樂部、大正十年（一九二一年）一月に組織せられた大和民勞會、大十一年（一九二二年）十一月に結成した赤化防止團及び大正十四年（一九二五年）二月に組織せられた日本正義團等々である。少し遅れて昭和三年（一九二八年）

八月一日組織せられた愛國社もこのカテゴリーに屬するものとみて可なりであらう。

以上の諸團體は、思想的には、玄洋社——浪人會の系統を踏むものであるが、多くなかには、主として政友會、時には民政黨といふ既成政黨の院外團的性質を帯びたものもあつた。かゝる團體は、その運動資金を専ら資本家及び政黨幹部に仰ぎ、従つて漠然たる反共產主義、反社會主義といふこと以外に獨自の明確なる積極的綱領を有せず、その會員のうちには、院外團的壯士、土木業者、土方、人足といふ封建的職業者が多かつた。

三 大日本國粹會

戦後のデモクラシー全盛時代に輩出した國民主義團體のうちで、最も有名且つ有力であつたのは、大日本國粹會である。これは當時の原内閣の内務大臣にして「國粹保存」の信奉者たりし床次竹二郎が肝入りとなり、關西の西村伊三郎、關東の青山廣吉、篠信三郎など、いふ俠客達が提携して創立したものである。國粹會の綱領は、通常左の如きものとされてゐる。――

一、皇室を中心として民族の統一を計り盛んに經綸を行ふ事。

一、政治を俠道により行ひ政治家に信義を守らしむる事。

一、韓國併合以來二十年東亞の天地今猶擾亂熄まず生民塗炭に苦しむ、之を救ふは日本國民の天職と信ずる事。

一、敬神崇祖の念を昂め國民の思想を善導する事。

一、勞資の協同により資本家勞働者相互の共存共榮を圖り國民生活の安定を得せしめる事。右と併行して、今一つ杉浦重剛の筆になるといふ別個の綱領が存在してゐる。兩綱領の何れが

重要視せられてゐるかは俄かに明かでないが、杉浦重剛は、國粹會なる名稱の名付親として傳へられてゐるから、この綱領は、原始綱領であるかとも考へられる。この綱領の文言は、次ぎの如きものである。――

一、本會は意氣を以て立ち、仁俠を本領とする集團なり。

一、皇室を中心として、普く同志を糾合し國家の緩急に應じて、奉公の實を擧ぐることを期す。

一、本會員は古來より同志の間に慣行せられたる血約作法を尊重し、且つ之を維持す。

この兩綱領を通じて吾々の看取し得る大方針は、皇室中心主義の遵奉、祖先傳來の俠客道の固守、思想の善導、勞資協調及び國民生活の安定といふことである。一見政黨政治よりの超越といふことが感得せられるのであるが、その創立に床次竹二郎が産婆役となつてゐるといふこと、並びに創立當時の幹部として、總裁に大木遠吉伯、會長に村野常右衛門、理事長に中安信三郎等々の顔振れを並べ、その後、總裁に鈴木喜三郎、會長に高橋光成を経て中安信三郎等々を迎へたといふ點をみれば、同會が政友會系の團體であることが推測せられるのである。なほ、國粹會の顧問として、頭山滿及び瀧脇宏光子爵が列してゐるのを注意すべきであらう。

大日本國粹會は、その創立當初には、この種の團體のうちでも最も活潑なる活動力を示したものであつて、勞働運動、社會主義運動、水平社運動に對して、手痛い攻撃を加へた。なかんづく、水平社とは、しばしば猛烈な對立抗争を行つた。その有名なるものは、大正十三年三月、奈良縣水平社（柏原）と國粹會支部との衝突事件であつた。

國粹會は、始め東京に本部を置き、各府縣に府縣支部を設置し、全會員六十萬と號して、一時は大いに天下を震撼せしめたものであつた。しかるに、その後、後述の如く關東國粹會との對立を生じ、その本部も京都に移され、會としての活動も、少なくとも表面的にみえたところは、やゝ沈滞の形である。

四 關東國粹會

關東國粹會は、形式的に論ずれば、前項の大日本國粹會の關東本部といふ一地方團體に過ぎない。しかしながら、第一に、それは本家の大日本國粹會より時間的にみて若干早く創立せられたこと、第二に、關東國粹會の勢力範圍が俠客陣の本場たる關東俠客の錚々たるところを網羅してゐたこと、といふ二つの事情より、事實上、國粹會總本部より獨立してゐたのみならず、總本部に挑戦して繩張り争ひまでやつたのである。従つて、こゝでは大日本國粹會と別個に取扱ふこととしたのである。大日本國粹會と、關東國粹會との抗争は、幾多の難問を生んだが、つひに昭和二年（一九二七年）十月、兩者間の勢力範圍の協定が成つた。それによれば、關西は總本部の所轄、關東方面は、山梨及び栃木の兩縣を除き、東京市及び東京府、關八州、信越地方、東

北地方を、關東本部の所轄、といふこととなつた。

これで、兩者間の軋轢は全然解消したわけではないが、小康を得たことは、疑ひを容れぬ。現在では、大日本國粹會と關東國粹會との關係は、いはゆる「不即不離」の状態にある。而して、關東國粹會は、役員も總本部とは一應別個にこれを有し、始め總裁渡邊千冬子爵、總長木田伊之助、退役陸軍少將を推してゐたが、前者の關係は不明、木田少將は死去し、その後は、梅津勘兵衛あたりが實際上の首領として萬事を切り廻はしてゐるらしく思はれた。本部は、芝、虎ノ門附近にある。天龍を中心とする往年の角力騒動において、いはゆる脱退組の連中が嚆を下るさゝるを得なかつたのは、たま／＼斯界における關東國粹會の勢力を表示するものである。

關東國粹會の綱領は、前述、杉浦重剛の草案になるといふ三ヶ條、即ち

一、本會は意氣を以て立ち、仁俠を本領とする集團なり。

一、皇室を中心として、普く同志を糾合し國家の緩急に應じて、奉公の實を擧ぐることを期す。

一、本會員は古來より同志の間に慣行せられたる血約作法を尊重し、且つ之を維持す。

を採用してゐるらしいが、右の三ヶ條のほか二ヶ條の中合はせ信條といふものが行はれてゐる。その内容は、左の如きものであつて、一讀關東國粹會の面目躍如たるものがあるといふべき

であらう。――

一、皇室を中心とする我國體を未來永劫擁護し奉る、是れ吾々同胞無上の幸にして一切の正しき事、一切の善き行の土臺に御座候事。

一、弱きを扶け強きを挫くは私共俠客團以心傳心昔ながらの不動心に候へども右は素より前項主意に基くべきものに御座候事。

五 大和民勞會

この頃、國粹會といへば、必ずその對立物として民勞會を擧げるのが例であつた。それは、兩團體が相對立する有力國粹團體であつたといふのみならず、大日本國粹會及び關東國粹會が前述の如く政友會系の團體であつたのに對して、大和民勞會は、民政黨系の團體とみられてゐたが故である。

大和民勞會の創立者は、土木業者の大親分にして、大都キネマの社長であつた河合徳三郎である。彼は、もと大日本國粹會に所屬してゐたが、居ること半年にして同會より分離して、大正十年一月に大和民勞會を組織したのであつた。設立以來の民勞會は、關東大震災までは、相當目ざ

ましき活動力を示した。單なる「國粹團體」たるに止まらず、あるひは谷中に慈善病院を建設し、あるひは勞働社會大學によつて勞働者階級に呼びかけたり、またある時には社會運動の巨頭堺利彦を襲撃したりなどして、勇名を馳せた。

しかるに震災は民勞會に一轉機を與へ、震災後は創立者河合徳三郎が第一線より退き、その後を受けて藤代天放が會長となつた。機關誌として「民勞」及び「法律世界」を發行してゐるが、最近は餘り目立つた活動振りを示さず、事務所の如きも世田ヶ谷の一隅へ移轉したらしい。會員も一時は二萬などといはれたが、最近の實數は不明である。大和民勞會の干與した大罷業は、有名な野田醬油會社の勞働爭議と、東京朝日新聞の岩月新聞舗の爭議等であつた。

大和民勞會には「主張」と稱するものがある。恐らく會長藤代天放の筆になるものと思はれるが、民勞會といふ名稱について世人の有してゐる通念とは遠くかけ隔つた感傷的な響きをもつたものである。――

「一時は一時より、一刻は一刻より、流れて偉大なれ、民勞の精神よ、我等は光と共に在るものなり、我等は太陽と共に昇るものなり。犁の重みに屈める腰を伸べ土臭き手を翳して農民よ、森林に菜園に芋の葉に注がるる我等の光を見よ、鑛夫はその鶴嘴を休めて地上に唸る民勞の叫

びを聞き、彼等の心は共鳴したり。金の爲に危険思想を宣傳する運動屋よ、僅數千金にて自己の自由を質にして足らず、日本國民の自由と安寧を賣らんとする卑劣漢よ、汝等の根は既に絶たれたり、彼等に残さるゝは一片の猫イラズのみ、然らずんば本來の心に醒め走つて我等に來れ、我等は白熱せる坩堝なり、總てを溶解し、總てを化して民勞の生命に復活せしむるものなり、我等は正義公道を孕みて將に孵化せんとする蜂の巢なり、我等は蒔かれたる小麥なり、我民勞の生命希望と光輝に充つ。」

六 赤化防止團その他の活動

大正赤心團と赤化防止團は、國粹會及び民勞會系の諸團體とは異なりたる意味において一時名を賣つた右翼團體であつた。即ち、國粹會、民勞會等が、古來の俠客團の範圍より餘り遠く踏み出さなかつたのに對して、赤心團、赤化防止團等々は、直接に社會主義運動撲滅を使命として生れたる團體であつて、従つてその實力的活動はかなり熾烈なるものがあつたのである。

大正赤心團は、大正七年（一九一八年）七月、森健二によつて組織せられた。彼は、土木請負と新聞取次とを業とするものであつたが、野田卯太郎、武藤金吉等政友會の一部幹部の後援を得

て赤心團を組織したのであつた。

左に示す大正赤心團の綱領は、赤防團に比すれば若干既成政黨の色調の強いものであるが、その綱領の色調に拘はらず、本團の實踐活動は、相當猛烈なるものがあつた。――

一、皇室を中心として我國民精神の統一完成に務む。

二、國體の尊嚴を危くする凡ての思想に對し其撲滅を期す。

三、帝國憲政の穩健なる發達を庶幾す。

四、黨派に偏せず一意國威の伸張を念とす。

五、殖民興業の國家的發達に協力す。

なほ大正赤心團は、對支問題、內鮮融和、普選反對運動等には一役買つて出たのであつた。

赤化防止團は、辯護士米村嘉一郎が「本業の閑なるまゝに」大正十一年（一九二二年）十二月に組織せし團體であつて、その名の如く「赤化思想」の撲滅を一枚看板とするものであつた。その綱領は、左の如くかなり明確なるものであつて、「勞資の協同」を主張する國粹會や「殖民興業」の發達を庶幾する赤心團よりは一步出で、「資本家の横暴」と「富豪の惠恣」とに攻撃の矛を向けたところに、近代的國民主義團體の一としての同團の特徴が看取されるのである。――

一、赤化は社會秩序の根柢を破壊し、人類の幸福を呪咀するものなるが故に本會は一死以て之が防遏に任すべきを誓ふ。

一、資本家の横暴と富豪の惠恣とは過激思想助長の原因をなすが故に、資本家、富豪に對して極力猛省を促す。

一、勞働運動は爾來社會主義との連絡に依り多く誤解を受けたり、直ちに勞働者の叫びたるべきに何人か之に反對せん、本會は極力勞働運動の社會主義との分離を期す。

赤化防止團の赤坂の本部事務所には、毎日數十名の壯漢を養ひ、全國に數十の支部を置き、その勢ひたるや、一時はなか／＼旺んなるものがあつた。赤防團の公然の活動で有名だつたのは、その創立後間もなき大正十一年（一九二二年）神田の中央佛教會館においてなしたる左翼との立會演說會である。これは、赤化防止團の側から申し込んだものであつたが、同會からは會長米村嘉一郎、天野岡太郎等が出演し、左翼側（といつても、アナキストの一部であつたが）からは、岩佐作太郎、近藤憲二等が出た。演說會は豫期の如く混亂に終始し、解散を命ぜられるや、彼れ米村嘉一郎は日本刀を振つて岩佐作太郎に斬りつけた。また、その翌年大正十二年（一九二三年）六月、アナキストよりコミュニストに「轉向」せる高尾平兵衛、長山直厚、吉田一等が日本刀を

提げて赤化防止團本部を襲つたことがあつた。高尾平兵衛は、當時左翼陣營内における「暴れ者」であり、長山直厚、吉田一、何づれも一癖ある連中であつた。高尾等は、散々赤防團の本部を荒らし廻はつた末引き上げようとしたところを、背後から米村のために射撃せられて落命した。

この高尾と米村との争鬭は、當時の社會運動にとつては本流外の出来事であつたが、赤化防止團に對するジエスチュアの意味で、高尾の死は社會葬を以て送られた。

高尾平兵衛射殺後、首領米村嘉一郎は一年半の有期懲役（但し三年間の執行猶豫付き）に處せられた。め、赤化防止團の活動も下火となり、米村の後を金輪日東が代つて會長となり、大正十二年（一九二三年）二月、日・ソ國交恢復交渉のためやつて來たヨッフエの排撃運動を起し、同じ月にヨッフエを「招聘」した表面の責任者後藤新平東京市長に對して辭職勧告を行ひ、また大正十三年（一九二四年）七月にはアメリカ大使館の國旗を引下ろしたりして、時々小波瀾をみせてゐたが、その後は絶えて消息を聞かず、米村嘉一郎が死亡した頃には、會は殆んど解消状態となつてゐた。

皇道義會は、前荒木文相の秘書官で、齋藤内閣の時荒木陸相の下に參與官であつた茨城縣選出政友會代議士石井三郎が、大正七年（一九一八年）四月、野田卯太郎、小川平吉等の政友會領袖

の後援を得て創立したものであつて、アメリカ化反對、皇室中心主義を主要スローガンとし、武道（なかんづく剣道）を以て國士を養成せんとするものである。會長石井三郎自身が剣道をよくし、その千駄ヶ谷の道場（東武館）には、荒木大將の顔も時々みかけたやうであつた。社會的には別段に大した活動はしなかつた様である。皇道義會の綱領は、左の如し。――

- 一、皇室中心主義を基礎とし憲政有終の美を濟すること。
- 一、國民思想を善導し、忠誠至純の氣風を涵養すること。
- 一、大和民族の海外發展に努力すること。
- 一、行政機能を刷新し地方自治の發達を圖ること。
- 一、殖産興業の振興を策し國防を充實せしむること。
- 一、尙武右文の士氣を振作し、國士を養成すること。

縦横俱樂部は、前述の諸團體とはやゝ趣きを異にした團體であつて、早稻田大學の學生を中心にしてゐた。大正八年（一九一九年）六月の創立に係り、その首腦部は、森傳、結城源心といつた柔道の大家によつて形成せられ、この兩名のほかに、柏木三千三、三枝窄三、佐々木貢なども幹部のうちに名を列してゐた。その活動は、元來、早稻田學園内に限られてゐたのであるが、そ

の綱領は左の如きものであつた。――

- 一、日本國體の原理を闡明し、皇道を世界に布かんことを期す。
- 一、世界經濟聯盟を組織し、人類共存共榮の實を擧げんことを期す。
- 一、人類共存の大義に基き總ての偏狹的思想を撲滅せんことを期す。
- 一、社會混沌の病根を剔抉し、之が掃蕩を期す。
- 一、東西文明の融合を圖り、之が純美文明を創造せんことを期す。

縱横俱樂部がその存在を天下に示したのは、大正十二年（一九二三年）の早大、軍事研究團の組織に由來する大騒動である。同俱樂部はその時、支那通の早大教授青柳篤恒を會長として軍事研究團を創立し、時の陸軍次官石光中將以下の陸軍將星を招待して盛んに發會式を行はうとした。そこへ、早大内の對立團體たる左翼の文化同盟（これは、文化會と建設者同盟との合併團體であつた）が、帝大の新人會その他の學聯加盟團體の應援を得て、發會式開始前から大學構内をデモしてゐてたが、さていよく式が始められるや、諸將軍の祝辭に對して彌次を飛ばし、軍事研究團發會式を破壊し去つたのであつた。

その後、文化同盟一派は勢ひに乗じて軍事研究團反對の學生大會を催したところ、今度は縱横

俱樂部を先頭とする學内右翼派によつてこの大會を蹂躪せられた。そして、この事件を契機として同大學講師佐野學の研究室搜索事件、日本共產黨の摘發、同じく講師猪俣津南雄の辭職、檢舉といふ結果を惹起した。

縱横俱樂部は、その後大正十五年（一九二六年）に縱横社を起して、機關誌として「縱横」を發行した。そのよつて立つところは、日本主義であり、會員の卒業と同時に、その活動も學園より一步出でて社會的たらんとした形跡があつた。しかし、現在ではその團體としての存在は審かでなく、首腦の一人結城源心の如きは、静岡縣の清水港にあつて沖仲仕の親分をなしつゝ、ありと傳へられるが、時々柔道の選手權大會に出場しては、昔ながらの武勇を振つてゐる。柔道家の現役としては、比較的生命の長い方である。

何れにしても、早稻田時代の縱横俱樂部は、學生團に似合はぬ威力を振つたので、學生及び世人のこれを恐れる事一方ならぬものがあつた。

七 和製黒シャツ黨Ⅱ大日本正義團

大日本正義團は、團員に黒シャツの制服を着用せしめてをり、外觀的にみる場合、この頃の右

翼團體としては、最もイタリー・ファシスト的な集團であつた。正義團の創立者にして首領たる酒井榮藏は、人も知る如く大阪の有名なる俠客小林佐兵衛の二代目としてその跡目を相續した大親分である。酒井榮藏が正義團を組織したのは、大正十四年（一九二五年）二月のことであるが、彼は、その前年の夏、關西地方を震撼せしめた大阪市電の大爭議に調停役を買つて出てゐる。當時の關西地方としては社會全般に未だ封建的な空氣が多分に殘存してをり、かゝる意味において兩竦み狀態に陥れる大爭議の解決者として、有力なる顔役の出ることは、左まで不自然ではなかつたのであつたのであるが、この市電爭議に關係したことが、彼れ酒井榮藏の大日本正義團組織に若干の示唆を與へたのではあるまいかと憶測される。

大阪市電爭議における酒井榮藏の態度は、比較的公正であつたと傳へられる。強きを挫き弱きを扶けるといふ日本古來の俠客道意識が、彼れ酒井をして「弱き者」としての市電勞働者に對せしめたものであらう。最後の高野山における爭議團解散式の挨拶に際しても、勞働者側に對し部下を戒飭して自肅するところがあつた。爭議を無事解決せしめた後の酒井榮藏は、退いて近代勞働運動について深く考ふところがあつたことであらう。而してその思念の結果が、彼獨自の勞働問題解決策となり、それがこゝにいふ大日本正義團の結成となつて具體化せしものと思はれる。

のである。

酒井榮藏が正義團の組織を決意し、從來の舊き仁俠道から一步勇敢に踏み出さうとするや、先代小林佐兵衛以來の舊き乾分らのうちには、これを諫止せんとするものがかなりあつたと傳へられてゐる。しかし「強き男」の彼は、それらの反對を敢然として斥け、勇躍、舊き殻を破らんと努力した。その後の彼れ酒井榮藏は、イタリーのムッソリーニに猛烈に私淑し、正義團員に黒シヤツを着用せしめ、飛行機を購入し飛行士を養成して正義團の宣傳デモに参加せしめ、社會主義を研究したりした。また、勞働問題の解決に一家言を有する彼は、目蒲電鐵、東洋モス（昭和二年十月）、江の島電車、東京青バス等々の諸爭議の調停を行ひ、江の島電車、青バス等には正義團系の組織すら殘し得た。また一九三〇年にローマを訪ひ、ムッソリーニと面會したといはれ、また支那事變勃發後も愛嬢を作つてイタリーを訪問した。かくの如く彼は、大いに日本のムッソリーニたり、和製のファシスト團たらんとしてゐるが、その具體的運動には、他團體と比較してやはり昔の仁俠道的なる殘滓を多分に有せりといふ印象を、第三者に與へてゐる。

とはいへ、大日本正義團は、同期の右翼諸團體の間にあつて、明確なるイタリーのファシストたらんと自ら任じ、諸方面にイタリー・ファシズムの風を取り入れんとしてゐる點において、か

なり注目さるべき團體である。

大日本正義團の綱領は、左の如くである。――

- 一、忠君愛國、孝行信義の念を専らとし、己が稼業に精勵すべし。
- 一、仁道正義を旨とし、慈悲仁俠の道を忘るゝな。
- 一、自重の念を起し、廉耻の心を養ひ共同親和の實をあげる。
- 一、親分は親の如く乾分は子の如く乾分同志は一家兄弟たり、親分の命する處は水火も辭せず兄弟は互ひに相親しみ互ひに相扶け又禮讓を忘る可からず。

これは、イタリー・ファシズムの綱領とは相當に距離のある封建性の濃厚なるものといふべきであらう。

大日本正義團の團員には前述の如く一時は若干の近代交通労働者も數へられたが、その大多數は土木業者、大工、左官等の職人である。團員の數は、數年前の發表によれば、關東十萬、關西十二萬、九州五萬と註せられてゐた。首領酒井榮藏は――恐らく「ドゥーチェ」の譯名であらうが――主盟といふ。支部の組織は、支部長――副支部長――小額――助役といふ獨特なる段階を踏んでゐる。

主盟酒井榮藏は、政治的進出の氣あり、即ち昭和二年（一九二七年）に、政治監督會なる政治團體を別箇に組織し、政治運動の機關たらしめようとした。しかし、これは既成政黨との摩擦を生ずる虞れが多分にあり、正義團團内にあつてこの點を憂慮する一派と、然らずとする一派とが分れ、一時は東京支部半数の脱退とまでなつたが、その後兩派の妥協なり、一應この騒動は納まつた。けれども、酒井主盟は政治的進出の志望を捨てず、右の政治監督會騒動の翌年、即ち昭和三年（一九二八年）二月の普通選舉による第一回總選舉に大阪第四區より立候補し、社會民衆黨の鈴木文治と大いに争つたが、酒井の敗北に終つた。

八 愛國社の存在

以上の團體より少し遅れて組織せられた愛國社も、同様の傾向をもつ團體であつた。これは昭和三年（一九二八年）八月一日、岩田愛之助が社主となり松本勝らを幹部として結成したものであつて、岩田社主の支那及び滿洲における體驗に基き、對外硬と國內思想對策とを主要目標とするものである。その綱領にもこの二點が強く表示せられてゐる。――

愛國社綱領

第二節 歐洲大戰による社會的變動

一、愛國社は對支問題及び思想問題の研究を爲す、尙問題の發生する毎に社員たるものは會議に依り種々なる運動をなすものなり。

一、本會は大陸積極政策の遂行及び研究並に思想問題の研究を以て目的とする。

愛國社の本領は、右の如く對支、對滿問題に關する運動に積極的に參加するにあつたが、一方、青年の教育に留意したのは達見であつた。即ち、昭和四年頃より神奈川縣稻田多摩川邊りに愛國村塾を開き、また昭和六年頃よりは愛國社の指導下にある學生をして愛國學生聯盟を組織せしめた。昭和五年十一月十日、愛國社に寄寓する佐賀青年佐郷屋留吉の濱口首相狙撃事件が起つた。この事件は、まさに政黨政治没落の前奏曲たりしものであるが、この佐郷屋青年の行爲によつて、愛國社の存在は俄かに世上に名高くなつた。しかし社主岩田愛之助は個人的には溫厚な人物であり、國家主義陣營内にはかなりの人望があり、多くの信者を有したのであつた。

第二章 近代的國家主義への行進

第一節 國家社會主義運動の生誕

一 革新的要求の提示

前章において舉げた右翼諸團體は、いはゆる大亞細亞主義、即ち單なる對外硬主義より眼を國內社會問題に轉じたる點において、明治初期の國粹主義團體と異なるのであるが、しかし彼等の國內社會問題に對する視野たるや、豁然として舊套を蟬脱する能はず、反勞働者運動、反社會主義運動、赤化防止運動の埒を多く出でなかつた。なかには「勞資問題」の解決を稱へ、外國フシズム運動に倣はんとするものもあつたが、それは十分の理解の上に立つたものでなく、惡くいへば半可通的のところもあつて、世上には兎角の批評が絶えなかつた。

しかるに、一方において、かゝる舊來の右翼國粹主義團體が新裝工作に忙殺されつゝあつた時、他方において、從來の國粹主義團體とは異なる新方面を目指す國家主義團體が現出して來た。こ

これらの諸團體は、對外的には依然として大亞細亞主義を唱へ、大陸進出に思ひを潜めつゝあつたことに變りはないが、その對内的視野は、一步を踏み出して、從來の如き單なる勞資協調程度に止まらず、進んで「國內改造」といふことを主張し始めたのであつた。これらは、沿革的にも、人的にも從來の國粹團體とは全然別個のものであつて、語の嚴密なる意義における日本の近代的國家主義運動の起りは、これらの團體の裡にこそみることを得るといふべきであらう。

一九一四——一八年のヨーロッパ大戰を轉機として獨占的段階に入つた日本資本主義は、戦後の反動來と共に、深刻なる恐慌に當面した。加ふるに大正十二年（一九二三年）九月の關東大震災があつた。そのため、不景氣に苦しんだ勞働者及び農民は、その生活條件維持のために、守勢的勞働爭議及び小作爭議を頻々と起した。戦争直後のデモクラシー熱に乗じて勃興した上りのな社會主義の波は、大震災當時の反動的勞働氣のために一時窒息せしめられたかの如くであつたが、大震災の現實に打つかつて自己の足許の大衆より遊離せることを知つた日本社會主義は、この打撃によつて反省の機會を與へられ、著しく自己を現實化した。この現實化せられた社會主義と勞働者及び農民の運動との結合は一段と進行した。その程度は、表面的に傳へられたほど根柢の深いものではなかつたが、たま／＼同時に實施せられた普通選舉による民衆の政治熱の昂揚と共に、

多くの識者の憂慮を招いたのであつた。

こゝにおいてか、日本を「赤化」の危険より救ひ、光輝ある日本國家の健全性を防護せんとする、國家主義者が現はれ出で、それらの國家主義者が相集まつて、團體を組織することは自然の勢ひである。彼等は、「燎原の火の如く」行くかの如き外觀を呈した勞働者・農民運動を今にして打倒せざれば、日本社褻滅びんと考へた。彼等のこの憂慮に拍車を加へたものが、大正十年（一九二一年）のワシントン軍縮會議と大正十四年（一九二五年）の日・ソ國交恢復とである。ワシントン會議そのものは、英・米の世界爭覇戰の一表現であり、その全般的考察はしかく簡單には下し得ないものではあるが、（註一）とに角、それが英・米共同の對日壓迫といふ一面をもつてゐたことは争はれぬ。従つて、この會議の招聘狀に接するや、國家主義理論家たりし上杉愼吉博士の如き「國難來」を高く叫び、これを嘉永年間における浦賀の黒船來航に比したほどであつた。また「暴虐飽くなきボリシェヴィキ」の支配するソ聯と日本とが正式の外交關係に入るといふことは、痛く日本の國粹主義者の神經を刺戟せしところであつた。

「赤賊」伐つべしと起つた當時の國粹主義者は、しかしながら、從來の舊式國粹主義者乃至右翼主義者の行き方では、時弊を救ひ得ないのみか、下手をすれば穩健なる國民大衆の反感を招き、

思はざる結果を招來すべしとの覺醒があつた。もはや今日の時代においては、單なる右翼主義、單なる國粹主義、單なる日本主義一本槍を以てしては、日本國內の混亂を匡救し得ることが、彼等の眼にも明白であつた。また國民大衆の立場に身を置かんとする彼等のあるものにとつては、資本主義の弊害乃至一部資本家の横暴といふことも感得せられる。こゝにおいて、國民主義的精神と社會主義的思想との結合といふ近代的全體主義の特徴たる現象が、日本にもみらるゝに至つた。而して、こゝに國民社會主義といふ新動向が生誕したのである。

二 老壯會の歴史的意義

かゝる新しき國民社會主義のトップを切つたものは、大正七年（一九一八年）十月、即ちロシア革命後一年に生れた老壯會である。

老壯會は、最初はかなり漠然たる團體であつた。その名の如く、年齢の「老壯」思想の左右を問はず、思想家あり、實際運動家あり、軍人あり、實業家ありといふ状態であつて、そのイデオロギー的基準としては明確性を缺き特にとるべきところとはなかつた。たゞ、何となく日本國家を改革せんとする熱意を有する人々が相集まつて、忌憚なき意見を交換せんとするものであつた。

のである。

老壯會の歴史的存在は、この空漠たる集團から後日種々の國家主義團體を出したといふ、いはその貯水池的役割に意義があつたのである。この點において、老壯會は、日本國家主義運動更に看過し難き地位を占めるものといふべきである。

當時の老壯會の性質を知る規準としては、その構成メンバーの顔振れを擧げるのが、最も捷徑であらう。即ち、先づその當時の左翼派とみるべきものには、堺利彦、高島素之、島中雄三、下中彌三郎、大竹博吉、中村高一、北原龍雄、小栗慶太郎、高尾平兵衛、茂木久平、松延繁次、遠藤友四郎等々があり、右翼派としては、北一輝、大川周明、權藤成卿、滿川龜太郎、沼波瓊音、渥美勝、鹿子木貞信、笠木良明、岩田富美夫、清水行之助、金内良輔、山元龜次郎、島野三郎、細井肇等が控へ、その他の變り種としては、往年の自由黨左翼にして車堺黨の首領大井憲太郎、支那通の水野梅曉、軍人の佐藤鋼次郎、八千代生命の重役小原達明、山口正憲、長瀬鳳輔、川島清治、草間八十雄、田鍋安之助等の諸豪傑、中野正剛、宮川一貫、工藤鐵三郎等の既成政黨の暴れ者などが存在してゐた。これらの士は、後年、何れも各方面においてそれ／＼活躍したのであり、なかなづく國家主義陣營において、いかに彼等の多くが中心となつたかは、後段において示

す如くである。彼等は、毎月一回集まつては、時局を談じ、また講演會を催したりなどした。世話人としては、専ら滿川龜太郎が當つてゐた。

老壯會は、最初のほどはなか／＼活氣をもつてゐたが、何にしろ一定の目的、原則を缺く空漠たる集團であつたが故に、その後、だん／＼と無活動狀態に陥り、各自それ／＼その志す方に向つて進んで行つたがために、つひに大正十年（一九二二年）頃、會としての實際の存在は解消されてしまつたのであつた。

三 猶存社の運動

新種國家主義團體の先驅者たる老壯會は、會それ自體としては著しき發展をみせずして、いはば一種の自然死の如き狀態を以てその姿を消して了つたのであつたが、この老壯會を母體として老壯會成立の翌大正八年（一九一九年）に結成せられた猶存社は、日本の國家主義運動史上、大きな足跡を残した。

先づ、「猶存社」といふ名稱である。“Militarism and Fascism in Japan”の著者C. Tanin and E. Yohanはこの「猶存社」なる名稱の字義解釋に大いに當惑の色を示してゐるが、これは、

淵明の「雖三經就荒松菊猶存」といふ一句から採られたとのことである。思ふに舉世滔々たる「赤化」の濁流のうちにあつて、日本の國粹こゝに猶ほ存すとの氣概を示したものであらう。

猶存社の創立者は、北一輝こと北輝次郎である。北一輝は、周知の如く現民政黨代議士北吟吉の實兄であり、新潟縣佐渡の産であつた。東京に出て早稲田大學に學んだが、明治四十年頃、堀利彦の門に出入し、早くより「日本國體論」並びに「國體論及び純正社會主義」の大著を以て識者に知られた知的早熟者であつた。北一輝は間もなく早大を中途退學し、支那に渡り、支那革命の渦中に投じて活躍した。彼自らいふところによると、苑鴻仙、宋教仁、譚人鳳と親交を結んだといふ。彼としては飽くまで支那革命に終始したき意圖であつたが、大川周明の勸説に従つて、大正八年（一九一九年）即ち、デモクラシーの波の眞只中に歸國したのであつた。

この大川との歸國の際に、北一輝は、一卷の書を著し以て故國への土産とした。これ即ち、後年、日本國家主義運動の聖典として二・二六事件にまで影響を及ぼした有名なる書「日本改造法案大綱」である。歸國後の北一輝は、大川周明及び滿川龜太郎の二人を左右兩翼と頼んで、一つの革新的團體を組織した。蓋し「日本改造法案」の形而下的なものであらう。それが、こゝに述ぶる猶存社である。それは、北一輝自身のいふところによれば、「全亞細亞七億萬人を防衛すべ

き最後の封建城廓」を打ち樹てんがために作つたものである。

この時、支那から北一輝に従つて歸つたものは、岩田富美夫、清水行之助、辰川龍之助等の闘士であり、猶存社同人として北の傘下に糾合せられたものゝうちには、西田税、笠木良明、鹿子木貞信、安岡正篤、綾川武治、角田清彦、松延繁次、島野三郎、金内良輔、中谷武世等がゐた。なかでも、西田税が北の最高弟として刑場まで随伴したことは、世人の知るところである。

猶存社の中心スローガンは、日本帝國の改造と亞細亞民族の解放とである。その綱領には、二二種傳へられるが、最も多く用ひられたのは、左の七項目のそれである（註一）。

一、革命日本の建設

一、日本國民の思想的充實

一、日本國家の合理的組織

一、民族解放運動

一、道義的對外政策の遂行

一、改造運動の連絡

一、戦闘的同志の精神的鍛鍊

(註一) 猶存社の今一つの綱領は、「目的」として傳へられてゐる左の六項目である。――

一、革命的大帝國の建設運動。

一、國民精神の創造的革命。

一、道義的對外政策の提唱。

一、亞細亞解放の爲めの大軍國の組織。

一、各國改造狀態の報道批評研究。

一、國柱の同志の魂の鍛鍊。

猶存社は、北一輝の土産たる「日本改造法案大綱」を以て、自己の「中心操典」と定めると同時に、その江湖への頒布にも努力した。それには、謄爲版刷による大正九年(一九二〇年)二月頃の第一版、大正十二年(一九二三年)五月、改造社版による第二版、西田税の名による大正十五年(一九二六年)二月十一日の第三版がある。

次に、猶存社は、大正九年(一九二〇年)、その機關紙として「雄叫び」を刊行して、廣く天下に同志を求めて呼びかけるところがあつた。ところが、間もなく北一輝、大川周明の兩巨頭間と對立を生じ、社内に分裂的傾向をみるに至つた。その結果、猶存社自體の存續が困難となり、

第一節 國家社會主義運動の生誕

つひに大正十二年（一九二三年）三月、會員鹿千木員信の洋行を機として完全に解散することゝなつたのである。

四 猶存社の傍系團體

猶存社の直系團體は、行地社＝神武會の系統である。これは後に別に述ぶることとするが、猶存社の流れを掬む團體としては、傍系であるが時目的にいつて最も早く生誕した國家主義團體がある。それは、岩田富美夫の大化會と、その分岐物たる清水行之助の太行社である。

大化會は、大正九年（一九二〇年）四月に結成せられた。主宰者岩田富美夫は、北一輝の高弟であると同時に、當時なほ社會主義者たりし高昌素之の門下でもあるといふ、その時代としては相當複雑な、面白い性格の所有者であつた。一九二〇年、一九二二年の兩度に亘りソ聯潛入を企て、チタ監獄の飯をも食つたさうであるが、その秀れた腕力（といふよりも寧ろ拳力）と度胸とを以て、一時は右翼團體中、最も派手な動きを示したものであつた。その牛込加賀町の柔道々場へは、高等學校時代の筆者も訪問したことがあると記憶してゐる。

大化會の綱領は、いかにも武力を本領とする大化會らしきものである。――

一、大化會は日本の對世界的使命を全國に理解せしめ、以つて日本の合理的改造を斷行する根源的勢力を目的とす。

一、大化會は奴隸的日本の舊思想を排斥す、同時に模倣反響を事とする歐米の舊思想的革命を排斥す。

一、大化會は全國民を根基としてその間の指導的青年の人格的結合を計り、以て全國に號するの日を努力す。

一、大化會は日常の小事、非常の大事に際しては原始的武人の典型たるべし。

一、剛健、素朴、簡易、雄大、正義を全生活に實現すべし。

一、大化會員は天下何者をも怖れざるべし、唯、正義の審判最も峻嚴なることを誓明す。

大化會自體としては、不幸にして「非常の大事」に活躍する機會をもたなかつたやうであるが、「日常の小事」においては、大いに武力を發揮して、「原始的武人の典型」たることを遺憾なく示した。大化會は、後述高島素之の大衆社と關係を有し、また經倫學盟の武力行動部を擔當する一方、猶存社の青年部隊を收容してゐたので、元氣横溢、その精力の捌け口に困つたやうな有様にみられた。その元氣の漲つた最も典型的なる事件は、大正十二年例の大杉榮の遺骨奪取事件である。

大杉榮の遺骨がその遺族に下げ渡され、近藤憲二、岩佐作太郎らのアナーキストがこれを迎へて葬儀を営まんと本郷駒込の労働運動社に集まつてゐたところへ、大化會の岩田富美夫、下鳥繁三らの諸豪傑が躍り込んで、大杉の遺骨を奪取し去つたのであつた。

これは、思想的、政治的には大した根據をもつ事件でなかつたが、社會を騒がしたことは大變なものであつた。遺骨は、結局、大杉の遺族の手に返却されたが、この時、岩田を助けて奮闘した大化會の客分下鳥繁三は大變な豪傑でピストルの名手である。彼については種々の逸話が傳へられてゐるが、後、岩田と喧嘩して大化會を飛び出し、病を得て死んだ。

大化會には彼のほかに種々の豪傑がをり、日本國民黨の寺田稻次郎もこゝの道場で師範をしてゐたことがある。清水行之助、辰川龍之助、茂木久平もこゝにゐた。大化會の活動を示す事件としては、大杉遺骨奪取事件のほかに、前橋水平社事件、野田醬油爭議、不戰條約問題、民政黨の議會中心主義反對運動等があつた。

大行社は、大化會の兄弟分ともいふべき團體であつて、大正十三年（一九二四年）六月に、清水行之助が組織したものである。清水行之助の名は、茂木久平の指導による天龍の角力協會脱退事件と絡らんで、武藏山が拳闘界に轉身せんとした時、彼の後楯として世人の前に姿を現はしたこ

とで有名である。清水行之助も岩田富美夫と同じく、北一輝に従つて支那から歸つたものである。歸國後の彼は、老壯會——猶存社——大化會と、岩田と行動を共にしてゐたが、後、獨立して大行社を組織したわけである。

大行社の綱領は、大化會に比してやゝ既成政黨のであつて、即ち次きの如きものであつた。

一、我徒は天理に則り人道に則し徹底的大日本主義の宣揚充實を期す。――

一、我徒は國民外交の實現を期す。

一、我徒は國民の政治的自覺及政黨の徹底的覺醒を期す。

大行社の活動としては、アメリカに對する反感に基因する帝國ホテル舞踏場斬込事件や、大倉喜八郎の米壽祝賀反對運動等を舉げ得る。後者においては、大倉側が原理日本軍の鬼倉に話を持ち込んだが故に、原理日本軍と大行社との對立といふ右翼陣營内の同士討ちとなつた。また、若干政治的性質を帯びた運動としては、大正十四年（一九二五年）三月の貴族反對運動、昭和四年（一九二九年）の總選舉における首領清水の立候補等が舉げ得る。この選舉においては、清水行之助は民政黨非公認候補として立つたのであつたが、不運にして落選してしまつた。

五 白 狼 會

白狼會も、猶存社系の國家主義團體として、大正十二年（一九二三年）に辰川龍之助によつて組織せられたものである。辰川は前述の如く北一輝に従つて上海より歸つた人物であり、猶存社が解散さるゝと同時に組織したのがこの白狼會である。それにも矢張り北一輝の援助があつた。しかし創立後間もなく彼は某怪文書事件、十五銀行事件等のため下獄を餘儀なくせられ、滿洲事變後は滿洲へ押し渡つた。

六 行地社の足跡

大化會及び大行社を以て、猶存社の傍系團體とすれば、猶存社の正系の嫡子は、行地社である。その創立は、大化會及び大行社より遅れた大正十三年（一九二四年）四月のことに屬するが、その陣容の裝備、その歩みたる足跡、その歴史的役割等よりみて、これが正系たることは疑ひを容れないところである。

行地社の名稱にいはゆる行地とは一般大衆の耳に餘り親しくない文字であるが、それは「則天

行地」より出てゐる。それは——首領大川周明のいふところによれば——「ひとしく天に則り地に行はんとする同志の團結」である。「天に則る」とは、「明かに理想を認識し、堅くそれを把持すること」である。また、「地に行ふ」とは、「この理想を現實の生活に實現すること」をいふのである。行地社とは、かくの如き抱負を以て結成せられたものであつて、その役員としては、統務委員長に大川周明、主事に滿川龜太郎が就任し、その他各専門部長として安岡正篤、笠木良明、綾川武治、西川税、中谷武世、金内良輔、松延繁次、島野三郎、高村高次等を据えた。而して綱領は、次ぎの如きものであつて、既述諸團體のそれと比べて、一層洗練せられたものであつた。しかし、自由、平等、友愛等の文言が散見するのは、若干場違ひの感じを與へる。——

一、維新日本の建設。

一、國民的理想の確立。

一、精神生活に於ける自由の實現。

一、政治生活に於ける平等の實現。

一、經濟生活に於ける友愛の實現。

一、有色人種の解放。

一、世界の道義的統一。

行地社は、機關誌として月刊「日本」を出したが、それ以外に、會の首腦たる大川周明、滿川龜太郎等の著書の刊行、その他多くの出版活動をなした。しかしながら、行地社の活動として注意すべきものは、同社が舊本丸内において經營せし社會教育研究所及び大學寮の事業である。行地社は、これらの機關をもつて、行地思想に基く行地運動の青年闘士の養成に努力を傾倒した。西川税及び後に國民主義の立役者の一人となつた狩野敏も、大學寮の生徒である。この社會教育研究所——大學寮と關聯して注目すべきは、この間に行地社と一部軍人との交渉があつたことである、この點において、行地社の残せる足跡は、日本國家主義運動史上、記憶さるべきである。かくの如く、行地社の本領は、一部軍人との接近にあつたといへるのであるが、そのために、「常人」に對する働きかけを無視したといふのでは決してない。一般市民層獲得のためには、行地社は、大阪、京都その他に支部を設置し、また學生層の獲得のためには、東大及び京大その他の諸大學に學生團體を結成せしめた。これは一の達見である。例のアフガニスタン志士ブラタブ奪還事件も行地社の活動によつた。

しかるに、大正十五年（一九二六年）に至つて、行地社の基礎を危くするスキャンダルが起つ

た。それは、世上に騒がれた安田生命事件なるものである。事の起りは、行地社の一會員にして安田生命保險會社の社員たりし千倉某の誡首に發端する。この事件において、行地社統務委員長大川周明は、いふまでもなく被誡首者の側に立つたが、さきに猶存社において大川周明と對立せし北一輝派が、安田生命側を支持するに及び、安田生命對千倉某の對立は、つひに大川周明派と北一輝との對立に轉化して、兩者間にいろ／＼と紛議を醸すところがあつた。その間に、種々様々なるデマ、非デマが亂れ蜚び、かゝる性質の紛争を潔しとせざる分子を生じ、翌昭和二年（一九二七年）滿川龜太郎、笠木良明、高村光次、綾川武治、中谷武世、西田税、安岡正篤等は、行地社より脱退し、また大阪、京都、足尾等の地方支社にもこれに倣ふもの續出し、つひに行地社は收拾すべからざる混亂に陥るに至つた。この事件に對する世評は餘り香しくなかつた。

安田生命事件による混亂から沈滞に陥つた行地社は、その後、金内良輔、松延繁次などの舊社員や、新たに入社せる舊プロレタリア文士團「種蒔き社」同人の津田光造、狩野敏等々の本部入りによつて、銳意、社の建て直しに努力したが、昭和七年（一九三二年）二月、神武會が成立するや、それに「發展的解消」を遂げたのであつた。

七 左翼陣營よりの轉者向の先驅——高畠素之の地位

以上述べ來たつたところは、右翼側よりする全體主義團體生誕の過程である。しからば、左翼側よりする轉向の過程は、如何であらうか？ 近代的國家主義の一特徴は、國民主義と社會主義との結合にありといはれる。國民主義側の左へ歩み寄りのあるところ、必ずこれに對應する社會主義側より右への近接的動きが當然あるべきである。

大正七年——一〇年（一九一八——一九二一年）の老壯會に、幾多の左翼分子が參加してゐたことは、既に述べたところである。この時集まつた左翼派のうちには、堺利彦その他の如く、老壯會の死滅と同時に、その本然の古巢たる左翼陣營に復歸して行つた——乃至はこれによつて寄道を止めて從來の左翼運動を繼續して行つたものもあつた。しかし、なかにはしからざるものもあつた。即ち高畠素之とその一統とがそれであつて、彼等は、老壯會によつて踏み出した右翼への歩みをそのまゝ續けて行つて、つひに今日の國家社會主義のイデオロギー的鼻祖となるに至つたのである。

高畠素之は、長脇差を以てなる封建的たる群馬縣の産である。京都同志社に學んだこともあり、

つとに堺利彦の門下に入り、後者の賣文社にあつて、山川均と張り合つてゐた高弟であつた。ドイツ語をよくし、マルクスの「資本論」の唯一の全譯者として名がある。彼は賣文社内にあつて堺＝山川派と感情的によくあつたが、それと同時に、理論的にもマルクス主義の階級的國家觀たるものは必ず社會主義者でなければならず、眞の社會主義者は必ず國家主義でなければならぬ（「國家社會主義大義」との認識に到達するに到つた。

高昌素之の國家社會主義化の第一次的表現は、大正七年（一九一八年）における大衆社の創立である。この時、大衆社へ集まつた連中は、尾崎士郎、茂木久平、岩田富美夫、矢部周、石川準一郎、神永文三、小栗慶太郎、津久井龍雄、松延繁次、大木雄三等の顔振れであつて、その大部分が、後の國家社會主義運動の幹部たちである。

大衆社は、その後、——主として經濟的の必要から——堺利彦らの棄てた名稱の賣文社を拾ひ上げ、大正八年（一九一九年）五月より、「國家社會主義」誌を刊行した。「國家社會主義」誌は、經濟的に恵まれず、その生命は短かつたが（五號まで）、よく高昌素之流の國家社會主義的主張の鮮明に努力するところがあつた。また、新賣文社一統は、絶えずイタリーやドイツなどのファシス

ト運動に注意を拂つてをり、一九二二年十月、イタリーのムッソリーニがローマ進軍によつて政權を把握するや、「先手を打たれた」と口惜しがつた高昌素之が、泥酔して路傍の電柱に抱きついて泣いたとは、彼自身の口から後に語られたところである。また、ドイツのヒットラー主義運動についても、いち早く報道し、その本質を批判してゐたことも人の知るところである。

八 經綸學盟

高昌素之の國家社會主義運動は、始め餘り世の注意を惹かなかつたが、彼が東大教授上杉愼吉博士と握手して、經綸學盟なるものを結成してからは、相當、世に認められることゝなつた。高昌素之と上杉博士との仲介をなしたのは、かの岩田富美夫である。經綸學盟は、最初大なる抱負を以て始められ、その組織も、思想行動部と武力行動部とに分れ、後者には、岩田富美夫が據つて大いにその本領を發揮しようとしたが、上杉愼吉博士と高昌素之の組合せは、矢張り根本的に妥當性を缺如してゐたものらしく、つひに十分の活動を示さぬうちに自然消滅の形となつた。

經綸學盟そのものは、かくの如く敢えない最後を遂げたのであつたが、この學盟からは多くの團體が分流した。そのうち、高昌素として津久井龍雄の急進愛國黨、前述岩田富美夫の大化會、

石川準十郎の日本社會主義研究所——大日本國家社會黨が有名であり、また上杉系としては、赤尾敏の建國會、天野辰夫の興國同志會、竹内賀久治の國本社等が著名であつた。

九 建國會の活動とその衰退

この國家社會主義運動生誕時代において、對世間的に派手な活動を示したのは、建國會である。建國會は、大正十五年（一九二六年）二月、紀元節を機として赤尾敏によつて創立せられたものである。赤尾敏は、もと名古屋のアナキストであつたのであるが、同じ傾向をもつた先輩渥美勝が國家主義者に轉向した時、これと行動を共にし、建國會の設立となつたのである。その趣旨となるところは、思ふに、國民思想の惡化を救ふには、建國の昔を偲ばざるべからず、

そのためには、毎年二月十一日の紀元節の嘉節を卜して建國祭を行ふに如かずといふにあり、赤尾敏は、この趣旨を朝野の名士の間に説き廻はつた。そして大正十五年（一九二六年）の二月十一日に、その第一回を行ふこととなり、この建國祭執行の母體として建國會を作り上げたのであつた。

建國祭創立の始めにおいては、會長に上杉愼吉博士、顧問に頭山滿、永田秀次郎、平沼騏一郎、

山川健次郎、丸山鶴吉、一戸兵衛等を頂き、理事長には赤尾敏自身、書記長には津久井龍雄といふ堂々たる陣容であつた。その指導精神は高畠素之流の國家社會主義であり、その綱領は、左の如きものであつた。――

一、我等は普通選舉の實施と共に全國民をあげて天皇に直接し建國の精神に立脚せる真正なる日本民族の日本國家を建設せんことを期す。

一、我等は日本民族が有色人種の先頭に立ちて全人類の世界文明を實現するの我が歴史的使命を成就せんことを期す。

一、我等は日本民族の傳統的道德を維持し輕佻浮薄を排し質實剛健の美風を作興せんことを期す。

一、我等は國家によりて國民生活を統制し日本國民の天皇の赤子として平等なる所以を徹底し同胞中一人の不幸なるものなからしめんことを期す。

一、我等は各人の有する財産、地位、階級、職業、知識、技術、筋肉が皆國家社會のために存在することを確信し犠牲の精神に依りて極度に之を國家社會に奉ぜしめんことを期す。

赤尾敏によつて始められた建國祭は年々盛大に赴き、今日の日本においては重要なる年中行事

の一つとなり、建國節さへ設けられんとしてゐる。而して彼れ赤尾敏はかゝる重要な意義をもつ建國祭の創案者たる名譽を培ふものであるが、諸種の事情より、建國祭の方は永川秀次郎、丸山鶴吉らが主としてこれに當り、建國會はだん／＼とその本來の軌道より離れて行つた。また財政問題等と關聯して幹部間の對立も激化し、殊に上杉愼吉博士、高島素之の兩者の死後は、理事長赤尾敏の「日本主義」と相容れざる國家社會主義派幹部は、續々と建國會を脱退し、建國會は殆んど赤尾敏の獨占物となつたかの感があつた。

建國會の黃金時代は、その建立より昭和三年（一九二八年）頃までであらう。その頃には、左翼運動の行はれるところ、必ず建國會の反對運動ありといふ有様で、その旺盛なる活動力は、往年米村嘉一郎の赤化防止團のそれを彷彿せしむるものがあつた。野田醬油會社爭議の干涉、昭和三年（一九二八年）ソヴェート大使館に労働農民黨本部に大山郁夫宅の花火事件、メーデー撲滅運動等、當時の世人を驚かしめる事件が、建國會の手によつて頻々として惹起された。今日においても、例へば第七十三議會中の電力案反對運動撲滅、對ソ斷交要求の立看板運動等、相當の活動を示したが、それは往年の如き潑刺たるものではなかつた。

建國會の積極的事業としては、建國労働組合による労働者の組織運動、失業者運動等があつた。

第二章 近代的國家主義への行進

が、何づれも規模狹少で發展性を缺いてゐた。

第二節 恐慌の進化と國家主義の昂揚

一 恐慌と合理化

大正十二年（一九二三年）の關東大震災の打撃を受けた日本資本主義は、その後も漸次恐慌の廣さ及び幅を擴大し來たつたが、昭和二年（一九二七年）の若槻內閣の時、渡邊銀行の破綻を契機とするいはゆる金融恐慌とよばれる一大破局に當面するに至つた。この時、十五銀行を始めとし幾多の大小銀行は倒壊し、これと關聯して「東洋のステイネス」鈴木商店その他の産業資本も、再起不可能なまでの大打撃を蒙つた。なかんづく、この大恐慌によつて最も手酷い打撃を受けたものは、中小商工業者、中小地主等——一言にしていへば國の中堅たる中産階級であつた。彼等は、この金融恐慌によつて、殆んど没落の深淵に沈淪した。しかも、資本主義經濟の殘酷なる常則として、この金融大恐慌を通じて、獨占資本はますます資本の集中を強行し、金融資本の全國的霸權がこゝに完成したといはれる。これと並行して農村においても大土地所有の土地兼併過程が進捗した。

金融恐慌後の日本資本主義は、産業合理化と海外市場の確保とを必要とした。金融恐慌によって倒れた若槻内閣の後を受けて成立した田中政友會内閣は、元首相にして國家財政のヴェテランなる高橋是清を起用して財界の收拾に當らしむるに同時に、一聯の素朴的・封建的なる方法によつて政治的危機の切り抜けといふ近代的事業を遂行しようとした。

産業合理化の結果、大正十五年（一九二六年）より昭和三年（一九二八年）の間に生じた失業者数は、約百萬人に上つたといはれた。

田中内閣は一方において、國內の危険思想の撲滅に努めると共に、他方、大陸進出に鋭意努力した。いはゆる東方會議及びその所産として傳へられる「田中建白書」なる大亞細亞主義綱領がこの努力の産物と傳へられた。

田中内閣は滿洲某重大事件（張作霖爆死事件）の責任をとつて辭職した。その後を受けて成立した濱口雄幸の民政黨内閣は、往年原敬の政友會内閣にも比すべき純粹なる政黨内閣であり、諸方面における冒險政策を捨て、合理化の一路をひたむきに進んだ。この合理化工作のエクスパートとなつたのが藏相井上準之助であつた。

濱口内閣に表現せられた財閥の合理化政策は、對內的には極端なるデフレ政策Ⅱ緊縮政策Ⅱ不

景氣政策（昭和四年＝一九二九年）となつた。金輸出禁止が解除せられ、國內物價の低落が行はれ（昭和五年＝一九三〇年）、生産は過度に縮小せられた。失業者は、百五十萬乃至二百萬と稱せられ、この不景氣政策の影響は、廣く各方面に及んだ。

また濱口内閣は對外的には漸進主義をとつた。いはゆる幣原外交の名によつて代表さるゝ對外和平政策——いはゆる軟弱外交がそれである。その結果は、對支強硬策の緩和、ロンドン條約による海軍々縮（昭和五年＝一九三〇年）及び後者の締結と關聯する統帥權干犯問題の惹起となつた。これは、日本の國家主義運動の構成要素に一の重大なる變化を生ぜしめたのである。

しからば、この間、民衆の「代表機關」たる議會は、何をしてゐたか？ それは、自己を選出した大衆を襲ふ滔々たる不景氣の波に眼を掩ひ、大衆の生活と何ら關係なき「泥試合」に目を送つてゐた。かゝる議會を牛耳れる既成政黨が何ものゝ利害の代表者であるかは、何人の眼にも明かとなつて來た。こゝにおいてか、國內不景氣の克服、對外政策の硬化、財閥の打破、既成政黨の打倒、國內改造、——かうしたスローガンの下に、國家主義運動が勃然と起り始めたのである。

二 國家主義團體の叢出

猶存社の直系たる行地社の分裂は、前述の如く大正十五年（一九二六年）のことであるが、この分裂の直後に（同年）、先づ行地社一方の雄たる満川龜太郎は、一新社といふ思想團體を作り、笠木良明は、東興聯盟なる實行團體を興した。また、綾川武治、中谷武世は、全日本興國同志會（註一）を創立し、西田税は北一輝の後援を得て昭和三年（一九二八年）に士林莊を設立し、同門の馬場園義馬は國民戰線社を組織した。またその頃（昭和二年）、廣島高師教授の口田康信によつて大邦社なるものが組織されて、一新社、東興聯盟、國民戰線社等々と行動を共にした。

次ぎに、その友系として、北一輝の弟北吟吉は昭和四年（一九二九年）三月に祖國同志會を結成し、一方元無政府主義者の遠藤友四郎（無水）は昭和二年（一九二七年）五月に、錦旗會を作つて、それ／＼あるひは相結び、あるひは相拮抗してゐた。

（註一）これは大正九年（一九二〇年）の森戸事件に際して活躍した東京帝大の興國同志會とは別團體である。

満川龜太郎の一新社は、その行地社脱退聲明書にもある如く、行地社精神を堅持する正統派を以て自ら居るものであつて、笠木良明、高村光次、沼波瓊音等も關係を有し、笠木良明の東興聯盟は、いはゞその行動團體であつた。機關紙「鴻雁錄」を發行し、一新社叢書を編輯して世界維新

に面せる日本」その他を刊行した。又、一新社は早大潮の會等々の學生層に積極的に働きかけ、杉並區野方町の興亞學塾は、滿川が青年志士養成のために「人の道教團」の中野中學附屬の校舎を譲受けたものであるといはれる。創立當時に發表せられた宣言に、左の如くいつてゐる。

嗚呼大鹽中洲九十年、明治維新六十年、西郷南州五十年、露西亞革命十年の紀念たる今年は何を意味するか、我等は最も明確に天下一新の時機來れるを覺悟せねばならぬ。我等一新社は日本國家の改造を目的とする精神的結成である。我等は之がために永遠且つ廣汎なる戰闘の上に生くるを覺悟せねばならぬ。

東興聯盟は、前述の如く、一新社の行動團體ともみるべき關係にあるものであつて、行地社の笠木良明の組織統率するところである。その傘下に走せ參じたのは、大阪、京都、北海道、靜岡、足尾等々の行地社支部、即ち、大阪の清輝會、京都の白箭社、京都興國義塾、双々會、北海道の北辰義塾、靜岡の聖双社（狩野敏）、足尾の白道社（大貫吉次）であつて、大體反大川派を糾合したものであつた。學生團體の參加するものも多かつた。また大化會に關係してゐた山本重太郎も幹部として參加した。東興聯盟の綱領は、左の如くである。

一、東興聯盟は眞日本建設のために献身す。新舊思想に因る模倣の冥道を走らずして天下の正

道を闊歩す。

一、東興聯盟は全世界に散在する被壓迫有色民族の正常なる要求の具現に努力す。

一、東興聯盟は日本魂の渾然たる情誼的結合なり、一切の空論を斥けてその所信を遂行するに萬全の實力を以て臨む。

東興聯盟は、徳川侯ダンス事件、某怪文書事件等々に活躍したが、首腦笠木良明が滿洲國資政局長官とかに仕官して滿洲へ去つたので、自然その存在は薄らいで行つた。

なほ、東興聯盟とよく似た名稱に東海聯盟といふのがある。これは北一輝派の影響を受けた俠客の親分大杉精市が京濱地方の親分連を集めて大正十四年（一九二五年）に結成したものであつて、故らに國粹會に加はらず、行地社——一新社——東興聯盟等々と連絡をとつて、一時はなか／＼の實行力を示したものである。その綱領ともいふべきものは、次ぎの如く獨立的なるものであつた。――

一、東海聯盟は私利私權のために國家を毒する政治と背徳亂倫の社會に對して十全の實力を以て臨む。従つて各員の目的は常に大日本國と八千萬同胞の公義正道に在るべし。

二、東海聯盟は各員の義理と人情を紐帶として結合するものなり。従つて凡ての協議決定實行

等極めて圓滑自然に一致協力すべし。

一、本聯盟に統領、理事、等必要に應じて役員を設く、役員等は本聯盟の上に絶對の命令權を有すると共に無限の責任を負ふものなり。

一、本聯盟は一點の義理に反し人情に背く言動あるを許さず。義理を破り人情を顧みざる現代社會に對し常に正義の勇者任俠の男子たることを信條とすべし。

東海聯盟の統領は、勿論大杉精市が就任した。

綾川武治、中谷武世の全日本興國同志會は、昭和二年（一九二七年）の紀元節（二月十一日）に第一回準備會を舉げ、同年秋の新嘗祭（十一月二十三日）に創立大會を開いたものである。東京、埼玉、長野、新潟、静岡、青森、宮城、茨城、愛知、和歌山、滋賀、京都、廣島、熊本の諸地方から同志が參集した。

創立大會に於いては、宣言と綱領とが決定された。宣言は「我等は日本の生みの子である。我等の『我』は終始日本的『我』である。我等の理想我は日本に出發し、日本に歸する。我等の『道』は先づ而して竟に『日本の道』である。……かくて祖國の心を心とし、維新先覺の願を願とする吾等が自今最大の努力は日本其のものに巢喰ふ邪惡を斷滅粉碎し、祖國本然の面目に復歸せしむること

とにあらねばならぬ……」といひ、その綱領は、左の如くなつてゐる。――

一、建國の理想を恢弘し、民族無窮の發展を長養す。

一、一君萬民の國性を政治組織に實現す。

一、上下融和國氣一家の風を社會制度に反映す。

一、國民經濟の繁榮を鄉村自疆の根基の上に促進す。

一、有色民族の崛起運動に協力し、國際資源の衡平、人口移動自由の原則の上に新世界秩序を創建す。

全日本興國同志會は、機關紙「日本主義運動」を發行し、特に勞働者農民運動の日本主義化に努力した。その加盟團體は、全日本同志會支部と呼ばず、それ／＼別個の名稱を有した。今その名を挙げると、農大一志會、裏日本興國青年聯盟、下越憂國青年聯盟、弘前旭光聯盟、下伊那國民精神作興會、實行社、成田修養會、大氣社、正氣會、濱松日本主義勞農同志會、静岡青年國本社、名古屋日本思想研究會、大津湖國青年聯盟、日本金鷄黨、和歌山興國青年會、吳興國青年會、熊本新日本建設同盟等々である。

全日本興國同志會には、綾川武治、中谷武世のほか、天野辰夫、國本社の太田耕造、原理日本

社の箕田胸喜及び滿川龜太郎も幹部として名を列したが、程なく中谷武世、天野辰夫等が建國會を脱退した津久井龍雄と愛國勤勞黨組織に参加せんとしたので、その賛否について會内は二つに分裂し、中谷、天野等の賛成者は脱會し、綾川武治一派のみが會内に殘留した。以後、全日本興國同志會としての活動は下火となつた。

西田税は、日本國民主義陣營に於ける特異の存在であつた。彼は士官學校在學時代に北一輝の大日本改造法案の影響を受け、少尉時代に官を辭して行地社創立に参加した變り種である。社會教育研究所に於いて學ぶ傍ら、行地社の軍人部長となり、在郷軍人及び現役軍人間に北主義の宣傳に努力した。その努力の結晶の 하나가、富山在郷軍人の集團星光同盟——後の天劍黨の組織である。

安田生命事件によつて行地社を脱した後、彼は某怪文書事件及び朴烈怪寫眞事件によつて投獄せられたが、出所後、昭和三年九月、代々木山谷に設立したのが有名なる士林莊である。

士林莊よりは、北一輝の「大日本改造法案大綱」を出版し、また機關紙「雄叫」を刊行した。士林莊のバックをなすものは北一輝の財力とその思想的勢力とであつた。士林莊の活動は表面的なる行動よりも、むしろ陰に於ける工作にありとみられた。その綱領は左の如し。

一、人類を正導すべき則天日本の建設。

イ、一切の奴隸的思想と其れを根基とする組織、運動の根絶

ロ、國民理想の闡明とその信仰的情熱の激成

ハ、國民人權の確立を以て國民國家の完成

ニ、人生の理想に基く社會の實現

ホ、經濟の國家的統制に依る國民生活の安定向上

ヘ、道義的對外策の遂行と其の爲めに軍の躍進的充實

二、白人種の隷従より全有色人種の解放

三、國家生存權の國際的主張

四、日本文明の世界的宣揚

また、その「主張」と稱するものには、左の如く述べられてゐる。――

今や日本國民は對內的にも對外的にも、奴隸解放戰を戦はざるべからざるの秋を迎へた。實に見渡す限り、全世界を荒掠し全人類を支配するものは人間生存の興趣と其の躍進的活歴史の無視否認以外の何物があるか。過去若くは未來を現在に須ひんとする錯誤と人間ならぬ物慾偽理とは普く世界を横行して今の時に付せざる人間とその世界とを造り出して居る。――此の世

界的苦悶のどん底にある吾等こそ、選ばれたる人類最後の戦士として解放戦を戦はざるべからざる運命の兒であるのだ——と。

西田税と同じ北一輝の門に出で、彼とは別個の組織をもつのは、馬場園義馬である。その組織とは、即ち彼が昭和三年末、士林莊より少し遅れて組織した國民戦線社である。その創立宣言に
——

舉國奮發の秋、大衆は興國興民の戦線に起て、吾等は天道に則して人間生存の理趣と社會進化の理義とを根基として之を攪亂する一切の思想及運動と戦ふ。求むる所は國民正義の魂を以てする新大日本國の建設にあり。閥族私利のための金權政治を打破せよ。大衆よ、頭なき政治家の離脱、脚なき思想家の喧噪、理なき資本家の横暴、誠なき社會運動の跋扈、倫なき藝術家の獸行に超越して、國民のため國民日本建設の聖戦を戦へ。

創立前の馬場園義馬は、北一輝、西田税の下獄中、よくその留守を預かり、先づ西田税の怪文書を再度撤布して投獄せられたが、出獄後、北一輝、西田税等の面倒をみてゐた。國民戦線社設立後は、翌昭和四年（一九二九年）三月より機關紙「國民戦線」を發行し、社の擴張運動に従つた。

昭和五年、有名なるロンドン條約問題起るや、大阪の清輝會（元大阪行地社支部）の會長里見良作、滿川龜太郎、高村光次等と興民懇話會を結成してロンドン條約反對運動を捲き起した。

國民戰線社は、また文書活動にも力を注ぎ、その「國民戰線小冊」は、右翼理論家の論旨の宣傳に充てられた。日協に参加したが、その後は團體としては沈滞してゐる。

次に大邦社の創立者口田康信は、この陣營には珍らしい廣島高等師範の教員出である。彼が昭和二年（一九二七年）八月、その教職を捨て、大邦社を組織するや、その門弟數十名が教壇乃至學窓より参加したと傳へられる。その宣言「……日輪遍照して乾坤輝耀す。……吾等の新日本建設運動は此の原理の上に立つことを全世界に宣言する。……時代を區劃し幾百年の信念を一變すべき使命を以て生れたる吾等是我見驕慢昏冥の評論者や、鍍金者流僞而非の運動者を拒絶する。吾等の宣言は實行である。吾等の主張は實力である。……」といふをみても分る如く、多分に宗教的色彩を有し、「國家改造の原理」の著がある。機關紙「大邦」三號を出したるも、財政難のため、結局その運動は萎靡沈滞し、東興聯盟と協力し、啓蒙運動を通じて農村青年に働きかけ、農民組合の組織を企圖した。後、愛國勤勞黨の組織せられるや、之に参加したが、幾許もなく中谷武世等と衝突し、脱黨後は、その農村的地盤を利用して下中彌三郎、長野朗等と村治派同盟を組織し

た。笠木良明に招かれて一時滿洲國資政局研究所長の任に就いたと傳へられるが、橋孝三郎宿泊その他と關聯して笠木の退官後、その跡を追つて職を辭した。固より大邦社の運動は自然消滅の形である。

北吟吉の祖國同志會は、始め彼の發行するところの雜誌「祖國」の讀者會に過ぎなかつたが、前述の如く、昭和四年（一九二九年）三月に、國家主義思想團體としての發足をなしたのである。祖國同志會は、右翼團體としての旗揚げ後も、その出版部より雜誌「祖國」及び「學苑」を發行し、研究部、調査部、講演部等の組織を整備し、杉森孝次郎、若宮卯之助等の諸名士を引き入れ、その財政的基礎また甚だ鞏固であるといはれた。一時、山川均との筆戰によつて若干傷つくところありとみられ北吟吉も、祖國運動ではすつかり難生した感があり、あるひは日本新聞の主筆となり、あるひは帝國美術學校を經營し、あるひは代議士に當選して民政黨に走るなど、彼の活動は多彩を極めた。昭和七年四月の外遊の時には「祖國」を廢刊し、歸朝後は國民主義運動家としての色彩を薄くしてゐる。實兄北一輝が二・二六事件によつて處斷せられても、弟吟吉には何等の關係がなかつた。

他方において、上杉・高島の國家社會主義系の建國會は、國家社會主義者よりいへば、單なる第二節 恐慌の深化と國家主義の昂揚

日本主義派實行團體に逆行したかに考へられたので、かゝる動向を快適とせざる高島直系の書記長津久井龍雄は、昭和四年（一九二九年）の始め以來、同門の同志矢部周、神永文三、小栗慶太郎等と相計つて機關雜誌「急進」を經營すると同時に、他方、建國會の福島佐太郎、伊地知義一、長澤九一郎と共に急進愛國黨と稱する國家社會主義に立脚する新政黨を結成した。

急進愛國黨の綱領は、建國會のそれに比すれば、やゝ簡略であつた。思ふに、後者の多辯的なるものを排してゝのことであらうか。その全文は、左の如くである。――

一、天皇中心主義の下に全日本大衆を忠實に代表し、之が擁護と伸長を期す。

一、國際的プロレタリアとしての日本の地位を自覺し、國內階級對立の掃蕩と相俟つて國際的大進出の敢行を期す。

急進愛國黨は、執行委員長に津久井龍雄、中央委員に伊地知義一、福島佐太郎等が就任し、評議員として天野辰夫、中谷武世、矢部周、神永文三、小栗慶太郎等の錚々たる顔振れを並べた。これに引き續いて、同黨はその綱領の實現のために労働者大衆のなかに組織をもつ必要を感じ、その捷徑として、宿縁の建國會に屬する労働組合の奪取といふ方法を選んだ。その結果、同年（昭和四年）七月に、急進愛國労働者聯盟が生れた。その綱領は、もとより母體たる急進愛國黨の

それに則したものであり、殊に第一及び第四項は後者と殆んど同一文言である。

一、本聯盟は天皇中心主義の旗の下に忠良なる全日本労働大衆の日常利害を最も忠實に代表し

之が擁護と伸長とを期す。

一、本聯盟は労働者團結の威力によつて非國家的資本主義の徹底的改革を斷行し、以つて搾取なき國家の確立を期す。

一、本聯盟は労働者解放の擬装の下に國家の存立と發展とを拒否する一切の賣國的労働運動の克服を期す。

一、本聯盟は國際的プロレタリアとしての日本の地位を自覺して國內對立の掃蕩と相俟つて國際的大進出の敢行を期す。

右の綱領については、第二項の「非國家的資本主義の……改革」及び「搾取なき國家」、並びに

第三項の「賣國的労働運動の克服」の字句に注意すべきである。次ぎに、急進愛國労働者聯盟には「主張」と稱する具體的政策の提示がある。それは、相當高度

の近代國家主義的なスローガンを盛つたものであつて、その内容は、左の如くであつた。

一、國際労働會議反對

第二節 恐慌の深化と國家主義の昂揚

一、國家的勞働組合の團結權、罷業權、團體協約權の確立

二、八時間勞働制確立

三、失業、傷害、老廢勞働者の生活の國家保障

四、最低賃銀制の確立

五、完全なる勞働法の獲得

最後の項目の如き、當時としてはなかく「急進的」なる要求である。しかしながら、その運動の實踐がそれに副つてゐたか否やは別問題である。

急進愛國勞働者聯盟結成の翌昭和五年（一九三〇年）十月、錦旗會の遠藤友四郎と、愛勞聯盟の長澤九一郎とが、國粹勞農同盟を組織して、翌六年五月、これを尊皇急進黨と改稱した。國粹勞農同盟も尊皇急進黨も、その實踐は餘り振はなかつたやうである。しかしながら、それに附置せられた日本プロレタリア意識研究會は、若干の出版活動を行つたかの如くであつた。

三 全國的國家主義黨結成の企圖

昭和四年（一九二九年）十一月に日本國民黨が成立した。この黨の成立は、第一回普通選舉（一

九二八年）に於ける左翼諸政黨の議會進出に刺戟せられしものであつて、日本國民黨結成の母體たりしものは、信州國民黨なる地方右翼政黨であつた。信州國民黨とは、同じ昭和四年五月廿六日、信州松本市に於いて結成をみたものであつて、總理に野田喜代志、幹事長に八幡博堂、幹事に鈴木善一等が就任し、舊勞農黨よりの轉向者も多く加はつたといはれる。この信州國民黨の結成について一寸こゝに述べて置かねばならぬのは、鹽谷慶一郎の明德會のことである。鹽谷慶一郎は大阪の人で、三高を経て東大法學部に入學したのであつたが、學業中ばにして退き支那に遊び、大正十二年、關東震災後に歸國して米村嘉一郎の赤化防止團の相談役となつてゐたのである。その後、昭和二年（一九二七年）三月、明德會を組織し、

一、吾人は忠誠皇室を尊ぶ。

一、吾人は我が王道の大仁に依つて全世界の統制を期す。

一、吾人はボルセヴィズム並にファツシズムを排す。

一、吾人は社會各階級各個人の正義と自由とを主張す。

一、吾人は貴族富豪の専恣横暴を許さず。

といふ獨特なる綱領を掲げ（註一）、他の國粹團體とは異つた運動を始めた。先づ「明德論壇」に

第二節 恐慌の深化と國家主義の昂揚

よつて左翼團體、資本家、既成政黨等に對するの攻撃陣を張ると同時に、國家主義運動に關する理論的展開をも行ひ、八幡博堂、鈴木善一等の意見をもよく容れて「國家主義的無產政黨」結成の機運の醸成に與つて力があつた。信州國民黨は、實にかゝる明德會を中心とする右翼大衆黨結成の雰圍氣の產物であつたのである。明德會そのものは、大した發展も遂げずして、後、大日本生産黨に合流し、鹽谷慶一郎その人も餘り表面に出ることもなかつたが、信州國民黨なる一地方政黨より日本國民黨といふ全國的日本主義政黨に發展したのである。

(註一)この綱領は、後、左の如く變更せられた。――

一、吾人は忠誠 皇室を尊崇す。

二、吾人は全世界の皇化を期す。

一、吾人は建國精神に對立する惡思想惡制度の撲滅を期す。

さて、信州國民黨のスタッフは、顧問に日本主義陣營の巨頭、頭山滿、及び内田良平を戴き、執行委員長に寺田稻次郎、書記長に八幡博堂、書記次長に鈴木善一、統制委員長に西田税、中央常任委員に長野朗、津田光造等を並べ、その顔振れは堂々たるものであつた。その綱領及び政黨をみると、次ぎの如くである。――

綱 領

- 一、吾黨は一國一家主義の建國精神に則り國民生活の發展を期す。
- 一、吾黨は建國精神に對立する現存の非國家的諸制度組織の徹底的改革を期す。
- 一、吾黨は建國精神に則り道義的建設を期す。

政 綱

- 一、一君萬民の大義の徹底と君民同治の政治的大本の確立を期す。
- 一、財産土地の無制限的私有に對する限度制の確立を期す。
- 一、重要生産業の國家的統一を期す。
- 一、階級的制度組織を改革して國民生存權の確立を期す。
- 一、法制及稅制の根本的改正を期す。
- 一、教育制度の根本的改革と國民的信念の統一激成を期す。
- 一、軍備の徹底的整理充實を期す。
- 一、農民、勞働者及小市民大衆の生活權の擁護を期す。
- 一、道義的外交を以て國家生存權の國際的確立と有色人種の世界的解放を期す。

第二節 恐慌の深化と國家主義の昂揚

一、東西文明を融合統一し、日本文化の世界的開顯宣布を期す。

第二次普選總選舉には書記長八幡博堂が信州より立候補したが力足らずして破れ、選舉戦後には執行委員長寺田稻次郎と八幡書記長との間に意見の對立が生じて前者が脱黨し、統制委員長西田税また安田生命事件に關聯して離黨し、黨勢も追々と不振に陥つた。しかし、この黨の青年部からは例の血盟五人組の小沼正、菱沼五郎、川崎長光、黒澤大二等が出た。

日本國民黨に次いで現はれた日本主義單一政黨組織の試みは、昭和五年（一九三〇年）二月に結成せられた愛國勤勞黨である。これは、前に述べた上杉系の全日本興國同志會の天野辰夫、綾川武治、中谷武世、高畠門下の津久井龍雄、矢部周、神永文三、小栗慶太郎の二グループに、大邦社の口田康信等が合流して天野辰夫（註一）の財力を基礎として組織せられたものであつて、大川周明、北吟吉、鹿子木員信等が顧問となり、中央委員には赤神良讓、長野朗、水守龜之助等の顔振れもみえてゐた。またその前衛隊としては、深田政太郎が委員長たる愛國無産青年同盟を有した。機關紙は「勤勞日本」である。準備時代には愛國大衆黨準備會と稱してゐた（註二）。結黨後、間もなく上杉系と高畠系との間に軋轢を生じ、高畠系が黨を去り、大統社の口田康信も脱退した。上杉系のうちでも、綾川武治はその編輯局長たりし日本新聞との連れより黨を去るべく餘儀なく

され、愛國勤勞黨自體としての活動にはみるべきものがなかつた。

同黨は、その後、下中彌三郎派の日本國民黨準備會に合流したが、それからの存在は餘り明瞭に潰滅することゝなつたのであつたが、神兵隊事件にあつた。この事件によつて、愛國勤勞黨は完全のため、最後の氣を吐くものといひ得るであらう。思ふに、愛國勤勞黨の存在は、黨そのものの活動よりも、早期全國的國民主義政黨の一企圖として意義が認められるのである。最後に、愛國勤勞黨の綱領を掲げて置こう。

愛國勤勞黨綱領

- 一、吾黨は 天皇と國民大衆との間に介在する一切の不當なる中間勢力を排撃し、一君萬民君民一家の大義に基き搾取なき國家の建設を期す。
- 二、吾黨は 天皇政治を徹底し個人主義を基調とする諸般の組織に根本的改革を加へ、産業大權の確立によりて全産業の國家的統制を期す。
- 三、吾黨は 勤勞日本の實現を意圖し、農村勤勞者、都市勤勞者、諸海上勤勞者の利害の調和を期す。

一、吾黨は資本主義の傀儡たる特權政黨と國性を無視せる無產政黨とに鋭く對立し、之が克服を期す。

一、吾黨は日本民族の世界的使命を高調し、人種平等、資源衡平の原則の上に國際正義の確立を期す。

右の綱領のうち、最後の項にある「人種平等、資源衡平」なる字句は、後の國民主義團體の綱領中にしばしば繰り返されたスローガンであり、日本國家主義の對外的動向を示唆するものとして注意すべきであらう。

(註一)天野辰夫は、上杉愼吉博士の弟子であり、大正十四年の濱松樂器爭議(日本勞働組合評議會指導)に際し、有名となつた。彼は當時の濱松樂器會社々長の息であり、彼の組織した勞農同志會が白刃を振つて爭議團と對抗したため、同樂器爭議の形勢が悪化し、その解決が著しく遅れたといはれる。

(註二)愛國勤勞黨は、結黨當時は愛國大衆黨と稱し、上杉、高島兩系分裂後に愛國勤勞黨と改稱したとの記述も見受けるが、本文記述の如き經過の方が正確らしい。なほ日本新聞は小川平吉が他より資本を仰いで經營してゐた日刊新聞であつて、日本の國家主義運動には相當の貢獻をなした。この頃の日本新聞は綾川武治が編輯局長、中谷武世が論說部長、神永文三が整理部長として愛國勤勞黨が牛耳つてゐたのであるが、それが新聞經營者側の反對を買つたのである。

四 國家主義團體の統一運動

以上の如く、全國的國家主義政黨結成の企圖は、日本國家主義運動幹部等の病根といはるゝ、割據主義、親分主義、自我中心主義等々のために蹉躓を重ねて來たが、獨占資本の合理化過程が進行すると同時に、勞働者、農民及び中産階級等の生活の窮迫はいよゝ甚だしきを加へ、金融資本——即ち國家主義運動者の所謂財閥とそれに結ぶ一部既成政黨、既成政治家たちとの態度が、國家主義者らの眼にはいよゝ耐へ難く感ぜられて來た。加ふるに彼等の對外的休戰政策、即ち所謂平和主義政策は、ますゝ國家主義運動者の反感を咬るに役立つた。これらの反感は、財閥階級、議會政治否認、軟弱外交の清算——對支積極政策、滿蒙獨立運動の強調等のスローガンとなつて現はれたのである。

かうした情勢は、必然的に全國的國家主義政黨統一の企圖へ拍車をかけた。この企圖は、二つの線に現はれた。一は、昭和六年（一九三一年）三月に結成せられた全日本愛國者共同闘争協議會即ち日協であり、他は同じ年の六月における大日本生産黨の成立である。

第二節 恐慌の深化と國家主義の昂揚

義陣營の急進派分子の協同戦線であつた。その主唱者となつたものは行地社青年部の狩野敏、平田九郎、雪竹榮等であり、その聲に集まつたものは、舊急進愛國黨の津久井龍雄、伊地知義一、舊日本國民黨の八幡博堂、鈴木善一、奥戸足百、國民戦線社の馬場園義馬、東興聯盟の山本重太郎等であり、これらは何づれも日協結成後、その常任委員となつた。赤尾敏の建國會も一時これに参加したが間もなく意見の杆格を生じて離反した。

日協は、最初のうちは右翼戦線の單なる連絡機關に過ぎなかつたが、亡國議會抹殺民衆大會、亡國議會抹殺演說會等を開いて運動を進めて行く間に、日協を以て恒常的機關たらしむべしといふ意見が起り、つひにこの意見が用ひられて一個の恒常的協同戦線體となつた。而して機關紙として「興國新聞」を發行した。この「興國新聞」は、日協の單なる機關紙から獨立の出版物となつて興國新聞社なるものが出現した。

日協の綱領は、左の如し。――

- 一、我等は亡國議會政治を覆滅し天皇親政の實現を期す。
- 一、我等は産業大權の確立により資本主義の打倒を期す。
- 一、我等は國內階級對立を克服し國威の世界的發揚を期す。

この日協の存在は、僅々一年間のことであつたが、その間に演說會、民衆大會、示威大會等々を旺んに行ひ、かなり目覺ましい活動力を示し得た。とはいへ、そも／＼日協の存在意義は從來の日本國家主義陣營内における三大系統たる玄洋社系、猶存社系、高島系を結びつけたる點にある。即ち日協は、右に挙げた諸團體のほか、日本勞働會、興國農民組合、愛國無產青年同盟、大日本青年同盟、聖刃社、江東青年雄辯研究會、小樽純勞働者組合等々をも糾合することができた。また内部の組織的方面についても實に活動的であり、加盟各團體の青年部を再組織して日協前衛隊と稱する行動隊を編成し、その隊長には狩野敏、副隊長には奥戸足百、伊地知義一が就いた。この頃、日本國民黨から走せ參じたものゝうちには、小沼正、菱沼五郎、川崎長光、黒澤大二等の血盟團五人男の顔もみられた。

日協は、なほも進んで國家主義團體の一大結集體たらうと努力したが、その後、構成員の餘りにも雑多なりしたため、統一がつかず、自然消滅の状態となり、昭和七年（一九三二年）七月、神武會が創立せらるゝや、これに發展的合同をするといふ形式をとつた。

日協によつて示された統一・結成の方向をもつと大規模且つ組織的になしとけたのが、大阪の大日本生産黨である。これは舊型の國粹團體の草分けともいふべき黒龍會が、時代の潮流に棹さ

して近代的國民主義團體として更生せんがために、大阪地方の中小商工業者並びに國粹團體を基礎として組織せられたものである。その提唱者たりしものは、黒龍會大阪支部長の吉田益三であつて、黒龍會首腦内田良平もこれに賛した。内田の關係より國家主義陣營内の大御所頭山滿もその顧問たることを諾した。

かゝる事情よりして、大日本生産黨の結成式は、珍らしくも東京以外の地即ち大阪において舉げられた。それは、前述の如く昭和六年六月のことである。結黨後の生産黨は、東京方面にも着々とその地歩を擴大し、同年十一月、東京において第一回大會を開くまでになつた。

大日本生産黨の結黨式とその第一回大會との間には、九月十八日に滿洲事變の起るあり、内田良平の意氣込みも物凄く、彼は大日本生産黨を以て最後の御奉公として力をこれに注いだといはれる。十一月東京における第一回大會に参加した團體は、黒龍會、明德會(註一)、回天時報社、日本國民黨、大日本青年黨、本地日本同盟、大阪同仁會、大阪北濱自治會、大阪印刷職工組合經親會、大阪市電自動車親友會、日本光風會、洛北青年同盟、公德會、京都市電自動車組合、古神道實行會、神州護國黨、三木組、興良會の十八團體であつた。

大日本生産黨が創立當時に發表した主義及び政綱は、左の如くであり、その主眼とするところ

は、「自主主義の徹底」とそれに矛盾せざる「國家統制經濟の確立」であるといふ。――

主 義

一、大日本主義を以つて國家の經綸を行ふ。

政 綱

一、欽定憲法に違ひ、君民一致の善政を徹底せしむること。

二、國體と國家の進運に適合せざる法律制度の改廢を行ひ、政治機關を簡易化せしむること。

三、自給自足經濟立國經濟の基礎を確立すること。

また、第一回大會には三十五ヶ條よりなる政策を發表した。

大日本生産黨第一回大會後幾許もなく、即ち昭和七年（一九三二年）一月に前述日協の一翼たる津久井龍雄等の急進黨國黨が加盟し、その後も大阪勞働運動界の古い「名士」で多分第一回國際勞働會議の勞働代表顧問たりし堂前孫三郎一派、八幡博堂、鈴木善一等の日本國民黨、全國勞農大衆黨長野縣聯合會常任委員秦數馬一派、九州炭坑の立野、佐々木一派の入黨、横濱自治革新會の合流、大阪の陸軍勞働組合の支持等があつて斷然勞働者的要素を濃化し、近代적國家主義團體たるの資格要件を具備して來たのであつた。舊い型の國粹團體が多少とも大衆に基礎を置く正常

的な勞働組合を傘下に收め得たのは、この大日本生産黨を以て嚆矢とするといつて宜しからう。元來大日本生産黨の組織において注目すべき點は、それが最初から中小商工業者即ち中産階級を自己の組織的基礎として選んだといふことにあり、——而してこの點も近代的國家主義團體たる一の要件ではあるが——大衆的な勞働組合をも獲得したといふ事實は、それにもまして注意すべき點といはねばならない。

大日本生産黨は、愛國急進黨等々の参加を得て、その政策を國家社會主義化した。昭和七年（一九三二年）二月の第三次普選總選舉はその「光輝ある初陣」（一月同黨聲明書）であつたが、それに臨むに當つて發表した政策は左の如くであつた。——

政 治

一、國家觀念を缺如せる政治家の根絶

二、金融寡頭政治の打破

三、金融財閥の寄生蟲、政民兩黨排撃

四、國賊共產黨、全協、亞流共產主義黨（全國勞農大衆黨）、社會民主主義黨（社會民衆黨）撃

滅

五、國民共存共榮政治の建設

六、大日本主義政權に立つ強硬外交展開(註一)

七、滿蒙獨立國家建設促進、滿蒙權益の國民化

八、支那の誘導開發

九、侵略的白人勢力の驅逐、新興亞細亞の建設

十、精銳なる國防機關の充實、賣國的軍縮論排撃(註二)

經濟

一、亡國的資本主義經濟組織の根本的改廢

二、生産者立國の國家統制新經濟政策確立

三、我利的金融資本家打倒、金融機關の國家管理

四、産業の國家本位的統制

五、勤勞國民大衆の生活保障

六、勞働權の保障、耕作權の確立、居住權の保障(註三)

七、生活必需品に對する消費稅撤廢

八、一切の大衆負擔税の輕減撤廢

九、生活必需品（瓦斯、水道、電氣）供給停止反對

社 會（註四）

一、一國一家主義の徹底

二、一切の階級的利己主義排撃、家族的國民道德昂揚

三、不合理なる社會的諸制度の撤廢

四、日本的勞働組合法の確立

五、一切の勞働者に對する失業、疾病、災害保險制度の確立

六、誤れる一切の現行爭議調停法の根本的修正

七、施療施設の徹底

八、徴兵其他公務奉仕による失業災害並に窮乏家族保障制度の確立

九、教育の機會均等、建國精神に立脚する國民教育の徹底（註五）

十、宗教、教育の營利化禁壓

十一、自主的愛國青年團建設

十二、移民政策の確立

- (註一) 六一九を「外交」と題する別部門に纏め一―四の番號を打てる資料あり。
- (註二) 本項を「國防」と題して獨立せしめる資料あり。
- (註三) 本項を「社會政策」の部門に移せる資料あり。
- (註四) 本部門を「社會制度」と題し、四以下を別に「社會政策」とし右の(註三)を六と七との中間に挿入せる資料あり。

(註五) 九―十一を「教育・宗教」と題せる資料あり。

右の政策のほか、生産黨は總選舉の「標語」として左の如きスローガンを飛ばした。――

- 一、國を蝕む寄生(既成)黨。
- 一、無産亡國、生産立國。
- 一、魯死啞は共產黨、日本は生産黨。
- 一、守れよ祖國、進めよ滿蒙！
- 一、金融管理を國家の手で！
- 一、凶作農村を直ぐ救へ！
- 一、寄生(既成)黨。霧散(無産)黨、狂慘(共產)黨。

第二節 恐慌の深化と國家主義の昂揚

一、眼覺めよ日本、守れよ生産黨！

一、一國一黨生産黨！

一、ドル買財閥打ち倒せ！

一、産業は國民本位に！

一、滿蒙經營は國民の手で！

總選舉に於ける生産黨は成功しなかつた。これは、近代的國家主義なるものが未だ日本の國民大衆に受け容れられず、國民主義團體が單なる「反動團體」としてしか理解せられず、未だ彼等の間に根を下ろすに至らなかつたことの證左とみねばならぬ。

總選舉に失敗した生産黨は、轉じて勞働組合の組織に努力した。生産黨傘下の勞働組合は前述堂前孫三郎が會長となつて昭和七年十月二十日に結成せられた大日本生産黨職業組合聯合會の中に統一せられてゐるのであるが、その主たる勞働組合は、大阪金屬勞働者組合、大阪化學産業勞働組合、大阪紡織産業勞働組合、全國鐵道構内立賣從業員同盟、大阪借家人協議會、大阪合同勞働組合、大阪製材從業員向上會、大阪雜種産業勞働組合、東京海員同盟等であつた。

以上が、滿洲事變勃發以前における日本國民主義運動の情勢である。

第三章 滿洲事變による社會的大轉換

第一節 滿洲事變と新政治勢力の擡頭

一 滿洲事變前の國內情勢

濱口民政黨内閣による減俸、對支積極政策の修正、ロンドン條約による軍縮と統帥權干犯問題が日本の國家主義運動の構成要素に變化を生ぜしめる契機をなしたことは、既に簡單に述べたところである。デフレ政策の強行による都市中産階級の窮迫、農村の中小地主の没落は、その及ぼすところ、單に都鄙中産階級プロパーに止まらない。かゝる減俸の強行と、一連の疑獄事件の頻發との對比は、既成政黨及びこれに立脚するいはゆる政黨内閣なるものが國民の經濟生活について何を考へてゐるか——いな、何にも考へてゐないかを示唆する最も端的なる證左でなければならぬ。次ぎに、ロンドン條約並びにこれに關聯する統帥權問題は、廣く軍人一般を刺戟したことは當然である。陸軍軍縮としては、大正十一年、大正十二年、大正十五年と、三次に亘つて相當廣

範圍のものが行はれた。第一次軍縮においては將校以下約六萬人の整理を見、第二次軍縮には二獨立守備隊、五幼年校その他の廢止を見た。なかんづく最も廣汎なりしは第三次軍縮であり、この時には、第十三師團（高田）、第十五師團（豐橋）、第十七師團（岡山）、第十八師團（久留米）の四ヶ師團が廢止せられ、將校以下三萬四千人、馬匹六千頭が整理を受けることゝなつた。この時の内閣は若槻憲政會内閣、陸相は宇垣一成であり、當時の情勢に於いてはそれゝ止むを得ざる理由あることであつたが、これは後年に至るまでいろ／＼と尾を引いた出來事であつた。

かくの如く滔々たる軍縮的風潮の横行に對して、軍人一般が等しく反撥せざるを得なかつたのは誠に自然のことであるが、昭和六年頃となると、農村恐慌——なかんづく東北地方を襲つた冷害饑饉が、特に軍青年層に刺戟を與へた。このことは、當時滿洲にあつた關東軍が、その頃主として東北地方出身の兵によつて占められてゐたことゝも深き關聯を有してゐると考へられた。軍青年層が平生接觸する兵士等は、これ一個の勤勞者である。従つてこれら勤勞者の家庭の經濟的不安定が何らかの機會に軍青年層に傳はり、彼等が銃後の生活問題、社會・經濟問題に關心を有つに至つたのである。

而かも内には數次に及ぶ共產黨事件があり、外には蔣介石の國民政府によるいはゆる國權回

復運動が勃發し、滿蒙には軋轢が頻發した。曰く萬寶山事件、曰く中村大尉事件と。國內改造と
そのための烽火としての對外硬政策の強行、——青年將校の關心はそこに向つて集中せられた。

二 軍人と政治

昭和六年（一九三一年）九月十八日の柳條溝事件を契機とする滿洲事變は、日本に對し、國內的
にも國際的にも至大の影響を及ぼした。先づその國內的影響であるが、この事變が日本の社會の
各方面に與へた變化は實に劃期的であるといはねばならぬ。この變化とは、一言にして掩へば日
本の政治全體が著しく近代的國民主義化したのである。それは各方面についていへることではあ
るが、特に（一）軍人、（二）國家主義團體、（三）無產團體の三つに分けて考察するのが便宜であら
うと思はれる。

第一に、先づ軍人と政治との關係に及ぼした影響である。軍人と政治との關係については種々
の説が行はれてゐる。最も普通に觀念されてゐるところは「世論ニ惑ハス政治ニ拘ハラス唯々一
途ニ己カ本分ノ忠節ヲ守リ義ハ嶽ヨリモ重ク死ハ鴻毛ヨリモ輕シト覺悟セヨ」と仰せられた 明
治天皇の軍人に下されし勅諭によつて、日本の現役軍人は政治運動を嚴禁せられてゐるとなす説

である。この説は國民の政治的權利に關する諸規定中にその反映を見出すことができる。例へば、衆議院議員選舉法第七條第二項には「陸海軍軍人ニシテ現役中ノ者（未タ入營セサル者及ヒ歸休下士官ヲ除ク）及戰時事變ニ際シ召集中ノ者ハ選舉權及被選舉權ヲ有セズ、兵籍ニ編入セラレタル學生生徒（勅令ヲ以テ定ムル者ヲ除ク）及志願ニヨリ國民軍ニ編入セラレタル者亦同ジ」とあつて、現役軍人は衆議院選舉權及び被選舉權をもたない。府縣會議員の選舉權、被選舉權も本條の準用によつて現役軍人には禁止せられてゐる。次ぎに市制第十一條第三項、町村制第九條第三項もまた「陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ町村ノ公務ニ參與スルコトヲ得ス、其ノ他ノ兵役ニ在ル者ニシテ戰時又ハ事變ニ際シ召集セラレタルトキ亦同シ」といつて、現役軍人の公民權を停止し、市町村會議員たることを禁止してゐる。陪審法第十四條第五號によつて「現役ノ陸軍軍人、海軍軍人」は「陪審員ノ職務ニ就カシムル事ヲ得ス」：：と規定されてゐるのも、同様の精神に基づくのである。また、治安警察法第五條第一號は、「現役及召集中ノ豫備後備ノ陸海軍軍人」は「政事上ノ結社ニ加入スルコトヲ得ス」と規定して、現役軍人の政黨加入を嚴禁してゐるのである。

従つて、今までは、現役軍人は政黨に加入せず、また政治運動には關係しないのが普通の慣習であつた。明治四十三年十一月に組織せられた在郷軍人會は、現役軍人の統制下にあつたが、そ

の動きは單なる在郷軍人の運動とみられて特に、軍人と政治に關する論議が起るやうなことはなかつた。

大正十三年（一九二四年）三月に、東京九段偕行社において、恢弘會なる軍人の團體が組織された。偕行社といへば、現役將校も關係ある施設であるが、この恢弘會組織の提案者は、豫備陸軍少將で當時關東國粹會總長たりし木田伊之助であり、その趣旨は在郷軍人の思想善導であつた。恢弘會の發會式は翌大正十四年四月となつたが、幹部としては會長に八代六郎海軍大將を戴き、柴五郎大將始め石光眞臣、高山公通、筑柴熊一、松本寛威等の諸將軍、石橋甫、中島賢明、和田賢助、佐藤臯藏等の諸提督が幹事となつた。創立早々、陸海合はせて二千餘百名の在郷將校が入會したといはれ、左の如き綱領を掲げた。

一、明治天皇の御遺徳を顯揚し、今上陛下の聖旨を奉體して國民精神を作興し、時弊を矯正し以つて國體の精華を發揮せんことを期す。

一、教育國防等に關する事項を討究し以つて國運の發展に資せんことを期す。

傳へられるところによれば、最初、恢弘會は在郷軍人のみならず、一般地方民に對する思想善導をもなさうと意氣込んだ由であるが、力關係を考慮した擧句、その範圍を在郷將士の間に止め

ることゝなしたのだといふ。

かくの如く、恢弘會の運動は、偕行社を據點とする軍人への政治的・社會的動きを示すものなりとはいへ、それは結局、在郷軍人の運動に過ぎなかつたものである。

しかるに、大正末期頃より軍人と政治との關係が、漸次、密接化して來たやうに考へられた。いはゆる廣義國防といふ觀念の普遍化である。その先驅的事實ともいふべきは、前述、大川周明の行地社運動であつた。この傾向は昭和五年頃に至つてやゝ強まつたとみられたが、昭和六年の滿洲事變後は一層強化し、内外政治に對する軍部の發言權が大いに重きを加へたのである。

三 神武會の創立

廣義國防の見地よりする軍部の國內改革に對する熱意の増大と、民間團體のこれに對する呼應とが相俟つて華々しい實を結んだものが、神武會の結成である。これは形式的にいへば軍民交渉の最初の仲介物であつた行地社の擴大的再組織ではあるが、その實質は舊行地社の狭い殻を脱した遙かに廣汎なものであつた。

今、その結成の跡を尋ねてみるに、前に述べた如く行地社は北一輝及び大川周明の對立に基く

重なる内紛のために、大正十五年——昭和五年頃には、不振状態にあつた。しかし、彼等はその間も自己の結成の主旨たる軍民交渉といふことを忘れなかつたのである。而して、日本國家の國內改造には少壯將校と行地社同志との提携によるのほかに途なしといふ確信に燃えてゐたのであつた。

しかるに、滿洲事變後は、前述の如く、日本の朝野には國家主義の波瀾が脈打つた。この情勢を看取した行地社首脳部は、こゝにいよ／＼積極的改造運動に乗り出すべく決意し、たま／＼昭和七年（一九三二年）二月の總選舉の機を捉へ、陸軍中將菊池武夫、關西の實業家石原廣一郎、張作霖爆死事件當時の關東軍參謀にして當時滿鐵理事たりし河本大作大佐等と結び、二月十一日の紀元節を卜し、行地社を母體として神武會なる行動團體を創立したのである。

神武會は、石原廣一郎の財的支援と、會頭大川を通ずる交遊關係とより、財政の餘裕あること、運動に活氣あること、國家主義團體中に比ぶものなき豪華版であり、紀元節にスタートを切つたその出陣振りは、まことに朝日に香ふ梅花にも似て壯且つ麗であつた。その發會式に當つて神武會の傘下に集まるもの舊行地社員のほかに、主なるものとしては大日本生産黨の一部、日協の大部分があり、その新會員は三萬と號せられ、行地社の機關紙「日本」を以て神武會機關紙とした。結成早々、總選舉戦に乗じて全國的遊說運動を行ひ、行地社、生産黨、日協その他の青年分

子を始め、當時の日大工學部教授永井了吉工學博士、ジャーナリスト澤田謙等がそれに參加した。

また新聞紙上にも尨大なる宣傳廣告をなして、その財力の豊富なることを思はしめた。

神武會結成の趣旨は、機關紙「日本」上にて大川會頭のいふところによれば、「ひとへに神武精神の發揚によつて、神聖なる國體を無窮に護持し、國難を抜本的に打開して國家隆興の根基を確立せんが爲」であつた。而してその本質は、「政黨に非ず、國民全體の力を糾合動員せんとするものであり、他山の石としてレーニン、ムツソリーニ、ヒットラーに範をとり、革新の範圍をロシアの右傾、ドイツの左傾に標準する」といふのであつた。また、神武會の主義及び綱領として掲げられたものは、左の如くである。――

主 義

一、神武建國の精神を宣揚し、誠忠を皇室に誓ひて神聖なる國體を無窮に護持し、天業を四海に恢弘するの覺悟を堅確にして先づ有色民族の解放及指導に任じ、更に世界の道義的統一に向つて勇往邁進す。

綱 領

一、日本建國の精神、日本國家の本質及び國民的理想を闡明し、本末主客を顛倒せる形式的教

育の弊風を改革し、眞個の日本國民を育成すべき皇國的教育組織の實現を期す。

一、天皇親政の本義に則り、黨利を主として國策を從とする政黨政治の陋習を打破し、億兆心を一にして天業を四海に恢弘すべき皇國的政治組織の實現を期す。

一、一君萬民の國風に基き私利を主として民福を從とする資本主義經濟の搾取を排除し、全國民の生活を安定せしむべき皇國的經濟組織の實現を期す。

神武會の創立に當つて定められた幹部の顔振れを挙げれば、會頭は大川周明、總務部長は狩野敏、勞働部長は松延繁次、調査部長は金内良輔、組織部長は片岡氣介、法務部長は宇都宮良久、青年部長は日野月末廣、編輯部長は雪竹榮といふ陣容であり、何づれも舊行地社系の錚々たる連中であつた。幹部間には、勿論、かゝる團體のつねとして内部的對立もあつたと思はれるが、この神武會の陣立は、當時としては正に右翼主義團體中の壓卷であつた。殊に、神武會が滿鐵の別働隊たる東亞經濟調查局を握つてゐたことは、種々の意味においてこの團體の強味であつたといへよう。

この神武會の結成の裡にも看取される如く、軍部の政治的地位の加重は、愛國主義團體を鼓舞すること大であつた。安達Ⅱ久原のいはゆる協力内閣運動による若槻民政黨内閣崩壞の後を受け

た犬養政友會内閣の成立（昭和六年十二月）の際に當つて、教育總監部本部長より出で、陸相の重任についた荒木貞夫中將（當時）の發言は、むしろ犬養首相のそれよりも重く世間には評價され、諸官省中、陸軍省の政策が最も重大なる指導力をもつたのであつた。

四 在郷軍人政治團體の發生

かゝる情勢は、當然在郷軍人に刺戟を與へた。在郷軍人の組織としては、從來、帝國軍人會のほか、恢弘會の結成がみられたが、この頃から積極的に政治的に活躍せんことを目的とする有力なる在郷軍人團體が而かも二つまで生れた。その一は、高級在郷將校の集團たる明倫會であり、他は、豫備將校と平野力三派の日本農民組合との合作たる皇道會であつた。

明倫會は、昭和七年五月一日に陸軍大將田中國重の名において、「吾人の奮然躍起したる理由」なる聲明書を起草して、その結成運動の第一歩を踏み出さんとしたものであつた。この聲明書が未だ發表されざる間に、かの五・一五事件の勃發するあり、その後を受けて急遽、右聲明書を世上に發表して、明倫會組織を天下の同志に呼びかけたのであつた。その聲明書の内容は大體左の如くであつた。――

吾人の奮然蹶起したる理由(聲明)

明倫會代表
陸軍大將

田 中 國 重

我帝國は今や内憂外患の一大國難に直面し、其狀恰も國家興亡の十字街頭に彷徨しあるの觀を呈し、危きこと宛然累卵の如し。吾人は此曠古の危機難局を直視し、國を憂ふる耿々たる一片の丹心抑へ難く、茲に蹶然として奮起し警鐘を鳴らして同胞の覺醒と奮起とを促さんとす。

内を顧れば國政に參與する既成政黨は眼中政黨あつて國家なく、徒に政權爭奪に没頭して黨利黨略の獲得擴張に腐心し、國利民福の寄與に關しては何等の經綸あるなく、爲めに百弊續出の因をなし、或は國家の禮遇を辱うする閣員にして私利私慾を充たさんが爲め政商と結託し收賄行爲を爲して恥じざる者あり。或は神聖なる勳章を好餌として前代未聞の勳章疑獄を惹起したる破廉恥の官吏あり。或は減俸反對運動をなして官紀を紊亂せる官吏の朋黨あり。或は國政に參與する代議士の選舉を黃白の爭と化し政界腐敗の因をなして毫も顧みざる常習犯あり。或は政客と氣脈を通じて巧みに金貨流出の機に投じて巨億の暴利を獲得せる貪婪なる財閥あり。

而して彼等は一朝政權を掌握するや、直に中央地方の大小官吏を根底より異動して餓えたる

黨人の獵官熱を充たし、或は之を選擧干渉の手段に供して其の治績治安に對しては概ね無關心なるのみならず、甚だしきに至つては植民地の高級官吏特種銀行會社の要部に至るまで悉く黨人を以て之に代え(下略)……………

又我邦財政は逐年甚だしく膨脹して國力との均衡を失するに拘はらず何等見るべき整理の跡なく(下略)……………

今日の窮迫せる我財界を整理せんと欲せば徹底的に行政整理を斷行すること焦眉の急務なるに拘はらず、却々諸種の口實を構へ不急の官職官制を設けて獵官狂の歡心を迎へんとするに至つては其暴狀實に驚くの外なしとす。

抑も我邦の官制は歷代の内閣が人の爲めに官を設くるの惡弊を踏襲し來りたる結果、諸官廳は必要以上に膨大し、必然整理の餘地あるに拘はらず之に一大斧鉞を加ふるの英斷に乏しきは勿論……況んや帝都の中央に巍々として屹立する新議院及び新なる諸官廳舍の如き華奢なる大厦高樓は我が國富民力と對照して大に權衡を失するに拘はらず之に巨額の國費を投するに吝ならざるに反し、國家の浮沈安危に關する國防に至つては之を不生産的施設として閑却し、反つて軍備の縮少を絶叫し、國庫の窮乏を軍備の縮少に依つて補填せむとするの矛盾なる政策を遂

行し、之に加ふるに政黨乃至輿論に迎合して自己の野心を充たさんとする過去に於ける一部の軍部當局は彼等政客と氣脈を通じて步調を揃へて日露戰役以來我先輩が 明治天皇の御偉業を奉承して苦心慘憺辛うじて建設し得たる我陸軍に惜氣もなく大斧鉞を加へて前後二回に亘り約八ヶ師團に相當する兵力を縮少し、尙之に慊らず國務大臣の榮位に戀々たるの私心に驅使せられて財務當局の理不盡なる要求を一蹴するの勇氣なくして讓歩を是れ事とし裕ならざる軍事豫算是年々削減の厄に會ふも毫も意とせず兵器裝具の準備充實を放任し來りたるが爲め端なくも今回の滿洲及上海事變に遭遇し、我出征軍の兵器裝具の不備缺陷は遺憾なく中外に暴露せらるるの失態を演じたるが如き、其横暴醜狀は能く筆舌の盡す所にあらざるなり……

斯く弊害百出、腐敗の極に達せる政界官界に向つて財政行政の緊縮整理を望むは蓋し百年河清を待つと何等撰ぶ所なし。

嗚呼國家非常の秋には非常の決斷を必要とするに拘はらず何れの政府も黨利黨略の拘束制肘する所となり……

翻つて對外關係を顧みれば一層心肝を寒からしむるものあり。即ち歴代内閣の因襲たる軟弱退嬰外交は、大勢順應國際協調主義の外何等の主義主張もなく爲めに歐洲大戰直後の巴里平和

會議に於て列國環視の下に人種平等案の貫徹に慘敗して以來、或は青島の還附となり、或は九ヶ國條約の締結に依り滿洲に於ける特權の喪失となり或は倫敦會議に於て屈辱的海軍協定甘受の結果拭ふべからざる國防上の一大缺陷となり、延ひては統帥權の干犯問題を惹起し、將又今回の滿洲事變に際しては政府當局の錯誤に依り、圖らずも國際聯盟及米國の不當干涉を招來し、併も國際聯盟に於て偶々問題紛糾し其解決困難を告ぐるや、飽迄其主張たる第三者の干涉を排除するの勇氣に乏しく、姑息にも一時其窮境を脱せむため窮餘の一策として聯盟の滿洲問題認識不足を理由に自ら進んで調査委員の派遣を提案して反つて累を後日に貽し、滿洲問題解決の前途に一抹の暗影を投じたるが如き、或は又米國々務卿の一喝に辟易して錦州攻撃のため蹶起交戦中の關東軍に前代未聞の敵前退却を強要して我皇軍の光輝ある歴史に千歳拭ふべからざる瑕瑾を印したる如き、上海派遣兵に於ても我政府當局の態度は終始不徹底にして、敵に大打撃を加ふるの勇氣なく、彼に尙反噬の餘力を存せしめたる結果停戰會議に當り讓歩に重ぬるに讓歩を以てするも我が主張を貫徹すること能はずして痛く帝國の威信を失墜したるが如き外交上の失敗は是亦擧げて數ふるに遑あらざるなり。

前述の如く我邦内外の狀勢を仔細に検討して深く想を國家の前途に馳するとき、苟も一片憂

國の志あるもの、誰か又憤慨せざる者あらん哉。昭和の聖代に彼の忌むべき血盟團の如き暴舉の發生となり以て恐怖時代を現出し、社會人心を極度の不安に陥れたるは蓋し其偶然ならざるを想はしむ。斯くの如き不祥事件を根底より芟除せんと欲せば單に限りある警察力の能くすべきものにあらず其遠因に廻り我政界の積弊を掃蕩し仍て國民思想の善導を圖り現に興奮せる國民の神經作用に根本的の治療を施すにあらざれば到底回復の望なきや明なりとす。

今や我忠勇なる陛下の軍隊は、或は寂寥たる滿洲の荒野に、或は複雑なる上海の國際環境に、勇戦奮闘幾多の犠牲を捧げて我國威を宇内に發揚し、此の沈滞せる日本に一大覺醒を促し、吾人をして暗夜に燈火を得たるの感を懷かしめ大に意を強うするに足るものあり。

然るに幾多の犠牲を拂ひ、辛うじて贏ち得たる滿洲國の建設も國際聯盟乃至米國の干渉の爲め、其前途は暗澹として容易に樂觀を許さざるのみならず、滿洲國の慈母とも稱すべき地位にありながら未だその承認を躊躇して列國の鼻息を窺ひつゝあるが如き不鮮明なる態度は、實に怪訝に堪へざるなり。

尙……國際聯盟調査委員の調査報告が將來我に不利なる場合、我政府當局は之に對抗して飽迄其主張を貫徹するの勇氣ありや否や。……若し不幸にして政府の最後の決心動搖するが如き

ことあらむか、滿洲出兵も、上海派兵も、往年の西伯利亞出兵の覆轍を踏むことなきを保し難し、事茲に至れば、帝國の威信は全然失墜し、創業未だ半ならずして大陸より退却するの餘儀なきに至り、遂に我踴躍たる天地に閉息して自滅の運命を俟つ外其の途なきに至らむも測るべからざるなり。故に吾人の死活問題たる滿蒙の善後策に關しては、最初の堅き決心に基き、飽まで其主張を貫徹するの覺悟を必要とす、然るに眼中政黨あつて國家なき政黨内閣又は歐米政治家の一顰一笑に喜憂する小心翼々たる政治家外交官等に向つて斯くの如き決心を期待するは全く木に縁つて魚を求むるの類と何等撰ぶ所なきを奈何せむ。想ふて茲に至れば吾々日本國民は宛然噴火山上に起臥するの感なきにあらざるなり。

吾人は空前の此一大難局に直面し徒らに袖手傍觀するに忍びず奮然蹶起し吾人と憂を共にし主義主張を同うする天下の志士と結合し協心戮力以て此難局を打開し 明治天皇の御偉業を奉承恢弘して 聖恩の萬一に酬ひ奉ると同時に大和民族の進路を開拓し國利民福の増進を圖り以て光輝ある君國の使命を全うせんことを期す。冀くば憂國の士奮つて吾人の此舉に参加せられん事を。(昭和七年五月一日)

右の聲明書發表後、明倫會は、續いて主義綱領を發表して結成運動を押し進め、十月十四日には

第一回懇談會を開くまで漕ぎつけた。而して最初の聲明書より一年後の昭和八年五月十六日に至つて、いよ／＼正式發會式を舉ぐることになつた。その間屢次の聲明書發表あり、それによつてみれば、明倫會の主要目的は、五・一五事件の防止、在郷軍人の政治的任務の強調等であつて、議會進出を可とし、合法主義を奉じ、政黨は打倒とまではいはずにこれを排撃するといふ態度であつた。その中心人物は前述の陸軍大將田中重であつて、このほかに陸軍中將伊丹松雄、同奥平俊藏、同三子石官太郎、海軍中將東郷吉太郎、關西の實業家石原廣一郎、同松尾忠二郎等が合流した。その「主義綱領」は左の如くであつた。――

一、皇祖肇國ノ神勅ヲ奉戴シテ天壤無窮ノ我國體ヲ尊重シ忠君愛國及獻身奉公ノ至誠ト道義的觀念トノ普及徹底ヲ期ス

二、既成政黨ノ積弊ヲ打破シテ天皇政治ノ確立及國家本位ノ政治ノ遂行ヲ期ス

三、退嬰追従外交ヲ排シテ自主ト正義トヲ基調トスル外交ヲ斷行シ以テ國威國權ノ宣揚發展ヲ圖リ且ツ大亞細亞主義ノ實現ヲ期ス

四、統帥大權ノ發動並ニ國際的軍備平等權ヲ確保シ以テ自主的國防ノ安固ヲ期ス

五、根本的行政財政及稅制ノ整理ヲ斷行シ且産業ノ振興中正ナル經濟政策ノ遂行並民族ノ海外

發展ニ依テ國力ノ充實及國民生活ノ安定ヲ期ス

明倫會は、例の國防に關する陸軍パンフレットが問題となつた時、その支持運動を行ふのほか、機關說排撃、國體明徴運動には在郷軍人獨特の偉大なる活動力を示した。昭和十一年二月の總選舉には六名の候補者を立て、甲府市の今井新造一人の當選を得た。

この明倫會と兩々相對峙するものが皇道會である。皇道會は昭和七年以來、陸軍中將等々力森藏、同高田豐樹、陸軍少將黒澤圭一郎、同富永政市等の在郷將官によつて發議され、同八年一月二十日、平野力三一派の日本農民組合が提携を決議して合流し、こゝに昭和八年四月に創立をみたものである。その創立に當つて發表せられた宣言は、左の如くであつた。――

宣 言

皇統三千年の光輝ある歴史を有する日本の現状は今や未曾有の危機に直面せり。即ち國民の生活は益々窮迫し産業は停廢して勤勞大衆は餓死線上に彷徨し、思想は益々惡化して極右極左共に跳梁し、國民道德は弛緩して輕佻浮華の風日に盛となり、列強は名を國際平和に藉りて帝國の正當なる權益を抑壓せんとす。此の如くんば皇國の前途爲に暗く、吾人の痛憤措く能はざる所なり。

惟ふに事態の茲に至れる由て來る所遠しと雖も、要するに明治以降歐米の個人主義及階級闘争的思想漸次我國に浸潤し、日本の傳統たる皇道精神を汚瀆して、毫も國家の興隆發展を念とせず、或は私利私慾を追求して更に國民民福を顧みず、或は思想の動搖に昏迷して其歸趨に惑ひ、不正不義の徒其間隙に乗じて權勢利福を壟斷し、至誠愛國の士は屏息して其志を伸ぶるの餘地なきに至りたること蓋し其最大原因ならずんばあらず。

茲に於てか吾人は座視するに忍びず、奮然蹶起して時弊を肅正し國運を恢弘して聊か君國に報ずる所あらんとす。吾人は須く（中略）秩序と安寧とを確保し、皇道精神を振興して道德の理智を涵養し、國財を充實して列強の壓迫に對抗し、國際正義を確立して之を四海に宣布せざるべからず。此の如くして初めて内外の國難を匡救し國體の精華を發揚することを得べきなり。

吾人は以上の目的を貫徹するに當り常に公明正大なる心事と正々堂々たる方法とを堅持せんとするものにして、近時世上に頻發せる陰謀暴力其他非合法手段の如きは斷じて採らざる所なり。吾人は帝國臣民として當然享有する一切の權利を活用し、吾人と志を同じくする憂國慨世の諸士と共に精神一到何事か成らざらんの意氣を以て勇往邁進せんことを期す。

次ぎに、皇道會の綱領は、左の如くである。――

綱 領

皇道政治を徹底し以て金匱無缺なる我が國體の精華を發揚するを主眼とす。

一、既成政黨の積弊を打破し、以て公明なる政治の確立を期す。

二、資本主義經濟機構を改廢し、國家統制經濟の實現を期す。

三、國民道德の振興を圖り、以て綱紀の肅正を期す。

四、軍備を充實し、以て國防の完備を期す。

五、國際正義の貫徹を圖り、世界資源の衡平を期す。

右の創立宣言中にある「近時世上に頻發せる陰謀暴力其他非合法手段の如きは斷じて採らざる所なり」といふ一句は、皇道會が明倫會の動向とその軌を一つにすることを示すものである。また、會の實際活動をみるも、明倫會とよく類似し、國家主義運動が一時的退漸を示した昭和九年には、明倫會、皇道會、及び安達謙藏の國民同盟の三派合同説さへ持ち上がったほどであつた。この合同運動は、平野派の反對によつて流産したが、このために合同派と非合同派との感情にヒビが入り、皇道會創立の功勞者の一人水谷吉義少佐は會を去らねばならなかつた。

皇道會には、日本農民組合なる大衆組織が存してゐる。これは同會の特異な點でもあり、またその強味でもある。日本農民組合もと日農（現在の大日農）に屬してゐたものであるが、大正十四年に分離した。その基礎は平野力三の山梨縣と稻富稜人の福岡縣にある。また、皇道會は勞働者層に對しても特殊の關心を藏し、勞働委員會を有してゐた。

右のほか、なほ在郷軍人團體としては、海軍關係に有終會と洋々會とがある。有終會は、旅順口閉塞隊生き残りの勇士有馬良橋大將を中心として大正十五年一月に創立せられしものであり、洋々會は、中島資明を中心として大正十三年八月に結成せられたものである。洋々會は始めは單なる海軍豫備將官の社會的機關であつたが、ロンドン條約に憤慨して對外硬を叫んで各方面に働きかけるに至つたのであつた。

五 國本社の活動

この時代には、また平沼騏一郎男の國本社と安岡正篤の金鷄學院及び國維會の名が、世上にしきりに喧傳されることゝなつた。

國本社の發祥は、東京帝大内の森戸事件で有名なる興國同志會である。興國同志會は上杉愼吉

博士を指導者として新人會に對抗して組織せられた愛國團體であつて、大正九年の設立に係る。翌十年、同會は機關紙「國本」を公刊し、平沼男を顧問に頂いた。會の中心人物は太田耕造と竹内賀久治とであつた。

しかるに、關東大震災後の大正十二年（一九二三年）十二月、山本權兵衛内閣の時に、かの不祥なる虎ノ門事件が起つた。山本内閣に入つて法相たりし平沼男は、内閣總辭職のために野に下つたが、同事件によつて男の受けた衝動は一しほ、大なるものがあつた。この平沼男の沈思默考の後、翌大正十三年に生れたものが、即ち國本社である。その創立趣意書は左の如くいつて、同社が一個の教化團體たることを明かにしてゐる。――

惟ふに國家の隆昌、民族の安榮は一に繋りて國民精神の作興と智徳の竝進とに存す。維新以來人文大いに開け、學藝益々進むと雖ども、放恣輕佻の風は漸く質實剛健の氣を掃ひ奇矯過激の説は溫良恭讓の俗を排して世道日に壞れ人心月に荒み追隨模倣の習遂に其の性となりて獨立創始の氣將に其の跡を絶たむとす、況んや客年大災に遭ひて國財多く毀損せられ國力著しく衰退するをや、今にして國民精神を涵養振作し國本を固くし智徳の竝進に努め國體の精華顯揚するに非ずむば國家及民族の前途亦終に知るべからず、謹みて 先帝の遺訓を誦し恭しく 今上

の聖諭を拜し、洵に戰兢の至りに堪えず爰に同志を天下に求め國家民族の急務に赴かんと欲し敢えて區々の腹心を布く、先憂の士冀くば奮つて賛同せられむことを。

國本社の特徴は、その會員に各界の名士を網羅せる點にあつた。平沼男の司法部内における地位より當然の結果として鈴木喜三郎、小山松吉、小原直、和仁貞吉、皆川治廣、山岡萬之助等の司法官關係多く、そのほかに、軍人としては東郷平八郎元帥、上原勇作元帥、有馬良橋、齋藤實、宇垣一成、加藤寛治、大角岑生、荒木貞夫、眞崎甚三郎、小磯國昭、秦眞次、松井石根、永田鐵山、菊池武夫、四王天延孝等々の陸海軍諸將星があり、財界關係では池田成彬、結城豐太郎、その他原嘉道、山川健次郎、古在由直、荒木寅三郎、後藤文夫、本多熊太郎、川村貞四郎、田邊治通、河田烈等々の學界、官界の諸名士が名を列した。一方、支部は百七十、會員は二十萬と稱せられた。國本社の事業は、機關誌「國本」(月刊)及び「國本新聞」の刊行、並びに講演會の開催等であり、殊に國本社の講演會はその動員し得る名士の顔振れの豪華さを以て鳴つたものであつた。國本社の綱領の趣旨は、「國民精神の涵養振作に努め國本運動を助長し、教化運動の徹底を期す」とにあつたが、諸方面——就中、軍部の信頼厚かりし平沼男は政界に隱然たる一大惑星的存在たることを示し、政變の度毎に後繼首相候補者として下馬評に上つたのであつた。

國本社は一時は「日本ファシズムの總本山」との誤解を受け、内外の視聽を惹いたが、平沼男自身はかゝる誤解を頗る迷惑と感じ、昭和七年（一九三二年）四月十九日に聲明書を發して、世人の蒙を啓かんとした。それにいふ。——「最近世間に喧傳されるファシズムは外國の國情に起因するものである。我國には我國独自の目的もあり使命もある。この目的使命は皆道德を本としてゐる。我國本社はこれに基礎を置くもので、外國の國情に端を發したるファシズムとは何等の關係なきものである」と。

昭和十一年の二・二六事件後、政界に大變動起るや、當時、樞密院副議長たりし平沼騏一郎男は樞密院議長たる榮職を拜した。こゝにおいてか、平沼男はその地位の重大に鑑み、國本社の會長たるを辭したのであつたが、越えて六月四日、突如として國本社の解散が發表せられた。その理由は、社會情勢の變化により教化團體としての目的を達成したりといふ點にあつた。

なほ國本社關係の團體として修養團があつた。これは明治三十九年（一九〇六年）二月十一日の紀元節の佳節に、蓮沼門三によつて設立せられしものであつて、最初は有名なる雷博士田尻稻次郎子が團長であつた。大正十二年（一九二三年）田尻博士の逝くや、平沼男がその後を受けて團長に就任し、工場、鑛山方面の労働者の間に勢力があつた。團員は一時十萬と稱せられた。

修養團には「三大誓願」なるものがある。蓋し、同團の綱領ともいふべきものである。それは左の如きものであつた。――

一、同胞愛……人よ醒めよ、醒めて愛に歸れ、愛無き人生は暗黒なり、共に祈りつゝ總ての人と親しめ、我が住む郷に一人争ふものなき迄に。

一、流汗鍛鍊……人よ起てよ、起ちて汗に歸れ、汗なき社會は墮落なり、共に祈りつゝ總ての人と働け、我が住む里に一人の怠る者もなき迄に。

六 金鷄學院の存在

金鷄學院は、行地社より分裂した安岡正篤の創立したものである。安岡正篤は一高獨法を経て大正十一年に帝大法學部を卒業したものであるが、論語の研究深く、また陽明學の信奉者であつた。始め大川周明とよく、大川の實行的なるに對して、安岡は理論的であり、精神主義的であつた。かゝる意味において、行地社における兩者が袂を分つたのは、當然の成行きとするものもある。大正十一年秋頃より酒井忠正伯、後藤文夫等に知られ、酒井伯の邸内の金鷄園において孔子の書を講じた。これ即ち金鷄學院なる名稱の起原である。大正十五年（一九二六年）、酒井伯、結城豊

太郎、赤池濃等の援助を得て金鷄園内に金鷄學院を創立し、昭和七年（一九三二年）二月よりこれを公開した。それは、明治維新における吉田松陰の松下村塾乃至藤田東湖塾の再現を以て理想とするものであつて、その趣旨は「篤志の子弟と相扶けて深く聖賢の學を修め、聊か國家の風教に盡す所あらむことを庶幾ふ」にあり、その目的は、「儒教を中心に東洋聖賢の學を修め……特に日本民族精神並に國體と治道とを研究する」にあつた。

樹蔭深き小石川原町の金鷄學院において、安岡の講義を聴いたものは、軍人、官吏、財界人、華族等各方面に亘り、彼の聲望は頗る高かつた。この金鷄學院の支持者には、前述諸氏のほか、江口定條、鶴見左右雄、町田辰次郎、和田彦次郎、建川美次陸軍中將、重藤千秋同少將、根本博大佐、大塚惟精、次田大次郎等が數へられた。

金鷄學院の本領は精神教育に在るが、五・一五事件にも若干の關係者を出した。世上は、金鷄學院を以ていはゆる新官僚のイデオロギー的源泉と取沙汰した。内務省、農林省、文部省等に信奉者が特に多かつたといはれる。

なほ神野信一が創立した日本主義勞働組合の草分けたる石川自彊組合を主要分子とする日本産業勞働俱樂部が金鷄學院の指導下にあつたのは、異色ある事實であつた。

七 國維會と所謂新官僚の動き

金鷄學院と關聯して世人の注意を惹いたものは國維會である。國維會は、滿洲事變後に擡頭したいはゆる新官僚派の結合であつた。昭和七年（一九三二年）一月十七日、安岡正篤の支持者が相集まつて組織したものである。

國維會の目的とするところは、「現在横行せる權力爭奪のあらゆる紛争を超越し、河井繼之助の所謂地下百尺に埋るゝ覺悟、禮儀廉耻の士を朝野に亘つて連ね、國運の維新に盡瘁する」といふにあつた。その發起人には、荒木貞夫中將、後藤文夫、近衛文麿公等の名もみえたが、結成當初の役員には、理事に岡部長景、吉田茂、近衛文麿、大島辰次郎、松本學、香坂昌康、酒井忠正等、幹事に橋本清之助、町田辰次郎、湯澤三千男、富田亥之助、安部十二造等があつた。廣田弘毅、後藤文夫、荒木貞夫中將も理事であつたこともあつたが、大臣になれば辭めるといふ内規のため最後の理事は岡部長景、近衛文麿、酒井忠正、松本學、香坂昌康、大島辰次郎、湯澤三千男となつてゐた。そして「國維」といふ機關紙をもつた。

國維會の設立趣旨は左の如く書かれた。――

我が國近來の内憂外患は其の重大深刻なる殆んど有史以來未曾有といふべし。

明治の驚異すべき國民的緊張と躍進との反動に由る墮風は今や容易に改むべからず。且つ前代文化の急進速成は政治經濟教育等百般に破綻續出し來り、而かも之に處すべき内省と忠恕との創造的精神は廢れ、一切を偏に客觀的唯物的のみに批判し去らんとし、私怨盛んにして公義衰へ、國內到る處階級的反感抗爭尖銳にして物情洶々たるに、更に隣邦の友誼全く破れ一國際信義毫も恃むべからず。經濟恐慌と政治的動搖との世界的黑雲は方に朝夜を暗澹たらしめつゝあり。今にして斷然、在來因循の風を排除せずんば遂に收拾すべからざる禍亂に陥らん。

不肖等此の情勢を座視するに忍びず、自ら憚らずして奮然身を挺し、至公血誠の同志を連ね、敢て共產主義インターナショナルの橫行を擅にせしめず、排他的シヨウヴィニズムの跋扈を漫にせしめず、日本精神に依つて内、政教の維新を圖り、外、善隣の誼を修め、以て眞個の國際昭和を實現せんことを期す。

次ぎに國維會の綱領は、左の如くである。――

- 一、廣く人材を結成し、國維の更張を期す。
- 一、大に國家の政教を興し、産業經濟の發展を期す。

一、輕佻詭激なる思想を匡し、日本精神の世界的光輝を期す。

國維會が最も有名になつたのは、昭和九年（一九三四年）七月三日、かの帝人事件によつて齋藤内閣が倒れた後を受けて、岡田内閣が成り、國維會の會員たる廣田弘毅が外務大臣、同後藤文夫が内務大臣、同藤井真信が大藏大臣となりし時であつた。その後、偉材永田鐵山少將等が後藤文夫等と結んだと傳へられたため、國維會の名はますます世間に喧傳せられたので、世の疑惑を解くため、昭和九年十一月、國維會の解散が發表せられた。

國維會解散の後、その繼續と思はるゝ朝飯會なる懇親團體が組織せられた。しかし、これについても世評がとかく煩さかつたので、間もなく朝飯會も解散となつた。

八 愛國的學生團體について

ドイツ（ナチス把握以前ですら）フランスあたりの大學生は、率ね右翼派に屬するが、日本の學生層には割合にさうした團體の勢力は強くない。——少なくとも過去においては強くなかつた。しかし、今後は時代の進むと共に、この社會層のうちにも國家主義運動の戦野が開拓されて行くことであらう。

近代における學生愛國主義運動の先驅は、東京帝大に組織された興國同志會である。これは前述の如く新人會に對抗し、時世の急進化を慨して結成せられたものである。その直接の動機となりしものは、いはゆる森戸事件である。大正九年一月、東京帝大經濟學部機關誌「經濟學研究」創刊號に、當時同學部助教たりし森戸辰男がクロボトキンの社會思想に關する研究を發表し、それが當局の忌憚に觸れ、編輯者大内兵衛助教と共に朝憲紊亂罪を以て問はれた。この時、新人會一派は森戸側に立つたが、上杉愼吉教授に私淑する學生たちは、斷然森戸糾弾の運動を起した。これが興國同志會の起原であり、當時可成純眞な學生も入つてゐた。森戸辰男は禁錮刑に處せられ下獄したが、この事件の波が納まつた後、太田耕造、竹内賀久治等の手によつて、興國同志會は學内團體としては解消し、百尺竿頭一步を進めて社會的なる國本社となり、辰野辰夫等は別に全日本興國同志會を組織したのであつた。

興國同志會の發展的解消後、學生の愛國團體として明確な存在を示したのは、早稻田大學の軍事研究團であつた。創立は大正十二年秋であつて、支那研究家青柳篤恒教授が指導者であつた。その創立大會が左翼集團文化同盟の妨害に遭ひ、それに引き續いて有名なる亂闘事件を惹起し、これが第一次共產黨事件摘發の口火ともなつたことは、前に縱横俱樂部の個所にて述べた通りで

ある。その後軍事研究團は、大正十五年六月に國防研究會として副島義一教授を指導者に頂き、後藤辰夫らが幹部となつて、學生の軍事研究、思想善導、身體鍛鍊等に努め、學生と軍隊とを接近せしむるに大いに與つて力があつた。

早大には、このほかに「潮の會」なるものがあつた。これは大正十一年十二月に、行地社の學生班として組織せられたものである、行地社の滿川龜太郎、松永材の兩者が指導者となつて親しく學生の訓育に努力したものでつた。行地社分裂後も滿川等の指導を仰ぎ、その敬愛學寮——興亞學塾等々滿川の行くところに従つた。しかし、一方、大川派の加藤春海らは學生興國聯盟を組織して大いに對抗したのであつた。

興國同志會の傳統を繼ぐ東京帝大内の右翼學生團體は、有名なる七生社である。指導者は前者と同じく上杉慎吉教授であつて、大正十四年二月十一日の紀元節に組織された。幹部は法學部學生の松岡平市。その名稱はいふまでもなく楠木正成公の遺訓に發してゐる。即ち七生社の主義は「至誠一貫報國盡忠」といふことにあり、また「吾人生を我邦に受け、大日本を世界の表に建つること能はずんば何を以てか能く祖先に報じ子孫に愧じざるを得む。……正に少壯有爲の士、憤然蹶起精神活潑の元氣を以つて踔厲風發身を以つて國家の重きに任んぜんことを期すべき秋に非

すや……吾人今學窓に在るも庶幾くは切磋琢磨氣節を砥勵し人格を陶冶し盛んに經綸の大策を講圖し盟友相誓つて以つて他日の飛躍を期せん」といつてゐる。

七生社の直接闘争目標は新人會の撲滅にあつた。この目的は一先づ達成せられた。現在この傳統は東大精神科學研究會あたりによつて繼がれ、藤澤親雄など國家主義陣營の名士を招いて講演會、研究會等を行つてゐる。

東大にはまた行地社系の「日ノ會」があつた。これは先輩にして行地社員なる笠木良明、綾川武治、中谷武世らによつて指導されてゐたものである。大正十四年に五高東光會の古閑潔の入學を得て俄然振つたが、その後は餘りその活動を聞かないやうである。

東大には右のほか現在では朱光會などがあつて、研究會等を行つてゐる。

東大「日ノ會」、早大「潮の會」をみても分るやうに、行地社が學生組織の方面に印した足跡は、相當大であつた。いま、序にその主なるものを挙げれば、先づ京都帝大の猶興學會である。それは大正十四年末、大川門下の江藤夏雄、篠原寧らを中心に結成せられたものであつて、大川周明、笠木良明、滿川龜太郎、中野琥逸、口田康信らの指導を交々受けた。後、行地社の分裂の影響を受けて、會内に大川派、滿川・笠木派の對立を生じて會の圓滿なる發展を阻害した。血盟團事件の京大

學生星子毅は、笠木派に屬する猶興會員であり、この事件によつて猶興學會の名を高からしめた。京大の猶興學會と同じ頃、同じ京都の立命館大學にも行地社系の團體が組織せられた。双双會といひ、兒玉精吾、寺田芳夫らが中心であつた。行地社分裂後は、一時白箭社と稱したが、昭和二年に解消した。

次ぎに行地社系としては、拓殖大學の「魂ノ會」(大正十二年創立にして幹部は内山文雄、中島信一、柳瀬薫、平田九郎等)北海道帝大の「烽の會」(幹部は高橋北雄、泉由松、山田鶴、石川博見等)、宇都宮高等農林學校の瑞穗會、五高東光會(大正十一年四月創立され、八波則吉、江藤夏雄、古閑潔らが幹部であつた)等がある。

以上のほか、國家主義學生團體として名があつたのを挙げると、京都同志社大學の洛北青年同盟明治大學の興國同志會(昭和四年十一月創立で指導者は赤神良讓教授、石井勇等)、日本大學の國司會(昭和四年十一月創立にして武藤賢、立田勇雄等が指導者)、慶應大學の國防研究會(昭和五年一月創立、幹部新館正國、天川勇等)、一高瑞穗會、東京愛國學生聯盟(昭和六年十月創立、指導者は愛國社の岩田愛之助、中谷武世、學生三原朝雄等)、京都愛國學生聯盟(昭和六年十一月創立、指導者は長尾郡太等)、全大學日本魂聯盟(大正十五年六月創立、幹部は帝國興信所長後藤武

夫、芳井直利、中谷登美夫、正田敏男等)、國學院の全國大日本主義同盟(指導者松永材教授)、全日本學生協議會(昭和七年四月創立、日本社會主義研究所の別働隊にして従つて赤松克麿、津久井龍雄、松延繁次、石川準十郎等の指導下にあつた)、日本新興學生協會等々があつた。これらのうち、一高の瑞穂會は割合に健全な校内活動をやつてゐるやうである。

なほ學協の綱領は

一、戰時的國家主義意識の確立。

二、共產主義的、社會民主主義的、ファシズム的諸グループの粉碎。

三、勞農青年との戰闘的同盟。

四、資本主義日本の打倒、社會主義日本の建設。

五、反動教育の打倒、自主的討究の確立。

六、軍事的訓練の徹底。

といふのであつた。

しかし以上の愛國學生團體は、その大部分が學生大衆を獲得することに失敗して、現在では學生團體としては、一部の例外を除き、殆んど活動を中止してゐる状態である。

第二節 血盟團事件

一 個人的テロの頻發

滿洲事變によつて日本の全社會の風潮が急轉向し始めた昭和七年（一九三二年）二月に、事變後最初の總選舉が行はれた。

滿洲事變勃發當時の若槻民政黨内閣は、安達謙藏・久原房之助のいはゆる協力内閣運動によつてその年の十二月十二日に「爆破」されたのであつた。この協力内閣運動については金解禁問題が存したため、當時種々の批評が世上に行はれないでもなかつたが、今日よりみれば久原の一國一黨的な、また安達の國民同盟的な一種の國家主義的政略の發現であつたといへよう。

若槻内閣の「爆破」後、安達・久原の企圖した協力内閣は成立せずして、犬養毅を首班とする政友會單獨内閣が成立した。衆議院の少數たる政友會内閣は議會を解散した。そして、二月に總選舉が行はるゝことゝなつたのである。

ところで、總選舉戦がいよ／＼白熱状態に達した二月九日夜のこと、當時、民政黨の選舉委員

長として、萬事の采配を振つてゐた前藏相井上準之助が、東京第二區民政黨候補者たる駒井重次の應援演説のため、本郷區駒込の駒本小學校へ乗り込んだ時、茨城縣人小沼正なる青年の手にせるピストルに倒れた。犯人小沼は「百姓の窮乏をみるに忍びず、その責任者たる前藏相を撃つた」と陳述してゐた。

すると、越えて三月五日、三井合名理事長團琢磨が、白晝、三井銀行の建物内にある合名に入らんとするところを、同じく茨城縣人の菱沼五郎なる青年のピストルに倒れたといふ事件が持ち上つた。

從來とても、日本の社會には、政治的暗殺が皆無といふわけではなかつた。敢て大久保利通、横井小楠、森有禮等々明治初期の古きに遡らずとも、大正時代に至つても外務省阿部政務局長の暗殺、朝日平吾による安田善次郎の刺殺、中岡良一による原敬暗殺より、近くは昭和三年三月の七生義團員黒田保久二による山本宣治代議士刺殺事件、昭和五年十一月の愛國社員佐郷屋留雄による濱口雄幸首相の暗殺事件等があつた。しかしながら、これらの事件が何づれも散發的、偶發的であるのに引き換へ、今次の井上——團の暗殺事件は、時代の急進的雰圍氣と相俟つて、何となく事件の背後に何か大きなものゝ存在するらしき氣配を世人に印象づけたのであつた。

二 血盟五人男の存在

暗殺犯人小沼正と菱沼五郎とは、昭和五年のロンドン條約問題紛糾の折、前に述べた日本國民黨中央委員の寺田稻次郎の檄に應じて故郷より決死隊員として上京して來た男であつた。而してその時、同じ決死隊員となりし茨城縣出身の川崎長光、黒澤大二、もう一人の黒澤金吉と共に血盟し、國民黨の生産黨への發展的解消後は、五名は相携へて日協前衛隊へ参加し、いはゆる血盟五人組を結成せることが、寺田稻次郎の口から語られた(註一)。而して黒澤大二も叔父につれて警視廳へ自首して出たのであつた。西川税も参考人として召喚せられた。

(註一)小沼正が公判廷にて語つたところによれば、血盟組の命名者は寺田稻次郎、五人組の命名者は鈴木善一、この兩呼稱が合して血盟五人組なる語が生れた。五人組は實は小沼正、黒澤大二、同金吉、川崎長光、菱沼五郎、照沼初太郎の六名であつたと。

事の重大に驚きたる警視廳當局が糸をたぐつて調査したところによれば、彼等は日召こと井上昭なる日蓮宗僧侶と、古内榮司なる小學校教員との指導の下に、より深き計劃を立てゝをり、そこには藤井齊海軍少佐、古賀清志海軍中尉らの名も線上に現はれたのであつた。

こゝにおいて、檢察當局の大活動が開始された。先づ古内榮司が三月十一日拂曉、代々木上原在の權藤成郷所有空家にて逮捕され、またかねて澁谷の頭山邸に匿れてゐた首魁日召は、三月九日その居所を突き止められ、古内就縛の報を聞いて同じ日の午前十時紫山塾頭本間憲一郎の附添ひの下に大野警視總監の官舎に自首した。そのほか、東京、京都兩帝大在學の同志らが續いて捕はれた。彼等一同を取調べた結果によれば、彼等は「我國現下の狀況を目して政治經濟その他の機構いづれも多く、缺陷を有し政黨財閥並びに特權階級は相結託して私利私慾のみに没頭し、國政をみだり國家存立の大義を誤り居るものとなして之が革正を計り、眞に君民共治の實現を期するために非常手段により政黨財閥並に特權階級等舊勢力を打倒せんと企圖しひたすらその機會の到來するのを待ちつゝあつた」(豫審終結決定書による)ものであつて、即ち國家改造の捨石とならんがために、井上日召を主盟、古内榮司を副司令として血盟團を結成し、政黨、政界、財閥の有力者をピストルを以て倒さんとしたものである。

以上の計劃の下に、日召は茨城縣大洗海岸東光臺の立正護國堂なる祠宇において、前記の青年を決死隊員として訓練すると共に、海軍側(古賀中尉等)、陸軍側(西田税等)及び大川周明派と結んだ。然るに、その後陸軍側は去り、昭和七年一月九日頃、井上派及び海軍側のみにて事を舉ぐるこ

とし、

一、二月十一日紀元節前後を期し政界財界並に特權階級の巨頭暗殺を決行すること。

二、武器は拳銃を使用すべきこと。

三、同志の一人東大法學部學生田元義隆をして地方在住の海軍部内同志にこれが傳達をなさしむること。

等を決定した。

ところが、その後、間もなく上海事變のために海軍側同志は出征するものが續出して共同行爲に出づることが不可能となつたため、一月三十一日、更らに井上派と海軍側とが凝議した結果、一、海軍側と分離し一先づ井上一派のみで決行し海軍側は他日を期すること。(これが、後に五一五事件となつた。)

二、井上は計劃實行の指揮統制に當り、他の同志において暗殺實行を擔當すること。

三、暗殺は機會をみて一人が一人を倒す方法をとること。(いはゆる一人二殺主義。)

四、直に行動を開始すること、井上日召の活動不能となつた時は各自臨機の處生をとること。等々を決定し、同時に暗殺割當をも決定した。それは政界、財界等各方面の代表的人物二十餘

名を選び、それに一人づつ擔當者を決定したのであつた。

血盟團の武器は藤井海軍少佐が滿洲方面（大連市の日滿商會）より入手して一同に手交したものであつた。藤井少佐は佐賀縣の産で古賀中尉の先輩である。大正十四年に海軍兵學校を卒業し昭和四年霞ヶ浦航空隊に入隊、同五年大村海軍航空隊付となり、同六年大尉に進級、航空母艦加賀乗組を命ぜられ、上海事變の時、二月六日真茹上空で偵察飛行中自爆して上海事變最初の空軍犠牲者となつた人である。自爆の後、少佐に進級した。海兵内に王師會なる啓蒙團體を組織し、後進を導いた。日召とは大洗海岸の護國寺でしばしば會つて肝膽相照してゐた仲である。

三 井上日召の人物

この事件は、血盟團事件として當時の日本社會を震撼せしめたものであるが、この事件によつて、和尚こと井上日召なる人物、その本據たる茨城縣大洗海岸の護國堂、この一團に思想的影響を與へまたその幹部に隠れ家を提供した制度學者成郷こと權藤善太郎及びその私塾たる自治學館などの存在が、世上に喧傳せられた。

主盟井上日召は、田中光顯伯が「容貌のいゝ非凡な坊主だと感心した。……護國堂で青年を集

めて辯ずるところは坊主頭だが正に國士といふ感じで、青年達はすっかり心酔してゐて、暗殺を教唆したりするやうな小さい男でないやうだ。……劍道は眞庭念流の使ひ手で親父に對しては絶對に服従し、兄弟を敬愛してゐた（『東朝』昭和七年三月十一日）と語つてゐる如く、かなりしつかりしたところのある人物らしかつた。多年支那を放浪して來て、特務的任務に服してゐたこともあるといふ。彼の著に「日本精神に生よ」（改造社版）といふのがあるが、これをみると、少年時代より相當苦勞して來た男であることが分る。最初は禪宗に凝り、その後は日蓮宗に傾倒した。右翼一部の間では「和尚」として非常なる尊敬を拂はれ、第三者的にみても相當の人物であるといつてよからうと思ふ。

四 血盟團事件の公判

血盟團十三名は三月二十八日、起訴と決定したが、その調書は數千枚の多きに達した。そしてその公判は、採めに採めて裁判を停止し、最初の裁判長酒卷貞一郎判事の如きは、忌避願ぎや病氣のため一時裁判官生活より引退したほどであつた。その後を藤井五一郎判事が代つて裁判長となつた。公判を重ねること前後九十二回（うち藤井裁判長のみで八十回）、二年半の歳月を費して

昭和九年十一月二十二日に判決が下つた。それは左の如くであつた。――

無期懲役	井上日昭
(求刑死刑)	
懲役十五年	古内榮司
(求刑死刑)	
無期懲役	小沼正
(求刑死刑)	
無期懲役	菱沼五郎
(求刑死刑)	
懲役十五年	田元義隆
(求刑無期)	
同 八年	池袋正釺郎
(求刑十五年)	
同 六年	久木田祐弘
(求刑十年)	
同 六年	須田太郎
(求刑十年)	
同 六年	田中邦雄
(求刑十年)	
同 六年	田倉利之
(求刑十年)	
同 四年	星子綴
(求刑六年)	
同 四年	森憲二
(求刑八年)	
同 四年	黒澤大二
(求刑八年)	

同 三年（求刑七年）

（幫助）伊

藤

廣（註一）

（註一）公判廷では、森、星子、伊藤は「同志でない」との理由で、日付、古内らから分離を請求された。

日召が逮捕せられたその翌日から、古賀中尉らのいはゆる第二陣の計劃が進められ、これが前述の如く有名なる五・一五事件となつて表面化した。従つて血盟團事件は單なる個人的なるテロ事件ではなく、また、これ一個を切り離して考ふことも間違ひであるほどの大事件であつたのである。

第三節 五・一五事件

一 大事件の勃發

昭和五年（一九三〇年）頃より日本社會に瀾漫し來たり、種々の小事件にその銳鋒を示しつつあつた革新的・國民主義的風波は、昭和七年（一九三二年）五月十五日に起つた事件によつて、その最頂上に達したといひ得るであらう。

この五月十五日事件、即ちいはゆる五・一五事件は、日本社會としては最初の政治的・思想的背景に支持されたる大規模の行動事件として、日本上下の震撼したところであつた。事件經過は當時新聞紙上でも詳しく報道せられ、またこれに關する書も少なくないので、叙述を出来るだけ簡單にするが、本事件參加の諸勢力は分つて四とすることが出来る。第一は、海軍中尉古賀清志、同中村義雄を指導者とする海軍側であり、それには、古賀中尉のほか、中尉三上卓、同山岸宏、少尉村山格之、豫備少尉黒岩勇、少尉伊藤龜域、同大庭春雄、及び大尉林正義、同塚野道雄等十名が參與してゐた。第二は、士官候補生を以て固める陸軍側であり、候補生後藤映範、中島忠秋、

八木春雄、金清豐、西川武敏、吉原政己、篠原市之助、石關榮、野村三郎、菅勤、坂元兼一郎の十一名及び陸士中退の池松武志等であつた。第一の海軍側と第二の陸軍側とは相會して軍人行動隊を形成した。第三は、民間行動隊であり、これは茨城縣の愛郷塾頭橋孝三郎、同塾教師にして塾頭の姻戚たる林正三、同塾少年係り後藤閑彦、塾長秘書春田信義等を首腦とし矢吹正吾、横須賀喜久雄、塙五百枝、大貫明幹、温水秀則、小室力也、奥田秀夫(明大生)、高根澤與一、杉浦孝、堀川秀雄(訓導)、照沼操(元訓導)、黒澤金吉、川崎長光等のいはゆる農民決死隊がこれに屬してゐた。第四は、民間側の行動隊援助者であり、神武會頭大川周明を始め紫山塾頭本間憲一郎、天行會長頭山秀三(頭山滿の息)がさうであつた。第一より第三のグループはそれ／＼手分けして首相官邸始め帝都の諸要所を襲撃し、首相以下の重要人物を暗殺し、全市を混亂に陥れ、しかる後に戒嚴の布告を促し、軍政府を樹立せしめ、それによつて國內改革を強行せんとしたのであつた。

海軍側の中心人物は前に血盟團事件において一言した藤井齊少佐であつた。古賀清志は大正十四年海兵在學中、藤井少佐より大亞細亞主義の洗禮を受け、霞ヶ浦時代に更らに一層の薰陶を受けたのであつた。古賀中尉は、佐賀縣佐賀市の産であり、幼にして貧しかつたが、土地の素封家伊丹氏の援助を得て佐賀中學より海兵に入學した力行の士である。昭和三年三月少尉となり、同

六年十二月中尉に進み、同時に拔擢されて霞ヶ浦航空隊學生となつたのであつた。この間に彼は、藤井少佐の指導により、現制度に對して批判的立場をとるに至つた、たま／＼ロンドン條約問題起るや、大いに憤慨せしめらるゝところがあつた。藤井齊少佐が井上日召と相結びたる關係上、日召一派とも聯絡をとり、また霞ヶ浦に近い茨城の愛郷塾にも近づき橋孝一郎派とも手を握り、一方東京に於いては神武會の大川周明派、西田税の士林莊一派とも相通するに至つた。彼は、相當に政治的才幹を有するらしく、諸方面の人々と相知つてゐた。

藤井少佐の死後、古賀中尉はその後を受けて運動の指導權を握り、血盟團とは別個に、昭和七年（一九三三年）二月より三月にかけていよ／＼事を擧ぐる決心をなし、援助者大川周明より運動資金及び武器を、また頭山秀三、本間憲一郎より武器を供與され、三月十三日に、行動の具體的プランを作製したのであつた。

二五・一五事件の計劃

右のプランによれば、第一段の行動として第一組、海軍側の三上卓、山岸宏、村山格之、黒岩勇、陸軍側の野村三郎、後藤映範、篠原市之助、石關榮、八木春雄が首相官邸及び日本銀行を、

第三組、海軍側の古賀清司、陸軍側の坂元兼一郎、菅勤、西川武敏、池松武志が牧野内大臣邸を
第三組、海軍側の中村義雄、陸軍側の中島忠秋、金清豊、吉原政己が政友會本部を、第四組、明
大生奥田秀雄、杉浦剛が三菱銀行を襲撃する。次ぎに、第二段の行動として、第一―第三組が集
合して一隊となり、警視廳へ向ふ。他方、別働隊として後藤閑彦を隊長とする愛郷熟の農民決死
隊をして日没より各變電所を襲撃せしめ帝都を暗黒化する。即ち、その内譯をいへば、尾久變電
所には大貫明幹及び高根澤興一、田端變電所には塙五百枝、鳩ヶ谷變電所には横須賀喜久雄、龜
戸變電所には矢吹正吾、淀橋變電所には温水秀則、日白變電所には小室力也が手榴弾を以て襲撃
する。而してまた別に「裏切者」として西田税豫備中尉を血祭りに上げることゝして、これには川
嶋長光、堀川秀雄、照沼操、黒澤金吉が當る。

以上の如きプロセスにより、帝都の混亂を策し、軍隊力を以て收拾するに非らざれば秩序を維
持し得ないやうな事態を惹起せしめ、嚴戒令を施行するの止むなきに至らしめ、つひに革新政府
樹立の目的を達成せんとするものであつた。

三月十五日午後五時半が事を擧ぐる時刻と決められた。その行動方針としては、
(一)行動には自動車を強制使用すること。

(二) 統制は年長者これに當り絶對服従のこと。

(三) 集合の際は特に注意して騒然に涉らざる如く、例へば偶然知己に遇したる如く装ふこと。

(四) 武器の授受は集合後適宜にこれをなすこと。

(五) 武器の使用法(略)。

を定めた。而してその行動は、先づ第一組は午後四時半に靖國神社に勢揃ひをなし、自動車に分乗して五時二十七分、永田町なる首相官邸に到着し、犬養老首相の姿を求めた結果、先づ三上中尉が日本間食堂に首相を得た。彼は直ちに拳銃の引金を引いたが、その前に護衛巡查を狙撃したので空發に終つた。首相は逸る一同を制して日本間應接室に導き「話せば分る」と襲撃者を説得せんとせしが、猶豫せば事を仕損ずるとみた山岸中尉が、「問答無用、撃て！」といひ(註一)、その聲に應じて、黒岩豫備少尉が左下顎骨部を、續いて三上中尉が右顎顚に拳銃彈丸を命中せしめた。

(註一) 後日、海軍側の横須賀鎮守府軍法會議において山岸中尉が陳述したところによれば、彼が自動車にて首相官邸へ急ぐ途中、「士官候補生の一人が、首相は支那ゴロで腹が据つてゐるから面と向つては殺せなくなりはいまいかときいたので、私は戦ひは意氣込みだから飛込んだ勢ひでやれと申しました。吾々の

惧れたのは首相がじわり受けて言葉巧みに逃げることでしたので即戦即決でやる決心でした」といつてゐる。更らに「問題無用、撃て！」については、「撃て撃てと大聲でいつたことは確かに覺えてゐるが、問答無用の言葉の方は全く夢中でした」と語つてゐる。

首相官邸襲撃組は犬養首相のほかに、護衛巡查田中五郎を狙撃、後にこれを死亡せしめ、また平山八十松巡查をも負傷せしめた。その後彼等の一部は警視廳に至つたが、豫期に反して警官の動員せられをらざるをみるや、襲撃を中止して憲兵隊に自首し、他の一隊は警視廳に向ひ、轉じて日本銀行に趣きし後、憲兵隊に自首した。

古賀中尉らの第二組は午後四時半高輪泉岳寺に集合し、五時二十七分頃三田臺町なる牧野内大臣邸を襲撃して手榴彈を門内に投げ込み、護衛巡查橋井龜一を拳銃にて傷けた。續いて途中檄文を撒きつゝ五時四十分、第三組よりやゝ遅れて警視廳に到着し、書記長坂弘一巡查及び讀賣新聞記者高橋巍を負傷せしめた後、憲兵隊へ自首した。

第三組は中村中尉の指揮の下に午後四時三十分新橋驛に集合し、五時四十分自動車にて麴町區内山下町なる政友會本部に至り手榴彈を投げ、同四十分警視廳前に至り、手榴彈一箇を投げ路傍の電柱に命中せしめしのみにて、途中檄文を散布しつゝ憲兵隊へ自首して出た。

第四組の奥田秀夫は手榴彈二箇を受けしも、七時三十分頃漸く三菱銀行にその一箇を投げて外壁の一部に損傷を加へて逃走し、一箇を友人宅に匿した。

變電所襲撃組は、何づれも機械の一部を短刀、鋏等にて損傷せしのみにて、手榴彈の威力を發揮せしむること能はず、目白變電所に趣きたる小室力也の如きは恐怖心のために手榴彈の投擲すら不可能といふ状態であつた。後に軍法會議法廷にて暴露せられしところによれば、憲兵隊へ自首せし海軍側行動者らは、當夜何づれも電燈を眺めてその消ゆる時を待つたが、ついに一瞬だにも消燈なく、失望せりといふことであつた。

三 五・一五事件のイデオロギ―

五・一五事件は、人命の犠牲者は犬養首相及び田中巡查の二名に過ぎなかつたが、社會の受けた衝撃は空前のものであつたといへよう。

しかし、その行動計劃そのものゝ内容は、些か杜撰であつたとの批判が行はれ得るであらう。たゞし、彼等からいへば、口火さへ切れば後は他の力によつて收拾さるべしと考へてゐたことであらう。

この點に關する詳述は避けるが要之、海軍側は、戒嚴令——革新政府樹立といふ考へをもつてゐたのである。特別辨護人朝田大尉（今次事變で戦死）が三上中尉に對し、「吾々級友は、諸君は事件決行後當然割腹するものと思つてゐた、然るに自首の行爲をとり今日に及んだのはいかなる原因によるのであるか」と鋭い質問を爲して、しばらく、三上中尉をして考へ込ませてゐたのも、この邊の事情を衡いたのであらう。

ところで、陸軍側の士官候補生は、そこまでは考へず、單純に捨石となる積りでゐたとみるべきであらう。例へば、第一師團軍法會議において、石關榮候補生は、「海軍は戒嚴令を豫想してゐたといふが、私共は討死するつもりであつて、海軍のやうな結果を豫想してゐなかつたのであります」といつてゐるし、篠原補候生もまた、「私は自首する積りはありませんでした。私は首相官邸で死ぬ積りでした」といひ、「自刃でもする積りだつたか」といふ西村判士長の質問に對して、「さうです……」「上は宸襟を惱まし奉り、軍規を紊り、國法を犯し、一同打揃つて自刃し得なかつたのは中譯ありません。罪萬死に値ひします。極刑を望みます」といつてゐる。また中島忠秋候補生の如き、自刃の覺悟で現に祖母の守刀の短刀を所持して行つたのをみても、それは分るであらう（註一）。

(註一)但し、陸軍側でも後藤映範候補生の如きは、戒嚴令の布告まで見透してゐたやうである。

候補生の参加理由については、軍法會議法廷において、判士長が坂元兼一郎に對し、「中村中尉は海軍のみで決行すると將來陸海軍對立となるから陸軍の肩章のついた人の参加を望むと云つたか」と訊問に對し坂元が「申されたやうでした」と答へてゐることによつて、察すべきである。

なほ五・一五事件當日の行動要項には、後述の如く、「年長者統制絶対服従」とあり、陸軍側は、年長者たる海軍側に當日の指揮をとられたこと若干遺憾に思ふ旨を法廷に洩らしてゐた。例へば、菅、中島、石關らの如きがさうである。

右の如く、五・一五事件の参加者の意思には、幾分喰ひ違つたところもみられるが、法廷における各被告の言動をみれば、從來の右翼運動者よりは一層批判的であり、眞面目な人々であつたことが分る。彼等の抱く思想的動向、なかんづくそのとれる手段については種々批評があるであらう。しかし心から、國家を思ひ、國民を思ふ彼等の至情には、打たれぬものはあるまい。五・一五事件の公判記録こそは、まことに貴重な國民教育の資料であらう。

古賀中尉はいふ——「……過去における自分の見方は不十分で一方に偏してゐたと思ひます。

但し一貫して救國濟民の心においては鞏固であり、七轉八起して、この思ひは貫く考へてありま

す。……日本は重大時期に臨んで居ります、この秋に政治家は改造を行ふべきにも拘はらず財閥と結託して黨利黨略を事とし、その責を忘れてゐます。……私は君民一體、中大兄皇子が蘇我入鹿を誅戮した心を心とし、斷乎として無二無三大和魂たゞ一つ——これが將來に對する覺悟であります。……と。中村中尉は、政府の政策を攻撃して「内閣を交迭する度に、朝鮮、臺灣の兩當局、滿鐵を初め地方農村の平巡查まで人をすげ替へる。かくの如き政黨のやり口は、天皇統治の大權を斷斷するものである。又井上準之助はロンドン條約による減税をしたが、減税は上に厚く下に薄い。然もこれを増税する時は下に厚く上に薄いのだと聞いた事があり、政黨財閥の結託をますく信じた」といひ、將來に對する考へとして「衆生濟度の大願には依然として變りはありません。日本臣民としては三千年の光輝ある歴史を永遠に子孫に傳ふべき責任を死しても盡さねばならぬと考へて居ります。大義に據りては百萬の大衆を控へても恐れず、死に至りては七度生れて國恩に報ぜんとした大楠公の態度をそのまゝ我心として進む決心であります」といつてゐる。三上中尉は「……行動の善惡は別として刻下の日本は人心の改造を必要とする。人の改造は國民の指導者たる支配階級が民衆に先立つて範を垂れることに始まる。私の確信する限り吾人の革命は私心や階級的反感に基く暴動或ひは反亂とは全く異つてゐる。唯だ祈る所は 天皇治下の國民の幸

福にある。憎む所はこれに反する邪惡の徒輩である。私は犯した罪を知つてゐるが、氣持は純一無雜にして一舉唯だ愛國心に基くものであつたことは公言できます……」 「現在の日本は吾々の行動の有無に拘らず今日既に重要な轉機に立つてゐる。今こそ新しき日本へと進むべき秋である。

……願はくば國民が眞に覺醒して昭和維新の實を擧げて貰ひたい、これ以外に念願はありません。死しては魂魄この世に止まつて護國の鬼となり、日本を守るため今死しても決して惜しむ所はありません。」「……私は上海事變に出征して感じましたが、陛下の萬歳を叫びつゝ靜かに倒れて行く無名の英雄が暗澹たる上海の戰況を刻々と輝やかしき勝利へと導いて行つた。吾々の輝やかしき彼岸はこの無名の戰死者の雄々しい努力で出来るものである。……」 「私は 天皇及び日本を信ずる。かの明治維新を前にして橘曙賢が

吹く風の目にこそ見えぬ神々は

此の天地にかむまつります

と誦した。これが私の心境です」といつてゐる。

陸軍側の候補生の法廷における態度も同様に立派なものであつたといへよう。後藤映範は、行動の理由を説明して「……第一に農村疲弊は心あるものゝ心痛の種であり、漁村然り、小中商工

業者また然りです。殊に一昨年秋は東北地方は不作のため農民は慘苦を極めてゐた。其の子弟は滿洲に出征してゐます。出征兵士に後顧の憂ひあるは國軍にとつて最も重大である。軍隊の中でも農兵は素質がよく東北農兵は皇軍の模範である。その出征兵士が生死の際に立ちながら、その家族が餓に泣き後顧あるは全く危険である。此東北農民の救民問題は全く捨てゝ顧みられない、財閥は巨富を擁して東北救民を尻目にかけて私慾を逞うしてゐる。一方東北救民のいたくない小學子弟には朝食も食へずに學校へ行き、家族は腐つた馬鈴薯を擦つて食べてゐるといふ窮狀である。之を一日捨てゝ置けば一日軍を危険に置くと考へたのである。之が爲には徒らに看板のみを掲げてゐる政黨、財閥を打倒する外はないと感じたのである。」「……私共がやつた事情、それは私達が國家の非常時を認識した以上、自らの生命を擲つて起つたのであります」とひ、石關榮は「國軍の基礎は國民であるが、農民今日の窮狀は坐視するに忍びない所だ」と叫んでゐる。西川武敏は「東北農村農民の悲惨な狀況を聞き（中略）而して東北、北海道代表が井上藏相に面會に行き、たび／＼拒絕された後、漸く會へて、然も何の得る所もなかつたとの事にこんな内閣では到底駄目だとの考へを深めた……」、「……楠公七生の通り身は亡んでも君國のために盡す覺悟を有つてをります」と決意を語つてゐる。士官校砲兵科首席で二ヶ月後には恩賜の光榮が待つてゐた

と云ふ吉原正己は「私が國家改造運動に入つた動機は將校となつて壯丁を教育するに當り、我が國體觀念を確立する必要を深刻に感じて國家研究に没頭するに至つた結果だ……大南洲に傾倒して其研究に没頭した結果、初めて大南洲の『名もいらぬ、金もいらぬ、名譽もいらぬ人間程住末に困る者はない』といつた言葉の意味を知つたといひ、その故郷福島村における農村の窮狀を聲淚共に下る言葉で述べて、測々と人の胸を惹打つた。

五・一五事件の軍人たちは、通常、大川周明、權藤成郷、北一輝、橋孝三郎、井上日召らのイデオロギー的影響を受けた如く考へられてゐるのであるが、法廷における彼等の陳述より察すれば、日召及び橋を除く以外の人々には、餘り大した敬意を拂はなかつたやうに思はれた。

彼等のうち、海軍側三上中尉の意見は獨特である。彼曰く「革命と維新とは同意義である。これに關する支那及び英米のやゝこしい議論は必要がない。日本國體に即し、日本人としての充分なる検討をすればそれで充分だ。吾々の維新革命は天皇親政、君民一如の國政を施くため、あらゆる社會惡を清算し、これを實踐の上に確立することである」といひ、直譯的ファシズム排撃論を展開した後、「私慾と權勢に左右される支配者が上にある時は國政は紊れ、國民は塗炭の苦しみを受け、外國の侮りを受ける。國家はなか／＼滅亡するものではないとの氣休めめ考へを以て吾

吾のやるのを餘計なことゝ考へるのは間違ひである。惡は飽くまで排しなければならぬ。私は直譯流のファシズムは絶對反對で戒嚴令は……（中略）……昭和維新建設の第一歩に入らんとため舉國一致内閣成立に至るまでの短時間における秩序維持といふだけの意味しか考へませんでしたといつてゐる。

四 五・一五事件の影響

五・一五事件は、犬養毅の生命と共に、いはゆる政黨内閣なるものゝ生命をも完全に葬り去つてしまつた。犬養横死直後、その夜半二時高橋藏相が臨時首相になつたが、翌十六日午前、内閣は總辭職をなし、その後繼内閣の性質に關し、諸議紛々元老西園寺公望公も、重臣として倉富樞府議長、牧野内府、山本權兵衛伯、清浦伯、岩槻男のほか、特に軍部の最長老として東郷平八郎、上原勇作の兩元帥の意見をも議した。軍部——殊に陸軍側では荒木陸相の下に眞崎參謀次長、武藤教育總監、小磯次官らが種々協議し、陸相に對し、強硬意見を述ぶところがあつた。一方、當の政友會では鈴木喜三郎後任總裁が單獨政友内閣を主張して森恪らの舉國一致内閣に反對してゐた。かくて、西園寺公は諸方面の情勢を顧慮した後、海軍大將齋藤實を奏請し、事件後十日餘を経た

る五月二十六日に漸く齋藤内閣が成立した。齋藤内閣は、なほ政・民兩黨の代表として山本達雄男（内相、民政）、永井柳太郎（拓相、民政）、三土忠三（鐵相、政友）、南弘（遞相、政友系）等を有したが、その後、岡田、廣田、林、近衛、平沼、阿部の諸内閣を通じて政黨代表の意味も薄れ、勿論純政黨内閣は一部の人々の希望を外に、今日未だ實現せず、まだ將來もその可能性がみられない状態である。

五・一五事件は政黨内閣に止めを刺すと共に、財閥をして「轉向」をなさしめ、なかんづく池田成彬を指導者とする三井財閥のそれが鮮かであつた。次ぎに農村匡救事業が續々と急施せられて窮乏せる農村を救ひ、また軍部の政治的進出を更らに急調ならしめた。

軍部では、五・一五事件直後の五月十七日に、先づ陸軍省が聲明を發して、

帝國國內の現状に憤激し非常手段に訴へ今次の不詳事件を引き起したる一味に關與せる陸軍側人員は在學中の陸軍士官學校生徒十一名にして事件直後直に全員東京憲兵隊に自首したるを以て目下憲兵隊に收容取調中なり。

といひ、また海軍側では、連日首脳部會議を開いた結果、十八日に至り、その最高意思を決定し、同日朝、大角海相より東郷元帥に一時間に亘つて諒解を求めた。その内容は左の如きものであつた。

一、部内よりかくの如き不逞漢をだした事に對しては飽くまでも謹慎の意を表し、直接犯行に携はつたものは勿論、その根元を突きとめ、軍紀の振肅を保持すること。

二、軍人に賜はりたる勅諭の精神を奉體し政治的に關與するが如き態度を極力排撃すること。

五 農民決死隊と愛郷塾

橘孝一郎を塾主とする愛郷塾生の農民決死隊の當日における行動は、軍人側の行動に比して精彩を缺いてゐた。彼等の決意にも拘はらず、その行動は殆んど失敗であつたといへよう。

橘孝一郎は大正三年（一九一四年）、一高英文科三年を中退した人間である。その後、故郷において田園生活を營むうち、農村の窮乏に深く心を動かされ、その主原因が社會組織の缺陷に存することに氣がついた。一時、マルクシズムの研究にも進んだが、マルクシズムが日本の國體と相容れぬことを痛感し、相互扶助を基調とするトルストイズムに轉向したといはれる。大正九年十一月より兄弟村を經營し、兄弟愛、隣人愛、土の勤勞主義に立脚する運動を始めた。いはゆる愛郷塾は、昭和五年（一九三〇年）末に開かれた彼の私塾であつて、正式には「自覺的農村勤勞學校愛郷塾」と稱し、代議士風見章及び縣當局の應援を得て、大地主義、兄弟主義、勤勞主義の三大原則を奉

じ、橋塾頭を中心として青年の訓練に猛進して行つた。塾の設立趣意書には、「け、さこそかけません。パイプルの講釋もいたしませんが、もと私は神佛にあつく歸依信入して居る所の一家であります。私の能とする處のものは神佛を信じまゐらせたく眞心のありたけを捧げつうけつ諸共に生きてゆく事だけであります。これが私の生活基調であります。一切は此基調によつて整へられなくてはなりません。塾を起し塾生に接するにしても何等變る所とてありません。塾生違もみな同胞の如く共に生きてゆく様にいたさねばなりません。そこで私の監督の下に塾生をして自營せしめるといふしくみにいたす譯であります」といつてゐる。その宗教的香ひの高いことが窺はれるであらう。

愛郷塾は少年部と青年部とに分れ、少年部は大體高等小學校卒業程度の學力及び年齢者、期間は二ケ年半。青年部は甲種及び乙種の二に分れ、甲種は滿十八歳以上のもので愛郷塾精神に徹せるもの限り、學力の如何を問はない。期間も限定しない。乙種は、一身上の理由で愛郷運動に没入し得ぬものではあるが志を同じうするものとし、農閑期に入塾し短期間（六ヶ月以内）のものである。

愛郷塾の教育は、愛郷精神と愛郷農法といふ理論及び實踐兩方面の訓練をなす。五・一五事件

前には塾生二十三名であつた。また愛郷塾は、その精神の宣傳及び對社會的活動のために、愛郷會を組織し、縣下の各方面に愛郷會支部を設けた。その數五十餘、會員一千名と云はれた。かくの如く、愛郷塾本來の面目は、いはゆる「晴耕雨讀」の理想郷たらんとする、極めて平和的

のものであり、建設的のものであつた。しかるに一方には農村の極端なる疲弊、既成政黨の腐敗と無力とがあり、他方には井上日召、日川康信、古賀清志等々の國民主義者との交渉あり、つひに塾主橘孝一郎は、平和的な農村主義より急進的な行動主義に急轉向するに至つたものである。従つて、五・一五事件を起す直前、滿洲國入りと觸れ込んで水戸で送別會が行はれ、橘が激烈な

る挨拶をなしたる時、彼のよき後援者菊池謙二郎の如きは色をなして叱正したといふことである。五・一五事件における農民決死隊は、左の如き三項目に準據したといはれる。――

一、祖國觀念、同胞觀念を全然忘れたかの如く思惟される國民大衆に、この觀念を呼び起さしめ、同時に日本の社會的疲弊の根本原因は、日本建國の基礎である農村を捨てゝ顧みないところの資本主義の總本山、都市專制に依るを、躬を以て示唆すること。

二、農民は農村の國家的重大性と使命を忘れ、自己と祖國とを救済する氣概と精神を奪ひ去られた、一種農奴的農民は自身の力を以て自己と祖國とを救済すべく奮起すべし。

一、陸海軍少壯士官と行動を共にせることは、軍部獨裁政治實現運動の表現なりとの、國民一般の誤解を、明瞭にせんためである。

橋孝三郎は、事件當日、事の成否をみずして滿洲國へ逃れたが捕へられた。この橋の逃避行については、世間の一部でも非難があり、橋自身にも何か思ひ違ひがあつてか、公判廷において苦笑してゐた。橋の人格は、その「獄中通信」序において、「……現在私の心境は、ひたすらに神の懷にのみ住み、人類社會の平和を切に祈り、農村社會の繁榮を切に切に希つてをります。……」といつてゐるのもみても分る如く、極めて謙虛なものである。しかし、彼は公判廷に於ていはゆる「公判鬭争」の舞臺と心得てか、公判の近づくにつれて漸次昂奮の色が現はれてゐた。

六 五・一五事件の處理

帝都を騒がした五・一五事件の軍人側行動者は、東京憲兵隊に自首し、農民決死隊員はそれぞれ逮捕され、隊長後藤閑彦は島根縣松江市に走つて同地の憲兵隊へ自首し、大川周明、本間憲一郎、頭山秀三らも、それ／＼捕へられた。本間憲一郎（紫山塾主）の如き、一時は檢舉不可能説さへ出たほどであつたが、同年九月十八日、澁谷で逮捕せられた。なほ事件の副産物としては、翌

昭和六年一月八日、陸軍始め觀兵式行幸に際し、愛郷塾生山田忠一の愛郷塾生釋放の直訴事件があり、その背後關係として、愛郷塾主代理橋徳次郎、植田義夫、染谷忠助ら三人が檢舉せられた。

五・一五事件の公判は、陸、海、民間三者各別に行はれた。先づ陸軍側では、第一師團軍法會議において、判士長西村琢磨砲兵中佐、判士中川睦之歩兵大尉、同川島修歩兵大尉、同横田洋歩兵大尉、同谷岩藏歩兵中尉、主理島田明三郎法務官、檢察官勾坂春平第一師團法務部長といふ陣容の下に、特別辯護人として細見惟雄歩兵少佐、中村次喜藏歩兵少佐、辯護士中村孝太郎ほか四名の辯護を以て、昭和八年七月二十五日から始められた。その結果、反亂罪を以て、被告等に禁で、一同禁錮八年の求刑があつたが、九月十九日の判決で、「動機は諒とするも軍紀紊亂重し」との理由を以て禁錮四年（未決勾留百五十日通算）となつた。大赦等のため、昭和十一年六月には、その全部が出所した。その多くは、大陸へ進出してゐるものゝ如くである。

次に、海軍側は横須賀鎮守府軍法會議において判士長高須四郎大佐、判士大和田昇少佐、同木阪義胤大尉、同藤尾勝夫大尉、主理高賴治法務官、檢察官潮水茂樹法務官、特別辯護人朝田肆六大尉、同淺水鐵男中尉、辯護士塚崎直義、清瀬一郎ほか三名といふ顔振れにて陸軍に先立つこと一日の昭和八年七月二十四日より公判を開始した。九月十一日山本檢察官は反亂罪の罪名の下

に古賀清志に死刑、中村義雄に無期禁錮、三上卓、黒岩勇に死刑、山岸宏、村山格之に無期禁錮、伊藤龜域、大庭春雄、林正藏に禁錮六年、塚野道雄に同三年を求刑するところがあつたが、九月八日の判決は、古賀清志が禁錮十五年、三上卓が同十五年、黒岩勇が同十三年、中村義雄が同十年、山岸宏が同十年、村山格之が同十年、大庭春雄、林正義が同二年（五年間執行猶豫）、塚野道雄が同一年（二年間執行猶豫）といふのであつた。

最後に、民間側の公判は、東京地方裁判所において、神垣裁判長、八木田、長野兩陪席判事、木内検事、辯護士杉浦武雄その他の陣容を以て軍部側に遅れて、昭和八年九月二十六日から開かれた。最初陸、海、法、三省會議において刑の量定につき協議する豫定であつたが、反對運動が起り、軍檢察の獨立を確認して、各別に行はる事となつたのである。民間側の罪名は、爆藥物取締罰則違反、殺人及び殺人未遂等々で、求刑は橋孝三郎が無期懲役、後藤閑彦が懲役十五年、林正三が同十二年、矢吹正吾、横須賀喜久雄が同十年、塙五百枝が同八年、大貫明幹が同十年、小室力也、春田信義が同七年奥田秀夫、池松武志（豫備の故を以て民間側に移送）が同十五年、高根澤與一、杉浦孝が同七年、堀川秀雄が同十二年、照沼操、黒澤金吾が同十年、川崎長光が無期懲役、また帮助者側として大川周明が同十五年、頭山秀三、本部憲一郎が同十年であつた。昭和九年二

月三日の判決では、橋孝三郎が無期懲役、大川周明が懲役十五年、頭山秀三が懲役八年、本間憲一郎が懲役十年、後藤閑彦が同十五年、奥田秀夫が同十二年、池松武志が同十五年、川崎長光が同十二年、林正三が同十二年、矢吹正吾が同七年、横須賀喜久雄が同七年、塙五百枝が同七年、大貫明幹が同七年、小室力也が同五年、春田信義が同三年六ヶ月、高根澤與一が同三年六ヶ月、杉浦孝が同三年六ヶ月、堀川秀雄が同八年、照沼操が同五年、黒澤金吉が同五年となり、後藤閑彦以下有期懲役の面々には、それ／＼四百日乃至三百日の未決通算があつた。

この判決に對しては辯護士側としては異論もあり、被告一同と協議を重ねたが、被告等は刑の輕重の如きは今更ら問ふところにあらずとして、一樣に上訴權を放棄し、第一審で服罪した。しかるに幫助者側においては、前述の如く、大川周明が懲役十五年、頭山秀三が同八年、本間憲一郎が同十年となつたが、この三名は上訴し、控訴審にては大川周明が禁錮七年、頭山秀三が同四年、本間憲一郎が同五年となり、上告審（昭和十年十月二十四日）においては、一層減刑され、大川周明が禁錮五年、頭山秀三が同三年、本間憲一郎が同四年となつた。

第四節 無產政黨の轉向

一 近代的國家主義と大衆組織

近代的國家主義運動の一大特徴は、それが大衆組織といふ基本部隊によつて支持せられてゐるといふことである。この一點は、多くの人々によつて看過され勝ちではあるが、これがなければそれは近代的國家主義運動と稱することは出來ず、またその運動の發展性もない。近代的デモクラシーの反動として起つた近代的國家主義は、大衆の心を把握しなければ、現實的地歩を確保し得ない。ここに近代的國家主義が往昔の單なる獨裁主義乃至專制主義と異なつた特異性を有するのである。單なる個人・集團乃至社會層の利害・權力を中心に發動せらるゝ單なる獨裁政治乃至專制主義は、二十世紀の世界においては通用し難き古手形なのである。

それは、世界の近代的國家主義運動の歴史を繕けば、直ちに看取し得るところである。先づ近代的國家主義運動の發祥たるイタリー・フアシズムに於いては、何よりもムツソリーニ自身がイタリー社會黨の優れたる指導者の一人であり、その機關紙「アヴァンティ」の主筆であつたし、事

を擧げた彼の下には、ヴィアンキ、ロツソーニ、ランツィルロなどの社會黨有數の闘士が馳せ参じた。またポーランドの近代國家主義運動の創建者でありポーランド建國の父たるピルスツキ一元帥はポーランド社會黨の出身である。ドイツ・ナチスにおいても運動を起したフェーグー、シュトラッサーらは社會主義的傾向の濃き理論家であつたのである。

かゝる意味において、近代國家主義を以てナショナリズムとソシアリズムとの結合であると斷ずる士も出て來てゐる。近代國家主義運動の最も簡單な定義を求めらるれば、さういつても、敢て大過はないであらう。

この點について、日本においては事態は何うであつたか？日本においても、大正七年の老壯會（及びある程度において猶存社、行地社）、大正七年の高昌素之の大衆社の組織、大正八年における高昌派と上杉愼吉博士との合作たる經倫學盟（及びその派生物たる急進愛國黨）等において、廣義の社會主義と國民主義との結合をみることができ。しかし、それらの轉向社會主義者は、敢ていふならば格別に大した大衆的組織をもたない、いはゞ街頭的・分散的ソシアリストに過ぎない。高昌素之といふ一個の人格を中心に結成せられたインテリ・ソシアリストの集團に過ぎなかつた。しかるに、**滿洲事變は**、大衆的規模において社會主義陣營の國民主義化を招來し、日本の國家

主義運動をして始めて語の適切なる意味における大衆組織を把握するに至らしめたのである。かかる意味においても、滿洲事變が日本の國內政治に及ぼした影響は、決定的に甚大なるものがあつたといはねばならぬ。

いま、無産團體と近代的國家主義との結合の過程は、それを四つに分つて考察するのが便宜であらう。第一は、赤松克麿を中心として惹き起されたる無産政黨内右翼派社會民衆黨の分裂であり、第二は、今村等らのいはゆる五人組を先頭とする中間派全國勞農大衆黨の内紛であり、第三は、いはゆる中間派（實は無産陣營内の右翼穩健派）勞働組合聯合體たる日本勞働組合總聯合を含む下中彌三郎を中心とする國民社會黨準備會の動きであり、第四は、最左翼陣營内の國家主義化運動である。

二 社會民衆の分裂

大衆的無産團體よりする國家主義への轉向の第一人者は、社會民衆黨書記長の赤松克麿であつた。

赤松克麿は明治二十七年（一八九四年）山口縣徳山町の産。大正八年に東京帝大法學部を卒業し

たものであるが、在學中、大正七年秋、教授吉野作造博士が浪人會との立會演説を行ふや、學内多數の學生と共に博士を擁護し、ついにこれを契機として同年末、同學の宮崎龍介、石渡春三らと共に吉野博士を擯いで新人會を組織した人間である。大學卒業後は、雑誌「解放」等の編輯に従つたが、後、日本勞働總同盟に入り、大正十年夏神戸川崎造船所の大ストライキには大いに活躍した。その有名なる「慘敗宣言」は彼の筆になると傳へられてゐる。文章に長じ、幾多の著者のほか、彼の作詞乃至譯詞になると傳へらるゝ歌がある。つねに當時の學生乃至インテリゲンチヤの歩む途のトップを切つたものであり、この意味において、大いに目先きの利く人間との評があつた。吉野博士の娘を娶り、總同盟婦人部の赤松常子及び河上肇門下で後、兄の跡を追つて右翼に轉向した赤松五百廣は彼の弟妹である。

彼は、最初は、最左翼派に屬すといふことであつたが、大正十三年（一九二四年）春、勞働總同盟大會の「方向轉換」宣言において、先づ最左翼よりの轉向の萌芽を示したと信ぜられてゐる。續いて、同年十一月の雑誌「新人」巻頭言に「科學的日本主義へ」を執筆し、從來の觀念的な左翼主義を排し、社會進化の普遍的法則と日本國家との兩者を知りたる上において合理的に案出せられた、日本における「眞の科學的無産階級指導方針」を樹立すべきことを主張した。これは、今

日においては左程珍奇とすべきものではなく——むしろ極めて平凡なる意見を述べたものに過ぎないが、この平凡事も、當時の、左翼イデオロギー全盛時代の労働運動界における發言としては、甚だ思ひ切つたものであつた。これは、赤松の有するよき一面たる先驅的大膽性を示すものといへよう。尤も、この赤松克麿のいはゆる「科學的日本主義」も、煎じ詰めれば、彼のいはゆる「勤勞階級」即ち「小役人、小商人、俸給生活者、官業被傭人」等の小市民層、いはゆる小ブルジョアジー層に基礎を置く社會民主主義に過ぎなかつたのである。換言すれば、彼の第一回轉向は、「コミニズムよりソシアル・デモクラシーへ、急進的社會主義から溫和的社會主義への轉向であつたのである。

ところが、高島素之によつて、「十年足らずの間に世界を一周したやうな、カメレオンの日和見振りと評せられた赤松克麿は、長く社會民主主義に止まることが出来ず、一步一步と右への歩みを續けて行つた。そして滿洲事變勃發前に、既に彼流に國家主義を把握して來てゐたのである。即ち彼は、その主張する「勤勞階級」に前記の如き意義を附し、また、當時専ら彼の編輯してゐた社會民衆黨機關紙「民衆新聞」第六號社説において、日本官憲の特殊性として、後者が露骨に資本主義の提灯を持たない事を縷々強調し、「官憲の國家的良心をして資本專制の社會的不正に目

を開かしめよ！」と叫び、日本官憲の國家主義が「その内容を新たにすべき時期」が來たつたことを力説し、また雑誌「改造」(大正十五年Ⅱ一九二六年十月號)に「官憲の特殊心理と民衆運動」なる論策を發表し、その中において、日本官憲の勞資何れにも偏せざる「超然たる國家の統治階級」たる矜持を稱揚し、官憲と社會運動との接近を説いた。これら一聯の勞作において、當時の彼のイデオロギーが近代的國民主義、國家主義に漸次傾いて行つたことを知ることができるのである。

赤松克麿の國家主義への移行に拍車をかけたのは、彼と行地社の大川周明との接近であつたであらう。兩者の接觸は、昭和六年(一九三一年)七月頃よりともいはれ、またそれより以前から始まつてゐたとも傳へられるのであるが、とに角、赤松、大川の接近の結果として、同年九月、日本社會主義研究所なるものが結成せられた。これは、社會民衆黨内の赤松派、行地社の勞働組合方面擔當者にして曾て鐵道従業員組合を組織したことのある松延繁次派、高島門下の理論家石川準十郎派、及び日協の津久井龍雄らが參加したものであつた。機關誌として翌十月より「日本社會主義」を發刊し、後昭和七年六月よりその名を「國家社會主義」と改題した。

日本社會主義研究所の目的は、「日本社會主義」發刊の辭に、「我等の『日本社會主義』とは、日本に行はるべき社會主義の謂ひである。我等は日本に行はるべき社會主義は國家社會主義ならざる

べからずと信ずる。蓋し我々は國家社會主義こそは、近世社會主義の理論的及び實踐的發展の歸結であり、日本民族共同精神の歸結であると信ずるからである」いつてゐる如く、また前記機關誌の改題によつても窺ひ得る如く、國家社會主義の理論的究明にあり、兼ねて、國家社會主義諸團體の提携を策するにあり、相當の資金も擁してゐたことゝて、無產團體の轉向には、この日本社會主義研究所は相當の役割を演じたと考へられる。

日本社會主義研究所は、その「暫定綱領」として左の如きものを掲げた。――

一、我等は國家を以て（中略）人類社會生活に必要缺くべからざる存在と信じ、この認識前提の下に日本共同社會の（中略）を期す。

二、我等は日本傳來の 天皇制を以て日本國民最適の國家形態と信じ、一切の經綸を此の前提の下に行はんことを期す。

三、我等は日本國家は日本國民の生活を保證するの責任あるものと信じ、これに必要な一切の改革を要求す。

四、我等は生産手段の私有を基礎とする資本主義の無政府經濟制を以て（下略）。

五、我等は現日本國民大多數者生活の窮乏を救済するは生産手段の國有並びに國家による集中

的計劃經濟の施行の外なきものと信じ、あらゆる手段を盡して之が實現を期す。

六、我等は日本國民は凡て平等の權利及義務を有し、且つ何人も公益に反して私益を追ふ能はざる事を要求し、これに反したる者は非國民と認め徹底的排撃を期す。

七、我等は凡ゆる國民はその生存資源に於いて包有人口を基礎とせる平等の權利を有すべきものと信じ、この包有人口に顧みて過分の土地及資源の國民に對してその門戸を解放すべきことを要求す。

八、我等は右の立場及び標準よりして、我が國民の扶養に必要な土地及び資源を公然世界の過當占有國民に對して要求す。

九、我等は現在の白色民族に依る有色民族の壓殺及搾取を以て許すべからざるものと認め、全有色民族を糾合して一大民族同盟を結成し、以てこれが全的解放を期す。

十、我等は右の見地に立つ新たなる國際同盟インターナショナルの結成を世界各国國民に向つて提唱しこれが實現を期す。これに反對するものは世界平和の敵と認めあらゆる手段を盡して其の克服を期す、

同年十月、日本社會主義研究所は、赤松克麿の「國民主義と社會主義」なるパンフレットを刊行した。これは、七月一日、早大において彼の行つた講演を纏めて上梓したものであるが、その

うちには、彼の國家社會主義理論が展開せられてゐる。先づ第一に、彼は「今日の資本主義といふ制度を打倒せねばならぬ」と考へるものであつて、その方法論としては「ナショナルを通じてインタナショナルに向ふべきだ」と信ずるのである。

赤松の國家社會主義理論は、翌昭和七年四月に發行せられた「新國民運動の基調」において更に嚴密に規定せられた。「マルクス主義者には階級意識があつて國民意識がない。」「世界資本主義を打倒すれば、直ちに世界社會主義が實現し、そして人類協調の世界平和がくると考へるのがマルクス主義の空想的インタナショナルイズムである。」「社會主義は一國の國民經濟を通じて實現する。一國の勤勞大衆は、その生活權を確立するために、國民的限界に於いて社會主義を實現する。萬國のプロレタリアートが團結することが、解釋の第一條件ではない。一國のプロレタリアートが獨力をもつて自主的に一國社會主義を建設することが、解放の第一條件である。……社會主義がその發達の第一段階として、國民主義的形態をとすることは必然といはねばならぬ。……我は現段階に於いて先づ社會主義の國民的性質を把握しなければならぬ。プロレタリアートに祖國はある。祖國は我々が生活と文化と運命を共にする基本的共同體である。社會主義は先づ我々の祖國に實を結ばねばならぬ」と。

か、理由に基き、赤松の「國民社會主義は、空想的インタナショナルイズムを否定して、現實的インタナショナルイズムに立脚する。」「これを具體的にいへば、劣弱なる諸民族が、共同戦線を張つて、強大民族の獨占的權益の放棄のために闘争し、諸民族の生活水準の世界的平均化を促進する指導精神が、現實的インタナショナルイズムである。」即ち、それは「萬國のプロレタリアートの中、結ぶべきものは結び、戦ふべきものは戦ひ、民族闘争を通じて、國際平和へ近づかんとするものである。一國社會主義が國內闘争を通じて建設される如く、國際社會主義もまた民族闘争を通じて實現される。」更にこの「現實的インタナショナルイズム」を一層具體的にいへば、それは「アジアの被壓迫民族を統一する第五インタナショナル(註一)でなければならぬ。第五インタショナルは……強大民族と弱小民族との闘争を肯定するものだ。しかしこの新インタナショナルの主動的地位に立つべきものは、わが日本であるが、これがためには第一歩として、先づ資本主義日本を打倒して、社會主義日本の建設を急がねばならぬ。……日本國家の正しき使命は、日本、朝鮮、臺灣、滿洲、……支那、印度、フィリッピンまで引き入れて、大亞細亞社會主義プロツクを建設するにある。」

(註一)第一第二第三インタナショナルは、マルクス主義的國際主義のもの、第四は、アナキストのそれ
第四節 無產政黨の轉向

であると、赤松は規定する。

しかしながら、それは、舊き大亞細亞主義とは異なる。「舊き大亞細亞主義は搾取のための大亞細亞主義であつた。しかしそれは王道主義ではない。……日本民族の行くべき道は、王道主義に立つ大亞細亞主義の實現でなければならぬ。それがためには、我々は高き文化を有する指導者としての社會主義日本を建設しなければならぬ。資本主義日本の地位にある限りアジア・インタナショナルの指導者の資格を缺くのみならず、滿洲國を指導する資格さへないのである」。

赤松克麿の國家社會主義は、こゝに王道主義に飛躍する。しかし、それは、滿洲事變による直接的刺戟を受けたことによるものであつて、この段階における彼の理論が國家社會主義から離脱したことを意味するものではない。即ち、續けて彼はいふ。——「……社會主義がプロレタリアーだけの階級的イデオロギーにとどまる間は、民族を動かす力となり得ない。社會主義が現段階に於ける民族が國難打開のため當然これを採らねばならぬ、イデオロギーとしての民族的價值を有するに至つて、始めて全大衆を動かす力となるのだ。……社會主義運動は愛國運動でなければならぬ。愛國的基調に立たざる社會主義運動は、無力なる少數者運動に固定し、社會主義的基礎に立たざる愛國運動は、現状維持の反動運動に終る。國家主義そのものに最高價值があるのでは

ない。國家は國民の生活を擁護し、その文化の發展を促進するものでなければならぬ。若し國家にして國民の生活を安定せしめず、その文化の發展を阻止するものであるならば、その國家は改革されなければならぬ。現代の日本國家は資本主義國家である。それは財閥富豪を擁護し、國民大衆を生活難に陥れ、不健全なる資本主義文化を醸成し、日本の文化的發展を邪道に導くものである。我々は今や資本主義改革の必要に迫られてゐる。資本主義を支持する愛國運動はあり得ない。なんとすれば資本主義國家はすでに歴史的使命を終へて、國民文化にとり有害無益の存在と化したからである。愛國者は社會主義者でなければならぬ。社會主義者は愛國者でなければならぬ。」

かゝる見地から、彼れ赤松克麿は、「新國民運動を要望す」る。この新しき運動、即ち「この新しき黨は、財閥と結託して黨利に没頭する黨の衣裳替へではない。マルクス主義的階級主義に固定する黨の看板塗替へでもない。それは新日本の指導者としての感激と經綸と實力とを具備した黨でなければならぬ。われ／＼はこの意味に於ける新しき黨の出現を要望する。」

では、この新しき政黨の性質は、いかなるものか？ それは、

一、國民主義の黨たること。

二、社會主義の黨たること。

三、空想的インターナショナルを廢棄して現實的インターナショナルに立つこと。

四、行動主義であること。

赤松克麿の國家社會主義理論の展開は、大體以上の如くであつた。最初の「國民主義と社會主義」に展示せられた彼の立場に對しては、既に社會民衆黨内青年分子のうちには、相當の支持者が発見され、後の「新國民運動の基調」に指示せられた新黨の性質は、後述の如く、國家社會黨準備會の新黨運動に實踐的に結晶しつゝあつたのである。

後、社會民衆黨内の赤松派青年分子は、昭和六年十一月二十九日に、赤松の下に結成し、社民黨前衛として、社會青年同盟を組織した。その創立大會宣言は前述赤松の國家社會主義論を示したものであつて、一國社會主義の段階を経て國際社會主義の建設に至る旨を述べ、「……社會民主主義即ち議會主義の一切の公式主義が無力化するに至つた今こそ、……國民的基礎に立脚せる社會主義日本の建設に向つて驍進すべき秋である……」といひ、また、その綱領は「……一切のファシヨ運動を粉碎して資本主義打倒の強力なる現實的戰術を以て國民的社會主義の果敢なる實踐行動により……」といつてゐる。そこでは大膽且つ明瞭に社民黨立黨の基準たる「社會民主主義」

の揚棄と、「國民的社會主義」の採擇とを公言してゐるのである。

社會民衆黨は、滿洲事變勃發當時には、口を緘して何もいはなかつた。だが、いつまでも頬被りもなり兼ねるので、十月十五日の中央委員會において滿蒙問題調査委員を滿洲へ派遣することを決定し、二十一日、その委員の顔振れを、片山哲、小池四郎、島中雄三の三名と決定すると同時に、黨としての聲明書を發表し、「漫然ブルジョア權益の擁護に終始するが如き態度は絶対に排撃せざるべからずと同時に、ブルジョアの權益なるが故を以て無條件にこれを放棄すべしと云ふが如き空想的なる國際主義的態度も」斷じて排撃することを明かにした。調査委員歸京後、十一月二十二日に發表せられた中央委員會の決議も、また、「國際社會主義へ向ふ道程として、社會主義日本の建設を必然的段階と信する我等は、日本國民大衆の生存權確保のため、滿蒙に於ける我が條約上の權益が侵害さるゝは不常なり」と認め、「從來の誤れるブルジョア的滿蒙管理を排して、これを社會主義的國家管理に移し、更にこの立場に立つて滿蒙に於ける日支民衆の生活利益のため兩者の共同經濟を樹立することが、眞の滿蒙問題の根本的解決なり」と信じたのであつた。以上の如く、滿洲事變に當面した社會民衆黨は、公然たる黨としての態度においても、從來の社會民主主義を離れて國民主義的方向へ一歩近づいて行つたのであつたが、未だその社會民主主

義の看板を外づることが出来なかつた。従つて、日一日と激化し行く赤松克麿派の國家社會主義的動向に對して、黙過し難き立場に追ひ詰められた結果、翌昭和七年（一九三二年）一月十九、二十日の兩日、第六回大會を開いて、この事態に裁斷を下すことゝなつたのであつた。

一月十九—二十日の大會は、先づ無産黨合同の基準として、有名なる「三反綱領」なるものを可決した。それは、人々も知る如く、

一、反資本主義

二、反共產主義

三、反ファシズム

といふのであり、黨内社會民主主義者の主張を容れたものであつた。しかるに、大會はそれと同時に赤松等の國家社會主義派の提出に係る「新運動方針書」なるものをも採擇した。それは、左の如き内容のものであつて、明かに右の三反主義の第三項とは矛盾するものであつた。――

新運動方針書綱要

一、日本の國體を尊重するの精神を一層明確にすること

一、國家の本質に對する認識に於いて、マルクス主義の搾取的國家觀を排し、純正なる統制機

能を有する機構としての國家觀を肯定する立場を明確にし、更にその統制機能の民衆化の實現を期すること。

一、現下の熾烈なる民族鬭争の世界狀勢下に於いて、國民的利害關係を無視し、全世界の無産階級の共同利害のみを高調し、且つ機械的劃一的國際鬭争を企圖するマルクス主義的國際主義は空想的誤謬なることを明かにし、無産階級の國民的立場を明確化した上で、最も現實的な國際主義を採ること。

一、我等は從來議會萬能主義を奉ずるものではなかつたが、絶對的議會否認主義の共產黨と對立した關係上、往々我等の運動方針が議會萬能主義であるかの如き印象を一般に與へた。今日我等は斯くの如き印象を一掃するの必要を感じると共に更に更に加ふるに現在の客觀狀勢に直面して、我等は議會政策と相並んで一層活潑なる議會外の大衆行動を展開するの必要を認めること。

越えて四月七―八日、社會民衆黨では戰線統一問題を議するために、中央執行委員會を招集した。委員會においては、國家社會主義的な赤松案（黨本部書記局、日本農民組合、社會青年同盟系）と、三反主義を基礎とする社會民主主義的な片山哲、吉川末次郎、松岡駒吉案（勞働組

合系」とが對立した。赤松案の内容は、

我等は現下の客觀的狀勢に鑑み、本年度大會に於て決定されたる新運動方針の精神に基き、即時解黨して廣く同志を天下に求め一大新黨の樹立に向つて邁進すべし。

右決議す。

といふのであつたが、これは十二票を得、片山案は十一票で、一票の多數を以て赤松派の勝利となつたのである。

しかし、問題はそれで解決しなかつた。それから約一週間後の四月十五日の中央委員會において、再び戰線統一問題が蒸し返された。戰線統一問題は、國家社會主義的基準によるか、はたまた三反主義即ち社會民主主義によるか（具體的には全國大衆黨との合同による新社會民主主義黨の結成）を決定するものであるが、その政治的意義は、社民黨の指導方針を新しき國家社會主義にとるか、はたまた舊來の社會民主主義にとるかにあつた。

四月十五日の中央委員會においては、赤松派は五十二票、片山（吉川、松岡）案は六十一票、結局九票の多數を以て、赤松派が敗北することゝなつた。

採決に敗れた赤松派は、事ここに至つては分裂も止むなしとして、憤然として退場し、社會民

衆黨よりの脱黨を決議し、同時に國家社會主義新黨樹立の聲明書を發して、翌十六日に國家社會主義新黨準備會を組織したのであつた。

當時、國家社會主義新黨準備會に参加した陣營は、左の如くである。――

日本農民組合……………平野力三、稻富稜人

遞友會同志會……………赤松克麿、當清

俸給生活者組合……………小池四郎

社會青年同盟……………陶山篤太郎、大槻正秋

社會婦人同盟……………小池文子、赤松明子

總同盟中央會同勞動組合製氷支部……………野口榮治

其他……………馬島憐、山元龜次郎、菅舜英、淺井敬吾

右をみても分る如く、國家社會主義者が勞動組合方面に大きく纏まつた勢力をもつてゐなかつたことが、その弱點ともいへるのであつた。

三 全國勞農大衆黨の動搖

社會民衆黨と相對峙してゐた今一つの大衆政黨たる全國勞農大衆黨は、國家社會主義の風のかでいかに動いて行つたか？

全國大衆黨の立黨精神は、最初大正十五年十二月社會民衆黨から脱退して日本勞農黨を組織した當時に公表せられたが如く、右に偏せず、左に傾かず、中間道、即ちいはゆる「無産階級運動の正道」をとるものであつた。それは、實質的には社會民主主義といひ得るが、さりとて理論としてコミニズムを徹底的に排撃するわけでもなく、一種の混亂を示してゐたといへよう。それは、後、昭和三年十二月無産大衆黨その他と合同することにより勞農派を包容して日本大衆黨となり、同六年七月新勞農黨等（ほかに社民現實同盟）との合同によつて勞農黨系左翼派をも收めて全國勞農大衆黨となるに至つてはます／＼甚だしくなつた。

かゝる成立過程を有する結果として、全國勞農大衆黨は、その綱領に反戰主義、反帝主義を掲げてゐた。従つて、滿洲事變に對しては社民黨よりも早く態度を決定し、事變後十日過ぎた九月二十九日には、その常任中央委員會は、滿洲事變反對の聲明書を出したほどであつた。

しかるに、同年の秋の府縣會選舉において、立候補者の選定に關して黨幹部と支持團體たる日本勞働組合總聯合（坂本孝三郎派）との間に紛争を生じ、後者はつひに、その全國大會において勞

大黨の支持を取消し、脱黨するに至つた。この一派は、後述する如く、國民社會黨準備會に走つた。勞働組合總聯合派の脱退に續いて起つた波紋は、同黨京都府聯合會幹部神田兵三、半谷玉三、山村直三郎、橋本寅太郎四名の脱黨であつた。その脱退理由は、(一)大衆黨のイデオロギーの缺如。(二)國家に對する認識の缺如。(三)民族的解放、國民主義に對する認識の缺如。(四)滿蒙政策の缺如といふ四點であつた。しかし、神田、半谷らは、舊勞農黨時代から一部に批評の絶えなかつた人々だけに、この脱退事件は大した影響を與へなかつたといはれる。

しかるに、勞大黨生え拔きの代議士松谷與二郎の「滿蒙問題に關する意見書」の發表は、黨内に多大のショックを與へた。松谷代議士は、議員視察團の一員として滿洲見學に赴き、滿洲の事態を親しく見るに及んで心境の急激なる變化を生じ、年末、歸朝早々、右の意見書を發表したのである。その趣旨は、滿蒙權益擁護のための出兵は斷じて帝國主義戰爭に非ず、我權益に對する張學良政權の不當なる壓迫を反撃するは實に正當にして、むしろ遲きに失するくらゐである。従つて黨内部に於て、今回の出兵を目して帝國主義戰爭なりとして反對するが如きは、全く認識不足にあらざれば、正に支那政府の代辯である」と手酷しくキメつけたものであつた。而して同意見書の結論は、

一、滿蒙の權益は擁護すべし。

二、滿蒙の權益は之を……勞働者農民の手に渡せ。

三、我國現在の失業者二百萬を滿蒙の野に送り、滿蒙の權益は彼等の手に依つて處理せしむべし。

四、黨は此のスローガンの爲に死を賭して奮闘すべし。

といふのであつた。

右の松谷與二郎代議士の意見書は、大衆黨内において混亂を惹起した。除名運動も起つたが直ちに抑止せられた。これには、下中彌三郎、赤松克賢らの黨外國家社會主義派の工作と、黨内の田所輝明らの盡力によるものとされてゐる。

松谷與二郎の「滿蒙問題に關する意見書」は、未だ頬被りを許した。ところが、次ぎに起つた勞働組合系幹部のいはゆる五人組の意見書の提出は、黨を鼎の沸く如く混亂せしめた。それは、松谷意見書發表の翌昭和七年（一九三二年）三月十一日に、大衆黨の主要支持團體たる全國勞働組合同盟の中央委員兼中央執行委員の今村等、藤岡文六、望月源治、安藝盛及び中央委員岩田善作の五名が提出したものであり、國家社會主義的傾向を多分に盛つた意見書である。その内容は次

ぎの如くであつた。――

意見書

一、我黨は從來、其の外貌は共產主義的左翼主義の立場を採り、觀念的に黨を拘束し、實質に於いては、勞農組合の經濟闘争の範圍に閉ぢ籠つてゐた。従つて大膽に現實に即して、今日の資本主義の諸情勢に對應し黨を活潑に躍進せしめ、國民の要求を指導することが出来ない結果、常に現實に行詰りを暴露し、今次の如き滿蒙事件の發生するや、我黨は黨の活動を休止して、黨をも、黨の指導下の大衆をも、俗惡なる日和見主義に彷徨せしむるに至つた。

二、先きに我黨が大會の運動方針書に於いて資本主義が危機に於て自動的に没落するものではないと規定したのは正しい。然るに、その後を續けて、日本資本主義を自己體には經濟的危機を反映するところの政治的不安はあるが、無産階級陣營内に於ける主體勢力の未成熟なるが故に、階級對立に於ける政治的危機はないと嘆じてゐる。然るに右方針書は、如何にして主體勢力を完成すべきやの實踐的戰略方法に就いては何等示すところなく、たゞ機械的にその未成熟の原因を羅列してゐるに過ぎない。

惟ふに、政治的危機を齎すべき主體の勢力の完成に就ては、日本に於ける現在のプロレ

タリアートの組織勢力の比較的弱勢なる事實に顧りみる必要あり、これのみに頼つて決定的勢力を完成することは不可能なりと言はざるを得ぬ。若し然らば、國民の凡ゆる階級層の反資本主義勢力を結集し、主體勢力を完成する所の實踐的戰略こそ、當面の重要問題である。而して、その戰略の缺如こそは我黨の根本的缺陷なりと云ふべきである。

三、「政權獲得」は大會の聲明を以て終はるべきではない。資本家政權の不安定條件を現實に認識し、その不安定を益々擴大せしむる爲に、あらゆる機會に乘じ、大衆的結集力を以て、國民的に、國家的に深刻なる闘争を展開せしむべきである。

黨は速かに過去の形式的立場を清算し、運動方針を根柢より改革し我が國家社會の現實に即し、實踐的戰略の上に堅固なる陣營を確立し以て政權獲得の一路を勇往邁進すべきである。敢て中央執行委員諸君の猛省を促す所以である。

昭和七年三月十一日

中央執行委員 今 村 等

同 藤 岡 文 六

同 安 藝 盛

全國勞農黨中央執行委員會御中

同	望月源治
中央委員	岩内善作

右の五人組の轉向は、大衆黨にとつては全く晴天の霹靂であつた。總聯合の脫退、乃至は京都府聯合會幹部の脫落は、大衆黨としては、むしろ異分子の離脱ともいひ得るであらう。それは結局は、外様格の離反に過ぎない。松谷代議士とて、日勞黨創立以來の功勞者であるとはいへ、自由法曹團の辯護士から來投し來つた一インテリであり、大衆的・組織的背景はさして大ではない。しかるに、これらとは異つて右の五人組は日勞黨幹部麻生らと多年勞苦を共にしてきた同志であり、大衆的基礎を有する日勞黨以來生え抜きの黨幹部である。いはゞ日勞黨譜代の大名である。故に、これらの日勞黨闘士の國家社會主義的轉向は、黨員をして呆然たらしめた。

五人組の上申書に對する取扱ひをなすべく、大衆黨は三月二十四日に、第二回中央執行委員會を開いた。當日の議事内容は、

一、黨方針の具體化、解釋の確立統一と若干の補遺……公式的共同戰線黨を止揚し、第二、第三インタを否定、日本共產黨との對立、ファッショ反對、政權獲得を目的とすること、等々

に關する規定。

二、ファツシヨ粉碎に關する方針書。

といふのであつた。五人組の意見書に對する措置は、第二項のファツシヨ粉碎に關する方針書の討議によつて決定されたのであつたが、結局、彼等の國家社會主義的轉向は否定せらるゝことゝなつたのである。

こゝに於いて、大衆黨内の國家社會主義派も去就を決する必要に當面した。彼等は、社會民衆黨國家社會主義派赤松派の社民黨脱退（四月十五日）の直前、即ち、四月十一日に、赤松派と共に時局研究會なるものを組織して、公然たる國家社會黨運動の第一歩を踏み出した。それは、「重大なる時局に直面し、最も適正なる現状打開の道を考究する」ことを目的とするものであつた。その發起人は國家社會主義を規準とする社民、勞大兩黨の尖鋭分子の横斷的結合であり、その顔振れは左の如くであつた。――

勞農大衆黨側

大矢省三、藤岡文六、望月源治、安藝盛、坂本勝、岩内善作、白鳥廣近、熊本與市、山名義鶴、今村等。

社會民衆黨側

赤松克麿、小池四郎、陶山篤太郎、菅舜英、淺井敬吾、馬島側、山元龜次郎、平野力三、稻富稜人、佐藤吉熊。

勞大黨内における五人組の取扱ひは以上の如くであつたが、五人組の本據たる全國勞働組合同盟では如何にこれを處置したか？ 全勞では、五月四―五の兩日、第六回中央委員會を開いた。その中心議題は政黨支持問題であつて、同盟内の國社派は、全同盟を國家社會主義に拉し去ることの困難性を看取して、先づ政黨支持自由論を携けて委員會に臨んだ。投票の結果は、國社派の提案、即ち、大衆黨支持取消案は六票を得、これに對し、社會民主主義派の從來通り大衆黨を支持すべしとの案は、七票を得た。即ち、一票の差を以て國社派の惜敗といふ事態に立ち至つたのである。

こゝにおいてか、五月八日、大矢省三、藤岡文六、安藝盛、今村等、望月源治、白鳥廣近、山名義鶴の七名は、勞大黨を脱し、その下の勢力は社民派の國家社會主義新黨準備會に合流することとなつたのである。大矢省三、藤岡文六、安藝盛、山名義鶴らは、何れも總同盟時代より大阪における勞働運動界のヴェテランであり。殊に前三者は、評議會の分裂後も總同盟の左翼分子と

して存在したものであつた。今村等は長崎、望月源治は東京の、それ／＼古い闘士であつた。五人組の一人岩内善作は、事情あつて黨内に殘留することゝなつた。

この時の國社派支持組合は、

全勞九州聯合會（今村等派）

同 高知聯合會（安藝盛派）

同 關東合同勞働組合（望月源治、白鳥廣近派）

同 大阪聯合會の一部（大矢省三派）

同 大阪建築勞働組合（同

等々であつた。

四 日本國民社會黨準備會の運動

次に注目すべきは、下中彌三郎を中心とする日本國民社會黨準備會の運動である。

中心人物下中彌三郎は、兵庫縣の産で、始めは神戸市で小學校教員をやつてゐた。上京して日本教員組合啓明會を指導し、その思想的規準はアナーキズムにあつたといはれる。勞働戦線の統

一運動に熱意をもつたが、大正十一年（一九二二年）九月三十日の全國勞働組合總聯合の創立大會が決裂するや、勞働運動に望みを絶つたといはれる。後、書肆平凡社の社長としてその特異なる出版計劃を以て有名となつた。アナーキズムより第一回の轉向をなして社會民衆黨に屬し、全無產黨合同に努力したが、再度その誠意が裏切られて合同運動に挫折するに及び、時流の急激なる變轉と相俟つて漸く國家主義的觀念を抱くに至り、滿洲事變の直後（註一）、即ち昭和六年（一九三一年）十一月二十五日に、一新社（行地社分裂組）の滿川龜太郎、元行地社員の杉田省吾、佐々井一晁、高橋忠作らと共に、經濟問題研究會を組織した。

（註一）經濟問題研究會設立の日附は、昭和六年四月說、昭和七年一月說等もあるが、昭和六年十一月二十五日が正しい。

經濟問題研究會の綱領は、

一、……經濟統制

一、……財産の……制限

一、搾取によらざる後進國開發、

一、勞働力の全國民的動員

といふのであり、最初は「經濟問題」の調査研究を目的としたが、漸次政黨組織運動の方向に踏み出し來り、十二月に「新黨樹立に就て全同志諸君に懇ふ」といふ檄を發した。それは立黨要旨として、

日本國家成立の本義に基き搾取なき新社會の建設を期す

といふことを揚げ、また新黨の性質としては、

一、國民主義の黨たること。

一、反資本主義の黨たること。

一、單なる選舉黨ならぬこと。

の三點を主張した。

これについて、發起人下中彌三郎のいふところによれば、彼等はムツソリーニ、ヒットラー總統に對しては若干批判的態度を持し、「ファッショ」といふ流行語で片附けられることに不満であつた（註二）。而して、彼等が新しき黨の構成要素として挙げたるものは、左の如きものであつた。――

1、無產黨並に勞働團體を中樞として、これに加へて差支へないと信ずる右翼團體。

- 2、思想家、教授、役人、技術家、會社員、醫師、辯護士、小商工業者、一般國民大衆。
- 3、地方小農民並に中小地主。

(註一)社會民衆黨國社派赤松克磨も、その「新國民運動の基調」において、「フアツシヨ」呼ばはりの濫用に對して憤怒してゐる(一〇六一—一六頁)。

經濟問題研究會は、新黨の政策要綱をも表したが、それよりも、世に有名となつたのは、メンバーの一員近藤榮藏が六年十一月に公刊した「無産黨出直すべし」なる小冊子である。近藤榮藏は、米國歸りのコミュニストで、井伊敬(E・K)などゝ號した。大正八年、歸國早々大杉榮の労働運動社に入り、後、曉民共產黨事件(大正十一年)、第一次共產黨事件(大正十二年)等に連座した左翼闘士であつた。その後、左翼派とは離れ日労働の一平黨員として隠忍してゐたが、昭和六年頃より下中彌三郎と近づき、共に前述經濟問題研究會の運動を起したのである。

下中彌三郎によつて起された新黨運動には、さきに大衆黨を脱退した坂本孝三郎派の日本労働組合總聯合、愛國勤勞黨、日本村治派(註二)、大衆黨京都府聯合會の四人組らの脱黨者が續々と参加し、その他、前述の満川龜太郎、鹿子木員信、林癸未夫、中澤辨次郎らの個人の支持も得、こゝに陣容の整備をみたので、翌昭和七年一月二十五日に、日本國民社會黨準備會を結成するに

至つた。

(註一)日本村治派とは、昭和六年十一月に、大田卯、加藤一夫、風見章、下中彌三郎、長野朗、室伏高信、高須芳次郎、橋孝三郎、權藤成卿、土田杏村、津田光造、武者小路實篤らの組織した農村的・日本主義的・アナーキズム的團體である。そのスローガンは、唯物文明の克服、農村文化の確立、自治社會の實現等々であつた。

日本國民社會黨準備會は、黨誓と稱する根本方針と、これに基く三ヶ條の綱領とを發表した(註一)。それは、左の如きものである。――

黨 誓

一、建國の本義に基き搾取なき新日本の建設を期す。

綱 領

一、吾黨は行動的國民運動によりて天皆政治の徹底を期す。

一、吾黨は日本國內に於ける反資本主義統制經濟の實現を期す。

一、吾黨は人種平等、資源衡平の原則の上に新世界秩序の創建を期す。

(註一)下中派の理論家近藤榮藏は、他の小冊子に於いて、國民社會黨の性質を規定して、左の如くいつ

てゐる。――

(一)日本國民の全般的利益を代表すること。従つて、新黨は國民全般的利益に反する利益を追求する少數分子(資本家、大地主、特權階級等々)を除いたところの一般國民大衆の黨たること。

(二)社會主義的國家統制經濟の實現を直接の目的とすること。従つて新黨の運動は反資本主義的であると共に、同じく反資本主義的であつても、共產黨の如く机上論に終始するものでなく、現實に即して、實行可能なる具體的政策をもつて進む。例へば私有財産の問題に關しては、その全廢を叫ばずして、一定の所有制限を主張する。

(三)以上の目的實現のため必要なる政治權力の掌握を先決問題として取扱ふこと。従つて新黨は單なるプロバガンダ黨(例へば共產黨の如き)でなく、また單なる選舉黨(例へば社會民衆黨の如き)でもなく、眞實革命的なる國民運動の組織たること。

二月二十一日、日本國民社會黨準備會は、黨の前衛隊として國民青年同盟を結成した。而して愛國勤勞黨内の前衛部隊にして深川政太郎の主宰する愛國青年同盟もそれに合流した。

右の如く着々と國家主義的新黨の結成に向つて邁進せんとしたが、これと一脈相通する社會民衆黨内の赤松派の國家社會主義化工作が漸く激しくなり、單獨結成をなすよりも、藉すに暫らく時間を以てし、兩者合流して強大なる新黨組織に向ふ方が良策なりとして、社民黨の氣運の昂揚

を看守るために、結黨を總選舉後に延ばすこととした。この頃は、前述の如く神武會の光彩陸離たる發航あり、日本國內には國家主義的情熱がいやが上にも上騰した時代であつたのだ。

五 新黨結成綜合準備會の決裂と日本國家社會黨の結成

昭和七年二月の總選舉は、滿洲事變後最初の總選舉として注目されたが、それは無產政黨各派の大敗に終つた。左翼舊勞農黨系よりは一名の當選者もなく、僅かに社民黨三名、勞大黨二名、合計五名の代議士を得たるのみであつた（總得票數は約三十萬票）。この選舉戦において社民黨はあるひは「一君萬民社會主義」を高唱し、あるひは明治維新の「藩籍奉還」に倣つて「財産奉還論」を主張するなど、大いに時流に歩調を合はさんと試み、その候補者らは政見發表演說會において滿洲事變及び上海事變の支持を誓つたのであつたが、その折角の努力も國家主義に熱狂せる選舉民大衆の支持を得ることができなかつたのである。

かゝる狀勢の裡にあつて、社民黨赤松派は、前に述べた如く四月十五日にいよく脱黨を決行し、翌十六日に國家社會主義新黨準備會を正式に結成するに至つたのであつた。而して、この新黨準備會は、準備委員として小池四郎ほか三十四名を選び、更らに常任委員として、赤松克麿、

平野力三、陶山篤太郎、馬島側、小池四郎の五名を決定した。

新しき國家社會主義黨の基準は、從來しば／＼赤松克麿の説き來たつた國家社會主義理論中に見出されるところであるが、この時、更らに正式に發表せられたところに従つて記述すれば、左の四ヶ條にあつた。――

一、國民の黨なること。

二、社會主義の黨なること。

三、空想的インタナショナルを排して、現實的インタナショナルに立つこと。

四、實踐的行動主義の黨たること。

かくの如く、社民系の國家社會主義新黨準備會の御膳立てが揃つた時、五月八日、大衆黨系の國社派が合流し、こゝに二無産政黨内の國社派の握手がなつたことも前述の通りである。

こゝにおいて、下中派の日本國民社會黨準備會は、國家社會主義單一政黨樹立の機至れりとなし、五月十二日、赤松派に對して合同の提議をなした。赤松派はこれを喜び迎へて、兩派の間に新黨結成綜合準備會が成立し、五月十九日に第一回準備會を開き、五月二十九日を期して結黨大會を開催することに決定した。この日、創立すべき新黨の黨名につき、兩派の間に争ひがあつた

が、これは、國民日本黨となすことに妥協が成立した。なほ理論的には、國家社會主義新黨準備會派の赤松克麿らと日本國民社會黨派の中谷武世らとの對立が甚しかつたといはれる。

さて、いよいよ／＼待望の結黨式を舉行すべき五月二十九日は來たつた。當日、結黨式を前にして兩派の最後の準備會が開かれた。しかるに、この席上において、再びさきの黨名その他に關して紛爭が持ち上つた。これを簡單にいへば、赤松派は——その内部構成より察せらるゝ如く——ヨリ國家社會主義的であり、舊愛國勤勞黨系を含む下中派はヨリ日本主義的であつたのである。殊に兩派の對立を救ふべからざる沼地に追ひ込んだのは、役員制當て問題であつた。これは一方からいへば下らぬ勢力争ひらしくもみえるが、また他方よりいへば自己の黨の理論・政策を現實に行はうと思へば固執せざるを得ない問題であつたともいへよう。それはさて置き、この日の争ひでは、赤松派は新黨の役員の振り當てを、社民黨系、大衆黨系、國民社會黨準備會系の三單位にせんとした。以て新黨のヘゲモニーを把握せん底意である。これに對して、下中派は、國家社會主義新黨準備會系と日本國民社會黨準備會系との二單位に分けんことを主張した。この點については、第三者からいへば、下中派の方が一應合理的根據をもつかに思はれた。が、兩者互ひに譲らず、結局交渉は決裂となり、憤慨せる下中派は脱退し、こゝに兩派は最後の土壇場において完

全に袂を分つことゝなつたのである。

こゝにおいて、赤松派の國家社會主義新黨準備會は、決然、單獨結黨を斷行することゝなり、代議員二百六十五名の出席の下に、即日、左の如き順序を以て結黨式を舉行し、綱領、主張、及び役員を決定するに至つたのである。――

結黨式順序

- 一、黨名（日本國家社會黨）。
- 二、齋藤內閣に對する態度決定の件。
- 三、國民生活窮乏打開に關する件。
- 四、日滿統制經濟に關する件。
- 五、綱領、主張、規約決定の件。

綱領

- 一 一君萬民の國民精神に基き擗取なき新日本の建設を期す。

主張

- 一 吾黨は國民運動により金權支配を廢絶し皇道政治の徹底を期す。

二 吾黨は合法的手段に依り資本主義機構を打破し、國家統制經濟の實現に依り國民生活の保障を期す。

三 吾黨は人種平等資源衡平の原則に基きアジア民族の解放を期す。

なほ新黨の役員は左の如く定まつた。――

總裁（保留）。

黨務長、赤松克麿。

常任中央執行委員十名、今村等、山名義鶴、小池四郎、陶山篤太郎、望月源治、馬島憊、平野力三、安藝盛、山元龜次郎、野口榮治

中央執行委員三十七名（氏名略す）。

中央委員百十二名（氏名略す）。

新生日本國家社會黨は、下中派との決裂の直接的原因が役員問題であつたことに鑑みてか、多數の役員の顔を並べたのは「壯觀」であるとの下馬評もあつた。

六 新日本國民同盟の創立

赤松派の單獨結成をよそに會場より準備會本部に引き上げたる下中派は、同じ五月二十九日に、三百名の脱退派代議員を集め、こゝに日本國民社會黨準備會を解體し、一大國民的政黨組織に進することゝなつたが、その結黨までの暫定組織として、新日本國民同盟を結成した。そして新同盟の盟誓、綱領を左の如く決定すると同時に、別項の如き聲明書を發して、赤松派に對する態度を明かにし、且つ新同盟の結成について天下に訴へるところがあつたのである。

盟 誓

建國の本義に基き搾取なき新日本の建設を誓ふ

綱 領

- 一 我等は合法的國民運動により金權支配を廢絶し以て天皇政治の徹底を期す。
- 二 我等は資本主義機構を打破し國家統制經濟の實現により國民生活の確保を期す。
- 三 我等は人種平等資源衡平の原則の上に新世界秩序の創建を期す。

聲 明 書

祖國日本は今文字通りに未曾有の非常時局に直面してゐる。この非常時難を打開して國運民命を輝ける明日にまで導くべく、我等は同志と共に日本國民社會黨準備會を形成し、更に社會

民衆黨並に全國勞農大衆黨・脱派の諸勢力を糾合して純乎たる國民の黨としての國民日本黨の結成に努力し來つたのであるが、不幸にしてこれ等社會民主主義の轉向派がその心事に於いても其思想に於いても依然として從來の似而非無產黨的舊態を脱し得ざるの事實を發見し、これ等の諸勢力と提携する事の無意義を痛感したるを以て、此の種似而非無產黨的諸勢力を基調として新黨を組織するの意圖を全く斷念し、こゝに「新日本國民同盟」を結集して廣く天下同憂の士と共にこの非常時の國運を負擔せんとするものである。

なほ、新日本國民同盟の役員は、左の如くであつた。――

役員

本部委員長、下中彌三郎。

本部書記長、佐々井一晁。

中央常任委員、近藤榮藏、高山久藏、濱田藤次郎、森榮一、滿川龜太郎、佐野好男、神田兵三、坂本孝三郎、天野辰夫、中谷武世、神永文三。

顧問、權藤成卿、鹿子木員信、貴志彌次郎、小野武夫。

相談役、島中雄三。

右のうち、下中委員長は後に辭職し、坂本孝三郎も常任を辭した。また天野辰夫、中谷武世、神永文三の三名は、愛國勤勞黨が新日本國民國盟支持を取消すに至つたため、脱退して役員から名を消した。愛國勤勞黨は、その後の存在が明かでなかつたが、その主要人物が後に神兵隊事件に關係したため、自然潰滅の悲運に陥つたものゝ如くである。なほ、中央常任委員中、高山久藏は勞働組合總聯合關東聯合の重鎮であり、濱田藤次郎はもと東京市電自治會の幹部たりしものである。

七 最左翼陣營よりの轉向者

最左翼的サンデイカリズムの父ジョルジュ・ソレルが最右翼的王黨の「アクション・フランセーズ」運動と結合し、またムツソリーニのイタリー・ファシズムに理解をもつたことに徴しても解る如く、最左翼と最右翼とは、しばしば反民主主義、反自由主義の一點において吻合するものである。従つて共產主義運動と近代的國家主義運動とは、外観上幾多の類似點をもち、その運動の當事者は、左右の差こそあれ一種の共通觀、共通的ラディカリズムを抱いてゐるのである。

かゝる觀點よりすれば、最左翼の共產主義陣營から最右翼の近代的國家主義陣營への轉向者を

みることは、左ほど不思議な現象ではない。

最左翼よりの轉向者は、その陣營より最大級の裏切り者として罵倒せられる。人を罵倒するは易い。しかし、何が故にかゝる轉向が行はれたかについて冷静に思考することは、容易でない。彼等は曾て心魂を打ち込んだ運動に失敗したが、多くのインテリの如く引退すべく餘りに大きな熱情をもつ。といつて、中間的な社會民主主義に降服する氣はしない。そこで、感情的及び方法論的に却つて最も多大の共通點をもつ最右翼陣營へ走り去るのである。

最左翼よりの轉向者として、第一に世に傳へられたのは、曾て日本勞働組合評議會の創立以來の幹部であり、日本共產黨の幹部の一員にも列してゐた中村義明である。彼は、もと大阪電氣勞働組合に屬し、鍋山貞親と並び稱せられた雄辯なる闘士であつた。大正十一年秋大阪天王寺公會堂の日本勞働組合總聯合大會における彼の演説は有名である（尤もこれは荒畑寒村の筆になる原稿によるといはれたが）。昭和三年（一九二八年）、三・一五事件に檢舉せられ、獄中にあるや、日本共產黨の解黨を要求するいはゆる解黨派グループに屬した。保釋出獄後、自殺を計つたが、以てその心中の苦悶を察し得るであらう。

出獄後、昭和七年（一九三二年）、彼は從來の左翼運動に見切りをつけ、大阪において勤勞者前

衛同盟を興して、日本勤勞働新聞なる機關紙を出した（註一）。その綱領には――

本同盟は天皇の下萬民平等の國民的協調による天皇政治の徹底を期せんがための前衛たらくとを期す。

といつてゐる。彼の思ひ切つた轉向振りが解るではないか。これは、社會民主主義者の赤松克廣らが國家社會主義に轉向した時の社會主義的殘滓の未だ濃厚なりしに比して、興味ある事實である。

（註一）中村義明はこの機關紙に「何故に僕は日本共產黨の裏切者になつたか」を連載して、その心境を吐露した。

中村義明の勤勞者前衛同盟は、その後餘り大衆的に發展しなかつたやうであるが、同じ昭和七年十二月、彼は皇民意識振興會を起した。その後更らに、昭和九年（一九三四年）三月、東京において皇魂社を創立し、機關紙「皇魂」を刊行した。この中村が昭和十一年二月に至つて、かの二・二六事件に關係して檢舉せられた時には、世人は呵つと驚いたのであるが、事件に直接關係のないことが判明して、後釋放せられた。

中村義明らと同じく評議會幹部であり、日本共產黨に屬してゐた南喜一も、國民主義に轉向し、

たと傳へられた人間である。彼は、藥劑師の出身であり、元來右翼的色彩をもつてゐた男といはれてゐたが、たま／＼大正十二年秋、關東大震災に際し彼の實弟がいはゆる龜戸事件に倒れたので、それが契機となつて、左翼運動へ投じた。三・一五事件の獄中では彼も中村と同じく解黨派に屬したが、保釋出獄後、昭和七年十二月に江東方面において、江東工場連絡委員會を組織して國民主義的勞働運動を始めたといはれる。しかし、彼の運動の本質については、俄かに國家主義運動と名づけていゝか、若干の疑問が存するやうである。なほ現在の彼は、ある種の「世界的發明」乃至「發見」をなし、その工業化に奔走しつゝありと傳へられてゐる。仲々面白き男である。

最左翼農民組合方面では、曾て日本農民組合中央委員であり、勞農黨の中央委員でもあつた竹尾式がある。彼は明治二十九年千葉縣に生れ、東京外語露語科を卒業して八年間もシベリヤへ行つて、植田謙吉將軍や松井石根將軍に可愛がられ、些かもインテリ奥を帯びざる農民の風格の持主である。大正十四年（一九二五年）頃より社會運動に投じ、勞農黨、日農（後の全農）の幹部となり、昭和五年（一九三〇年）河上肇、細迫兼光、小岩井淨らが新勞農黨を興すや、その常任委員となり、河上博士の下に機關紙「勞働農民新聞」の編輯長となつた。同五年、新勞農黨解消運動を起し、左翼運動のグ راشなさに愛想をつかして、これを契機に左翼運動より一切手を引き、國民、

主義陣營へ轉じた。大亞細亞協會の松井石根將軍を始め、橋本欣五郎、行地社の松延繁次その他と交渉をもつたといはれるが、表立つた事件には關係せず、一時日蘇通信社を經營してゐたが、後、専ら郷里千葉縣の小作農民の組織運動に従つた。二、三回總選舉に立つたが、いつも惜しい處で破れてゐる。昭和十一年（一九三六年）三月より中野正剛の東方會に關係してその事業を手傳つてゐたが、肌が合はぬとみえ、十一月頃より自然關係を絶つたものゝ如くある。現在では印旛沼旱拓運動といふ風變りな運動に奔走してゐる。

西光萬吉といへば、全國水平社創立以來の元老で、西本願寺の「搾取」に對抗した、同社内黒衣同盟の主唱者であつた。奈良のお寺の和尚さんであるが頗る熱情漢であり、且つ文才あつて戯曲をよく物した。日本農民組合、勞農黨等の幹部であつたが、三・一五事件に連座し、出獄後は大日本國家社會黨へ走つた。最初は日本の國家社會主義は第三インタとも協力すべしなど、いつてゐた由であるが、その後は、だん／＼日本主義的信念を強めて行つた。現在は國社黨の幹部として働いてゐる。純情的な人柄であつて、個人的には誰からも惡感を抱かれない好人物である。

共產黨支持者の立場より國家主義に轉向したものに赤松五百鷹があつた。赤松克麿の弟であつて河上肇門下である。長らく兄と行動を共にせず昭和七年二月の總選舉には左翼を標榜して大阪

より立候補したが、不運にも一敗地に塗れた。この選挙戦には、姉赤松常子も秘かに應援したといはれるから、姉弟の情は流石である。

この赤松五百麿が、選挙後、他の仲間と紛争を惹起し、つひに左翼と手を切つて、兄の國家社會黨へ入黨した。後病を得て死んだが、彼も純な好人間であつた。

廣義における左翼陣營からは、このほかに、社會自由黨なるものが出現した。これは、昭和七年三月二十六日、主として新勞農黨支持であつた日本勞働組合總評議會關西地方評議會系の青柿善一郎、飯石豐市、矢勝義雄、小田孝、大橋治房らが國家社會主義に轉向して組織したものである。飯石豐市は、これより先き大正十五年（一九二六年）十一月成立の香具師の國粹團體神農會にも關係をもつたといはれるが、別段表立つて活動したわけではなく、彼の主たる活動舞臺は舊評議會及び舊勞農黨であつた。青柿も舊評議會の創立者の一人である（彼は後、再び國家社會主義を捨てたといはれる）。

社會自由黨の綱領及び政策は、左の如くであつた。――

綱 領

我が黨は立憲政治の本義に遵ひ、國民大衆の利益とその伸長の爲めに行動す。

政 策

一、國民外交の確立

二、財閥政治の打倒

一、反動恐怖獨裁政治の排撃

一、金融機關の統制

一、國民生活を基礎とする産業の保護と統制

一、滿蒙利權の國民的確保

一、選舉公營

一、投機々關の廢止

その後、飯石豐市、小田孝らは石川準十郎の國家主義學盟に入り、宮本純一（舊純向上會系）らは神武會と握手したので、社會自由黨の存在は稀薄となつた。一般的にいつて社會自由黨の、人々は前述の諸轉向者とは幾分異なり、相當の強か者が多かつた。

このほか、日本共產黨員にして、法廷において國家主義への改宗を誓つたもの、昭和八年（一九三三年）六月の佐野學、鍋山貞親らの一國家社會主義への轉向聲明等々、記すべきことも多い

が、こゝにはたゞ現實に國家主義運動に従事せるものゝみを、一瞥したわけである。

第四章 昂揚より沈滯へ

第一節 國家社會主義運動の退潮

一 客觀情勢の變化

滿洲事變、五・一五事件等によつて急激に上向線を辿つて行つた日本の國家主義運動は、右に述べた如く、昭和七年春に日本國家社會黨、新日本國民同盟を生誕せしめ、それに引き續いて多くの國家主義團體を簇生せしめた。しかるに、これらの團體は結成即分裂の慌たゞしき過程を繰り返し、全く文字通り一人一黨の状態を示した。その理由となすべきところは、從來の國家主義陣營内における宿痼たる割據的獨善主義の清算されないこと、思想的に統一を缺けること等、運動それ自體の内部事情も數へ得るが、主たる理由は國家主義運動の昂揚を育ぐんだ客觀的情勢の變北である。

これらの變化の第一は、農村匡救事業の進捗である。五・一五事件後成立した齋藤内閣は、六

月一日より第一次臨時議會、八月二十二日より第二次臨時議會を開き、「時局匡救決議案」を通過せしめ、當時經濟恐慌の打撃を最も大きく受けた農村、殊に東北、北海道等の凶作地方の救済に努力した。東北地方の「凶作」なるものは、特にこの年に限つたことでもなかつたのであるが、滿洲事變當時、滿洲の野にあつた關東軍には東北出身の兵多き多門將軍麾下の第二師團があつたといふ事實と、茨城縣の農民決死隊、血盟團に農民が多かつたことが相俟つて、世の視聽を多く引いたのである。また昭和七年春以後、生糸の値上りをみたことも農村の不安氣分を拂ふについて大いに與つて力があつた。また都市方面においても、金本位停止による圓爲替暴落のため、輸出が旺盛となり、また赤字公債による軍需インフレが起つたことが、一種の變態景氣を生ぜしめた。第二に、滿洲事變によつて惹起された國際情勢の緊張がだん／＼と緩和されて行き、日本が聯盟を脱退しても聯盟は豫想された經濟制裁を行ひ得ず、昭和七年六月十四日、臨時議會は滿洲國承認決議をなし、同年九月十五日、事變の一週年を前にして日滿議定書が交換せられ、また内田焦土外交に代はるに廣田正常外交の登場があつて、日本を繞ぐる國際環境が、やゝ改善されたことが數へ得るであらう。第三に、軍部首腦者が自重的に傾いたことである。五・一五事件直後に、海軍側は前述の如く軍紀の振肅の保持と軍人の政治干與排撃といふ二原則を明かにし、陸

軍側においても荒木陸相は「皇軍は……私兵の如く部分的に横斷的に結成して勝手に動くが如きは、斷じて許さるべきものではない」と聲明して、陸軍方面の空氣も漸次、靜觀的になつて行つたのであつた。第四に、從來、右翼主義團體に對して比較的寛であつた政府當局が、血盟團事件以後、これら右翼主義團體に對して峻嚴なる態度を以て臨むに至つたことである。第五に、政黨及び財閥が自肅し、且つ「轉向」を示し、ひたすら急進的國家主義的風潮の一過を祈つたことを擧げ得る。第六に、左翼運動の潰滅その他種々の事情より、右翼團體の財政的困難が加重し來つた。第七に、軍人と民間團體との關係が頗みに稀薄となつたことがある。

以上の諸點のほか、個人的にいへば、民間團體の雄たる神武會の會頭大川周明が、五・一五事件の關係のために六月十八日に檢舉せられ、ために當の神武會に大動搖を來たしたのはいふまでもなく、引いてはこのことが他の國家主義團體に大なる影響を與へたことを考ふべきであらう。事個人に關するが、當時における彼れ大川周明の獨自の立場より、彼の動きは運動全體に大きな波紋を投げかけたのであつた。その他、昭和八年七月の神兵隊事件において、首腦の一人安田鎮之助中佐が松屋百貨店支配人内藤彦一なるものゝ投機行爲と若干の關聯を有せりと傳へられたことは、國家主義運動者に大きなショックを與へたといひ得るであらう。

いま、日本國家主義團體がこの最高潮から漸次退潮の途を辿るに至つた経過をみて行かう。

二 日本國家社會黨の分裂

昭和七年五月二十九日に結黨した赤松派の日本國家社會黨は、當時の社會的風潮をバックにして、まことにその立黨聲明書のいふ如く、その「前途は洋々として春の如きものあるを覚え」しむるかの如き感を與へたが、昭和八年一月二十二日の第二回大會以後、赤松克麿對小池四郎、赤松克麿對平野力三等の人的並に理論的内部對立を生じ、黨内に動搖を來たした。動搖の根本原因は赤松克麿の思想的變化にあつた。即ち彼は、大川周明の捕はれし後、イデオロギー的に國家社會主義より離れ、彼のいはゆる「全體主義」即ち日本主義へ走つたのである。彼の主張するところによれば、日本國民は全體として團結せざるべからず、従つて階級闘争を主張する國家社會主義は誤つてをり、それは必然的に日本主義へ「揚棄」せられなければならぬといふのである。この赤松の日本主義への轉向が正式に表面化したのは、昭和八年（一九三三年）五月三十一日の逓友同志會中央委員會の席上であつた。この時、中央委員會は、「會長赤松氏は最近日本主義を唱導し、階級的見地に立つ健全なる勞働組合すら否認する」ものであるといふ理由の下に、赤松會長及び會計石塚幸

次郎、常任高地俱喜等を除名したのであつた。ここにおいて、赤松派は中央委員派と抗争するため六月十一日、自派會員を集めて、別に日本通信従業員組合を結成したのであつた。その綱領は我國は日本精神に基き通信事業の發達に貢獻すべき國家的責任を自覺すると共に、従業員の生活安定と社會的地位の向上を期す。

といふのであり、その宣言には、

既に我等がマルクス主義否定の立場に立ち一君萬民の國民精神に立脚を宣明する以上、我等の一切の運動精神が日本精神に於てその最高原理を求むべきは當然でなければならぬ。しかし日本精神は階級的利益を求むる部分主義に非ずして全體を生かし、全體の利益と幸福とを發展せしむる原動力である。我等は日本精神を體得することによつて日本民族を統一的生命體として全體的に認識し、この認識に基いて一切の運動方針を規定しなければならぬ。……たゞプロレタリア階級の生活利益のみを主張することは全體主義の破壊であり、日本精神の冒瀆である。……我等の運動が一部プロレタリア階級のためのみの運動にあらずして、全體のために全體を生かすものなるが故に、我等は天地に恥じざる正々堂々の運動を展開し得るのである。……日本主義は官僚專制主義と相容れない。日本精神は道德と情愛とに基く全體的協力一致を要求する。

……監督なるが故にこれに階級的に對立抗爭しなければならぬ本質的理由なしと斷定す。

といふ宣言を發表した。これに對して逓友同志會本部は「全體主義とは修養團一派の白色倫理化運動に外ならぬ」として、こゝに兩者全く分裂した。後、本部派は組合維持に耐えかねて、十月八日、安達謙藏の國民同盟の中野正剛を統令と仰ぎ、杉浦武雄を法律顧問としたのであつた。この分裂によつて六月十五日、赤松は國社黨務長を辭任した。ここにおいて國社黨は、六月二十四日に中央執行委員會を開いてこの問題を議したが、赤松の辭職に關する決定を保留した。他方、國社黨支持の平野派の日本農民組合は、同日、緊急中央委員會を開いて皇道會に加盟することゝして、國社黨の支持を取消したのであつた。

國社黨本部の小池四郎派は、黨の現状を維持するために、何とか妥協の途を講ぜざるべからずと希つてゐたが、その願望も空しく、分裂は不可避となつた。そこで七月二十三日、全國中央委員會を開くことゝなつたが、それに先手を打つて、その前日、赤松外十三名の中央委員は、「日本精神の國民的侵透化による眞日本建設」に邁進するといふ旨の聲明書を發して離黨した。二十三日、中央委員會は小池、山名、今村、陶山、山元、藤岡、森（直治）を常任中央執行委員に新たに任命して陣容を立直さんと計つたが、「黨指導精神の解釋統一に關する件」にて混亂に陥り、論議を重

ねた結果、千九票對二十三票で國家社會主義派の敗北となり、その退場をみることとなつた。越えて七月二十五日、脱退派は聲明書を發したが、それは、「彼等は一君萬民の國民精神といふ黨綱領の字句解釋の名にかくれて立黨の精神を放棄し、あまつさへ反動日本主義への追従墮落を企圖せんとした。……彼等は昭和維新斷行を百萬言叫ぶとはいへ、歸する所、資本主義への追従、既成政黨への合流墮落を必然的歸結とするものである」といつてゐる。

同じ七月二十五日及び二十六日に、國社黨殘留本部派は國社黨更生常任會議を開き、陶山篤太郎を常務長に新任し、大規（正秋）、小池、森等を各専門部長にしたが、八月三日にその有力支持團體たる日本労働同盟が後述の如く分裂してからは、黨勢不振となり、日本主義に轉向して黨名を愛國政治同盟と變じ、唯一の中心人物小池四郎も昭和十一年二月の總選舉において落選するの悲運に陥つたのであつた。

三 日本労働同盟の成立とその分裂

日本國家社會黨傘下隨一の大衆團體は、日本労働同盟であつた。その發端は前述の如く全國労働同盟内の國家社會主義派が時局研究會に參劃したことにある。そのため、全勞では昭和七年五

月四―五日の中央委員會において政黨支持に關する態度を決定することゝなつた。この中央委員會では、國社派は實に一票の差を以て敗れたので、つひに脱退することゝなり、同年十一月二十日に、日本勞働同盟といふ國民主義組合を創立することゝした。その時の陣容は、關東合同の一部、大阪聯合會の一部、九州聯合會の大部で、その組合員數二萬五千と稱した。創立大會は宣言及び綱領を發表したが、その綱領は、左の如きものであつた。――

綱 領

一 我等は一君萬民の日本建國の精神に基き勞働階級の生活を絶對的に保證する搾取なき新國家の建設を期す。

二 我等は勞働組合が資本主義打倒の全面的政治闘争に於ける經濟的部分を擔當することを認識し、これが完全なる使命の遂行を期す。

三 我等は強固なる團結と勇敢なる戦術とを以て資本家階級の彈壓に抗争せんことを期す

日本國家社會黨内における國家社會主義派と日本主義派との對立が、日本勞働同盟内に影響を及ぼすのは當然である。昭和八年七月二十五日の國社黨分裂の時には、勞働同盟は脱退派(國社派)に随つて退場したが、八月三日、大阪で開かれた中央委員會において「國家社會黨に關する件」を

議題とし、日本國家社會黨支持取消派（即ち國家社會主義派）と日本國家社會黨支持派（日本主義派）（註二）とに分裂した。兩者は、共同聲明書を發して、その分裂の經過を明かにしたから、今こゝにそれを掲げる。――

（註一）國家社會黨が國家社會主義に非ずして日本主義であることを知ればこの對立が分かるであらう。

聲 明 書

日本労働同盟第五回中央委員會は日本國家社會黨支持問題を中心として忌憚なき意見の交換をなし、會議懇談の上止むなく左記の如く分裂するに至れり。

△日本國家社會黨支持派 今村等、陶山篤太郎、山本龍助、光吉悦心、森登守

△日本國家社會黨支持取消派 大矢省三、熊本與市、本多滋二、山本富嘉、白鳥廣近、關根喜四郎（山本委任）、野口晋松

△意見保留派 安藝盛、松尾國市、山本辰次郎、藤岡文六、矢尼喜三郎
但し

- 一、國家社會黨支持派は同盟を脱退し國社黨に残り國家社會黨を守る事。
- 二、國家社會黨支持取消派は國家社會黨を脱退し同盟を守る事。

三、意見保留者は追て態度を決定する事。
右共同聲明す。

日本労働同盟第五回中央委員會

右の意見保留派のうち、藤岡久六は今村派に、安藝、松尾、矢尾は大矢派に走つた。そこで労働同盟残留派は會長大矢、主事會計白鳥廣近以下の役員を東京、神奈川、滋賀、京都、北陸、高知、大阪等より採つて決定し（尾崎、泉州は未定）、政治方針として「國家社會主義を嚴格に指導精神とする『國民の黨』の樹立を期す」こととし、日本國家社會主義全國協議會を提唱すること、門戸を開放し廣く國家社會主義を遵奉する同志を求むること、同盟中央委員會は各地方に於て右の方針の徹底を期すること等を決定した。

一方、労働同盟を脱退した日本主義派は、自己勢力を以て日本産業軍を編成し、聲明書、誓文並に盟約なるものと發表した。その聲明書は、左の如くいつてゐる。――

日本産業の健全なる發展と、致命的矛盾を暴露せる資本主義産業經營の亡國破産期に直面して其の擄取に蹂躪されつゝある日本労働者農民の生活權を防衛し、次で國家産業の發展伸長を期する建設大道は、一君萬民の國體原理を以て根本的に改革する産業大權樹立による、統制あ

る國家産業經營の大策實現にありと固く信じし……日本勞働者農民の國民的信念の下に、陛下の勞働者農民として國家産業の發展を期するために其の不抜の信念を基調となし、國家的本分を盡す強力なる日本産業軍の編成大綱を天下に聲明する。……而して、その誓文及び盡約には左の如く述べられてゐる。

誓文

一君萬民の建國精神を奉戴し産業大權の確立を我等の本分となす。

盡約

我が産業軍は左記の盟約を嚴守して國家産業軍たる本分を果す。

- 一、産業軍は陛下の勞働者農民たる本分を盡し、祖國日本と生死を共にすべし。
- 一、産業軍は勞資問題に對し無道義既成組合運動方針を排し陛下の勞働者農民としてその生活權を擁護すべし。

一、産業軍は日本精神を信奉し、相互に信義禮節を重んじ軍の規律を固く守るべし。

役員は、今村等、藤岡文六、陶山篤太郎、光吉悦心、森登守、高井信太郎、山本龍介、合田登高木昭男、米村長太郎、末永寶吉、寺田格一郎等であつた。

四 國民協會の設立と青年日本同盟の結成

日本國家社會黨の生みの親たる赤松克麿の一統は何うなつたか？ 彼は、昭和八年七月國社黨より分裂するや、更らに再轉して、政治運動より精神運動、文化運動へ轉するに至つた。即ち舊友津久井龍雄と提推して國民運動社（註一）によつて日本精神普及運動に従事してゐたが、八月、津久井が神兵隊の行動を不可として批判的態度を示したことによつて生産黨を除名されるや、彼と結んで國民協議會を創立した。その「創立趣意書」は、左の如くなつてゐる。――

建國以來未曾有の重大時局に當面しながら、しかも混沌として歸する所なき現下の祖國日本に於て、最も緊急なることは、日本精神の國民的浸透化であると信じます。行詰れる國內の改造も、滿洲國の健全なる成長も、大亞細亞主義の確立も、對英對米對露の國策斷行も、すべて日本精神を絶對基調とする國民的覺醒より出發するのであります。實に日本精神の國民的浸透化こそは、日本國民が今後偉大なる民族的使命を遂行するがための基礎工作でなければなりません。

いふまでもなく、日本精神は日本民族固有の傳統的性質を有すると共に時代の進運に伴ふ前

進的性質を有します。日本精神の國民的浸透化は、國民精神を建國の精神に立ち還らしむると共に、現下の一切の國家惡を排除し、以て眞日本民族の光輝ある發展の原動力となるものであります。長く國民を毒して來た利己主義、自由主義、共產主義、社會民主主義等の非日本的な思想とこれに基く非日本制度とは、日本精神の昂揚によりて霧散さるべき運命にあります。

われ等は日本精神の國民的浸透化のために微力を盡すことが國家奉公の道なりと確信し、茲に從來の政黨關係を離脱して國民協會を設立し、同志と共に献身的努力を致すことになりました。國民協會は政黨ではありません。また經濟團體でもありません。純乎たる國民文化運動の團體であります。われ等の運動が何程か祖國に貢獻する所あらしめたいと念願するわれ等の微意を酌まれ、今後格別の指導と御賛助とを賜りたく切に御願ひ致す次第であります。

(註一)國民運動社とは、昭和八年四月、日本社會主義研究所から離れた赤松、津久井、松延等の日本主義派が、愛國運動の統一のために出した機關誌「國民運動」の發行所である。「國民運動」は爾後、國民協會の機關誌となつた。

次ぎに國民協會の綱領は、大體右の趣旨書の要約の如きものであつて、

我等は日本精神の國民的浸透化を以て眞日本建設の基礎工作と認めこれが實現のため奉仕せ

んことを期す。

となつてゐる。役員は理事長Ⅱ赤松克麿、常任理事Ⅱ津久井龍雄(出版部長)、倉田百三(文藝部長)、森清人(研究部長)、大木雄二といふ顔振れである。

國民協會は、その後、松岡洋右が政友會を脱黨し、政黨解消聯盟を組織するや、それに共鳴しその「一國一體」の運動を支持し、松岡一黨に接近して行つた。

國民協會と關聯して注目すべきは、その行動隊たる青年日本同盟の結成である。即ち、協會創立の翌九月十八日の滿洲事變紀念日に、生産黨の一單位であり、津久井龍雄に率ひられてゐた大日本青年同盟と赤松の傘下にあつた、日本通信従業員組合とが合流して作られたものがそれであるその聲明書のいふところによれば「……たゞ信念相近く因縁相濃かなる兩者の間に自らなる合同が實現された……」のであつた。役員としては、赤松克麿が顧問となり、津久井龍雄が會長、伊地知義一が主事となつた。その綱領「經綸」並びに「宣誓」は左の如くであつた。――

青年日本同盟綱領

我等は全國青年の日本精神による結盟を通じて新興大日本の建設を期す

經綸

- 一、一君萬民の本義に則り皇道政治の確立を期す
- 一、一國一家の精神に基き皇道經濟の樹立を期す
- 一、忠孝一本の大義に従ひ皇道教育の徹底を期す
- 一、八紘一字の理想に基き日本民族の雄飛を期す

宣 誓

忠誠皇室を尊び勇烈邦家を護る

友愛同胞と交り信義同志と結ぶ

篤實上長を敬し無私統制に従ふ

五 新日本國民同盟の内紛

昭和七年五月二十九日に、國家社會黨と對立して組織された下中彌三郎派の新日本國民同盟も、その行路は、國社黨同様、頗るジグザクを極めた。同盟は結黨後間なく中心人物下中彌三郎の離黨をみ、財政的にも甚だ困難を加へたが、昭和八年劈頭、組織部長近藤榮藏を中心とする東京府聯合會派の國家社會主義派と書記長佐々井一晁を中心とする本部派の皇道主義派とが理論的並びに

組織方針上の對立を示した。この争ひは、一月七日の常任委員會において決定をみ、近藤が常任委員及び組織部長の職を辭することとなり、宣傳部長坪井専次郎も同一行動に出た。しかるに、他方において國際勞働會議參加問題に關して本部派と日本勞働組合總聯合との間に對立を生じ、本部派は、前勞働代表たる總聯合の首腦坂本孝三郎に反對決議文を突きつけた。この時、坂本は新日本國民同盟の積極的支持を表明して泣きつたが、三月十四日に總聯合は、日本勞働者として日本の國策を海外に宣揚するために國際勞働會議に参加するのであるといふ聲明書を發した。

兩者の抗争は、本部と府聯との事務所を分離したため、却てますます熾烈となり、顧問島中雄三はこの情勢をみてその任を辭した。本部派は後述國難打開、皇道理想達成の祈願運動に熱中し府聯側は後述日本社會主義學盟の純正國家社會主義新黨樹立運動に參劃し、つひに七月八日、離黨聲明書を發するに至つた。その聲明書の一節には、同盟を批評して——「……國民政黨を誇稱する黨が唯一回の大會、中央委員會の開催なく、基準ある協議會の召集が行はれず、……（赤松派との分裂の際——著者）興奮に驅られたる代議員傍觀者の雲集に向けて突如としてその承認を求めた四、五の分子に同盟常任執行委員の名を冠せた所謂本部員が過去に於て獨りその指導機關に付いてゐる」云々といひ、また祈願運動に對しても、民衆の生活苦の救助に關し實際効力ありや否

の點につき、批判的な見解を表明してゐる。

こゝにおいて、本部派は、七月九日、全國府縣支部總代會議を開き、八月七日、支部代表祈願を兼ねて全國支部代表者會議を招集して、同盟の運動方針を確立し、新役員として中央總務委員長佐々井一晁その他の中央常務委員を選任した。十一月三日、國難打開、皇道理想達成の祈願運動及び臨時大會を催して「再び全國同胞に祈ふ」といふ宣言を發表したが、全體としてその運動は餘り振はず、赤松派と同じく漸次政治運動より精神運動へと變轉して行つた。

第二節 神兵隊事件

一 事件の概要

血盟團事件、五・一五事件以來、小テロ事件として、昭和七年（一九三二年）八月中旬、神武會顧問醫學博士今牧壽夫一派の川越挺身隊事件（政友會總裁鈴木喜三郎暗殺未遂）、同年十一月上旬天行會（頭山秀三主宰）、獨立青年社一派の陰謀事件等があつたが、何れも大した事件でなく、世人は漸くこの種のテロ事件の記憶を忘れ去らうとしてゐた昭和八年七月十日、突如として神兵隊事件なるものが起つた。

この事件の中心人物は、大日本生産黨青年部長の鈴木善一、愛國勤勞黨の天野辰夫、同じく前田虎雄、陸軍中佐安田鎮之助、海軍第二航空司令海軍中佐山口三郎等である。神兵隊は、血盟團事件、五・一五事件の人々の志を繼ぎ、國難を救済するために起つて齋藤内閣を倒し、帝都を擾亂していはゆる昭和維新を斷行せんとしたものである。

この計劃では最初三千六百名の動員が豫定されたが、第一次計劃（七月七日）は齟齬し、第二次

計劃（七月十一日）でも豫定の四百名のうち、僅か百二、三十名が動員されたに過ぎなかつた。

その動員方法は、國難打開、國防祈願を名として明治神宮外苑の神宮講習館に集まらうといふのであつた。事前にこれを知つた警視廳では先手を打つて當日集まつた四十九名を一網打盡にして事なきを得た。地方からは兵庫、大阪、京都、奈良、徳島、茨城の諸府縣のものがやつて來た。

この事件は、これまでのこの種の事件とは異つて、神兵隊顧問安田中佐を通じて、松屋デパートの元取締役内藤彦一、株屋黒澤福太郎等と結び、事件の早耳料として合計六萬二千圓内外の金子を受取つたので、「没落ブルジョアの投機と結ぶとは不純過ぎる」ものとして、世人をして本件に對する誤解を抱かせ、當の神兵隊は勿論のこと、他の國民主義團體一般にも少なからぬ打撃を與へた。なかでも大日本生産黨は、このために分裂の悲運に際會し、愛國勤勞黨の如き、殆んど自然消滅に近い狀態に陥つたのであつた。

神兵隊事件が他のテロ事件と異つてゐる第二點は、豫密における取調への結果、本件が破壊のみ目標としてゐた血盟團事件、五・一五事件等々より一步を進めて建設的方面まで考慮に入れてゐたため、殺人、放火豫備を適用されず、刑法第七十八條の内亂罪を以て問擬されたことである。それは、五・一五事件の橋等にも關係あるものとして、一時は橋の非常上告といふ方法まで考へ

られたのは、人のよく知るところである。

神兵隊事件の公判は、その後紛糾に紛糾を重ね、加ふるに首盟天野辰夫の病氣等ありて六年越しの今日、未だ片づかない状態である。

二 大日本生産黨への打撃

神兵隊事件によつて、最も直接且つ深刻なる打撃を蒙つたのは、大日本生産黨である。生産黨は前述の如く、内田良平「最後の御奉公」として設立されたものであるが、その肝腎の内田總裁が昭和七年以來病氣であつたために、内部の統制がとれなかつた。生産黨内には二つの潮流があつた。一は、内田直系ともいふべき黒龍會の池田弘、小幡虎太郎、葛生能久等の本部元老派であり、他は、後から來投した舊日本國民黨の八幡博堂、鈴木善一、舊急進愛國黨の津久井龍雄、伊地知義一等の青年新興派である。元老派は黒龍會の傳統を自負し、青年派は急進的國家改造運動を主張する。そして津久井の大日本青年同盟は、生産黨の青年分子を中心として黨外青年層をも糾合せんとしてゐた。後、八幡、鈴木が生産黨青年部を確立してこれと對立することゝなつた。そこへ、また大日本愛國青年同盟會長三宮維信（生産黨産業部主事）が加はつて、黨内はますます

す混亂することゝなつたのである。

かゝるところへ起つたのが、神兵隊事件である。この事件には前田虎雄、鈴木善一、影山正治、橋詰宗治、片岡駿等が連座して、黨の中堅部が殆んど全滅した。生産黨としては、この事件に關し、七月二十四日に聲明書を發し態度を明かにして、「元より黨本部幹部の興り知らざる處にして合法黨たる本部の黨是に反する事云ふ迄もなし……茲に遺憾の意を表するものなり、……行動の一切は立憲の大道に即し……穩健合法の順序を追ふてその目的の達成を期す」といつたが、本事件に關し強硬に直接行動反對の態度を示した津久井龍雄、三宮維信の兩名は、黨の方針を無視して分派的行動をとつたといふ理由の下に除名處分に遭つた。そこで三宮維信は大日本愛國青年同盟を率ひて獨往し、その後、日滿經濟調查局を設立、主宰し、獨立的なる調査を行ひ、あるひは「日滿經濟論壇」を刊行し、あるひは各地に講演會を開く等、質實なる活動を續けてゐる。また津久井龍雄は前述の如く赤松と組んで國民協會を創立したのである。

この神兵隊直接の關聯と、津久井、三宮兩名の除名といふ二つの事情によつて、大日本生産黨はその青年部を失ひ、漸次沈滞に赴いた。「財界廓清に關する意見」とか「金融財政統制について二當局に質すの書」などを發表したりしてゐたが、後述昭和神聖會に内田總裁が若干の關係を有し

たこと、及び内田良平の死（昭和十二年七月二十六日）が生産黨の活動を沈滞に陥らしめる主因となつた。しかし、内田總裁亡き後を受けた委員長吉田益三はよく生産黨の黨勢恢復に努力し、二・二六事件後、全国的に展開された國民主義團體統一運動に主役を演じ、その活動にはみるべきものがあつた。

昭和八年（一九三三年）八月、五・一五事件被告減刑運動を機會として生産黨が一般右翼運動犠牲者のために愛國戰士救援會を組織したのは、右翼團體の行方としては珍らしき事業として、注目すべき事實であらう。

第五章 運動再建への努力

第一節 國家主義團體の統一の企圖

一 國難打開聯合協議會

日本國家主義團體が、結成即分裂といふが如き事態を繰り返してゐることは國民主義といふ建前よりするも意義なきこととして、漸く統一への叫びが起り始めた。即ち、國家主義團體の分裂的紛争は、昭和八年夏頃が頂點であり、その秋から統一の傾向が強くなり始めた。しかし、それ以前より統一的努力がなかつたのではない。昭和七年秋―冬に起つた諸々の動きがさうである。假りにこれを第一期の統一運動とすれば、昭和八年秋―冬のそれは、第二期の統一運動といふことができるであらう。

第二期における運動の分裂―沈滞の原因に神兵隊事件が潜んでゐると同じく、第一期のその裡には五・一五事件が潜んでゐる。殊に神武會會頭大川周明の收監は、前述の如く決定的打撃を

國家主義團體に與へたのであつた。

國難打開聯合協議會（略稱「國協」）は、國家主義團體統一の最初の試みである。五・一五事件の反動によつて萎縮沈滞に陥つた愛國陣營に生氣を吹き込み、各黨の勢揃ひをやらうとする意圖の下に考慮せられたものであつて、昭和七年（一九三二年）六月九日、日本國家社會黨、大日本生産黨、神武會、勤皇維新同盟（註一）等、國家社會主義的傾向をもつ團體が集まり、新日本國民同盟その他へも參加が勧誘された。その聲明書は「齋藤内閣は……僞瞞的舉國一致に過ぎず……」として、これに反對の態度を明かにし、新滿洲國即時承認と國民生活窮乏打破とをスローガンとした。六月十六日、上野に國民大會を催した。その後、明糖脱稅問題、司法官赤化問題等にて共同闘争を行ひ、それを通じて國社戰線の統一にまで進もうとしたが、十一月頃より漸く機運が盛り上つて來た。十二月六日には國社黨と對立關係にあつた新日本國民同盟や愛國勤勞黨も參加し、十二月二十九日、「國協」第一回委員會を開いた。委員會は、當面の闘争スローガンとして、國民生活窮乏打破、國際聯盟脱退促進、司法官赤化糾彈運動を決定した。

（註一）勤皇維新同盟とは、端艇界の變り種工學士永井了吉（當時日大教授）を總理、田尻隼人、三浦大定を副總理として組織された團體で、「民主的金融資本の返上奉還を絶叫する」ものである。總理永井了吉

は神兵隊事件の時ある種の誤解を受け、五・一五事件における西川税の如き立場に置かれたといはれる。昭和七年二月の創立で、現在は殆んど活動なし。永井は、目下「東亞技術聯盟」といふ技術者中心の愛國運動を起し、自らその事務長となつてゐるが、この聯盟は興亞の線に沿ひ、「金の經濟」を廢し「物の經濟」を樹立することを目的としてゐるらしい。昭和九年二月創立に係る大森一聲、西郷隆秀等の直心道場は、その別働隊である。しかし鈴木勇が大正十五年に創立した勤王聯盟とは全然別物である。

この前後から、國難打開聯合協議會を中心にそれ以外の青年分子をも糾合して、同じ統一の目的から、大同俱樂部なる別働隊結成計劃が進められた。即ち、「祖國維新は青年の手で」「戰線統一は青年分子の統一より」といふスローガンの下に、十月十六日、大日本生産黨、大日本青年同盟、神武會、日本國家社會黨、日本社會主義研究所、洛北青年同盟等の青年分子が相集まつて、大同俱樂部の組織をみたのである。世話人(委員)として大日本青年同盟より鈴木善一、影山正治、神武會より鈴木款、平田九郎、榊原文史郎、川俣孔義、大石茂、國家社會黨より簀本政義、菊池一雄、勤皇維新同盟より大森一聲、洛北青年同盟より中川裕、日本社會主義研究所より坂本八郎、その他無所屬として杉川省吾、西郷隆秀、吉元俊熊、藤村又次郎等の十六名を出した。結成と同時に部則聲明書等を發表した。俱樂部の活動としては、時偶々一〇・三〇事件(日本共產黨事件)

が起つた時であつたから、尾崎隆判事の赤化事件を捉へ齋藤首相及び小山法相に聲明書を突きつけて小山法相、齋藤首相、牧野内府、一木宮相の辭職を要求した。また十二月九日、青山會館において、五・一五事件に於ける農民決死隊員で獄死した温水秀則の國民葬を斡旋した、これは、大日本生産黨、神武會、愛國勤勞黨、新日本國家同盟、勤皇維新同盟、日本國家社會黨、大日本青年同盟、國家社會青年同盟、神武會青年隊、洛北青年同盟、皇國農民同盟、拓大魂の會、帝大七生社及び朱光會、日の會、國士會、逕友同志會、日本勞働同盟（以上大同俱樂部加盟團體）、日本皇政會、愛國青年聯盟、愛國青年學生聯盟の賛成を得、久し振りにて廣汎なる協同戰線が展開せられたのであつた。「國協」及び大同俱樂部の運動は人目にも立つたが、間もなく沈滞に陥り、相變らず各團體の人的不和に憊んだ。そのうち、昭和八年七月の神兵隊事件によつて、中堅分子を失ひ、自然滅亡の狀態となつてしまつた。

二 團體擁護聯合會の組織

國家主義團體の第二の統一運動は、團體擁護聯合會である。この運動の動機となつたものは司法官赤化事件である。これは、昭和七年十月のいはゆる赤色ギャング事件及びそれに續く一〇・

三〇事件と關聯して暴露された判事シンバ事件である。結合の機縁は、同年十二月二日、日比谷松本樓で開かれた滿洲國侍武官次長工藤忠歡迎會であつて、その散會後、政教社の五百木良三のイニシアチヴに基き、司法官赤化事件を議題として統一運動を行ふ事を協議したのである。同月七日、第二次會を開き、愛國社、明德會、黑龍會、愛國法曹聯盟、政教社、大統社、國民戰線社、國防協會、昭和同志會、霜雪會、建國會等が相集まつた。續いて十二月十三日、第三次會を開き、つひに國體擁護、日本精神の昂揚を目標とする國體擁護聯合會が成立したのである。この時の常務委員は、五百木良三、入江種矩、小山内大六、須藤理助、齋藤努夫、松浦市十郎、鹽谷慶一郎、増田一悅、薩摩雄次、鈴木勇、瀬尾榮太郎、實川時治郎、小山田創南、佐藤慶次郎、津田隆司、高畑正、原藤右衛門、馬場園義馬、深澤源造、金子力三、千々波敬太郎、荒牧退助、小島高踏、鈴木善一、下澤秀夫、田村萬治、佐藤天風、田中七五三、島田政治、林逸郎、角岡知良、平野鐵舟等である。人的にいへば入江種矩、増田一悅が中心となり、團體としては、左記の八十餘團體が抱合されてゐた。

國體擁護聯合會加盟團體（順序不同）

政教社、愛國青年聯盟、愛國勞働農民同志會、維新會、敬神崇祖聯盟、黑龍會、愛國勞働聯盟

汗山莊、大和民勞會、廣島興國同志會、愛國社、東亞聯盟義會、東亞社、白玉社、風雲俱樂部、明德會、大日本經國聯盟、原理日本社、興國社、立憲革新青年會、回天時報社、大統社、大日本奉公團、昭和同志會、舊邦社、對外同志會、大日本愛國義團、大日本國士黨、五月黨、昭和義塾、勤王聯盟、大乘會、神州國團、民力振興會、殉國會、建國會、大化會、愛國青年同盟、地湧日本社、大日本護國青年黨、帝國新報社、大本會、大義社、大亞細亞民族會、大日本進興俱樂部、日本新聞社、勤王會、國士同盟會、内外更始俱樂部、大日本守國會、大正赤心團、全日本興國同志會、聖日本學會、立憲本民黨、信統會、大日本生産黨、興國義會、東洋共存會、新日本建設同盟、幸福社、大輝會、愛國新聞社、大風會、大日本國輝會、關東玄洋社、愛國法曹聯盟、原理日本軍、星共社、大日本古神道實行團、興國日本社、愛國學生聯盟、大日本殉國會、鶴鳴莊、大日本俱樂部、旋風社、樂進塾、帝國擁護會、國民戰線社、洗心莊、同志同盟、大日本國守會、國家主義東亞聯盟。

三 自治農民協議會の活動

自治農民協議會は主として農村關係のみの運動ではあるが、一種の戰線統一運動とみられよう。

昭和六年末に、下中彌三郎、長野朗、口田康信、津田光造、村井弘信、古谷榮一（無政府主義的傾向あり）が相集まつて日本村治聯盟を結成した。その指導精神は權藤成郷の農本自治主義であつた。これが昭和七年一月に擴大して農本聯盟となつた。しかるに農本聯盟は、急進的政治運動派と建設的經濟運動派とに分れ、前者は、同年四月中旬、長野朗を中心とし、長野縣日本農民協會の和合恒雄、解放戰線社盟主宮邊信一郎（元無政府主義者）、愛郷塾主橋孝三郎、全國農民組合新潟聯合會の稻村隆一等を集めて自治農民協議會を結成した。一種の協同戰線體であり、血盟團、愛郷塾、軍人學生等とも若干の聯絡があつたとみられる。協議會の運動としては、昭和七年齋藤内閣の第二次臨時議會召集に際し、

- 一、農家負債三ヶ年間据置、
- 二、肥料資金反當一圓補助、
- 三、滿蒙移住費五萬圓補助、

といふ請願運動をやつた。農村の自足自給を唱へ、醬油の自家醸造、屑繭による自紡自織等、あたかもガンヂー運動の如くであつた。階級的農民運動及び國家社會主義排撃もその一特徴である。その後活動を傳へられず。その綱領及び政策は、左の如くであつた。――

汗山莊、大和民勞會、廣島興國同志會、愛國社、東亞聯盟義會、東亞社、白玉社、風雲俱樂部、明德會、大日本經國聯盟、原理日本社、興國社、立憲革新青年會、同天時報社、大統社、大日本奉公團、昭和同志會、舊邦社、對外同志會、大日本愛國義團、大日本國士黨、五月黨、昭和義塾、勤王聯盟、大乘會、神州國團、民力振興會、殉國會、建國會、大化會、愛國青年同盟、地湧日本社、大日本護國青年黨、帝國新報社、大本會、大義社、大亞細亞民族會、大日本進興俱樂部、日本新聞社、勤王會、國士同盟會、内外更始俱樂部、大日本守國會、大正赤心團、全日本興國同志會、聖日本學會、立憲本民黨、信統會、大日本生産黨、興國義會、東洋共存會、新日本建設同盟、幸福社、大輝會、愛國新聞社、大風會、大日本國輝會、關東玄洋社、愛國法曹聯盟、原理日本軍、星共社、大日本古神道實行團、興國日本社、愛國學生聯盟、大日本殉國會、鶴鳴莊、大日本俱樂部、旋風社、樂進塾、帝國擁護會、國民戰線社、洗心莊、同志同盟、大日本國守會、國家主義東亞聯盟。

三 自治農民協議會の活動

自治農民協議會は主として農村關係のみの運動ではあるが、一種の戰線統一運動とみられよう。

昭和六年末に、下中彌三郎、長野朗、口田康信、津田光造、村井弘伯、古谷榮一（無政府主義的傾向あり）が相集まつて日本村治聯盟を結成した。その指導精神は權藤成郷の農本自治主義であつた。これが昭和七年一月に擴大して農本聯盟となつた。しかるに農本聯盟は、急進的政治運動派と建設的經濟運動派とに分れ、前者は、同年四月中旬、長野朗を中心とし、長野縣日本農民協會の和合恒雄、解放戰線社盟主宮邊信一郎（元無政府主義者）、愛郷塾主橋孝三郎、全國農民組合新潟聯合會の稻村隆一等を集めて自治農民協議會を結成した。一種の協同戰線體であり、血盟團、愛郷塾、軍人學生等とも若干の聯絡があつたとみられる。協議會の運動としては、昭和七年齋藤内閣の第二次臨時議會召集に際し、

一、農家負債三ヶ年間据置、

二、肥料資金反當一回補助、

三、滿蒙移住費五萬圓補助、

といふ請願運動をやつた。農村の自足自給を唱へ、醬油の自家醸造、屑繭による自紡自織等、あたかもガンヂー運動の如くであつた。階級的農民運動及び國家社會主義排撃もその一特徴である。その後活動を傳へられず。その綱領及び政策は、左の如くであつた。――

綱 領

- 一 政治的には我が社稷體統公同自治を確立す。
- 二 經濟的には我が共存共濟の原則により農を本として衣食佳物資の充足に努む。
- 三 教育は人の性能を陶冶するを以て目的とす。
- 四 外交は彼我協和の主旨を重んじ有無疏通を以て目的とす。

政 策

- 一 自給自足を實行し營利經濟より厚生經濟より厚生經濟に遷る其ため現狀に於て實行し得る一切の自給手段を取る。又共存互濟の原理により産業組合を改造し、且つその發展を圖る。
- 二 農民生活保證のため自治町村の食糧貯藏を圖り其供給權を確立す。
- 三 村内に居住せざる者の土地所有權及侵耕を排拒し地主の作付義務を促成す。
- 四 農家負擔の根本整理を遂行す。
- 五 農家負擔の輕減を圖る。
- 六 代表選出の弊風を戒飭し自治結束を以て公民權の伸長を圖る。
- 七 滿洲移民を農民の手によつて實現するため一切の準備調査をなす。

四 日本國家社會主義全國協議會

この運動は、統一運動ではあつたが、その經過は分裂的傾向を多分に包藏してゐた。

日本國家社會主義全國協議會運動の中樞は、石川準十郎の日本國家社會主義學盟である。日本國家社會主義學盟の前身は、前述の如く、昭和六年九月、石川、津久井（高島系）、赤松（社民黨系）、松延（行地社系）によつて設立された日本社會主義研究所である。これが、そも／＼國家社會主義理論の確立と、國家主義團體の連絡・統一とを目的とするものであつた。昭和七年（一九三二年）四月十八日、日本社會主義研究所が中心となり、更らに陣容を擴大して日本國家社會主義學盟なるものを創立した。その綱領は、

一、本學盟は國家社會主義の理論及び方法を學術的に研究し、且之を全國民に徹底せしめんとを期す。

二、本學盟は國家社會主義を否定し、或は之に背反する一切の思想を排撃せんことを期す。

三、本學盟は國家社會主義の實現を目的とする諸運動を支持し極力之を援助せんことを期す。といふのであるが、その役員の顔振れをみれば、それが統一運動を旨指してゐるものであること

とを知り得るであらう。即ち顧問として國民社會黨準備會(後の新日本國民同盟)の下中彌三郎、社民脫退派(後の國社黨)の島中雄三、神武會の大川周明あり。幹事長としては、國民社會黨準備會顧問の林癸未夫あり。常任幹事として、國民社會黨系の佐々井一晁、近藤榮藏、矢部周、社民脫退派の赤松克麿、小池四郎、平野力三、大衆黨脫退組(同じく後の國社黨)の山名義鶴、大日本生産黨の津久井龍雄、神武會の松延繁次、狩野敏、日本社會主義研究所の石川準十郎、五十嵐隆といふ、ある人の表現に従へば「日本國家社會主義者のオール・スター・キャスト」であつた。そして事務局は、主事石川準十郎以下今里勝男、藪本正義、田代耕三、別府峻介、五十嵐隆を以て構成した。

かくして、堂々たる協同戦線が成立したのであつたが、同年十月頃より早くも内紛が生じた。その原因は日本國家主義運動の基本的底流ともいふべき「純正日本主義」と「科學的國家社會主義」との對立である。「純正日本主義」派は、國家社會主義はマルクス主義の修正であり、眞正の國家主義に非ずといふ(註一)。また「科學的國家社會主義」派は、彼等のいはゆる「純正日本主義」とは、結局反動的國家主義にほかならずといふのである。大日本生産黨機關紙「改造戦線」(七年十一月號)の如き、「大同團結號」と銘打つて兩派の調停に努め「科學的には國家社會主義と稱し、精神的に

は日本主義と稱す」と苦吟を示したが、内紛はもとより治まらなかつた。

(註一)この對立の理論的基礎を知るには、祖國會パンフレット第一輯「國家社會主義を排撃す」(昭和九年二月、祖國會出版部刊行)をみるのが便利である。若宮卯之助、五來欣造、杉森孝次郎、荻田胸喜、綾川武治、下位春吉、北吟吉、土川杏村が執筆してゐる。

兩者の理論的・人的對立は果てしもなかつたので、つひに昭和七年十二月一日、日本社會主義研究所及び日本國家社會主義學盟を改組・合體し、國家社會主義派のみを以て新たに日本國家社會主義學盟を組織した。その改組宣言には「純正日本主義」を指して「反動の役割を果したる日本主義」といつてゐる。

新學盟は、顧問林葵未夫、大川周明、下中彌三郎、島中雄三、中央常任委員近藤榮藏、平野力三、五十嵐隆、松本悟朗、石川準十郎、別府峻介、矢部周、高橋忠作、坂本八郎といった連中で、赤松克麿、津久井龍雄、松延繁次等は學塾を去つた。

その後昭和八年六月頃、國家社會黨内において赤松の日本主義派と日本勞働同盟の國家社會主義派との獨立が鋭尖化し、分裂不可避とみゆるや、學盟は、思想團體より實踐運動に乗り出すべく決意し、六月二十九日、純正國家社會主義新黨樹立に關し擴大委員會を開くことを發表して、

國社黨本部小池派に挑戦した。續いて七月五日、擴大委員會を開き、

一、現下の國家社會主義戰線の狀勢に鑑み、從來の思想團體の域を出で、運動主體確立のため、積極的に努力すべき事、

二、特別委員會を設けてこれに全權を賦與し、以て現下の緊急情勢に適當に善處すべき事、を決定し、逋友同志會、日本勞働同盟内の國社派の糾合に努力した。この頃學盟中央常任委員會が發した「國家社會主義戰線の全同志に檄す」なるアピールは、當時の國社陣營の内情をよく傳へてゐる。

昭和八年（一九三三年）八月二十六日、學盟は、國家社會黨を脱退した日本勞働同盟中の國家社會主義派、及び新日本國民同盟を脱退した東京府聯合會を集め、東京において國家社會主義關東協議會を結成した。これに續いて十月七日、國家社會主義大阪地方協議會、十月八日、同關西地方協議會がなり、つひに十月十五日に日本國家社會主義全國協議會が成立した。その宣言は日本主義に對する批判を以て充たされ、これを指して「既成權力の……便衣隊」といつてゐる。役員は、中央常任委員長石川準十郎、顧問大矢省三、中央常任委員近藤榮藏、白鳥廣近、北里隆一、熊本與一、矢尾勝、水原友次郎、中央委員齋藤武彌、別府峻介、小林信吾、萩原貞一、近藤隆夫、

小田孝長、谷川正、吉川義男、本田滋二、岡五郎、野越正一、井上勝、浦部節郎、古田武、中村松太郎、大石彦造、有津美佐夫、松尾國一、美奈島愛一他十九名といふ大インフレであつた。井上勝、小田孝等といふ舊勞農黨支持派の來投に注目すべきである。

日本國家主義全國協議會は、その結束なるや、十二月五日の常任委員會において、昭和九年二月十一日の紀元節を卜して新黨を結成する旨を決定した。そして協議會をば日本國家社會黨準備會に改組した。

五 愛國運動一致協議會

五・一五事件後の萎縮を救ふために、國難打開聯合協議會及び大同俱樂部等の統一運動が行はれたことは、前述の如くであるが、この二つの運動は間もなく沈滞した。その間、部分的には九州の大日本護國軍の運動や、信州皇民同盟の合同運動等があつたが、何づれも規模狭小、天下の形勢を動かすに足らなかつた。國家社會主義團體の分裂過程は昭和八年（一九三三年）夏頃を以て頂上に達し、その秋頃より漸く統一への機運が漲ぎつて來たと前にいつたが、それについては、七月下旬頃より海軍側及び陸軍側の五・一五事件被告の裁判が開始され、民間側の裁判またそれに續

いて開かれて、世人は今更らの如く五・一五事件を想起し、殊に被告等の財閥・政黨等への批判が五・一五事件發生の根本原因について考へしめるところがあり、あれやこれやで、國民主義的風潮が昂まつて來た事實を指摘せねばならぬ。

かゝる空氣を受けて、秋頃より神武會、日本國家社會黨、勤皇維新同盟が世話役となつて、昭和維新國民會議準備會を作つた。十一月始めより名古屋、岐阜、福岡、京都、大阪、横濱、酒田等に地方國民大會がもたれ、十二月十日には内政改要求全國民大會が開かれた。その翌十一日、昭和維新國民會議準備會において、勤皇維新同盟の永井總理が口を切り、愛國運動一致協議會の設置を提案した。これに對して、國體擁護聯合會の金子力三が賛成した。その目的とするところは「眞正國民會議を設置し、愛國一致を實現する」にある。その組織案の大綱は、眞正町村國民會議―眞正郡國民會議―眞正市國民會議―眞正縣國民會議―眞正地方國民會議―眞正全國國民會議といふことになる。世話人として、東京Ⅱ狩野敏、金内良輔、松延緊次(以上神武會)、岡山篤太郎、小池四郎、今村等(以上國家社會黨)、永井了吉(勤皇維新同盟)、金子力三(國體擁護聯合會)、五十嵐治孝、井田三郎、中部Ⅱ高橋喜三、東北Ⅱ大久保正俊、毛利力之助、中國Ⅱ寺田格一郎、大山俊雄、北陸Ⅱ逸見爲男、近畿Ⅱ宮本純一、山本龍介、鎌田昌純、九州Ⅱ高次昇、木本榮が挙げ

られた。但し國體擁護聯合會は、愛國運動一致協議會が國家社會主義的色彩濃厚なりとして、つひに加盟を肯んじなかつた(註一)。

(註一)國體擁護聯合會は、甚だ頑強であつて、昭和十二年一月、頼母木選相の電力國營案の時も、他の愛國團體が一齊にこれを支持せしに拘はらず、「電力國營案は民業を壓迫する」といふ理由でそれに反對した。

第二節 民間國家主義團結の沈滞と

政治の底流

一 大日本國家社會黨の成立

昭和八年（一九三三年）七月の神兵隊事件以來、不振に陥つた日本國家主義運動は、秋から冬へかけて、復活・統一運動、——愛國運動一致協議會の如き組織を發生せしめたが、その活動も餘りみるべきものなく、運動全體は沈滞を重ねて行つた。政界推進力方面においても、昭和九年一月、陸相のバトン^{バトン}は荒木貞夫中將より林銑十郎大將に引繼がれ、軍部の靜觀的態度は一層強化されたと世間では觀念した。しかしながら、陸軍パンフレット問題（昭和九年九月）、在滿機構改革問題（同）等の經過に徴すれば、軍の廣義國防的見解が決して弱まつてゐたのではないことが了解された。

先づ、民間國家主義團結の離合集散の跡をみると、それは、次ぎの如きものである。

昭和八年末に成立した石川準十郎派の日本國家社會黨準備會は、二月十一日の結黨を目指して

進むことゝなつたが、その最初から内紛を起した。それは新黨の總務長に近藤榮藏、財務部長に五十嵐隆を推す一派（労働同盟の山本富嘉派）と總務長に石川準十郎を推さんとする一派（準機關紙「進め」の福田狂二派）との對立である。そのために二月十一日の結黨式は流れたが、同日の常任委員會において、近藤が「進め」支持取消しを提案し可決されるや、こゝに兩者の公然たる鬭争が開始され、近藤は「賣黨ブローカー」扱ひにされた。その結果、近藤、五十嵐は準備會を脱退することゝなり、石川も「進め」推薦の責任をとつて脱退した。

準備會は齋藤武彌を臨時委員長として事態を收拾しようとしたが、日本労働同盟側は松谷與次郎を推薦しようとする運動を始めた。松谷は「滿蒙問題に關する意見書」以來、大衆黨に安住せず、愛國主義團體の組織も思はしくなく、つひに安達の國民同盟へ走つてゐたのであつたが、労働同盟一派は彼に着目し、松谷與次郎を擔ぎだすべく工作を開始したのである。

こゝにおいて労働同盟派と學盟派とは完全に分裂し、後者は昭和九年（一九三四年）三月六日、準備會を脱會し、學盟をば大日本國家社會主義協會と改組した。そして三月十日、突如として労働同盟派の先手を打つて大日本國家社會黨を創立したのである。その結黨宣言には「永くして尊き歴史を持つ日本國家社會主義は、幾度か反動及び赤色の嵐に見舞はれつゝ、而も毅然としてその

光輝ある旗旗を死守することが出来た。……國家社會主義は今や唯一の恐るべき未來を持つ力として全既成勢力を根底から脅威すると共に、不可解の悦物として赤色反動共を畏怖せしめつゝある。……茲に我等同志相寄り『大日本國家社會黨』を創設す。その數少く、その力や尙ほ小なりと雖も、その憂國愛民の精神は宇内を壓す。……』といつてゐる。

大日本國家社會黨は、國社派唯一の「理論家」石川準十郎を首腦に仰ぐだけあつて、その理論的主張は國家主義團體中、最も整備してゐるといへるであらう。またその幹部も比較的純真な人々が多いやうである。そこで、同黨の綱領・政策は、日本における國家社會主義の理論水準を知る上に参考となると思はれるので、煩を厭はず左に掲げて置く。――

黨 誓

光輝ある建國の本義に基き、君民一如搾取なき新日本の建設を期す。

綱 領

一 我等は我國古來の天皇制を以て我國最適至上の國家體制と信じ、これが絶對的遵奉の下に我が國家及び國民の一大歴史的更生を期す。

二 我等は現行資本主義の無政府經濟組織を以て現下の我が國家及び國民生活を危うする最大

なるものと認め、公然の國民運動に依りこれが改廢を期す。

三 我等は現下の我が國民生活の救済は國家に依る集中的計畫經濟の施行に依るの外なきものと信じ、合法的方法に依りこれが達成を期す。

四 我等は凡ゆる國民はその生存の自然的基礎たる土地及び資源に於いて平等の權利を有するものと信じ、我が國民の生存に必要な土地及び資源を公然世界の過當占有國民に向つて要求す。

五 我等はアジア民族及び有色民族の解放を以て世界人類に負ふ我が國民の與へられたる使命なりと信じ、一大民族運動に依りこれが實現を期す。

政 策

政 治

一 天皇政治を發揚せしむべき政治組織の改革。二 資本家本位の諸法令の改廢。三 選舉法の徹底的改造。

財 政

四 勤勞國民負擔の輕減。五 財産税、相続税、所得税、資本金子税等々の高率累進課税。

六 生活必需品に於ける消費税の撤廢。

金 融

七 大金融機關の國營又は公營。八 取引所の廢止。九 信用組合の助長と小口金融機關の普及。

十 支拂不能借金に對する……。十一 利子の限定と高利貸の嚴罰。

産 業

十二 重要産業機關の國有並國營。十三 海外貿易の國營又は國家統制。十四 保險業の國營又は公營。

勞 働

十五 生活賃銀並に俸給の保證。十六 勞働時間制の確立。十七 國家に依る失業者並に貧困者の生活保證。

農村、都市

十八 土地の國有。十九 耕作權の確立。二十 主要農産物の價格統制と米穀の國家管理。二十一 肥料の國營。二十二 協同組合制度の助長。二十三 公營住宅の普及と貧民窟の撤去。

教 育

二十四 教育に於ける機會均等と公費教育の徹底。二十五 教員の嚴選と優遇。二十六 國家精神の涵養。二十七 邪教の撲滅。

社 會

二十八 恩給制の廢止と養老金制度の實施。二十九 醫療の國營。三十 廢兵公傷者及び國防犧牲者家族に對する國家の保護。三十一 社會的差別觀念及び差別待遇の徹底的打破。

軍 事

三十二 國民皆兵制の徹底と國防の充實。三十三 軍備均等權の確立。

國 際

三十四 自主的外交の確立。三十五 亞細亞弱小民族自治の確認とその保護。三十六 國民經濟の確立に必要な海外資源利用權の確保。三十七 東洋平和を確保すべき亞細亞聯盟の結成。

大日本國家社會黨の役員は、總理が石川準一郎。中央黨務局長は、海軍少佐で一時はマルクス主義にも興味をもつたといはれ戰時經濟の研究で知られる齋藤直幹。組織部長齋藤直幹、宣傳部長勝谷爲友、資金部長宮川千之助、機關紙部長別府峻介、調查部長鷺野隼太郎、書記長相良政行、常任書記關俊二、顧問金子忠吉となつてゐる。

同黨は、結黨の始めは大衆的基礎を殆んどもたなかつたが、結黨以來の熱心な努力の結果、昭和九年十二月二日に、大日本労働組合協議會といふ労働組合の聯合體を結成せしめることに成功した。その加盟組合は、富士スレート従業員組合、關東新聞労働組合、小石川登録者共助會、日本逓信同盟、大日本映畫人同盟(東京)、北日本労働聯盟(高岡)、中央労働聯盟(名古屋)、旭川總合同労働組合(旭川)、奈良桐工組合、奈良瓦工組合(奈良)、大阪一般労働組合、西大阪借家人組合、城東支部労働委員會(大阪)、自動車従業員組合、女給同盟(廣島)である。

二 勤勞日本黨の結成

石川派に先手を打たれた日本國家社會黨準備會の殘留派(日本労働同盟派)は、松谷與次郎を擁して、昭和九年四月二十九日の天長節に勤勞日本黨の結黨式を舉げた。その宣言は、「金權政治の妖雲今や日に密にして天地暗し。……無産黨は依然として痴人の夢。國家主義諸團體の多くも亦、觀念的誤謬に低迷するの狀態たるを如何せん。……我等國家社會主義を信奉する同志相倚り、蹶然起つて愛國の一黨を成す。念願するところは、直ちに國民的な革新勢力の結集を通じて、昭和維新に參與し……」云々といつてゐる。その役員として、總理松谷與次郎、黨務長近藤榮藏以

下白鳥廣近、齋藤武彌、瀧川末一、山本富嘉等があり、馬島個、賀川豐彦、山崎今朝彌、古野周、三、島中雄三等も名を列ねた。その綱領は左の如し。――

綱 領

- 一 我が黨は國體の本義に基き金權政治の介在を排除し君民一如理想國家の實現を期す。
 - 二 我が黨は行詰れる資本主義機構を合理的に改廢し國民生活の改善を期す。
 - 三 我が黨は愛國精神に基く國民道德を振興し以て社會惡の克服を期す。
 - 四 我が黨は世界平和の基礎に立ち人種の平等を期す。
 - 五 我が黨は社會改造の根本原理として國家社會主義を信奉す。
- 勤勞日本黨の中心勢力は前述の如く日本勞働同盟であつたが、この心臓部に異變が起つた。それは、内外の情勢に鑑み、日本の勞働者階級の間に統一的機運が起つて來たからである。
- この統一戰線の機運は、國家主義を奉ずる勞働同盟の大衆にも及んだ。それには、國家主義團體の餘りにも頻々たる分裂騒ぎが、彼等大衆に再考慮の機會を供したことも若干手傳つてゐるであらう。そこで、昭和九年六月、大阪に開かれた勞働同盟第二回大會は、
- 一、國家無視の共產主義を排すること。

二、資本主義の根本的改革を目的とすること。

三、天皇と民族の絶對性を承認すること。

等を條件として労働組合戦線の統一を行ふことに大體話が決まつた。しかるに、その具體的方法として、

一、總同盟との合同説、

二、關西側は總同盟へ、關東側は全國労働へ、

三、全的合同签订まで延期、

の三説あり、いろ／＼紛議をかもしたが、結局、十一月二日の中央委員會において、關西側は總同盟、關東側は全國労働と合同し、將來總同盟と全勞との合同に盡力することゝ決定し、十一月二日には大阪側、同十一日には關東側が、それ／＼合同を實行した。

こゝにおいてか、勤勞日本黨殘留派は、松谷與次郎、近藤榮藏等を中心として再結束を計り、東北、北陸、滋賀、京都、和歌山の諸地方聯合會及び大阪聯合會の一部は、「分裂絶對反對」といふスローガンの下に相結集することゝなり、十一月十四日、大津の滋賀合同労働組合事務所に分裂反對の會議を催し、日本労働同盟中央連絡委員會を設置して、勤勞日本黨に據り、國家社會主

義を守ることゝなつた。當日發せられた聲明書は左の如くであるが、労働同盟の脱退によつて、勤勞日本黨は著しくその勢力を失墜し、昭和十一年二月の總選舉における總理松谷與次郎の落選は、この打撃を倍加したものだといへよう。――

聲 明 書

國家社會主義の大旗を高く掲げて立つ我國に於ける唯一の全國労働組合聯合會、日本労働同盟は大阪に於ける一部と東京に於ける一部とが最近他團體と合同せる故を以て解消せられたるかの如くに傳へらるゝも、右は全く事實に反する誤傳にして労働同盟それ自體の健在に何等變るところなく、その各地方組織は依然として日常闘争と組織の擴大強化に寧日なく、一路所期の目的に向つて邁進しつゝあることを茲に改めて聲明す。

昭和九年十一月十四日

日本労働同盟中央連絡委員會

三 青年日本同盟の分裂

赤松克麿・津久井龍雄のコンビによる國民協會は、松岡洋右と相結び、その政黨解消聯盟に協

働してゐたが、幾許もなく協會の行動隊たる青年日本同盟に内紛が起つた。この内紛の原因は、結成以來の對立たる舊國社黨系と舊大日本青年同盟系との抗爭である。その結果昭和九年（一九三四年）五月、舊國社黨系の菊池一雄、岩井清、小黑將永等が脱退して別に正氣俱樂部を作るに至つた。

同盟主事伊地知義一は、その責を負つて、引退したが、その影響下にある横濱支部が伊地知復歸運動を起した。伊地知義一と會長津久井龍雄とは昔から切つても切れぬ因縁があるので、彼は分裂覺悟の上で、伊地知の復歸を認めた。果たせるかな、反伊地知派の常任中央委員竹本信一派はこれに憤慨して七月二十七日、同盟を脱退し、八月七日、維新會を結成した。決裂の際、双方ともに聲明書を發して、互ひの非を發き立てた。竹本派によれば、「同盟内の腐敗分子伊地知……はその重なる非行の代償として一切の社會的生命を奪はれて然るべき極惡漢である」し、津久井派によれば、反對派が「……伊地知氏の私行を誇大に剔抉中傷し、反對團體は勿論、警察にまで發送し、伊地知氏はもちろん、青年日本同盟全體の名譽を故意に毀損する行爲に出でたるが如き、その惡辣非日本主義的なる××××と雖も爲すを憚るところである」といふ。

維新會の宣言には、結成の趣旨を述べてかういつてゐる。――

……いまや昭和の國難至るに及び身を挺して之に赴かむとするの志の、苟くも邦家の前途に心を寄する者の胸奥深く燃ゆるを見る。即ち爰に無名にして微力乍ら思を同じうする我等同志盟約して以て「維新會」と稱す。稱呼の由來する處、我等の志の存する處一に現下の非常難局を克服して皇國日本の世界的使命を達成すべく先づ國內改造のために微力を竭さむとするにあり。……最近「國家改造」の旗幟を掲げて團體を成すもの多しとするも名實伴はざるもの少なからず、或は外國流儀の革命に倣はむとするもの、或は腐敗階級の御用を努めて革新的氣魄に缺くもの或は數名の幹部の賣名利己の手段に供せらるもの等々、不幸にして我等の安んじて共同し得べき「眞の日本主義團體」は幾許もない。……

維新會は竹本信一を中央委員長、市原壽を書記長とし、綱領を左の如く定めた。――

我國は日本精神の宣揚を通じて第二維新の實現を期す。

青年日本同盟では、この分裂によりて更らに勢力を小さくしたが、九月十六日、第二回全國大會を開いて亡國華府條約の即時廢棄、農村危機打開、反動的自由主義封壓を「集中的活動目標」と決定し、組織を變更して會長津久井龍雄を顧問に、鶴島三郎を黨務長に、伊地知義一を前衛隊長にし、青年層の活動を自由にするこゝとした。

四 昭和神聖會の出現

時局重大にも拘はらず、民間國家主義團體は徒らに分立して、久しくその勢力を統一する能はざる状態にあつた。この時、突然、大本教の出口王仁三郎がこの方面に名乗りを上げて來た。出口は自己の豊富なる資金を利用して愛國團體の統一を計り、これを地盤として、自己の政治的野心を達成せんとしたのである。

この出口の陰謀は、昭和九年七月二十二日の九段軍人會館における昭和神聖會の結成となつて現はれた。この時、出口の正體を知らざる多くの名士がこれに列席し、國家主義諸團體また昭和神聖會に協力せんとした。而して、當日創立せられた昭和神聖會には、某公爵が總裁（但し後に取消す）、出口王仁三郎が統管、内田良平が副統管となり、こゝに大本教と生産黨とのコンビがみられたのであつた。在郷軍人の團體明倫會、皇道會、青年日本同盟、神武會も連絡があり、昭和神聖會は、當日左の如き聲明書及び宣言を發した。――

聲 明

方今國際狀勢愈々紛糾し、皇國日本の前途に重大なる危機を孕み、國內の不安（中略）克服さる

ゝ時あるを見ず。

惟ふに是れ神聖なる天地の大道（中略）を忘失して外來文物制度に侵毒せられたるに依る。然るに未だ眞に覺醒する者尠なく滔々として闇黒不安の流れに狼狽するのみ。

吾人は久しく靜觀して覺悟するあり、今や天の時は漫然傍觀するを許さず、憂國の至情は此處に敢然身命を挺して（中略）政治に經濟に外交に教育に一切を究明し（中略）神州日本の美し國を將來せむと誠心奉公を誓ひ、茲に昭和神聖會を創り以て其目的達成に邁進せむとす。

昭和九年七月

昭和神聖會代表 出口 王 仁 三 郎

宣 言

大日本皇國の天業未だ途にありて内外稀有の不安に會す。寔に憂慮に堪へざるなり。惟ふに是れ天地の大道、皇道の大精神を忘却せるに依る。

茲に於て天祖の神勅、列聖の聖詔を奉戴し、大義名文を明かに百般の事家を究明して、世道人心を正し、至誠奉公神州臣民たる天賦の使命を遂行し以て聖慮に應え奉らむことを誓ふ。
右宣言す。

昭和九年七月二十三日

昭和神聖會

結成なつた昭和神聖會は、その青年部隊昭和青年會を基礎として、大阪、京都その他に支部を設けると共に、他方、前述國家主義諸團體と手を握つて海軍問題有志懇談會の結成に努力し、あるひは、國家改造斷行に關する請願運動を捲き起して、長野、富山、石川等の農村團體を動員した。何にしる大本教の資金をバックとせるだけに、その政治的將來は相當注目すべきものがあつたが、突如、昭和十年十二月八日、京都、東京、松江その他において大本教に對する手入れが疾風迅雷的に行はれ、王仁三郎以下の大本教幹部は、昭和十一年三月十三日、豫審終結して治安維持法及び不敬罪を以て起訴せられ、それと同時に昭和神聖會は、他の大本教所屬諸團體と共に解散を命ぜられたのであつた。最後に昭和神聖會の主義、及び綱領を掲げて置く。――

主 義

本會は神聖なる神國日本の大道、皇道に則り、萬世一系の聖天子の天業を翼賛し奉り、榮國の精神を遵奉し、皇國の大使命と皇國民天賦の使命達成を期す。

綱 領

一 皇道の本義に基き祭政一致の確立を期す。

- 一 天祖の神勅並に聖詔を奉戴し、神國日本の大使命遂行を期す。
- 一 萬邦無比の國體を闡明し、皇道經濟、皇道外交の確立を期す。
- 一 皇道を國教と信奉し、國民教育、指導精神の確立を期す。
- 一 國防の充實と農村の隆昌を圖り、國本の基礎確立を期す。
- 一 神聖皇道を宣布發揚し、人類愛善の實踐を期す。

五 維新懇話會に現はれたる統一への動き

理論的にみれば極めて當然のことでありながら、しかも實際的にいへば、その實現が甚だ困難であつた國家主義團體の統一運動は、昭和九年に一つの成果を得た。それは、大亞細亞協會幹部としての下中彌三郎の著「維新を語る」の出版が動機となつて作られた維新懇話會である。もとより一個の茶話會程度のものに過ぎなかつたが、分裂の苦汁を十分に味つてきた人々の集まりだけに方法さへ宜しきを得れば日本愛國團體統一への飛石たる役割を果たす可能性が十分にあつた。

その經過をみるに、昭和九年五月、右、下中彌三郎の「維新を語る」が出版されるや、その記念のための愛國團體幹部懇親會が六月十五日にもたれた。當日集まつた顔振れは、下中彌三郎、中谷武世

（大亞細亞協會）、小栗慶太郎（國民思想研究所）、滿川龜太郎（新日本國民同盟）、島中雄三（皇道會）、赤松克麿（國民協會）、小池四郎、陶山篤太郎（愛國政治同盟）、狩野敏、松延繁次、金内良輔（神武會）、津久井龍雄（青年日本同盟）、高山久藏（總聯合）、玉藤義吉（明倫會）等であつたが、當夜、この會合を恒常的機關として、情報交換及び實際運動提携促進に力めることゝなつた。そして會の名を維新懇話會と名づけたのである。

維新懇話會の活動は、當分のうち「懇話」の範圍を出でなかつたやうだが、帝人事件によつて齋藤内閣が辭職するや、七月二日、同會は左の中合せをして元老重臣その他に申達した。――

中 合 せ

一（略）

一 政黨財閥の傀儡たる内閣の出現を許さず。

一 後繼内閣の奏請は内窮迫せる國民生活を匡救し、外眼前に迫れる國際危機を突破し得べき少壯有爲の人材内閣たる事を要す。

維新懇話會の「中合せ」にも拘はらず、岡田内閣が成立するや、七月四日、岡田内閣反對の「中合せ」をなし、また軍縮條約問題と農村問題とに關しても、懇話會の「中合せ」をなすと共に、小

委員として、前者には赤松、島中、金内、中谷、小池、後者には小栗、松延、狩野、津久井、陶山の各五名を選んで具體案の作製とその實行とに當らしめた。

六 陸軍バンフレットその他

以上の如く、表面に浮ぶ民間國家主義團體の不振に對比して、軍部はいかなる状態にあつたか？いはゆる民間愛國團體の不振の大きな原因の一つは、五・一五事件以來、軍部が民間の愛國團體と力めて關係を稀薄せんとしたことにあつたといはれる。

かくの如く、軍部は民間愛國團體とは關係を薄くしたが、廣義國防の見地に基く革新の原動力としての存在は依然堅實なるものがあつた。八年九月における廣田弘毅の外相就任によつて、内田焦土外交は清算せられた。そして廣田の協和外交が始まつたのである。それから八年秋の五相會議となり、この五相會議の運用は、國內の空氣の鎮靜に寄與するところが少なくなかつた。我等の在任中斷じて戦争なしと廣田が大見得を切つたのも、その頃である。軍部及び愛國團體の憂慮したいはゆる一九三五、六年の危機は、安全に乘切られ、軍縮會議に對しても妥協的なる如き空氣が看取せられた。そこで愛國團體は、軍縮條約廢棄の猛運動を行つた。この運動は九年（一

九三四年）十二月の廢棄實行の時まで續き、四分五裂の狀態にあつた民間愛國團體によき運動目標を與へたのであつた。

その次に擧ぐべきは、昭和九年九月の滿鐵改組にからむ在滿機構改革問題である。軍部案、外務省案、拓務省案の三者對立し、軍部案が通り、拓務省案が蹂躪されたため、關東廳警官の反對運動まで惹起した。これは、軍部の威力を如實に示した出來事であつた。

次に軍部の威望を示した事件は、昭和九年（一九三四年）十月始め（日附は十日）、陸軍省新聞班から「國防の本義と其強化の提唱」なる五十頁足らずの小冊子が發行・配布せられた件である。それは鈴木員一大佐（現少將）が書いたともいひ、清水宣明少佐（現在大佐）が書いたともいはれるのであるが、「本篇は『躍進の日本と列強の重壓』の姉妹篇として、國防の本義を明かにし、其強化を提唱し以て非常時局に對する覺悟を促さんが爲め配布するものである」とのことであつた。内容は「一、國防觀念の再檢討 二、國防力構成の要素 三、現下の國際情勢と我が國防 四、國防國策強化の提唱 五、國民の覺悟」の五部に分れ、先づ有名な「たかひは創造の父、文化の母である。」との句から始まり、軍部の國內政治に對する積極的意見の表明として、各方面で大いに問題とされた。それは、「國民が國際競争の闘士として、自己を没却し君國の爲め奮闘せんが爲めには、其

生活の安定を必要とし、兵士をして後顧の憂ひなく戦場に立たしめんが爲めには、銃後に不安あらしめてはならぬ。茲に國防と一般國策との不可分の關係を見るのである」(一三頁)とする。即ち國民をして國家主義精神をもたしめるには「國民生活の安定を圖るを要し、就中、勤勞民の生活保障、農山漁村の疲弊の救済は最も重要な政策である」(一四頁)といふのである。「國民生活の安定」については、「國民の一部のみが經濟上の利益特に不勞所得を享有し、國民の大部が塗炭の苦しみを嘗め、延ては階級的對立を生ずるが如きこと」は國防上、看過できぬ(三一頁)。そのためには「速に皇國の理想實現に適應する如き經濟機構の樹立に邁進する事が望ましい」(三一頁)。

農山漁村の窮迫の原因は、「大半は都市と農村との對立に歸納せられる」(三三頁)。かくて現經濟機構は、「國家的全體觀」……よりすれば、「1、…必ずしも國家國民全般の利益と一致しないことがある。2、…階級對立觀念を醸成する處がある。3、富の偏在を來し、國民大衆の貧困、失業、中小產業者農民等の凋落を來し、國民生活の安定を庶幾し得ない憾みがある。4、…國家豫算に甚しき制限を受け、國防上絶対に必要とする施設すら之を實現し得ざる状態に在る」(四一―四二頁)。

そこで「現經濟機構の變改是正の方策」として、

1、建國の理想に基き、道義的經濟觀念に立脚し、國家の發展と國民全體の慶福を増進すること。

2、國民全部の活動を促進し、勤勞に應ずる所得を得しめ、國民大衆の生活安定を齎らすものなること。

3、資源開發、産業振興、貿易の促進、國防施設の充備に遺憾なからしむる如く、金融の諸制度並に産業の運営を改善すること。

4、國家の要求に反せざる限り、個人の創意と企業慾とを満足せしめ、益々勤勞心を振興せしむること。

5、公租公課を眞に公正ならしむる如く税制の整理。

の五項目を擧げてゐる(四二頁)。これは、大日本社會黨本部の聲明書(昭和九年十月五日)によれば、「尙抽象的大方針に止まると雖も我が國家社會主義の方針以外の何物でもない」のであるが、廣田外相の就任以來——殊に林陸相の就任以來、吾氣に構へてゐた財閥、既成政黨、言論界は大いに驚いた。これは、結局、「今直ちに實行に移す積りはない」といふ軍部の説明で納得することゝなつたが、一時の騒ぎは大したものであつた。

この陸軍パンフレット、——いはゆる「陸パン」に對して、國家主義團體が滿腔の支持をなしたのはいふまでもない。即ち、愛國運動一致協議會、大日本國家社會黨、明倫會等々續々と賛意を表明した、（但し北畠吉の「祖國」はこれに反對した。「愛國新聞」「日本新聞」もこれに批判的であつた）。

當時、社會大衆黨書記長麻生久は、黨機關紙「社會大衆新聞」第六十四號（十月二十八日發行）において、これを支持して、左の如くいつた。——

……今回の軍部の改革的態度は五・一五事件當時の如き軍部の一部と、所謂愛國團體の一部との通謀に依る陰謀的非法性のもではなくして、飽適合法性のものである……更に今回の軍部の改革的態度は前回の如き非民衆的な獨裁的態度でなくして、……民主的態度である。……今回のこれは科學的態度に發展し率直に資本主義的機構を廢棄して社會主義的ならしむることを主張してゐる……この點が此パンフレットの最重要點であつて資本主義的諸勢力がこのパンフレットに依つて深刻なる衝擊を受けた所以である……我々は滿洲事變、五・一五事件以來當時のファアシヨ的反動勢力と戦ひつゝも日本の國情より觀察し日本の軍隊の本質より推理してファツシヨの可能性を確信し、同時に日本の軍隊がその本質に従つて聽て今回のパンフレットに盛られた思想に迄發展し來るべきを確信したのであつた。而して我等の見透しは誤らな

かつた。……日本の國情に於ては資本主義打倒の社會改革に於て軍隊と無産階級の合理的結合を必然ならしめてゐる。目的を達するには此の必然を激成して行く以外に道はない。而して今回のパンフレットは公然としてその道を開いた。單なる軍服を着てるが故に之を恐るゝは自由民權時代の虚妄である。脊廣が我等の味方ならばブルジョア政黨財閥悉く我等の味方でなければならぬ。黨員諸君は、この開かれた道を正視しこのパンフレットを仲介として研究會を開き……このパンフレットの内容に従つて反資本主義勢力の擴大強化に努力して黨の擴大強化を圖るべし。

なほこの頃の軍部關係の出來事としては、昭和九年十一月二十日に、陸軍省より、左の如き發表があつた。――

陸軍當局談（昭和十年四月四日午後五時半發表）

昨年十一月中旬在京青年將校及び士官候補生若干名が不穩の企圖をなしあるやの疑ひありしを以て、嚴正調査のため軍法會議において關係者を取調べたり。その結果によればこれ等將校及び士官候補生は豫てより我國の現状は建國の理想に遠ざかり宿弊山積し國家の前途憂慮すべきものあるを以て速かにこれを刷新改善して我國體の眞姿を顯現せざるべからずとの考へを懷

き、これに關し談合連絡をなしたることあり。然れども不穩の行動に出づるの企圖に關しては徹底的に取調べたるもその事實認むべき證據十分ならず、軍法會議においては本件を不起訴處分に付したり。然るところこれ等青年將校及び士官候補生の言動において軍紀上適當ならざるものありたるに因りそれ／＼適應の處置を講じたり。

第六章 一・二・二六事件を中心として

第一節 一・二・二六事件前の情勢

一 機關說排撃と國體明徴運動

國家主義團體が聲を大にして叫んで來たいはゆる一九三五・六年の危機の第一年たる三五年（昭和十年）は來た。しかし懸念された國際的危機は來なかつた。問題の海軍々縮條約は、一九三四年（昭和九年）十二月を以て廢棄されたが、無制限の建艦競争も起らず、同じく一九三四年で效力發生した聯盟脫退も、格別さしたる事態も惹起せず、むしろヨーロッパ諸國は一九三五年三月のナチス・ドイツの再軍備宣言、一九三四年十二月の國境紛争に發端し一九三五年十月に爆發した伊・エ戦争等々のために、極東問題どころではなかつたのである。

翻つて國內事情をみるに、繭價の値上り、米價騰貴、農村匡救事業の進捗、輸出及び軍需インフレ等によつて、とも角、一時切迫せる經濟的危機は大いに緩和せられた。

しかしながら、この頃注意すべき事象が二つあつた。一は、天皇機關説排撃問題及びそれに引續く國體明徴運動であり、二は、永田鐵山暗殺事件である。

昭和十年二月、第六十七議會における國家主義代議士江藤源九郎少將（奈良縣選出）の質問をキツカケとして、天皇機關説排撃運動の幕は切つて落された。二月二十五日、貴族院における美濃部達吉博士の辯明は、議場においてこそ人々の傾聴を買つたが、この逆襲的辯明が俄然院外の軍部及び國家主義團體を刺戟した。このために、美濃部博士は議員その他一切の公職を辭し、その著書は發賣を禁止せられ、一時は起訴まで傳へられ、つひには小田某によるピストルの襲撃まで受けた。軍部は舉つて美濃部學説に反對し、政府に迫つて再三國體明徴に關する聲明を發せしめ、それはつひに重大なる政治問題化した。軍部の目指すところは、美濃部博士と同一學說系統と目される法制局長官金森德次郎、樞密院議長一木喜徳郎男の責任を問はんとするものであつた。種々の經緯の後、結局、金森法制局長官は辭職し、一木樞相また二・二六事件を機として辭任したので、軍部の目的は窮極において達成せられた。また教學刷新委員會を設け、多くの機關説學者を辭任せしめ、大學の講義内容に改訂を命じ、機關説は刑事上の犯罪とせられたのである。

この機關説排撃―國體明徴運動は、その及ぶところ諸方に波瀾を捲き起した。政友會内にも久原

房之助一派のいはゆる明徴派を生じて、岡田内閣倒壊運動を行はしめた。議會においても三月二十日、衆議院では「國體に關する決議」を、貴族院では「政教刷新建議案」を可決した。

國家主義團體が、この問題に對して奮起したのは固よりのことである。即ち、三月八日、頭山滿、菊池武夫、四王天中將、五百木良三、葛生能久、岩田愛之助、入江種矩、橋本徹馬等を中心とする機關説撲滅同盟が結成され、同十九日、機關説撲滅有志大會を開催して、左の如き宣言及び決議を可決し、これを首相、内相、陸、海兩相、文相等々に訪問・手交し、四月には更らに機關説撲滅同盟世話人會議を開いて、司法省及び檢事局に陳情した。――

機關説撲滅有志大會宣言

上に萬世一系の天皇を戴き萬民その治を仰ぎて無窮なるは是れ我國體なり。天皇機關説は西洋の民主思想を以て我が神聖なる欽定憲法を曲解し國體の本義を攪亂するものにして兇逆不道斷じて許すべからず。此の邪説を正さずして何の國民精神の作興ぞや。吾人は茲に國體の本義を明徴にし億兆一心誓つて此の兇逆なる邪説の撲滅を期す。

決 議

一、政府は天皇機關説の發表を即時禁止すべし。

二、政府は美濃部達吉及び其の一派を一切の公職より去らしめ自決を促すべし。

一方、統一戦線團體たる國體擁護聯合會も、三月六日には「兇逆思想の掃討と國本の防護」なるパンフレットを刊行し、また青山會館に總會を催すなど、機關説撲滅運動を旺んに行つた。

かくて、新日本國民同盟、大日本生産黨、愛國政治同盟、國民協會、昭和神聖會等の國民主義團體は、在郷軍人、なかんづくその組織たる明倫會、皇道會と手を組んで大いに奮闘をなし、統一戦線・協同闘争が強力に展開せられた。それに關して注意すべきは、地方愛國團體の活潑なる活動である。九北州、近畿、中部地方等における各團體は、中央以上の緊密な協同戦線を布いて、演説會、國民大會等に大いに活躍したものであつた。

機關説排撃運動——國體明徴運動と前後して暴力團狩りが行はれた。「街の紳士」一千七百餘名が檢舉せられた。このため、惡質の運動ブローカーが檢舉せられたが、これは純正愛國團體及び一般輿論の共に慶んだところであらう。これに關聯する重要事件は、大阪の國粹大衆黨總裁笹川良一が暴力團狩りにひつかゝつて收容せられ、直ちに轉向を表明して、國粹大衆黨の解散を上申したことであつた。

何はともあれ、機關説排撃運動は、國家主義の威力が學説の領域まで及んだといふ意味におい

て記録さるべきものである(註一)。

(註一)参考のため八月五日政府聲明に對する明倫會の聲明書、及び十一月二十日、關西側の内閣打倒國民大會の宣言、決議を左に掲げる。――

明倫會聲明

……將來此の政府聲明の實績を舉ぐるため政府の斷乎たる具體策即ち司法及び行政權の發動並に國體明徴に關する國民教育の徹底的刷新を觀ない限りは政府の折角の聲明も亦一種の畫餅に等しく從來機關説に絡まれる禍根を一掃することは到底望み難いと信じ吾人は引續き嚴重政府を監視し極力國體明徴の徹底を期さねばならぬ。若し夫れ從來國體の本義を徹る邪説を主張し、武は著書を刊行せる者に對しては其閱歷地位の如何を問はず容赦なく司法及び行政處分に付すべきであつて徒らに其人の身分や主張の年月の先後に捉はれて取捨すべき限りのものでない。

内閣打倒國民大會宣言

岡田現内閣は天皇機關説に關し再度天下に聲明を發せり。然もその聲明は吾等臣下の要望に添はざる所多く、極めて優柔不斷にして該說信奉者への處分と雖も何等施す處なく到底國體明徴を期し得ず。如斯内閣の存在は我金甌無缺の皇統の尊嚴を侵し奉り延ては皇國日本の無窮の發展を阻害するものと確信す。故に吾人は現内閣の無責任と無能とを糾弾し以て即時總辭職を要望せんと茲に國民大會を開催し吾等が總意を明示す。

決 議

現内閣は國體明徴達成に關し何等其の誠意を有せず如斯は將に我が國體を破壊せんとするものにして其の罪たるや萬死に償す。政府は宜しく罪を闕下に乞ひ即時總辭職をなすべし。

二 永田事件

林陸相の就任以來、軍部内の統制的傾向が漸次強まり、その空氣が靜觀的に傾いたことは屢述の如くである。

かゝるうちに、昭和十年七月十五日、教育總監眞崎甚三郎大將の交迭をみた。しかるに、その直後の八月十三日、永田鐵山暗殺事件なるものが起つた。

永田鐵山中將（當時少將）は、當時陸軍省軍務局長の要職にあり、士官校、陸大の成績抄群で、とに角陸軍隨一の材幹を謳はれてゐた。よく林陸相を支持してその肅軍工作に協力したと傳へらるゝのであつたが、それがはしくも一部の誤解を招き、殊に眞崎大將の交迭と關聯してこの誤解が深かつた。犯人相澤三郎中佐も、かゝる誤解を抱いた一人であつて、彼は眞崎大將交迭を敢へてした主動者は永田少將にありと認め、しば／＼同少將に辭職を強請したがきかれなかつたのを

憤つて、事を起したものと傳へられる。相澤中佐は豫審官に對して「近年漸く、政黨、財閥が腐敗し或る勢力と結んでは私利、私慾の爲に動くものが多くなり、様々の罪惡史を記録する情況を現出するに至り、各方面で維新斷行の聲が叫ばれ、私もこの感を深くして居つたのであります。殊に私は軍人として（中略）軍を私兵化せんとするものが段々出て來た點には衷心から慨歎を禁じ得なくなつたものであります」といつてゐるが、これをみると、彼のイデオロギイ、その傾向がわかるであらう。

昭和十一年一月二十八日より開かれた永田事件の公判は、いろ／＼の意味において世間の注視を惹いた。裁判長たる佐藤正三郎少將（第一旅團長）、特別辯護人たる滿井佐吉中佐（陸大教官）の處置及び辯論、更らに林銑十郎大將（事件當時の陸相）、橋本虎之助中將（同陸軍次官）、前教育總監眞崎甚三郎大將始め種々の證人喚問が申請されたその申請に關する滿井中佐の理由に、甚だ注意すべきものがあつたのである。

先づ證人眞崎大將の喚問が許可せられたが、その訊問は二・二六事件の前日まで紛糾した。

永田事件勃發後は、いはゆる政界上層部に種々な異變を生じた。機關説が犯罪を構成するものと斷定の下されたのも、事件勃發後の九月十八日のことであり、美濃部博士の處分が決定し貴

族院議員を剝奪されたのも同じ頃である。そして牧野内大臣、金森法制局長官の異動があつたのも永田事件の豫審調書發表後のことであつた。

三 神武會の解散と中核組織論・大衆的組織論の對立

國體明徴運動の強力なる展開にも拘はらず、國家主義陣營のスランプは急速に脱却し得なかつた。それは、前述の如く、主として民間愛國團體と軍部との關係が往年の如く緊密に行かなかつたことに基くものとされた。勿論、陸軍・パンフレット支持運動、國體明徴運動等は、軍部の容れるところではあつたが、大體において、軍部は民間運動に對しては消極的・自肅的態度をとつたのであつた。されば二・二六事件前の國家主義團體の頽勢は、昭和九年のそれよりも一層正しかつたのである。

この時代における民間國家主義團體頽勢のトップを切つたものは、昭和十年（一九三五年）二月十一日における神武會の解散である。

神武會は、前にも述べた如く、昭和七年二月十一日に、大川周明を會頭として組織された愛國團體であり、對軍部關係、資金關係、人的關係において、この種愛國團體中の隨一と數へられた

ものであつた。成立早々、五・一五事件が起り、それに連座した會頭大川周明が六月中旬收監されるや、俄かにその勢が衰へたが、しかし、なほ國家主義團體中の指導的地位は失はなかつたのである。

しかるに昭和九年十一月、大川會頭が保釋となるや、獄中において深く省みるところあつた大川周明は、昭和十年二月十一日の神武會全國代表者會議において、その解散を宜したのである。

神武會解散について、會頭大川はいふ——「花は開き花は落つ。開落ともに任運法爾である。

いま神武會は梅花の如く咲き、梅花の如く散る。咲くべくして咲き、散るべくして散る。古語に曰く、梅は霜雪の先、花は猶風雨の後と。神武會の解散は即ち百花燎亂の春に先驅するものである」(神武會機關紙「日本」二月一日號)と。二月十一日の解散に當つて、神武會は悲壯な解散の辭を發表したが、それは當時の日本の國家主義團體の置かれてゐる地位をよく表はしてゐるので、左にその全文を掲げる。――

神武會解散の辭

昭和七年二月、全國の同志と共に我が神武會を結成して茲に三閱年、一顧して長望すればその間瞬時の如く、又十年の長きを覚えしめる。滿洲事變勃發後の澎湃たる日本精神の最高潮時

に棹して、我が神武會は昭和維新國民運動の醗酵要素として誕生し、その志す所の大綱を全國民に明かにした。爾來滿洲國の創建と承認、國際聯盟の脫退を實現し、自主的外交を確立し、今や軍備平等權の主張を世界に明徴ならしめむとしつゝある。

昭和維新外交工作の基礎漸く成り東亞全局の平和を保持して有色民族を桎梏より解放し、皇道を世界に宣布するの實力は備はらむとして居る。見よ、世界列國の政治的、經濟的報復の重壓を突破して躍進しつゝある皇國の雄姿を。儒佛基三教を吸収して更に西洋文明を最高度に咀嚼し、今やマルクス、レーニン主義を克服して、皇國が東西文化調合の最高峰に立たんとしつゝある。此の莊嚴なる世界史的使命を負擔する日本民族の生命力は無限の發展段階を登高する。維新外交の基礎成れるは實にこの大業の一半を達成したるもの、此の點に關し大川周明先生を會頭に推戴せる我が神武會は昭和史上に不朽の足跡を印するものと信ずる。

乍去喜樂の背後に悲憂あり、輝かしき神武會の首途にあつて五・一五事件は我等の會頭を奪ひ去つた。爾來長かりし二年有餘、全國同志の憂何ぞ深かりし、而も我等は一切の批判を超越して飽迄最後の勝利を確信した。皇天の加護に拍手低頭するの全國同志の果敢なりし會頭釋放の鬭争に對しては茲に改めて深き感謝と敬意とを捧げる。

會頭の保釋出所を機として我が神武會は内外の情勢に深刻なる省察を加ふべき秋に際會した。端的に云はむと欲する所のは滿洲事變、五・一五事件後の國民的興奮の間に、國內改造の大事を遂行し得ざりし日本國民は退一步して三思すべきであり、凡ての愛國維新運動は顔を洗つて出直すべきである。

是れ維新運動の犠牲者に對する我等の責務である。而かも我が神武會は大川會頭の思想的指導を中心として結成せられ、大川先生を以て海内無双の大勇者なりと信ずるが故に、會頭の拘束せられ居る今日、潔く花と散り、又旋風の如き捲土重來を期したい。

昭和七年九月十五日、大川會頭自ら宣する所の「吾等の志」一篇に明瞭なる通り我が神武會は維新國民運動の醗酵要素にして斷じて政黨にあらず、一城一廓に立籠りて政權掌握の白日夢を描くものではない。我等の志は無私無欲維新國民の捨石となり、興矢たるに在る。斯るが故に吾等の出所進退は自由無礙である。要すれば形をなし要せざれば散ず。是れ悉く時宜に據る諦觀的敗北にあらず。やがて突撃への後方機動である。

×

×

滿洲國の健全なる發達は日滿支の三國の經濟聯繫、而して支那の和平を必須條件とする。滿洲事變、五・一五事件以來、國內政黨、財閥の橫暴專肆少しく緩急を見るが如きも、今日の如き彌縫政策を以てしては國民生活難の諸問題は少しも抜本的に解決せられない。鬱勃たる民族の生命力は不當に抑壓されて居る。こゝに禍心を藏する。大嵐は一年後に來るや將又三年後に來るや、唯神之を知るのみ。

非常時は默々として加速度的に深刻化すると斷じて解消せず。眼前の走馬燈的現象に幻惑して右顧左眄するは勇者の事ではない。我等一旦芳盟を契りて昭和維新國民運動を發起せる者離合集散に仍つて志を二三にするものに非ざる事を誓ふ。内外何れにせよ單一改造國策に維新國民運動に結集し得るの日迄、我國は不退轉に沈潜する。而して不斷の魂の鍛鍊は無形有形の連携を濃かにするであらう。茲に我が神武會は大なる矜持と抱負を以て解散を天下に宣言する。全國の同志幸に加餐自重せよ。

神武會の解散後、静岡、福井、京都等の地方的勢力は、それ／＼地方行地社となり、行地社精神を奉じて他日を期することゝなつた。

神武會の解散を機として、日本の國家主義陣營内に、いはゆる中核組織論と大衆的組織論との

對立が表面に出て來た。これは、古くは國家社會主義對日本主義の對立となり、後には議會主義と非議會主義、大衆的維新政黨即時結成論と非政黨主義との對立となつた國家主義内部の宿癆的、二大底流の對立である。いま中核組織論と大衆的組織論との理論的根據をみるに、神武會の大川周明の組織論は、五・一五事件でもみられるやうに、精銳主義、中核組織主義である。中核的組織論は五・一五事件以來、神兵隊事件その他の事件の經過をみてもわかるやうに、現在までのところ失敗の連續である。テロリズムの如き、一時的・警世的效果はあつても結局國家改新の大義は達成せらるべくもない。殊に現在の如き客觀的情勢の下において國家主義運動の起死更生を計り、これを文字通り國民運動にまで高めるには、議會進出の他に途なしといふのが大衆的組織論であつて、丁度大正十二、三年頃左翼陣營内に起つたりベツ化運動の如きものである。

神武會の傳統を固守し、その中核的組織論を擁護するものは、北斗俱樂部である。これは神武會解散直後、議會進出論の擡頭に憤慨し、四月、舊神武會青年有志を中心として正氣俱樂部、愛國政治同盟の青年有志等を糾合して結成された青年分子の協同戰線體であり、皇道主義の研究把握、維新戰略の研究、國際情勢、對外皇化方針の研究、全國青年有志の連絡等を運動方針とするものであり、榊原文次郎、藪本正義、菊池一夫等を幹部とするものである。北斗俱樂部の趣意書

は、中核派の理論的基準を端的に明示するものであるが、それは左の如くいつてゐる。――

北斗俱樂部趣意書

國民窮乏の聲巷に滿ち、維新斷行の叫び數年に垂んとするも、愛國運動の陣營は一沫の寂寥を湛へ、今やその出直しを必須、不可避とする情勢に直面するに到つた。即ち滿洲事變直後の國民的興奮の雰圍氣の裡に、その飛躍的伸展を期待された所謂愛國團體は、維新の緒動たらんとした五・一五事件前後の歴史的瞬間に應照するに由なく、或は不在の幻想を追ふて他力化し、或は半解の日本精神に捕へられて觀念主義の泥沼に陥り、或は不淨の黃白を求めて金融ファッショの軍門に移行し、或は支配階級の觸手に内應して個人的地位の確立に奔命せんとする傾向一部に顯著にして、全國の純眞なる青年同志の隱忍苦闘にも不拘、愛國運動は今や從來の運動樣式に深刻なる省察を加ふべき秋に際會するに至つた。

我等はかゝる現状の打解は先づ全國青年同志の強力なる結合、奮起に俟たねばならぬと共に、來るべき維新國民運動の飛躍的發展段階に照應し、その推進の主動的役割を演じ得るものは所謂前衛的中核組織を措いて他なしと信ずるものである。

北斗俱樂部は、斯る組織の出現を確信しつゝ、一の過渡的形態としてその全國的連絡を促進す

べく生れたものである。全國同憂の士の參加、協力を希ふ次第である。

なほ、北斗俱樂部には、「選舉批判」なるものがある。併せ掲げて彼等の議會主義批判論を知る參考資料としたい。――

北斗俱樂部の選舉批判

一、議會主義の本質と議會進出の可否

吾等は議會制度そのものを否認するのではなく、むしろ欽定憲法の精神に則つてゆく事を絶對に正しいと信ずるが、今日の議會は本來の精神から逸脱し、買収、因縁情實等、利權と干渉によつてデツちあげられたもので、醜惡な政權爭奪の具である。かくしたものは一部特權階級財閥既成政黨人の私利私欲である。

我等は眞正の議會再建することは國政の全般的改革、皇道維新と切り離して部分的に實現し得るものではない。従つて議會選舉に對する我等の方針は當然に國家改造の戰略と關聯して考へねばならぬ。

一、愛國團體の議會進出に對する可否について

議會主義と議會進出とは混同さるべきでない。議會主義とは議會に多數を占めることによつ

て議會行動を中心として國家改造を計らうとする主義で、其の根本的思想は自由主義、民主主義である。之はその意圖の如何に不拘必然的に現状維持に墮する。議會進出は必ずしもさうではない。今日の議會の反國體的反動の本質を暴露し全面的改造を推進する爲の一戰術手段として之を利用せんとする場合もある。

しかし乍ら今日の議會進出は一にその主體的條件(議會鬭争の一貫した方針、統制ある組織が無い爲に正當に正しく闘はれても結局木乃伊取が木乃伊になるは必然だ。第二に今日の議會に對して國民が關心を有しない。國民の窮乏は今日の議會の如何ともする能はざる所である。かくの如き時に於ける議會進出は意識の如何に不拘老朽した今日の議會政治に一抹の息吹を與へ、國民の打倒議會政治の正しい意識を外し、昭和維新に對する熱意を失はしめると云ふ反動的役割を與へる。

中核的組織論派に屬するものには、北斗俱樂部のほか、維新會、核心社(註一)がある。彼等は議會進出論を以て、「公武合體的微溫化」への移行、「金權ファッショ」への轉化なりとしてゐる。彼等とても議會鬭争の必要を否定するものではなく、「議會主義」と「議會進出」とを區別する。即ち右の「選舉批判」にいふ如く、「今日の議會の反國體的反動の本體を暴露し全面的改造を

推進する爲の一の戦術として」の利用價值を認める。しかし、それには「主體的條件」を必要とする。即ち中核的組織だといふのであつて、左翼の議會論より學ぶところが少なくないといへよう。

(註一)二・二六事件に死刑となつた澁川善助(元陸士生)は直心道場幹部であり、核心社の同人である。

議會進出論を主張するものは、赤松克麿の國民協會を始め、政黨解消聯盟、大日本國家社會黨、勤勞日本黨、新日本國民同盟、明倫會、皇道會等である。この方面においても先頭に立つものは赤松克麿であつて、彼の傘下にある國民協會(及び青年日本同盟)は、さきに政治運動より文化運動へ轉向したのであつたが、下中等の維新懇話會に参加してから再轉向して政治運動へ向ひ、昭和十年秋の府縣會選舉及び十一年春の總選舉を目指して議會進出を計ることゝなつた。そこで昭和十年三月十日、全國代表者會議を開催して、國民協會を政治團體に改組し、同時に青年日本同盟をも國民青年隊とすることゝした。更生せる新國民協會の綱領は左の如くである。――

一、強力國策内閣の樹立。

二、公益を基調とする國家統制經濟の確立。

三、新世界平和秩序創建を目的とする大亞細亞主義の強行。

四、軍備の完全充實。

五、日本主義國民文化の創造及び宣揚。

國民協會中でも殊に京都支部が最も議會進出に熱心であつて、「全合法愛國派の政治的實勢力結成の急務。日本主義運動の議會進出を企圖し政局の批判者より政局の擔當者になれ！」といふ協同戦線のアピールを同傾向の國家主義團體へ送つた。

いはゆる議會進出論を主張する愛國團體の幹部たちは、國民協會の赤松克麿といひ、愛國政治同盟の小池四郎といひ、また勤勞本黨の松谷與次郎といひ、何れも舊無產政黨内にあつても、比較的議會主義的色彩の強かつた人々であることが、特徴的であるといへばいへるであらう。

議會進出論に轉向した彼等は、昭和十年秋の府縣會選舉と、昭和十一年春の國會總選舉とに臨んだ。何れも失敗であつた。府縣會選舉の方は、皇道會十一名、明倫會五名、愛國政治同盟三名、新日本國民同盟、生産黨、勤勞民衆同盟各二名、合計三十四名の立候補者あり。七萬九千八十八票を得て當選者十三名といふ不振であつた。また昭和十一年春の總選舉においては、赤松克麿は北海道に戦野を選んだが不運にして落選し、小池四郎(福岡第三區)、松谷與次郎(東京第六區)等は却つて議席を失ひ、その他國家主義者は一般に不成績であつた。たゞ平野力三(山梨)、北吟吉(新潟)、綾川武治(埼玉)等が當選したのが異常の好成績とみられた。

この時期における國家主義團體の趨勢を語るものとして、新日本同盟の内紛及び大日本國家社會黨の内訌がある。前者は昭和十年五月頃より佐々井一晁、神田兵三系對高橋忠作、野木義雄系が對立したものであつて、高橋＝野木派は九月に新日本國民同盟革新會を組織し、滿川龜太郎は憤慨して脱退した。また大日本國家社會黨の内訌は、四月頃より黨方針に關して關西黨務局と本部派とが對立し、七月に妥協成つた事件である。この兩内紛に關する資料文献も手許に存在するが詳細は割愛しよう。

四 事件直前における愛國團體の勢力

二・二六事件直前における日本の國家主義團體の數は、吾々の知り得る限りでも三百五十餘もあつた。その種類は、あるひは政黨あり、勞働組合あり、教化團體あり、學生團體あり、研究團體あり、新聞雜誌社あり、俱樂部あり、在郷軍人團體ありといった様子であつて、且つその幹部が數團體に跨がつてゐた。個々の團體の成員は、少數の有力團體を除くほか、大體において少數である。ある右翼論客は大體一團體百人以下とみていゝといつてゐるが、公平にみてその程度の團體が多いらしく思はれる。勿論各團體の聲明書などは大きく呼號してゐるが、例へば昭和十年

九月二十一日の新日本國民同盟革新會の機をみると、新日本國民同盟の會員を三萬と號してゐる。しかし實數がそこまであるか何うかは客觀的にみても問題であつた。

愛國政治團體が日本主義派と國家社會主義派とに分れてゐた如く、愛國的労働組合も、日本主義的「勞資協調主義」的なものと、國家社會主義的「階級闘争」的なものとに分れてゐた。前者の尤物は、神野信一の組織した日本産業労働俱樂部であつて、石川島造船所の自強組合（會員四、五八三人）が中心となつて浦賀船渠の工愛會（二、五五八人）、横濱船渠の工信會（二、一四六人）等、十八組合を集めて昭和八年五月に設立されたものである。その勢力は二〇、二八二人と稱せられてゐる（註一）。日本産業労働俱樂部式の協調組合は資本家の協力を得、一般愛國團體の頽勢を尻にかけてます／＼發展の兆があつた。その主なる事業は愛國機献納運動、日本労働祭（四月三日神武天皇祭當日）等である。また同俱樂部が昭和八年十二月十四日に發表した「全國産業労働會議設置に關する建議案」は、フランスの「國民經濟評議會」（C. E. N.）にも似た組織大綱を有し、職能主義思想「マルボラチズム」思想の表はれとして、近代國家主義的建設組織の提示として注目すべきものであると考へられる。荒木貞夫、後藤文夫等も關係をもち、また前述の如く安岡正篤の金鷄學院の指導をも受けてゐた。日本産業労働俱樂部及びその中心たる、石川島自強組合

の綱領は左の如くになつてゐる。――

日本産業労働俱樂部綱領

- 一 我等は自己の本分を盡して公正なる勞資關係を確立し以て産業報國の實を擧げんことを期す。
- 二 我等は建國の本義に基き皇道日本の完成を期す。
- 三 我等は日本精神に則り和衷協力以て識見の開發德操の正養に努め世界文化に貢獻せんことを期す。

自彊組合綱領

- 一 本組は建國の精神を尊重し進んで社會問題の解決を期す。
- 二 本組合は皇國労働者の人格の向上と技術の進歩とを計り以て産業の發達を期す。
- 三 本組合は組合員相互の福利を増進せしめ労働條件の維持改善を計り社會共存共榮の實績を擧げんことを期す。

(註一)日本産業労働俱樂部の勢力については、別に十六組合、一八、六七八名の數字もあつた。

日本産業労働俱樂部以外の愛國的労働組合の中で最も大きいのは、何といつても日本労働組合

總聯合であつた。これは機械産業、重工業に根を張つてゐるといふ意味において注目すべき組合である。從來その態度はとかく浮動的であつたが、昭和十年四月、坂本孝三郎の死後、高山久藏が會長となるや、日本主義への轉向を宣言し、九月、決定的に日本勞働組合會議を脱退して國家主義的態度を鮮明にした。加盟組合數四十一、組合員二七、一二六人、新日本國民同盟を支持して來た。十一月、名古屋に於ける轉向後最初の大會では左の如き綱領を決定した。――

- 一 我等は建國の本義に基き和衷協同皇道日本の完成を促し、以て國家産業の發展を期す。
- 二 我等は公正なる勞資關係を確立し勞働者の向上を圖り、進んで經濟制度の革新を期す。
- 三 我等は業に勵み智を磨き徳を樹て、自省以て人類文化に貢獻せんことを期す。

次ぎに國家主義政治團體と直接の支持關係はないが、海軍勞働組合聯盟が加盟組合七、組合員三九、八一〇人を擁しつゝ勞働組合主義を棄て、國家主義へ轉向したことは、大きな意味をもつといはねばならぬ。その他、日本産業軍（愛國政治同盟支持）は組合數十七、組合員二、九四六名と號し、日本勞働同盟は十組合一、二二〇人（もと勤勞日本黨支持。昭和十年三月、勤勞日本黨と絶縁し「再建」した。その會員實數は少ない。）、大日本勞働組合協議會（大日本國家社會黨支持）は十九組合、二、八三五人（實は五〇〇人くらゐとの説もある）、日本海員組合より脱退した新日本海員組合

(註一)が十一支部四、七〇〇名、大日本生産黨支持の陸軍勞働組合(大阪造兵廠)が七五〇名、愛國政治同盟支持の全國俸給者協會が五〇〇名となつてゐた。

(註二)新日本海員組合は、昭和十年に創立せられたものである。即ち、日本最大の勞働組合たる日本海員組合では、昭和八年夏頃より組合長濱田國太郎と組織部長赤崎寅藏との間に對立を生じ、これがやがて本部派對反本部派の對立にまで發展した。反本部派は海員組合革正同盟を組織して對抗したが、昭和十年一月、一先づ妥協が成立するかにみえた。しかるに、妥協は破れ、同年五月、革正派は脱退して新日本海員組合を組織し、顧問赤崎寅藏、組合長缺、副組合長那賀源三郎、組織部長藤原喜代治、政治部長新妻德壽といふ陣容となつた。間もなく組合として日本主義に轉向、十一年四月、愛國勞働組合全國懇話會に加盟、同年末、赤崎顧問、新妻政治部長が時局協議會に加盟した。

しかるに同十一年末、普通船員退職手當制度問題に關聯して新舊組合の接近が行はれ、藤原大阪逓信局長らの斡旋により昭和十二年三月十三日、兩組合の正式合同がなつた。新組合の那賀副組合長、藤原組織部長は合同派の先鋒となつたが、赤崎顧問、新妻政治部長、教育出版部長松田喬平、東京支部長挾間信一、横濱支部長岡邊市二、函館支部長松永八の六名を含む合同反對派十二名は新組合の合同決定委員會に際し、除名せられた。従つて十二年三月以後の新日本海員組合の勢力は、それ以前とは變動があるわけである。

次に農民團體としては皇道會の日本農民組合、吉田賢一等の皇國農民同盟等がある。後者の組合員數は不明だが、左程大きなものではあるまいと思はれた。

その他、昭和十年前半には、東電従業員組合（二、〇〇〇人）を擁する東電内の護皇會と愛國同志會とが合流して東電愛國同盟を組織し、右組合を脅かしつゝあつた。また港灣従業員組合より中部港灣労働組合が脱退して、總同盟一ノ宮合同労働組合と共に日本主義に轉向し、日本労働組合全國評議會中部地方評議會の山崎常吉が轉向して大日本忠孝労働組合を組織した。一般に中部地方では、昭和十年末の東三地方の私鐵爭議、即ち豐川鐵道、豐橋電氣軌道、鳳來寺鐵道、渥美電鐵、三信鐵道、田口鐵道等のストライキにみられる如く、監督官が愛國主義的立場より労働組合の組織、既存組合の國家主義化等に關與して世人の注意を惹いた。

昭和十年末には國家主義運動の頽勢を盛り返さんがために、日本主義労働組合戦線統一の企圖がなされた。その肝入りとなつたのは關西の八月會である。これは府議戦を前にした八月二十六日に國家主義戦線の統一を目指して作られたものであつて、豫備陸軍少將村井清規、當時の同志社大學講師野村重臣、皇國農民同盟の吉田賢一が斡旋して結成されたのであつた。月一回の懇談によつて國內政治經濟問題の戦線統一問題等を討議した。その主なる参加者は、前述三名のほか、陸軍少將杉村勇次郎、海軍少佐金子忠吉、出雲大社教副總監千家尊建、立山塾頭大道重次、大日本忠孝労働組合山崎常吉、國社黨名古屋黨務局長伊藤長光、同大阪黨務局長大橋治房、國社黨西

光萬吉、日本産業軍今村等、同山本龍介、同藤岡文六、總聯合今井武吉、末中勘三郎、新日本海員組合赤崎寅吉、同那賀源三郎、同松田喬平、新日本國民同盟大阪支部委員長手島剛毅、日本産業協同團理事鶴野久吾、同幹事和田神力男、洛北青年同盟中川裕等であつた(註一)。

(註一)右のうち、藤岡文六、手島剛毅らは、八月會に慊らず、反八月會派と結んで、後、五月俱樂部を組織したのであつた。

九月二十九日、總聯合が組合會議を脱退するや、愛國労働同盟統一の機運昂まり、この八月會の斡旋によつて、先づ大阪において愛國労働組合會議第一回準備會が開かれた。總聯合、新日本海員組合、大日本労働組合協議會、日本労働同盟、日本産業軍、皇國農民組合等六團體が集まつた。中部地方では、十月五日、中部労働聯盟の主催によつて總聯合を中心に、名古屋に第一回懇談會を催し、十一月十四日、總聯合、中部労働聯盟、中部港灣労働組合、大日本忠孝労働組合、日本革新労働組合等が集まつて、日本主義労働團體中部地方協議會を創立した。

最後に、東京地方では、十月廿六日、總聯合・産業労働俱樂部共同提唱の下に第一回懇談會が開かれ、總聯合、日本産業労働俱樂部、大日本労働組合協議會、東電愛國同盟、汽車會社従業員組合、帝國木材工同志會、大東京大工組合、新日本海員組合等の代表者四十七名が集まつて協議

し、愛國勞働組合統一促進關東地方懇話會を創立し、全國的に連絡をとることゝなつた。そして三地方懇談の後、昭和十一年一月、大阪において愛國勞働組合會議を結成する運びにまでなつたが、更らに議を重ねた結果、三月十五日、東京において愛國勞働組合全國懇話會を創立することに決定したのであつた。（しかしこれは後述の如く、二・二六事件後の戒嚴令のため延期せられた。）

第二節 一・二六事件の経緯

一 事件の勃發

永田事件その他によつて、世人は何となく不安に驅られつゝ、世は昭和十一年（一九三六年）に入つた。劈頭、議會は解散せられ、二月に總選舉が施行せられた。この選舉戦は、現状維持勢力對革新勢力の闘争、兩勢力盛衰のバロメーターとして注目されたのであつたが、結果は既成政黨の大勝、國家主義團體の敗北に終つた、なかでも無產政黨の躍進は相當のもので、社大黨の十八名を筆頭に、全部で二十四名の當選をみた。

一方において、第一師團が日露戦争以來、實に「三十年振り」で滿洲へ派遣を命ぜられることゝなつた。また、一月二十八日から開かれた永田事件の犯人相澤三郎中佐の公判は、眞崎甚三郎大將の證人出廷を中心として意外の紛糾を來たした。

ところへ、二・二六事件は起つた。

二・二六事件は、五・一五事件以上の重大事件である。事件の經過については、三月四日午後

一時卅分に戒嚴司令部當局談として發表せられたものが、比較的簡にして要領を得てゐる。それによれば、「二月二十六日早朝近衛歩兵第三聯隊、歩兵第一聯隊、歩兵第三聯隊、野戰重砲兵第七聯隊等に屬したる將兵約千四百數十名は、（中略）不法出動を敢てし、（中略）先づ首相官邸、齋藤内大臣私邸、渡邊教育總監私邸、牧野前内大臣宿舍（湯河原伊藤屋旅館）、鈴木侍従長官邸、高橋大藏大臣私邸等を襲撃し、齋藤内大臣、渡邊教育總監を殺害し、鈴木侍従長、高橋大藏大臣に重傷を負はしめ（高橋大藏大臣は同日薨去）、次いで此等叛亂軍は、麴町區永田町附近に位置して、その内外の交通を遮斷するに至つた。その目的とするところは趣意書によれば、内外重大危機の際、（中略）大義を正し國體を擁護開顯せんとするにあつた、事件起るや東京警備司令官は直に在京部隊を指揮して治安の維持に任じ同日午後三時第一師管戰時警備を下命せられることゝなつた。この間、甲府、佐倉、高崎、宇都宮等より一部の部隊に上京を命ぜられ……翌廿七日には東京市の一部に戒嚴令の施行を令せられることゝなり、新に戒嚴司令部編成せられ、東京警備司令官香椎中將は戒嚴司令官に補せられ（中略）、帝都治安の恢復に當る事となつた。（中略）廿八日に至り（中略）遂に強行解決を決意せらるゝの止むなきに至つた次第である。（中略）斯くて二十九日朝、先づ麴町區永田町附近の住民に避難を命じ、市内の交通を停止し、叛亂軍に對しては強行解決の途

に出ると共に、他面下士官兵には歸順の餘地を與へて飛行機、戰車等に依り歸順説得のピラ等を撒布し反省を求むることに努めた所、下士官兵は漸次歸順し來るものを生じ、同日午後殆んど全員歸順するに至り、夫々武裝を解除して兵營に隔離收容される事となつた。又、叛亂軍の幹部中、野中四郎は自決し、その他の大部は、衛戍刑務所に收容せられ茲に兵火を交ふことなく、叛亂軍の鎮定を見たわけである。」

叛亂軍に参加した下士官兵の總數は、三月六日午後七時の戒嚴司令部發表によれば、「近衛歩兵第三聯隊五十數名、歩兵第一聯隊四百數十名、歩兵第三聯隊九百數十名、野戰重砲第七聯隊十數名」といふことであり、幹部は、二月二十九日内閣發表によれば、「陸軍大尉香田清貞、同安藤輝三、同野中四郎、同中尉中橋基明、同栗原安秀、同丹生誠忠、同坂井直、陸軍砲兵中尉田中勝」以下歩兵少尉七名である。

三月十日、戒嚴司令部發表第十號によれば、「今次事件に關聯し北一輝、西田税、中村義明、薩摩雄次、龜川哲也、福井幸等百五十名は東京憲兵隊及警視廳に檢舉並に檢束せられ取調中なり」とあるが、民間側は、極く少數の例外を除き、事件前には何事も知らされなかつたやうである。このことは、五・一五事件と全く異なる特徴といひ得るであらう（註一）。

(註一)明倫會總裁田中國重大將は叛亂勃發の翌二十七日午後、九段偕行社に至り、眞崎、荒木兩軍事參議官と會見した。これは事件中における民間愛國團體の唯一の動きともいふべきものであるが、むしろ陸軍大將としての行動とみるべきであらう。

二 事件發生の理由

何故に、かくも未曾有の大事件が起つたのであるか？

これについて、昭和十一年七月七日、陸軍より發表せられた本事件の判決理由書は、左の如く語つてゐる。――

村中孝次、磯部淺一、香田清貞、安藤輝三、栗原安秀、對馬勝雄、中橋基明は夙に世相の頽廢人心の輕兆を慨し、國家の前途に憂心を覺えありしが就中昭和五年のロンドン條約問題、昭和六年の滿洲事變などを契機とする一部識者の警世的意見、軍内に起れる滿洲事變の根本的解決要望の機運などに刺戟せられ(中略)、當に國民生活の作興、國防軍備の充實、國民生活の安定など方に國運の一大飛躍的進展を策せざるべからずの秋に當面しあるものとなし時艱の克服打開に多大の熱意を抱持するに至れり。

なほこの間軍隊教育に従事し兵の身上を通じ農山漁村の窮乏、小商工業者の疲弊を知得して深くこれらに同情し、就中一死報國共に國防の第一線に立つべき兵士の身上に後顧の憂多きものと思惟せり。

……かくて前記の者はこの非常時局に處し（中略）内治、外交共に萎靡して振はず政黨は黨利に墮し……財閥また利慾に汲々として……特にロンドン條約成立の經緯において統帥權干犯の所爲ありと斷じ、かくの如きは畢竟元老、重臣、官僚、軍閥、政黨、財閥など所謂特權階級が國家の本義に悖り大權の尊嚴を輕んずるの致せる所なりとなし 一君萬民たるべき皇國本然の眞姿を顯現せんがため速かにこれら所謂特權階級を打倒して急激に國家を革新する必要あることを痛感するに至れり。

しかしてその急進矯激性が國軍一般將士の堅實中正なる思想と相容れざりしに由り思想傾向相通する歩兵大尉大藏榮一、同菅波三郎、同大岸頼好らの同志と氣脈を通じ、天皇親率の下舉、國一體たるべき皇軍内にいはゆる同志親念を以て横斷的團結を敢てし、またこの前後より前記の者の大部は北輝次郎及び西川税との關係交渉を深め、その思想に共鳴するに至りしが特に北輝次郎著「日本改造法案大綱」たるやその思想根柢において絶對に我が國體と相容れざるもの

あるに拘はらずその雄勁なる文章等に眩惑せられたために素朴純忠に發せる研究思索も漸次獨斷偏狹となり不知不識の間に正邪の辨別を誤り國法を蔑視するに至れり。

しかしてこの間生起したる昭和七年血盟團事件および五・一五事件において深く同憂者等の驟起に刺激せられ益々國家革新の決意を固め（中略）危險思想を抱藏するに至れり。

かくて昭和八年頃より一般同志間の聯絡を計りまたは相互會合を重ね種々意見の交換をなすと共に不穩文書の頒布等各種の措置を講じ同志の獲得に努むるの外一部の者にありては軍隊教育に當りその獨斷的思想信念の下に下士官兵に革新的思想を注入してその指導に努めたり（中略）更に天皇機關説を繞りて起れる國體明徵問題の進展と共にその運動益々熾烈となり時恰も教育總監の更迭あるやこれに關する一部の言を耳にし輕々なる推斷の下に一途に統帥權干犯の事實ありとなし大いに憤激せるが偶々相澤中佐の永田中將殺害事件に會し深くこの舉に感動激發せらるゝ所あり（中略）一部重臣は、（中略）國法を超越する存在なりと臆斷し合法的に之が打倒を企圖すとも到底其の目的を達し得ざるにより宜しく國法を超越し軍の一部を借用し直接行動を以て之等に天誅を加へざるべからずしかもこの行動は現下非常時に處する獨斷的義舉なりと斷じ更に之を契機として國體の明徵、國防の充實、國民生活の安定を庶幾し軍上層部を推進

していはゆる昭和維新の實現を齎さしめることを企圖せるものなり。(下略)

三 叛亂將校のイデオロギー

陸軍省發表による右の判決理由書の一部援用により、二・二六事件關係將校がいかなる過程によつて相結び事を起すに至つたか、略々推察せられるであらう。しかし、これだけでは五・一五事件、血盟團事件と、そのイデオロギーが全然同一であるか否かは明瞭でない。しかも、この點は、二・二六事件の本質を知る上に頗る重要視すべきものである。

二・二六事件背後の思想を知る上に參考となる稀少な資料の一は、雑誌「日本評論」昭和十一年三月號所載「青年將校に物を訊く」といふ一文である。これによれば、いはゆる「青年將校」とは、「軍隊内にあつて、下士官、兵士たちと苦樂を共にしてゐる中隊長以下の若き大尉、中尉、少尉によつて占められてゐる。決して軍部の中央部にあつて華やかに世間的存在を認められてゐるものでない」のである。また青年將校の考へは、左翼と同じではないかといふ質問に對しては「國體觀念から出發してゐるといふ一點で、磁石の兩極ほど違ふだらう」ともいつてゐる。また彼等は支配階級の内容をば「例へば政黨であり、財閥であり、軍閥であり、吏閥である」とし、い

はゆる新官僚に對しても、相當手酷しい批判をしてゐる。

即ち彼等はいふ。——「官僚は長年政黨の壓迫下にあつたので、この時とばかり、軍部擡頭の力を逆用してゐるのだ。……此の新官僚の立場といふものは、假に維新を例とすると、公武合體派だ。……官僚が看板にしてゐる、舊勢力にもよい新勢力にもよかれといふ存在は矛盾である。……國家改造など思ひも寄らない。むしろ明治の當初における官僚階級とその華やかさに對する思慕に過ぎない。……運動を實踐するに當つても、自らその力もないので××に頼らうとしたのだ」と。

次に、右翼團體も、彼等の批判を免れ得ない。——「單純に右翼と青年將校とを結びつけることは迷惑至極である。右翼と云つても、日本精神を賣り物にして、寄生虫的存在が多いと思はれる。だから既成の右翼團體といふものは、革新運動の中心にはなつてゐない現状だ。……右翼小兒病などのいゝ例は、活動寫真によくある近藤勇が酒に酔つて藝者を前に置いて深刻な顔をしてゐる。それに魅力を感じるやうなものだ。最近の各種右翼運動などでよく發見されるやうに、國家を改造すると稱してゐるものが、日夜待合などに出入して、藝者を抱いて紅燈綠酒の下に酔ひしれてゐる實情である。それで何の改造が出来るか、營々として働いてゐる農民や勞働者に中

しわけがない。で、第一に彼等には眞剣さがない。改造の捨石になる信念がない。だから改造だ改造だと云つてゐながら、ひとりであると淋しくなる。同志が集まつては酒を呑み、女を抱き焦燥的寂寥を語魔化さうとしてゐるのだ……と。

最後に神兵隊事件について聞かれて「あれは、ファツショだ。日本の國體觀念を錯覽した歐化思想である。その改造の方法に、國家に擾亂を起して戒嚴令を敷かうとした如き思想は以つての外のことだと思ふ。況んや其の資金を作る爲に株式の投機業者と結托したり、又は關係者がさうした金で遊興してゐたなどに到つては、むしろ苦笑を禁じ得ない」といつてゐる。

四 占據部隊中央部の動靜

事件中、叛軍中央部はいかなる動きを示してゐたか？ いまこれを、前述陸軍省發表判決理由書によつて窺ふことにする。

昭和維新斷行折衝

11 二月廿六日東京方面の襲撃を終へたる部隊は豫め計劃せるところに基き首相官邸、陸相官邸、陸軍省及び警視廳を占位し麴町區西南都地區一帯の交通を制限し、以て香田清貞、村中

孝次、磯部淺一等の陸軍首脳部に對する折衝工作を支援せり。

前記香田清貞、村中孝次、磯部淺一らは丹生誠忠の指揮する部隊と共に二月二十六日午前五時ごろ陸軍大臣川島大將に面接し、香田清貞は一同を代表して蹴起趣意書(註一)を朗讀すると共に各所襲撃の状況を説明したる後維新斷行のため善處を要望し、また眞崎大將、古莊陸軍次官、山下少將、滿井歩兵中佐を招致して事態收拾に善處せられたき旨要請せり。

(註一)この趣旨書は、村中孝次の起草さるところであり、二十六日午前各新聞社に配布してその掲載を要求したものである。

この間同日午前十時ごろ磯部淺一は同邸表玄関において、折柄居合はせたる片倉歩兵少佐に對し拳銃を以て射撃し同人に銃創を負はしめたり。

次いで彼らは折柄來邸したる山下少將より軍部首脳部において起案したる説得文を讀聞け説示せられたるもこれに服せず。

第一師管戰時警備の下命せらるゝや、成るべくこれら部隊は流血の慘を避け説得に依り歸隊せしめむとする警備司令の方針に基き、同二十六日夕より歩兵第一聯隊長小藤大佐の指揮下に入らしめられ、次で同二十七日早朝戒嚴令中一部施行ありし後も前日と同一方針の下に右状態

を持續せしめられたるが、幹部は之を以て一般の情勢好轉せりと判斷し益々其所信を深め、その企圖を斷行推進せむと志すに至れり。

12 同月廿七日朝村中孝次は滿井中佐等の勸告により陸軍省參謀本部の執務の便宜を顧慮し同地を解放し、寧ろこの際各所屬部隊に引揚ぐべき旨同志に提議せるが、一同の容るゝ所とならず、結局首相官邸及び新議事堂附近に部隊を集結することに一決したるを以て村中孝次、香田清貞は、戒嚴司令部に到り司令官香椎中將、參謀長安井少將等に對し蹶起の趣意並に軍上層部に對する要望を述べ部隊の配備を縮少する件を説明し、現警備狀態を暫らく是認せられたく（中略）と力説し、次で村中孝次、磯部淺一等は（中略）香田清貞、栗原安秀、亡野中四郎等と協議し、同日午後四時頃陸相官邸において一部軍事參議官と會見し（中略）要請する所ありしが却て先づ小藤大佐の命に従ひ現位置を撤去するの必要を説示せられ、一應は之を諒解せるも撤去意思を確定するに至らず、而して此等部隊は小藤大佐の指揮に基き同夜より首相、藏相、鐵相、農相、文相、各官邸、料理店幸樂及び山王ホテルに宿營せり。

遂に抗戰と決意

13 二月廿八日朝村中孝次、香田清貞等は近衛歩兵第三聯隊長より中橋基明に對する聯隊命

令として、

戒嚴司令官は勅命を奉じ占據部隊をして速に歩兵第一聯隊兵營附近に集結せしめらるるに
より同中尉はその指揮下にある部隊を率ゐ小藤大佐の指揮に入り行動すべき

旨の電話通達ありたるを承知し（中略）、偶々小藤大佐は戒嚴司令官に對し下されたる占據部隊
を速かに原所屬に復歸せしむべき旨の勅命に基く第一師團命令を受領し、（中略）これと前後し
て村中孝次、香田清貞、對馬勝雄等は午前十時頃第一師團司令部に到り師團長及び參謀長に對
し勅命の下令なきやう斡旋方を陳情し陸相官邸に歸來せるに、山下少將來邸しこれ等首腦者に
對し勅命に基く行動の實施近きこと確實なるを以て善處すべき旨通達する所あり、よつて首腦
一同會議の結果自決の決心をなし、偶々説得に來れる師團長及び小藤大佐に對しても陛下の御
命令に服従すべき旨誓ひたるも（中略）、第一線を指揮しありたる者も情況の不明に基因し或は
流言に惑はされ心境一變し、（中略）同月廿八日夕より首相官邸、新議事堂、陸軍省、山王ホテ
ル等に位置して戰鬪準備をなすに至れり。

抵抗斷念と野中四郎の自決

14 斯くて戒嚴司令官香椎中將は小藤大佐に對し、これ等部隊の指揮權を解除し一般包圍部

隊に對し廿九日朝を期し一齊に占據地區の掃蕩を下合するに至りしが、叛亂幹部の大部は廿九日早朝ラヂオ放送並に撒布せられたるビラ等により勅命に基く行動の既に開始せられたるを確認し且包圍部隊の逐次近迫せるを目撃し抵抗を斷念して下士官兵に對し屯營に歸還を命じ、先に歸營せる數十名を併せて同日午後二時頃までに下士官兵の全部歸順するに至れり、爾後山本又を除き幹部全員陸相官邸に集合、その多くは自決を決意したるも一部の者はその時機に非ざるを主張し、遂に亡野中四郎を除く外一同自決を斷念し、同日夕何れも東京衛戍刑務所に強制收容せられ、山本又はその宗教心より同日午後ごろ逃れて身延山に向ひしが三月四日東京憲兵隊に自首せり。

五 鎮壓の過程

この未曾有の事件に對して、陸軍當局はいかなる措置を以て臨んだか？ 一步誤らば皇軍相撃の不祥事を生じ、且つ全帝都は混亂の巷と化する危険がある。幸ひにして當局の措置宜しきを得たため、日本は空前の不祥事から逃れることゝなつた。この當局の措置の經過をひとへに當局發表の資料をして語らしめてみよう。――

叛亂勃發の當日、岡田首相の即死が傳へられたので、急遽参内した各閣僚は閣議の結果、後藤内相をして總理大臣臨時代理を兼任せしめ、續いて同夜總辭職を決定。陸軍は治安維持のため戰時警備令を施行することとなり、同日午後七時東京警備司令部より左の發表があつた。

二月二十六日午後七時東京警備司令部發表

一、本日午後三時第一師團管下戰時警備を下令せらる

二、戰時警備の目的は兵力を以て重要物件を警備し併はせて一般の治安を維持するにあり

三、目下治安は維持せられあるを以て一般市民は安堵してその業に従事せらるべし

廿六日午後十時東京警備司令官の發表

告諭

今般第一師管に戰時警備を下令せらる、本職はこゝに大命を奉じ軍隊の一部を所要方面に出動せしめたり、今回の出動は帝都の治安を維持し緊要なる物件を擁護する目的に出づるものなり、軍隊出動の目的以上の如し、本職は官民互に相戒め謠言を慎み秩序の維持に協力せられんことを希望す

昭和十一年二月二十六日

他省の發表。――

二十六日午後八時四十五分海軍省發表

一、第一艦隊、第二艦隊は各東京灣及び大阪灣警備のため回航を命ぜられ、それ／＼二十七日入港の豫定

二、横須賀警備戰隊は東京灣警備を命ぜられ二十六日午後芝浦に到着せり

二十六日午後九時十五分内務省發表

先に陸軍省より發表せられたる事件に關しては帝都及び全國各地方とも一般治安は維持せられ人心は動搖なく平靜なり

二十七日午前零時半内務省發表

その後各地より來着せる情報によれば各地方とも何等事故なく平穩なり、帝都に於ては軍隊、憲兵、警察相協力して治安の維持に當りつゝあり、一般に平穩なり、

次いで二十七日午前三時半、東京市全部に亘り戒嚴令を布く旨公表せられ、戒嚴令第九條及び第十四條の規定が適用さるゝことゝなり、戒嚴司令部は九段軍人會館、戒嚴司令官は東京警備司

令官香椎浩平中將、戒嚴參謀長は東京警備參謀長安井藤治少將の兼補となつた。

二十七日午前八時十五分發表戒嚴司令官告諭

今朝昭和十一年勅令第十八及び第十九號（二月二十七日官報公布）を以て東京市の區域に戒嚴令中一部施行を命ぜらる。是蓋し前告諭に示せる如く帝都附近全般の治安を維持し緊急なる物件を掩護すると共に赤系分子等の盲動を未然に防遏するの目的に出づ。茲に本職は人命を奉じ兵力を以て戒嚴地境を警備し地方行政事務及び司法事務の軍事關係あるものを管掌せんとす。地境内官民克くその理を辨へ協力一致深く言動を慎み本職を信倚し以て戒嚴の施行をして遺憾なからしめんことを期すべし。

昭和十一年二月二十七日

戒嚴司令官 香 椎 浩 平

二十七日戒嚴司令官部發表第一號

一、戒嚴司令官隸下の部隊は近衛師團並に第一師團の平時在京部隊の外昨二十六日上京を命ぜられたる近在部隊の一部にしてこれ等の部隊は既に昨二十六日夜半着京せり。

二、目下東京市内は平穩にしてその後變化なし。

二十七日戒嚴司令部發表第二號

二十七日戒嚴司令官より警視總監及び憲兵司令官宛軍事に關係ある警察事務に關し左の如く命ぜらる

- 一、集合及び時勢に妨害ありと認むる新聞雜誌、廣告等の停止
- 二、銃砲彈藥兵器の賣買及び授受禁止
- 三、交通は停止せず
- 四、警戒配備を嚴にす

二十七日午後九時半、ラヂオによる戒嚴司令部の發表

目下東京市中において種々流言が行はれ御心配の向もあるやうであります。が戒嚴司令官は必要の軍隊をもつて嚴重に警備し帝都の治安は確實に維持せられて居りますから徒らに風説に迷はされぬやう御注意下さい。

二十八日午後十時半戒嚴司令部發表第三號

- 一、一昨日二十六日早朝騷擾を起したる數百名の部隊は目下麴町區永田町附近に位置しあるも之に對しては戒嚴司令官に於て適應の措置を講じつゝあり

二、前項部隊以外の戒嚴司令官隷下の軍隊は 陛下の大命を奉じて行動しつゝありて軍紀嚴正
士氣亦旺盛なり

三、東京市内も麴町區永田町附近の小部分以外は平靜なり、又其他の全國各地は何等の變化な
く平穩なり

二十九日には、平和的處理方法つかず、つひに斷乎武力鎮壓が決定せられた。――

二十九日午前六時二十分發表戒嚴司令部告諭第二號

本職は更に戒嚴令第十四條全部を適用し斷乎南部麴町區附近に於て騷擾を起したる叛徒の鎮壓
を期す、然れどもその地域は狭小にして波及大ならざるべきを豫想するを以て官民一般は前告
諭に示す兵力出動の目的を克く理解し特に平靜なるを要す

昭和十一年二月二十九日

戒嚴司令官 香 椎 浩 平

二十九日午前六時二十五分戒嚴司令部發表

二月二十六日朝蹶起せる部隊に對しては各々その固有の所屬に復歸することを各上官よりあら
ゆる手段を盡し誠意を以て再三再四説諭したるも彼等は遂にこれを聴き入るゝに至らず。

そもそも蹶起部隊に對する措置のため時日の遷延を敢て辭せざりし所以のものは若しこれが鎮壓のため強硬手段をとるに於ては流血の慘事或は免るゝ能はず不幸かゝる情勢を招來するに於てはその被彈地域は誠に長くも宮城を始め皇王族邸に及び奉る虞もあり、且その地域内には外國公館の存在するあり、かゝる情勢に導くことは極力これを回避せざるべからざるのみならず、皇軍互に相撃つが如きは皇國精神上誠に忍び得ざるものありしに囚るなり、然れども徒らに時日のみを遷延せしめて、しかも治安維持の確保を見ざるは洵に恐懼に堪へざる所なるを以て上奏の上勅を奉じ現姿勢を撤し各々所屬に復歸すべき命令を昨日傳達したる所、彼等は尙もこれは聽かず遂に勅命に抗するに至れり、事既に此處に至る、遂に已むなく武力を以て事態の強行解決を計るに決せり、右に關し不幸兵火を交ふ場合に於てもその範圍は麴町區永田町附近の一小地域に限定せらるべきを以て一般民衆は徒らに流言蜚語にまどはさるゝことなく勉めてその居所に安定せんことを希望す

二十九日午前七時十分戒嚴司令部發表

萬一流彈あるやも知れず戦闘區附近の市民は次の様御注意下さる。

一、銃聲のする方向に對して掩護物を利用し難を避ける事

二、なるべく低い處を利用する事

三、屋内では銃聲のする反對側にゐる事

四、立退區域 市電三宅坂から赤坂見付、溜池、虎ノ門、櫻田門、警視廳前、三宅坂の結び線は戦闘區域になるから立退きの事、この區域内には國會議事堂、霞ヶ關離宮、閑院宮邸、外務省、警視廳、府立一中等がある

五、立退き隨意區域 半藏門前警視總監官舎から辨慶橋を繋ぐ外廓を歩き黒田侯邸から大倉商業、靈南坂上、虎ノ門を繞る區域

六、その外廓は交通停止區域（以上地域は戒嚴司令部より地圖による發表）

本二十九日麴町區南部附近において多少の危險が起るかも知れぬがその他の地域内は危險の虞なしと判斷される市民は戒嚴令下の軍隊に信頼し沈着冷靜よく司令部の指導に服し特に左の注意を嚴守せよ

一、別に示す時機まで外出を見合せ自宅に在つて特に火災豫防に注意せよ

二、特別に命令のあつた地域の外避難してはならぬ

三、適時正確な情報や指示を「ラヂオ」その他により傳達するを以て流言蜚語に迷はず常に

之等に注意せよ

昭和十一年二月二十九日

戒嚴司令官 香 椎 浩 平

二十九日午前八時十分戒嚴司令部發表

避難を命ぜられたる地區の住民は整然と避難し何等の混亂をも惹起しませんでした。避難を命ぜられたる地區以外の方々も落着いて居て下さい。何等心配ありません。

(現在の地位を動くな) 事によると銃砲聲が聞えるかも知れませんが現在十分手配がしてありますから決して心配ありません。落着いて現在の地位を動かぬ様にして下さい。家の外に出ると流弾が飛んで来るかも知れませんが却つて危険です。寧ろ家の中で厚い壁や大きな家具の後に銃砲聲の聞えて来る方向の反対側に靜かに坐つてゐて下さい。特に火の御用心を願ひます。

戒嚴司令部當局談

二十六日以来部隊を率ゐて永田町附近に占據せる矯激なる一部青年將校は奉勅命令が下つたのにも拘はらずこれに服従せず遂に叛徒となり終つた。これ等青年將校に對しては三日間に亘り、陸軍大臣、戒嚴司令官、師團長、聯隊長其他陸軍首腦者同僚等より晝夜を問はず熱誠を以て原

所屬に復歸する様説得したが、一應これに聽従するが如き形勢を示したることも數回に及んだが忽ち前言を翻す等のことあり遂に奉勅命令に叛旗を翻してしまつたのは、かへすがへすも遺憾に堪へない。併し彼等に率ゐられてゐる兵士等は何も知らぬものが多いのは勿論であつて唯將校の命令のまに／＼これに率ゐられて出て行つたものが大部分であつて彼等を叛徒と見ることは誠に忍び得ないものがあるので今日に至るまでそれ等の兵に對しては上官即ち師團長聯隊長などより順逆の理を説き説得大いに努め場所に依ては一兵に對しても馬を降りて説くなど極力努力したものである。又可なり各所に散在もしてゐるので昨夜來順逆の理を明かにした説得書ビラ等を撒布し又今朝來は飛行機を以てこれを撒布してゐる(註一)。その他廣告氣球の利用(註二)電話の利用等凡ゆる手段を講じてをりこれがため昨夜より今曉にかけ下士官以下百數名の歸順者があつたが午前九時頃更に山王ホテル附近に於て約百五十名、赤坂見付附近において約二十名、午前九時二十分頃には赤坂溜池方面において約百二十名の歸順者があつた。この分で行けば今後とも續々歸順を見るものと思はれる。幸ひにして只今迄まだ兵火を交ふるに至つて居らぬ。

(註一)飛行機から撒かれたビラは、左の如き内容のものである。――

下士官兵ニ告グ

一、今カラデモ遅クナイカラ原隊へ歸レ

二、抵抗スル者ハ全部逆賊デアルカラ射殺スル

三、オ前達ノ父母兄弟ハ國賊トナルノデ皆泣イテオルゾ

二月二十九日

戒嚴司令部

(註二)このアドバルーンは、飛行會館屋上から揚げられ、左の大文字があつた。――

勅命下る、軍旗に手向ふな

午前十時五十分嚴戒司令部發表

一、第一師團方面に於いては叛亂軍に對し戰車を派遣して兵士説得のビラを撒布せり

二、飛行機を以てする兵士説得のビラの撒布は依然繼續しつゝあり

三、今朝避難を命ぜられ退去したる者の財産は戒嚴部隊の進出に伴ひ憲兵及び警察官をして逐次保護に任ぜしめつゝあり

四、幸ひにして唯今に至るまで兵火を交へをらず

この日、有名なる「兵に告ぐ」の説諭が發せられた。この慈愛をこめた名文は、これを放送するアナウンサーも涙、聞くものも皆涙であつた。この「兵に告ぐ」は、事件の和平解決に偉大な

力があつたといはれてゐる。その全内容左の如し。――

兵に告ぐ

遂に勅命が發せられたのである、既に天皇陛下の御命令が發せられたのである、お前達は上官の命を正しいものと信じて絶對服従をして誠心誠意活動して來たのであらうが既に天皇陛下の御命令によつてお前達は皆原隊に復歸せよと仰せられたのである、此上お前達が飽迄も抵抗したならば其は勅命に反抗することゝなり逆賊とならなければならない、正しいことをして居ると信じてゐたのにそれが間違つて居つたと知つたならば徒らに今迄の行懸りや義理上から何時までも反抗的態度を取つて天皇陛下に背き奉り逆賊としての汚名を永久に受けるやうなことがあつてはならない、今からでも決して遅くはないから直に抵抗をやめて軍旗の下に復歸するやうにせよ、さうしたなら今迄の罪も許されるのである、お前達の父兄は勿論のこと國民全體もそれを心から祈つて居るのである、速に現在の位置を捨て、歸つて來い

戒嚴司令官 香 椎 浩 平

午前十時十分戒嚴司令部發表

一、午前十時稍前、參謀本部附近に於て機關銃を有する下士官以下約三十名歸順しました

更に各方面に於て歸順の徵候があります

二、幸にしてたゞ今に至るまで兵火を交へない

戒嚴司令部發表

午前十一時五十分首相官邸及び山王ホテルにある極く小部隊を除き叛亂部隊の下士官兵の殆んど全部は大なる抵抗をなさずして歸順したるを以て間もなく叛亂の鎮靜を見るに至るべし

戒嚴司令部發表

叛亂部隊は午後二時頃を以てその全部の歸順を終りこゝに全く鎮定を見るに至れり

右は、二十九日午後三時頃ラヂオを以て放送せられた。

二十九日午後三時二十分戒嚴司令部發表

一、避難された方々は只今より憲兵、警察官の指示を受け自宅にお歸り下さい

二、環狀線の交通制限は午後四時十分以後解除します

以上の如き經過を以て、二月二十六日より四日間に亘り帝都の空を掩つてゐた暗雲は霽れ渡つたのであつた。

第三節 二・二六事件の處置

一 直接關係者の處分

吾が國空然の大不詳事たる二・二六事件の處置は、先づ二月二十八日、叛亂將校十五名の本官罷免に始まる。次ぎに同二十九日には免官の追加があり、合計二十名の將校に對して位返上、勳等功級記章褫奪があつた。事變解決後、二十九日川島陸相は聲明を發して陳謝の意を表した。三月一日午後四時戒嚴司令部發表によれば、「一、叛亂軍の將校中、野中四郎は自決し、爾餘の大部分並に叛亂に参加しありたる村中孝次、磯部淺一及び澁川善助は衛戍刑務所に收容せられたり、二、歸順せる下士官以下はそれ／＼兵營に收容せられあり」とあつたが、三月四日、特設軍法會議が設置せられた。右のうち、叛亂参加兵は三月十八日に取調を終はり、十九日午後五時二十分陸軍省發表によれば、「叛亂軍に参加したる兵千三百六十名は各々所屬部隊に留置し軍法會議檢察官において取計中なりしが、昨十八日一應の取調を了り千三百二十數名は留置を解除せられたり。」而して、留置を解除せられた兵は、その後何れも無罪となつたのであつた。

一方、叛亂將校らの取調は、七月上旬に終り、七月五日、判決言渡があり、七日處刑及びその理由書が陸軍省より發表せられた。それによれば、「直接事件に参加したる將校一名、元將校二十名(内二名は事件直後自決死亡す)見習醫官三名、下士官二名、元准士官八十九名、兵千三百五十八名、常人十名中起訴せられたる者は將校一名、元將校十八名、下士官二名、元准士官七十三名、兵十九名、常人十名」となつてゐる。公判は、永田事件の如く公開には到らなかつた。言渡は、左の如しである。――

將 校

禁錮四年

陸軍歩兵少尉 今 泉 義 道

元 將 校

死刑(首魁) 元陸軍歩兵大尉 香 田 清 貞

死刑(首魁) 同 安 藤 輝 三

死刑(首魁) 元陸軍歩兵中尉 栗 原 安 秀

死刑(謀議參與又は群衆指揮) 同 竹 脇 繼 夫

死刑(同) 同 對 馬 勝 雄

第六章 二・二六事件を中心として

三一八

死刑(同)	同	中橋基明
死刑(同)	同	丹生忠誠
死刑(同)	同	坂井直
死刑(同)	元陸軍砲兵中尉	田中勝
死刑(同)	元陸軍工兵少尉	中島莞爾
死刑(同)	元陸軍砲兵少尉	安田優
死刑(同)	元陸軍歩兵少尉	高橋太郎
死刑(同)	同	林八郎
死刑(首魁)	常人	村中孝次
死刑(首魁)		磯部浅一
死刑(謀議參與又は衆群指揮)		遊川善助
死刑(同)		水上源一

元將校

無期禁錮(謀議參與又は群衆指揮)

元陸軍歩兵少尉

麥屋清濟

無期禁錮()

同

同

常盤稔

無期禁錮()

同

同

鈴木金次郎

無期禁錮()

同

同

清原康平

無期禁錮()

同

同

池田俊彦

元准士官、元下士官

禁錮十五年

元陸軍歩兵軍曹

宇治野時參

禁錮十三年

同

伍長

長瀬一

禁錮八年

同

曹長

渡邊清作

禁錮八年

同

大江昭雄

禁錮七年

同

尾島健次郎

禁錮七年

同

軍曹

蛭田正夫

禁錮七年

同

青木銀次

禁錮五年

同

小原竹次郎

第六章 二・二六事件を中心として

三二〇

禁錮 五年

同

伍長

北 島

弘

禁錮 四年

同

曹長

立 石 利 三 郎

禁錮 三年

同

特務曹長

齋 藤 一 郎

禁錮 三年

同

軍曹

前 田 仲 吉

禁錮 三年

同

伍長

林 武

禁錮 二年

同

曹長

永 田 露

ほか三名

禁錮 二年(三年間執行猶豫)

同

特務曹長

桑 原 雄 三 郎

ほか十四名

禁錮 一年六月(三年間執行猶豫)

同

曹長

堀 宗 一

ほか十一名

兵

禁錮 二年(三年間執行猶豫)

陸軍歩兵上等兵

中 島 與 兵 衛

禁錮 二年(三年間執行猶豫)

同 一等兵

坪 井 敬 治

禁錮一年六月(二年間執行猶豫)

常 人

同 上等兵 倉 友 音 吉

禁錮十五年

宮田晃、中島清治、黒田昶、錦引正三、黒澤鶴一

禁錮 十年

山 本 又

右の死刑十七名の中、十五名(村中孝次、磯部淺一を除く)は七月十二日に死刑を執行せられ、當日午後六時、陸軍省よりその旨發表があつた。

二 副次的關係者の處分

しかし、以上を以て二・二六事件關係者の處分を終つたわけではない。七月二十一日には、左記の六名に對し追加處分があり、同三十一日午後九時陸軍省からその旨發表せられた。

罪名及び處罰

一、反亂者を利す

所屬歩兵第一聯隊歩兵大尉 山 口 一 太 郎

無期禁錮

第六章 二・二六事件を中心として

三三三

所屬歩兵第三聯隊歩兵中尉

柳 下 良 二

禁錮四年

二、司令官軍隊を率ゐ故なく配置の地を離る

所屬歩兵第三聯隊歩兵中尉

新 井 勲

禁錮六年

三、叛亂豫備

所屬歩兵第六聯隊一等主計

鈴 木 五 郎

禁錮六年

所屬豐橋陸軍歩兵教導學校歩兵中尉

井 上 辰 雄

所屬歩兵第十八聯隊歩兵中尉

鹽 田 淑 夫

各禁錮四年

その後、同年十一月十九日陸軍當局談により「起訴中の參謀本部附陸軍大尉田中彌は十月十八日正午ごろ自宅において自決」せる旨發表があつた。

また、十二月十四日、陸軍省は、久原房之助に關する處分につき左の如く發表した。――

東京陸軍軍法會議においては豫て久原房之助を二・二六事件關係叛亂幫助の容疑を以て豫審に附し取調中なりしがその證據十分ならず、よつて本日同人を不起訴處分として別に犯人藏匿の嫌疑をもつて管轄裁判所検事局に事件を送致することとせり

かくの如き事由により久原房之助は東京地方裁判所検事局に移送され、取調の結果龜川哲也藏匿の罪條明かとなり起訴豫審に附せられたが、公判の結果、昭和十三年五月六日、無罪となつた。

二・二六事件關係の處斷はその後なほ續き、事件の翌年即ち昭和十二年一月十八日、左の如き判決あり、翌十九日、その旨陸軍省より發表せられた。

軍人關係

禁鋼三年	陸軍歩兵中佐	滿井佐吉
禁鋼五年	同 大尉	菅波三郎
禁鋼四年	同 大尉	大藏榮一
禁鋼四年	同 大尉	末松太平
禁鋼三年	同 中尉	志村陸城
禁鋼一年六月	同 中尉	志岐孝人

禁鋼五年

豫備少將

齋・藤 瀏

常人關係

禁鋼二年

越 村 捨次郎

禁鋼三年

福 井 幸

禁鋼三年

町 田 專 藏

禁鋼一年六月

宮 本 正 之

禁鋼二年(執行猶豫四年)

加 藤 春 海

禁鋼二年六月(執行猶豫四年)

佐 藤 正 三

禁鋼

(同)

宮 本 誠 三

禁鋼

(同)

松 田 省 吾

同昭和十二年八月十四日、左記四名に對し第四次の判決言渡しあり、その旨、同日午後六時四十五分、陸軍省より發表せられた。――

死刑(首魁)

北 輝 次 郎

死刑(首魁)

西 田 税

無期禁錮（謀議參與）

龜川哲也

禁錮三年（但未決勾留日數二百五十日算入）（諸般の職務に従事）

中橋照夫

なほ八月十九日午前十一時五十分陸軍省發表によれば、村中孝次、磯部淺一、北輝次郎、西田税の四名は同日死刑を執行せられた。

最後に幫助を以て問擬せられてゐた眞崎甚三郎大將は、昭和十二年九月二十五日、證據不十分の故を以て無罪の旨、陸軍省より發表があつた。

三 廣田内閣の成立難と事件に關聯する肅軍人事

事件鎮定の日、陸相川島義之大將は、聲明を發表して「この度輦轂の下において軍内より未曾有の叛亂を惹起して軍秩を紊り、深く宸襟を惱まし奉りたるのみならず、安寧を害し遂に戒嚴の布告を見る等國內國外に對し著しく國家及び國軍の名聲を汚し、昭和聖代の歴史に拭ふべからざる汚辱を貼すに至りたるは寔に恐懼痛恨に堪へざる所にして、是れ全く本職不徳の致す所其の責の極めて重大なるを痛感しあり。……軍は事件を處理して一刻も早く治安を恢復し、軍秩を確定する爲苟くも遺漏なからんことを期したり。……斯くして治安の確立漸く其の緒に就きたるも其

の完全なる恢復と肅軍とは今後なほ幾多の努力に待たざるべからず、軍は本事件を契機として更始一新眞に團結鞏固なる國軍の眞價を充實し以て畏き敬慮に酬ひ奉り國家國民の信倚に副はんことを期す」といつた。

三月五日、後繼内閣組織の大命は外相廣田弘毅に下つた。川島陸相は後任陸相として寺内壽一大將を推したが、新内閣の對時局觀及び閣僚の顔振れにつき軍部に不満あり、一時、危く廣田内閣は流産に終らんとした。新内閣に對する軍の要望は、六日の寺内大將談にある如く、「内外に互り眞に時弊の根本的刷新、國防充實等積極的強力政策を遂行せんとするの氣魄とその實行力とを有することが絶対に必要であつて、依然として自由主義的色彩を帶び現狀維持又は消極政策に依り妥協退嬰を事とする如きものであつてはならない」といふ點にあつた。また閣僚については同じく寺内大將談によれば、「一、吉田茂氏を外相に起用せんとすること一、下村宏氏に入閣を交渉したこと一、川崎卓吉氏の如き黨人を内相に据ゑんとすること一、小原法相の留任一、中島知久平氏の入閣」の諸點にあり、結局、吉田、小原、下村の入閣を取止め、川崎の椅子變更によつて九日、漸く廣田内閣は成立したのであつた。

一方、陸軍は、擧げて未曾有の不詳事件に對する責任を痛感し、三月六日、林銑十郎大將、眞

崎甚三郎大將、阿部信行大將、荒木貞夫大將の四軍事參議官が待命、續いて十日、豫備役となつた。軍の先輩たる關東軍司令官南次郎大將も、三月六日引退辭職し、二十三日侍從武官長本庄繁大將も更迭となつり、第七師團長宇佐美興屋中將がその後任となつた。

次ぎに四月二日、戒嚴司令官香椎浩平も事件の責任をとつて、岩越恒一中將と交迭(註一)。七月十日には叛亂責任者として、兼ねて待命中の元東京警備司令官香椎中將、元第一師團長堀丈夫中將、元近衛師團長橋本虎之助中將、元憲兵司令官岩佐祿郎中將、元豐橋教導學校長中井武三少將、元歩二旅團長工藤義雄少將、元近歩二旅團長大島陸太郎少將、元野戰重砲三旅長石田保道少將、元一步旅長佐藤正三郎少將、元歩一聯隊長小藤惠大佐、元歩三聯隊長澁谷三郎大佐、元野戰重砲七聯隊長眞井鶴吉砲兵大佐、元近歩三聯隊長園山光藏大佐が豫備役に編入せられ、歩一大隊長北郷格郎少佐、歩三大隊長本江政一少佐、同野津敏少佐、近歩三大隊長稻見克己少佐、野重七大隊長下遠甲太郎少佐、歩三大隊長伊集院兼信少佐が各中佐に進級と同時に待命となつた。

(註一)戒嚴令は七月十八日より解除となつた。

右の直接責任者の處分の後、寺内陸相は、八月一日、廣汎なる大異動を發令した。世に肅軍人事と稱せられるものであつて、移動者は實に三千餘名に上つた。

この肅軍人事において、渡邊教育總監の後を受けた西義一大將が病氣のため豫備となつて杉山元中將が後任となり、第四師團長建川美次中將、陸軍大學校長小畑敏郎中將、技術本部長岸本綾夫中將（但し大將に進級）等の惜しむべき諸將星が退役となつた。

直接の肅軍人事ではないが、昭和十一年四月二十二日、造兵廠長官植村東彦中將が、瀆職事件にて待命、七月八日退役となり、續いて同廠勅任技師西山文雄が收賄事件で檢舉されたのも、一種の肅軍といへるであらう。なほ、永田事件の相澤中佐が五月七日死刑の判決を受け、六月三十日、上告棄却を申渡され七月三日死刑を執行せられたのも、この頃、出来事として記憶さるべきであらう。

最後に、肅軍と關聯して、昭和十一年五月十八日官報において、陸海軍大臣官制を變更し、大臣には現役大中將、次官には現役中少將に限ることとした旨發表せられ、八月二十五日には在郷軍人會の公的機關化が發令され、越えて昭和十二年三月二十二日には、軍人軍屬の意見發表につき所屬長官、監督官廳長官、所屬隊長等の許可を要する旨制定せられた。

かくの如く、二・二六事件の跡仕末として軍が肅正を急ぎつゝあつた反面、文官側においても、警視總監小栗一雄以下の責任者を處分すると共に、樞密院議長一木喜徳郎男の辭任を見、三月十

三日、樞府副議長平沼騏一郎男の昇格が行はれた。また二・二六事件に倒れた齋藤内大臣の後任は宮内大臣湯淺倉平、宮内大臣の後任は駐英大使松平恒雄と決定した。

二・二六事件は、財閥にも非常なるショックを與へた。全産聯はいち早く轉向態度を明かにし、諸財閥もその轉向工作を急いだことは、世人の記憶に新たなるところであらう。

第七章 二・二六事件後の國家主義陣營

第一節 統一運動の二潮流

一 事件直後の彈壓

二・二六事件―國家主義主義者のいはゆる「東京事件」は、國家主義陣營に異常なる衝動を與へた。と同時に、政府の國家主義に對する態度は、空前の峻烈さであり、諸團體には大量的手入が行はれ、また戒嚴令の施行により一切の集會が禁止せられた。これがために國家主義團體は、手も足も出なかつた。後述、全愛國團體統一聯盟が、五月二十九日の宣言において、「所謂東京事件ノ勃發以來、愛國運動ノ陣營ハ寂トシテ聲ナク四邊亦戰キテ應フル者ナシ」といつてゐるが、事實は正にその通りであつたのである。事件に對する批判の如きも、判決のあつた頃漸くその感想が發表されたぐらゐであり（例へば雜誌「維新」八月號參照）、これについては、彼等は一齊に沈黙を餘儀なくされたのである。

二・二六事件によつて過去の運動に對する反省、將來の方針に對する三慮を餘儀なくせられた國家主義陣營においては、運動方針としては、大體において、觀念的急進的なる非合法主義を排するの風が強まつた。また從來の國家主義陣營の根本的缺陷が各團體の割據主義にあり、將來、國家主義運動が延びるには、何を措いても愛國戰線の統一が必要であると觀念せらるゝに至つた。

しかしながら、以上の如き決論に立ち至つた國家主義陣營も、その方法論に至つては、矢張り意見の分るゝを如何ともし得なかつた。第一點、非合法的急進主義を排するについても、その間自ら緩急の差あり、それは、この陣營の傳統的對立たる議會主義對非議會主義（議會利用主義をも含む）の對峙となつた。この對立は、第二點たる統一運動の方法論にも反映し、議會主義派は、議會進出に便宜なる單一的愛國政黨の結成を急ぎ、そのために最も手取早き方法たる既存愛國團體の拙速的合同を先づ第一に企圖する。しかるに非議會主義派は、眞の戰線統一には基礎組織たる大衆的勞働者農民團體の實力的結集を不可避的前提條件とし、そのためには新たに勞農大衆の把握に第一の努力を傾注する。而して、かゝる勞農大衆組織の固き結成なりたる上、これを基礎として新鮮潑刺たる新國家主義政黨を生み出さんとするものであつた（註一）。

（註一）この點について、三六俱樂部（後に時局協議會に發展）の機關紙「三六情報」（昭和十一年六月號）

は、當時の「民間愛國運動」を左の如く分けてゐる。――

第一種 從來全國に分散せる愛國諸團體を糾合して、一の組織内に包容せしめ、之を以て直に一大愛國

政黨を樹立せんとする運動

第二種 終局の目的は同一なるも、夫れが爲には、先づ左の條件を具備すべく、各自内容を整頓せんと

する運動

(A)

既成政黨に代るべき愛國政黨は既成政黨の如く、金力と権力と利害情實とに依つて糾合された團體であつてはならない。其構成分子は、恰も勞働組合内に於けるが如く、主義に基く各員の據金に依つて組織されて、自治の訓練を経たものでなければならぬ。

(B)

日本主義に透徹し、利害に依つて主義を枉げざる純眞なる人士が、前條件を充たすべく、全國民内、各層、各方面に中堅となつて各部に自活力ある基礎組織を先づ完成せしめねばならない。此基礎組織完成の範圍が大なれば大なる程、又其本質が堅確なれば堅確なる程、之れ等の組織の上に出来上る愛國政黨は立派なものとなるであらう。即ち從來の如く先づ政黨を作りて然る後に余力を以て、其擴大を計るの策は、新政黨をして從來の如く、終に金權下に腐敗せしむる結果に陥るべきことを豫め深く認識し置かなければならない。

(C)

現在にあつては、前者の傾向を代表するものは政治革新協議會――日本革新黨であり、後者の代表者は愛國勞働農民同志會――時局協議會である。而して、後者に近く身を置きつゝも兩派の聯繫

妥協に苦心せるが橋本欣五郎大佐の大日本青年黨であり、これらと別個の存在を主張し、殊に時局協議會を以て「ファツシヨの陰謀」なりとして深く排撃しつゝあるのが、關西の大和聯盟である。

今より以上の各團體の結成及び對立の跡を尋ねんとするのであるが、毎度いふ如く、國民主義團體の離合集散は甚だ複雑であつて、個々の團體が具體的に何づれの系統に屬するかを確定することは甚だ困難であり、時に同一團體が主義の相反する兩派に所屬したり、また同一團體の幹部が議會主義派を青年革新分子が非議會主義派を支持するといふ如く一見矛盾する如き現象を呈することがあるので、外見よりの觀察は、ある程度の不徹底をば免れないといはねばならぬ。

二 二月會の統一運動

二・二六事件の跡を受けた國家主義戰線統一の第一聲は、先づ二月會によつて挙げられた。二月會とは、二・二六事件直後の三月上旬に、勤勞日本黨の松谷與次郎、愛國政治同盟の小池四郎、國民協會の赤松克麿、元神武會勞働部長の松延繁次、大日本國家社會黨の石川準十郎、皇道會の平野力三、大亞細亞協會の島中雄三に、宮崎龍介、山元龜次郎らの個人が加はつて結成せられた

ものであつて、先づこの協同戰線體より進んで愛國主義新政黨樹立に至らんとするものであつた。その根本的立場は議會進出論——即ち議會主義である。それは、二・二六事件の衝擊によることは勿論であるが、直接的には二月の總選舉における愛國團體の敗北、社大黨の驚異的進出に刺戟されたものである。二月會の中合はせには、「既成の愛國諸團體を清算統合すると共に、國民のあらゆる階層に分散せる革新的諸勢力を集結して、速かに一個強力なる國民運動の主體を結成すること」といつてゐる。が、その主たる目標は、この中合はせの前段、即ち主として既成愛國團體の勢力の糾合・統一にあつたのである。

何づれにせよ、二月會は、二・二六事件直後の戰線統一への先頭を切つたものとして注目すべき動きであつた。

二月會の愛國戰線統一の目標そのものは正しかつたといへる。しかしながら、その方法論において、廣く國家主義團體の賛同を得る能はず、一時その参加を喧傳せられた中野正剛の東方會も参加を見合はせ、明倫會もまた同様。日本主義勞農團體でも多くは参加を躊躇するに至り、最初的主唱者の意圖に反して、その工作は成功するに至らなかつたやうにみえた。たゞ、從來の愛國青年團體の政治的合従促進に役立つかに思へたが、これら青年分子の間にも、二月會の意圖する

如き議會進出中心の新政黨結成を喜ばざる風があつた。

中野正剛は、二・二六事件直後の三月に、東方會の再組織によつて旗揚げした人物である。明治十九年福岡縣に生れ、早くから民政黨内の青年闘士として鳴つてゐた。もし彼にして、今少し若きジェネレーションに屬してゐたとすれば、社大黨あたりへ來たるべき人間であつたかと思はれる。一種獨特の熱辯を有し、筆者など一高時代には彼の演説を喜んで聞いたものである。昭和六年十二月、かの協力内閣運動により風見章らと共に安達謙藏を擁し、民政黨を脱して、國民同盟を組織した。始めは黒色の制服なんかを着けて大いにファシスト振りを發揮してゐたやうである。ところが後に、國民同盟も行き詰つたので、彼はこれを脱し東方會によつて新たな一歩を踏みだすことゝなつた。東方會叢書第一輯なる彼の著「國家改造計劃綱領」によれば、「東方會は筆者(中野)が嘗て東方時論を出せし時、之を中心として設けられたる會合である。」東方時論は、大正五年(一九一六年)の創刊に係る故、東方會そのものゝ歴史は相當に古いものといはねばならぬ。而して「爾來縷々として一脈を傳へし東方會を再興して舊盟友と新知己とを合す。これが今日の東方會であつて、本體は一個の文化及び時勢研究の團體である。……東方會は何處までも文化團體であつて、政治及び社會運動に關與しない。文武官民中の志を有する者、相會して正義廉恥の

交をなすものである。」故にもし政治團體の必要が起れば他の組織によるべし、即ち「東方會の研究は四方に發散して、順次に天下の共鳴を得ば、或は東方會と別個に國民運動の指標たるべき東方改造同盟を組織するかも知れぬ。」と。

しかしながら、現在の東方會は、立派な政黨である（廣義における）。それは、既成政黨とは異なることを標榜してゐる。だが、中野正剛その人の主觀的善意に拘はらず、矢張りその團體としての政治行動は、その本質において既成政黨に近いものといはねばなるまいと思はれる。但し極めて活潑な政黨であつて、大石大等、農民運動のヴェテランを包容し、大衆組織に根を張るべく苦心してゐる。中野正剛はあるひは議會登院問題と關聯して議員を辭したり、あるひは社大黨との合同を策したり、あるひは院内團體としての東方會を解消したり、種々苦心をしてゐるやうであるが。その邊に、政黨としての東方會の悩みが存するのである。

中野正剛は、曾て國民同盟時代、社會國民黨（ソシアル・ナシヨナリズム）なるものを唱へた。社會國民黨には、彼の著「轉換日本の動向」によれば、「廣く人類社會を對象とし、之に奉仕し、之を指導し、之を救済し、之を統制するに國民黨を以てせんとするものであつて、終局は世界國家の構成に至つて、その理想を實現し得るのである。……ソシアル・ナシヨナリズムは、ステ

ート・ソーシアリズムとは趣を異にする。我國は特殊の歴史と特殊の環境に即し、統制せられたる國民主義をもつて、聰明に潤達に有効に、國際社會に働きかけねばならぬ。國家社會主義により義爾たる一小島國を箱庭的に統制しても、日本の前途は開拓されない。社會國民主義は國家社會主義よりは遙かに多く國際に關心し、遙かに根強く國民主義に立脚するものである。國家を基礎とする社會主義ではなく、社會を對象とする國民主義である」と。

東方會は、最初、二月會に参加するかに傳へられた。しかし、二月會の性質と東方會の内情とは、これを實現せしめなかつた。八月下旬、農民團體統一座談會を企圖したが、所屬農民團體（土佐農民總組合、山形縣置賜農民同盟）のほか、参加者をみなかつた。

三 全愛國團體統一聯盟の成立

東京の二月會に對して、大阪方面においては、五月俱樂部（註一）なるものが生れた。これは、前年（昭和十年）八月に生れた協同戰線體八月會内の不平派たる愛國政治同盟の藤岡文六、新日本國民同盟の手島剛毅等が反八月會派たる大日本生産黨の吉田益吉、兵庫縣愛國社の村田龍藏らと結んで組織せられたものであり、従つて八月會とは反對の立場にあるものである。五月俱樂部

結成の目的は、即時愛國戦線の統一により一大愛國政黨の結成に進むべしといふのであつた。即ち五月十九日、前述の四名が主たる幹旋者となり、國民協會の松浦正一、みこと會、新日本海員組合等々が糾合せられて創立せられたものである。

(註一)單に五月會と呼んでゐるものもあるが、五月俱樂部の方が正しい。

五月俱樂部が結成せられてより十日、五月二十九日に、この五月俱樂部を中心として、近畿地方各府縣の日本主義政治經濟思想團體約七十團體、百七十名の代表が參集して、全日本愛國政黨合同促進會を開催した。そして愛國政黨樹立のために、こゝにこれらの團體は、「全愛國團體統一聯盟」なる新組織を設立することとなつた。

全愛國團體統一聯盟のイデオロギーは、「社會民主主義に對抗、これを排撃する日本主義」と規定され、また黨内に日本主義勞農組合を組織することゝなつた。「廣田内閣檢討に關する件」においては、特別議會で庶政一新を實現せざりしことを責むる建白書を廣田首相その他に發送することゝし、宣言、綱領、及び二つの決議文(第一は社會民主主義に關し、第二は新政黨に關する)を可決した。なほ幹部として、手島剛毅、藤原俊雄、宮本純一、村田村治、藤岡文六、吉田益三の六名を選んだ。

宣 言

皇紀二千五百九十六年二月二十六日、所謂東京事件ノ勃發以來、愛國運動ノ陣營ハ寂トシテ聲ナク四邊亦戰キテ應フル者ナシ、時當ニ初夏茲ニ近畿ノ同志相會シ天業翼賛ノ大旗ヲ翳シテ大會ヲ舉行シ左ノ如ク宣言ス

嵐ノ中ニ大命ヲ拜受セシ廣田内閣ハ再度ニ亘リ時局ヲ拾收シ叡慮ヲ安ジ奉リ累積セル諸弊ヲ革新シテ億兆安土ノ決意アリト宇内ニ聲明セシモ未ダ何等實績ノ觀ルヘキモノ無キハ前途誠ニ憂慮ニ堪ヘザルモノアリ、此間ニ乗ジ外、國際情勢ハ日ヲ追フテ複雑化シ内ニ財閥、官僚、政黨、自由主義者ノ聯合軍ハ勢力ヲ盛返サント狂奔ス、皇國ノ爲甚ダコレヲ憂フ

今夕茲ニ同志會合シ愛國陣營ノ現状ヲ靜カニ顧ミテ三省ス、今吾等ハ驟然起チテ大義ノモトニ結合シ維新勢力ヲ集結シ更ニ全國ニ檄シテ全面的聯合軍ノ結成ヲナス、斯クシテ吾等ハ救國濟民ノ大業ヲ翼賛スル大旗ヲ死守センコトヲ敢テ宣言ス

昭和十一年五月二十九日

全愛國團體統一聯盟

一、吾等は合法的國民運動を以て金權支配を絶滅し肇國の本義に基く皇國本來の使命遂行を期す

一、吾等は自由、民主、資本主義等の亡國的思想を排し然して大日本主義に基く統制經濟の實現を圖り國民生活の確立を期す

一、吾等は皇道世界宣布を期し廣義國防の見地に立脚し以て軍民一致國體顯現を期す

一、吾等は以上三項目を實現し昭和維新の大業斷行の一日も速かならん事を期す爲小異を捨て、大同につき一大愛國政黨合同に向つて勇往邁進せん事を期す

決議（民主々義ニ關スル）

肇國ノ本義ニ基ク一君萬民ノ國是遂行ノ爲メニ社會民主々義ノ存在ハ斷ジテ許スカラズ吾等ハ資本主義ノ打倒ト共ニ之レヲ排撃シ以テ其ノ絶滅ヲ期シ一切ノ機會ニ於テ之レガ輿論ヲ喚起シ果敢ナル行動ヲ期ス

決議（新政黨ニ關スル）

全愛國團體統一聯盟

吾等ハ綱領第四項ニ基キ來ル六月二十日舉行ノ聯盟大會ヲ契機トシテ愈々維新政黨準備會大會

ニマデ發展ス可キモトス

全愛國團體統一聯盟

幹 事 會

四 維新政黨準備會の結成

この五月の大會の後、全愛國團體統一聯盟は、六月二十日、「統一聯盟加盟團體並に全國日本主義各團體及個人」を招集して、「統一聯盟大會」並に「維新政黨準備會」の結成大會を開催した。集まるもの、大日本生産黨關西本部、新日本國民同盟近畿地方協議會、愛國政治同盟、國民協會、皇道會、國體擁護聯合會等々の關西、中部地方各支部、その他多數の國民主義的政治・經濟・思想團體があつた。例によつて、綱領、宣言を可決すると共に、常任委員として、手島剛毅、藤岡文六、宮本純一、村田村治、藤原俊雄の五名が推薦せられた。綱領は、前掲統一運動のそれと大同小異である。――

維新政黨準備會綱領

一、吾等は合法的國民運動に依り國體政治に背反する金權政治を倒滅し皇道政治の確立を期す。

一、吾等は資本主義、社會民主主義、共產主義並にファシズムを排撃し大日本主義に依る一君萬民經濟組織の確立を期す。

二、吾等は皇道に依る國民信念の統一を激成し以て皇道の世界宣布を期す。

一、吾等は以上の三綱領を速かに實現せむことの熱意を以て結合し尊皇絶對、生命奉還の信念に基く一大維新政黨の結成を期す。

次ぎに、維新政黨準備會の宣言は、左の如くであつた。――

宣　　言

廣田内閣成立せられて茲に半歳、その施設方針を閲するに何ら經綸の片鱗だも認め能はざるのみならず、然かもその組閣以來高調標榜し來れる庶政一新の實體は只だ一片の空文たらんとしつつあるは洵に慨嘆に堪へず、惟ふに昭和維新の大業は一々現下特權階級偏重の傳統的社會機構を改革し以て皇道政治の確立を期するに非ずんば斷じてその目的は達成し得ざるものと云ふべし。然るに今や臺閣に一人の有能の士あるなく、加ふるに外國際情勢は日を追ふて複雑し、内財閥、政黨、官僚等の亡國的自由主義者の一群はその陣營を醜くも死守せんと狂奔しつつあるの現状なり。

斯くの如くんば皇國不動の國是たる大陸政策の遂行と國民生活の安定とは果したて何に依據して、その成果を求めんとするや、想ひをこゝに到れば暗雲臭々轉た寒心に堪えざるものあり。斯の秋に當り吾が愛國諸團體たるものゝ責任や實に重、且大と云はざるを得ず。我等志を同うするもの須らく己を空しうして戦線の再編成を遂げその擴大強化を圖り、苟くも我等の企圖を阻止せんとするものは何にものと雖も斷乎これを排撃し以て昭和維新の具現に勇往邁進せんとす。

斯くして黎明、亞細亞の曉鐘は我等の手によつて清く高らかに打ち鳴らさるゝならん。我等は皇紀二千五百九十六年の今月今日、我國未曾有の超非常時局に際し歴史的意義ある維新政黨準備會を堅く結成したる所以なり。

敢て天下に宣言す

維新政黨準備會全國大會

かくして、一大愛國政黨の結成を目的とする廣汎なる協同戦線體が結集せられたのであつたが、同準備會は、關西の國民主義農民團體等の大衆團體を包含する例の八月會と對立してゐたので、大衆的・組織的基礎はやゝ薄弱たるかにみられた。しかしながら、二・二六事件後の萎縮せる國家

主義陣營の再興運動が關西地方において挙げられたことは、注目すべき事象であり、それは、大正十二年（一九二三年）の關東大震災によつて日本の勞働運動が萎縮し切つた時、その復興運動の第一聲が關西において挙げられたことゝその軌を一にするものといはねばならない。

五 その他の國家主義者の動き

序に、二・二六事件直後の國家主義者の動きを一寸述べて置くが、第六十九議會における例の齋藤隆夫代議士の演説に對し、第二控室の平野力三、江藤源九郎、小山亮及び院外國家主義團體が機關紙、パンフレット等を以て、齋藤隆夫駁撃運動を起し、また、東京帝大經濟學部河合榮次郎教授のファッシュ批判論に反撥して河合攻撃運動をも始めた。河合教授は、昭和十一年度の高文試験始員を取止められたが、その原因は、恐らくかうした運動に存在したとみられた。また建國會が久し振りの活動を示し、「國體明徴皇威宣揚のため日露修交を即時斷絶せられたし」といふ請願書を廣田首相に提出することなどがあつた。

次に、關西方面においては、いはゆる同志社騒動に對する八月會の動きかけがあつた。同志社大學では、かねてより國家主義派教授と、然らざる教授とが對立して紛爭し、そのために學生

のチャペル鐘詰め事件さへ惹起し、憲兵司令官の出馬さへみる騒ぎであつたが、昭和十一年五月九日、八月會より湯淺同志社總長に對して、

一、同志社大學部に於けるマルキシスト教授（林要、田畑忍、具島兼三郎）國體明徴論文拒否事件の責任者（松山誠）を馘首すること。

一、貴下は今回の不祥事件の責任を負ひて同志社總長兼大學長の職を辭すること。

なる決議文を手交し、そのため林要教授は辭職し、後、湯淺總長またその職を去つた。蓋し、

國體明徴運動上に起つた小波瀾である。

第二節 愛國勞働團體の統一運動

一 愛國勞働組合全國懇話會結成運動の再出發

さきに大阪の八月會の斡旋によつて總聯合、産業勞働俱樂部等を中心とする愛國勞働組合全國懇話會の創立が決定せられ、三月十五日の豫定なりしその結成大會が、二・二六事件のために延期せられたことは既に述べたところである(註一)。

(註一)本書、第六章第一節末段參照。

これは、社會民主主義派の日本勞働組合會議に對抗する國民主義組合會議ともいふべきものであつて、その結成は諸方面より注目せられてゐたものである。それは、三六俱樂部の言によれば、統一戰線のうちの第二種、即ち大衆結成第一主義に屬する運動である。「即ち、一舉にして全國、全面に亘れる一大愛國政黨の樹立を企圖する代りに、先づ、勞働者間の愛國者を堅く、深く、且つ廣く相結束せしめ、力ある完全なる組織たらしめんとする」ものである。この運動は、「一面に於ては、我が國體の本義に戻る民主主義思想並に社會主義思想(唯物論であり、利害觀念のみ

を以て國內を分裂せしめ冷酷なる階級闘争の巷と化せんとするもの）を以て近頃大に勢力化しつつある社大黨の背景たる歐米式の社會主義的勞働運動に對抗して、蹶起せる日本主義（世界に比類なき和淳なる家族國家の本然の姿に目醒め、同胞骨肉間の總ての問題は、皇道に則したる溫き道義に基きて解決し、上御一人の下に萬民一體化の理想を實現せんとするもの）的勞働運動である。……資本主義も、社會主義も共に唯物論上の物質的抗爭主義なりと看做し、共に之を排撃し、而して力ある者に向つては、弱い者いぢめは、立國の道義に反すと嚴に戒め、弱者に向つては、分を守つて勤勉力行を主とすべく訓し、相共に道義的に一體となり、相和し、相扶けて、以て産業報國に勵み、眞に 皇運扶翼の實を擧ぐるを目標とするものである。即ち他人同士の利害の集團たる諸外國の國家に於ては、到底想像だにもなし得ざる日本獨特の勞働運動である。……勞働界に於ける國體明徴運動である。」而してこの運動は、「實にそれが社會の下層に於て、實際に物質的に苦闘しつつある勞働者自身の自然的大運動であるだけに、夫れだけ涙ぐましく且つ麗しき運動現象である」のである。

かゝる意義を有する愛國勞働組合全國懇話會は、二・二六事件の餘燼も漸く納まりたる昭和十一年四月十九日、東京において結成大會を開催した。參加團體は、日本勞働組合總聯合（約三萬）、

日本産業労働俱樂部(約二萬)、新日本海員組合(約九千)、日本労働同盟(約五千)、日本主義労働組合中部地方協議會(約三千)、大日本労働組合協議會(約四千七百)、三河愛國従業員組合聯盟(約二千)、愛國労働農民同志會(約二千六百)、日本海上同志會(約三千)、東電愛國同盟(約一千五百)、中部港灣労働組合(約一千)、帝國木材産業正義研究會、愛國木材同志會、東京花緒生産者組合等であり(註一)、加入者總數約十萬弱といはれた。未だ戒嚴令下の集會のことゝて、代議員の數を五十名に制限した(實際の參加者は四十八名)。

(註一)愛國労働組合全國懇話會成立後、「日本主義労働組合中部地方協議會」は「愛國労働組合全國懇話會中部地方委員會」と改稱し、また生活防衛同盟(約千八百)が加はることによつて、懇話會の加盟團體は十五團體となつた。

懇話會結成大會は、宣言、要綱を決定し、産業労働會議設置案を可決した。これは、前述の日本産業労働俱樂部が發表した建議案と同じものであつて、いはゆるコルボラチズムに立脚する勞資協調主義の組織プランである。大會はまた、懇話會の全國常任委員をも決定したが、その顔振れは、總聯合の高山久藏、産業労働俱樂部の西山仁三郎、東電愛國同盟の矢ヶ崎靜馬、新日本海員組合の新妻德壽、日本労働同盟の矢尾喜三郎、中部労働聯盟の山崎常吉、三河愛國従業員組合聯盟

の露久保賢治、大日本労働組合協議會の大橋治房の八名であつた。結成大會の宣言左の如し。――

宣 言

日本主義労働運動の全國的結成は、久しき以前より全國の愛國労働者の等しく要望し期待せる所であつたが、今やその大同團結の氣運は熟し、茲に愛國労働組合懇話會として、全國的に結成する運びとなつた。

從來、日本に於ける労働運動は餘りに日本民族の獨自性を没却してゐた。明治維新以來物質文明の盲目的輸入は經濟、政治、外交その他一切に亘る分野に於て、歐米追隨主義を生み出し、同時に労働運動それ自身も歐米模倣主義に墮してゐた。資本主義の發達と共に共產主義、社會民主主義等の思想は輸入され、徒らに階級闘争の激發をのみこれ事として來た。日本の國民性、民族性を無視せる之等の労働運動が、今日、日本國民の前に一切の信頼と大衆性を放棄するに至つたのはもとより當然の歸結と言はねばならぬ。

滿洲事變以來、日本の世界に向つての獨自的發展は、一切の非國家的思想排撃の上に立つて、日本精神の昂揚を來たした。政治、外交、經濟その他文化一切に亘る再批判のもとに、自由主義撃滅の叫びは、全國民の間に澎湃として湧き起るに至つた。

同時に、從來の如き非國家的社會主義勞働運動を清算し、日本民族独自の勞働運動統一要望の聲は、全國產業勞働者の間に昂然として擡頭するに至つた。

國民生活を破壊する資本主義の革新、國民生活の安定を基準とする所の日本國家の發展、一君萬民に則る道義日本の確立を目標とする日本主義勞働運動こそ、全國勞働者の等しく要望してゐる所である。

今や、祖國日本は内外共に、發展的危急を告げてゐる。自由主義の行詰り、資本主義の矛盾の激化、農民と言はず、勞働者と言はず、一般國民生活を破壊し、それに必然的に伴ふ思想國難を惹起して、國內的危機を昂めてゐる。

一方、對外的には滿洲事變を契機として、國際聯盟の脫退、華府條約の破棄、軍縮會議の決裂による、世界列強に對する外交上の立場は、極度に尖鋭化して居る。

露滿國境に低迷せる暗雲、日本の發展を阻止せんとする、英米露支の包圍陣、日本を取巻く一切の國際環境は悉く險惡にして一觸即發の危機を醸成してゐる。

誠に、日本國民は今や乾坤一擲の一大危機に直面してゐると言はねばならぬ。今こそ日本國民は思想の統一の上に立つて、舉國一體となつてこの未曾有の國難を突破せねばならぬ秋に際

會してゐる。

吾等は茲に日本主義勞働運動の全國的統一の前提として、愛國勞働組合全國懇話會を結成するに際し、祖國日本の危急に殉ぜんとして蹶然奮起するものである。

吾等は、産業勞働者として、産業報國の至誠を以つて、國家産業の全面的發展に参加すると共に、一方、共產主義、社會民主々義を撃滅し、更らに進んで、資本主義の革新、國體明徴徹底のため一大國民運動を展開せん事を誓ふものである。

右宣言す。

次に、懇話會の要綱は、左の三條に分れてゐる。――

要 綱

一 我等は日本精神に則り産業人の結束を促し産業報國の實を擧げ以つて皇國日本の興隆を期す

一 我等は産業人たる使命に徹し、公正なる生産關係を確立し、以つて勞働者の生活向上を期す

一 我等は合理的方法を以つて資本主義經濟制度を革新し以つて人類文化の發展に貢獻せん

ことを期す

愛國労働組合全國懇話會結成大會では劈頭先づ、皇居を遙拜し、國歌を合唱し、閉會に當つても萬歳三唱後、代議員一同打ち揃つて明治神宮へ參拜する等、その態度は從來の労働組合大會では到底みられなかつた様子であると、愛國團體機關紙に報告されてゐる。

二 懇話會の組織及び活動

懇話會は、結成の翌日、即ち四月二十日に直ちに第一回常任委員會を開き、「吾等の久しく待望せる日本主義労働運動は今回全國的組織の統一を宣誓した。吾等の今後の目標は要綱に基づき更に全國労働者と提携し初志の達成を期すにある、尙日本全國には吾等と全く志を同じくして未だ相互に未知の團體もあるのだ、従つて今後一層の互譲の精神に依つてその大同團結の完壁に努めねばならぬ。斯くてこの愛國的實力を以つて日本産業労働組合會議を編成し一君萬民の下に祖國の繁榮を促し其の進運を共にするものである。更にまた吾等は日本主義農民運動の蹶起とその全國的統一を要望し以つて勞農相協力、一大國民運動を展開せん事を深く期待する。吾等は斯く日本精神に依る皇國の興隆を期し國民經濟の安定に貢獻せんとするものである」といふ聲明を發し、

更らにその翌二十一日、「國體明徴に關する要請書」を、總理大臣、陸海軍大臣、內務大臣の四相官邸に手交した。その内容は左の如くである。――

要 請 書

組閣以來、貴大臣閣下が國體明徴徹底ノ爲メ、日夜御盡力ニ對シ深ク感謝シテ居リマス。吾等、愛國勞働者ト致シマシテモ、之ノ肇國以來ノ非常時局ニ際シ、默視スル事能ハズ、茲ニ蹶然奮起シテ、去ル四月十九日ニ、愛國勞働組合全國懇話會ヲ結成致シマシタ。就イテハ、左ノ三項目ノ決議ニ對シ

貴大臣閣下が、即時實行アラン事ヲ要請スル次第デアリマス。

決 議

- 一、國體明徴ノ徹底ヲ期スル事
- 一、反國體的思想ノ一掃並ニ反國體的團體ノ即時解散ヲ命ズルコト
- 一、亡國的メーデーヲ絶對ニ禁止スルコト

以上

昭和十一年四月二十一日

懇話會の組織は、地域的には、關東、中部、近畿の三地方委員會を設け、また内部的には政治委員會を設置して一大懸案たる全國的愛國政黨結成問題を協議することゝなつた。そのうち、關東地方委員會は、六月二日、國體明徴問題徹底のため、先づメーデー禁止要請のデモを行ふことを決定し、同四日午前九時半、新橋驛に集合して、廣田首相並びに陸・海・内三相に禁止要請書を提出した(内容は、廣田首相宛てのものと、三相共通のものと二通である)。越えて同年九月十一日、陸軍當局が肅軍に作ふ措置といふ意味と、兼ねて國防強化といふ見地より、陸軍關係工廠従業員の勞働組合脫會を命ずるや、懇話會は軍部當局の措置を一應諒としつゝも、一個の勞働團體といふ立場より左の如き意思表示をなした。――

要 請 書

此度陸軍當局が肅軍と國防強化の完璧を期する爲めその國防の原動力たる兵器製造に當る各工廠に於いて多年妄動を續け來りし、亡國左翼社會民主主義指導精神を基調とせる反國體的團體たる官業勞働組合加入の全従業員に對して脫會を命ぜられたるは、祖國日本が當面しつゝあるソ滿國境紛争の深刻化並に北支問題の激化其他國際的諸情勢の急迫化を凝視する時寔に當然の處置であり、皇國の前途を憂ふる我等の衷心より欣快とする處ではあるが、眞の軍民一致、

國體明徴を念願し純正日本主義精神に立脚して、産業の發展、勤勞大衆の生活防衛運動を續けつゝある愛國勞働組合への加入をも阻止せんとするが如き結果を招來せんか、それこそ實に愛國勞働大衆の熱誠なる愛國的運動をも阻害するの傾向に陥るが故に、陸海軍當局に於かれては慎重に考慮され、各工廠は勿論、指定全軍需品工場に對して愛國勞働組合加入を認められる可く善處されん事を要請す。

昭和十一年九月

愛國勞働組合全國懇話會第三回常任委員會

陸海軍大臣宛

同日、右常任委員會は、當時問題となつてゐた電力國營問題についても、右の如き聲明書を發した。――

電力國營に關する聲明書

電力民有國營案は、國民生活上最も大なる關係を有する電力事業を統制し、皇國の産業興隆に一歩を進めるものとして、愛國勞働組合全國懇話會常任委員會は、其の實現を希望するものである。

抑々電力民有國營業は、皇國の國體理想を具現せる産業政策たるには未だ甚だ遠く、國家資本主義への動向を示すところのものではあるが無秩序、不統制なる現經濟機構の改新に一石を投ずるものとしての意義を認め、電力並に全電氣事業の供給價格の引下げ、従業員の身分保障並に生活の向上、進んでは國民の失業を防止し、改善し、産業の興隆開發に貢獻せしめ國防の充實に資し更に進んで將來に於る完全なる電力國營の徹底化を希望し、我が國現下の情勢に照らし過渡的政策として支持し實現を期する所以である。

右聲明す

昭和十一年九月十一日

愛國勞働組合全國懇話會第三回常任委員會

愛國勞働組合全國懇話會の第一回全國大會は、同昭和十一年九月二十七日、東京において開催せられた。大會は、(一)退職積立金法改正に關する件。(二)港灣勞働者保護法制定に關する件。

(三)電力國營に關する件。(四)愛國新政黨樹立促進に關する件。(五)人民戰線紛碎の件。(六)行動方針書等々を審議した。その行動方針書に表はれた懇話會の行動は、「要綱及創立宣言に基き、皇國の繁榮につとめ、更に日本主義勞働組合の大同團結と組織の擴大」を主要任務とするもので

あるが、その具體的内容は、（イ）愛國勞働組合の戰線統一及び組織の擴大。（ロ）失業問題の對策の樹立。（ハ）退職積立金法、健康保險法、工場法、勞働者災害扶助法、臨時雇傭制度の改廢及國情に即する社會政策、勞働立法の促進。（ニ）日本產業勞働會議の設立の促進。（ホ）日本產業の伸長と國際問題。（ヘ）政治問題への對策とそれへの協力の六項目であつた。また、失業對策のために、國內鐵道の電力、自動車の積極國產、國內土木事業の完成、國防の完壁等の具體的な積極策を提唱せるは、空虛な壯語に満足せざる質實的なる處が窺えて、流石に勞働組合なりと思はしむるものがあつた。第一回全國大會の宣言左の如し。――

宣 言

愛國勞働組合全國成話會は去る四月十九日、東京に於て結成式を舉行した。

當時帝都はなほ戒嚴令下にありて、結成宣誓式のための舉行なりしも參加各團體の熱烈なる支持に依つて次第に發展を遂げて今日に至つた。

爾來各種の行動實踐を通じて我等は「日本主義勞働運動」の堅實なる地質を確保した。

從來、日本に於ける政治、經濟、外交その他一切に亘る分野に於いて歐米追隨主義を生み出し、従つて勞働運動それ自體も共產主義、社會民主主義の思想的影響を受けて歐米模倣主義に

墮して居たことはさきに指摘した通りである。

然るに、これ等の共產主義者、社會民主々義者乃至一部の自由主義者は相提携し、最近人民戦線の結成を策し、益々露骨なる反國體思想の宣傳に狂奔しつゝあるのである。

觀よ！これ等の社會民主々義者團體は、社會民主々義政黨と共に、最近、陸軍部内に於ける労働組合が社會民主々義陣營より去つた事實を目して、單純なる團結權の蹂躪なりと稱し憲法論を振り翳して大衆を煽動し軍民離間を策し、斯くて敗戦主義への拍車を加へて居るのである。我等は、かくの如き一切の非國家的思想の排撃の上に起つて日本精神の昂揚につとめ、以て日本全國の労働者を日本主義に再編成をすることが必要である。

又政府は「退職積立金法」を制定したのであるが、なほ幾多の改正を要する項目あり、吾等はその重要な改正を當局に要求するのみならず、更にすゝんで日本の國體に即する労働立法の制定と併せて日本の産業の公正なる經營を通じその發展伸長のため産業労働會議の設置を要望するものである。

今や、日本内外の情勢は、いよ／＼切迫せる情勢を示して居り、吾等産業労働者の正しき行動は延いて皇國の繁榮に直接關連する所甚大なると同時に國防の上から缺くべからざる緊急事

である。

茲に日本主義労働組合の大同團結に驟然として邁進するものである。

吾等は亦政治問題の新たなる方向が我國現下必須の問題にして等來の反國體的諸政黨に依つては斷じて皇國の發展と國民生活の安定とを招來し得るものにあらざる事を知り、我等は熱意をもつて強力にして清新なる政治勢力の結成に協力するであらう。かくて、愛國労働組合全國懇話會は、共產主義社會民主主義其の他の一切の非國家的行動の絶滅を期して、全日本へ日本主義労働運動の大道を打ち立てなくてはならない。

右宣言す。

愛國労働組合全國懇話會は、八月會の肝入りによつて發足したものであるから、維新政黨準備會とは對立關係にあり、後者の一員（新日本國民國盟の手島剛毅）の如きは、準備會の結成當日、愛國労働組合懇話會を指して、これを眞の日本主義労働運動に非らずといったと傳へられるほどであつた。

三 政黨問題に關する内部對立

しかしながら、懇話會の内部においても、政黨問題については、なほ全部的に意見の一致をみるに至らなかつた。即ち、加盟各團體は、組合戰線統一の必要と政黨樹立の必然とはこれを認むるも、その政治的意見の細部に關しては、互ひに對立を免るゝこと能はず、殊に二大中心團體たる日本勞働組合總聯合と日本産業俱樂部との間に對立が甚しかつた。概括的にみて、愛國勞働組合全國懇話會は、維新政黨準備會に比して、ヨリ非政治的であつたが、そのうちでも更らに非政治的なる分子、日本産業勞働俱樂部の西山仁三郎は、一方において、日本農民組合の平野力三、大日本國家社會黨の石川準十郎、無名士俱樂部の直原直四郎、日本文化聯盟の松本學らと共に別に全一俱樂部なるものを組織した。また懇話會内の大日本勞働組合協議會(大日本國社黨系)にあつては、四月に關東地方の日本通信同盟及び大日本映畫人同盟が脱退して日本産業勞働俱樂部に加盟した故、主として關西派よりなる殘留勢力は、本部を大阪に移し、十一月十五日、總聯合に合流した。また同じく懇話會の加盟團體日本勞働同盟も九月、懇話會内の愛國勞働農民同志會に合流したのであつた。他方において、懇話會關西派(新日本海員組合、總聯合大阪聯合會、大日本勞働組合協議會)は、八月二十五日、皇國農民同盟と共に關西皇國勞農協議會を組織し、更らにその後、愛國勞働農民同志會を中心とする協同戰線體「時局協議會」が成立するや、その政黨的傾向に嫌ら

ざる懇話會内の青年分子は、皇國勞農協議會と共に大和聯盟を結成して對立するなど、懇話會をものゝ内部の移動もまた複雑を極めたのであつた。

第三節 勞農協議會運動

一 愛國農民戰線統一の提唱

八月會の斡旋より愛國労働組合全國懇話會の結成となつたことは前節に述べた通りであるが、最初八月會の意圖は、愛國労働組合の統一と併行して、愛國農民組合の戰線統一を計り、その兩者の上に立つて、大衆的基礎固き堅實なる愛國政黨を組織せんとするにあつたのである。

かゝる一般方針の上に立つて、八月會の中心人物たる皇國農民同盟の吉田賢一は、労働組合の結成をみた直後の五月、皇國農民團體の全國的統一に乗り出した。この呼びかけに應じて先づ機運の動いたのは中部―關東地方であつて、早くも名古屋農民組合同盟、富山縣勤勞農民同盟、新潟皇國農民聯盟及び維新青年俱樂部等が活潑なる動きをみせ始め、同じ五月に、これらの諸團體の連名を以て、「愛國派農民戰線統一の提唱」をなした。その提唱文は頗る長文のものであるが、その要約を示せば、「愛國運動は今日一大飛躍的戰列を整備すべき歴史的時期にある。愛國運動は今日迄大衆的基礎の重點を如何なる國民層におく可きかを考究することなく、之等に對して一顧

だにせず只盲目的に觀念的上滑りの運動を續けて來た事に重大缺陷があつた。滿洲事變以來、鳴りを靜めてゐた全國のマルキストは總選舉後急速に動き出し……愛國運動者が眞劍に對策を立てねばならないのは、右翼運動當面の諸現象に對する火事泥の對策ではなくして、地下運動的大衆獲得の恐るべき計劃的組織運動に對する恒久的對策樹立の點である。……全國農民組合の全組織がマルキストの指導下にあることは、公知の事實にして、全國の檢舉されたる共產主義者（表面轉向

を裝へる優秀なる闘士）が全農組合の各組織に潛入し、農村窮乏を好餌に村、部落に亘つて細胞組織を活潑に、然し表面は全く穩健なる態度で進めてゐるのを、全愛國者は如何に觀るや？……彼等の指導者は我國農村よりファッショ勢力を近き將來驅逐して見せると豪語してゐる。……日本主義者が農村運動を現状の如き狀態に放任して置くに於ては、我國農民の思想的動搖は深憂に

たえざるものがある。……今日に於て全愛國農民運動者が小異をすてゝ團結し、以て全國の優秀なる農民より優れたる闘士を養成、全農村に愛國運動の大旗を押し進むべきところ、眞に皇國を慮ふ愛國者の使命と信ずる。以上の如き考へのもとに、我々は全愛國派農民戰線の統一のため

の協議會の結成を提唱するものである」といふのであつた。かゝる趣旨の下に、關東地方では、提唱地の關西に先立つて六月二十八日、早くも皇國農民團體結成關東準備會が設立せられた。而し、

てこれには大日本皇國農民團、茨城の愛郷自治聯盟、川口市の愛國勞働農民同志會、新潟の皇國農民聯盟、愛知の皇國農民組合、富山の勤勞農民同盟、千葉の皇國農民自治聯盟、東京の興國自治會、長野の信州郷軍同志會、神奈川の農都一團會、及び山形、群馬、大阪の皇國農民同盟等であつた。當日は、格別に方針等を決定することなく、各地の情勢報告と「皇國內外の非常時局に鑑みて愛國運動の大衆的基礎勢力として全國各地の國體的農民團體並に同志諸兄の協力を促し、その大集結に努めること」といふ「申合せ」をなすに止まつた。

二 關西皇國勞農協議會の成立

關東地方に一步先んぜられたる本元の關西地方においては、吉田賢一辯護士の皇國農民同盟が中心となつて努力の結果、七月五日に皇國農民團體關西地方準備會が結成せられ、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取の皇國農民同盟、滋賀皇農政治同盟、富山勤勞農民同盟、愛知皇農組合等が參加し、「皇國內外の非常時局に鑑み、國體的農民團體の全國的統一のために先づ我等各團體は茲に單一組織として合同し、進んで皇農團體結成關東準備會と協力して速かに全國的大集結に努め政治的に發展せしむる事」といふ「申合せ」がなされた。

かく關東、關西步調を揃へ、いよいよ八月には國家主義大衆運動の一翼たる皇農團體の全國的結成を行ふべく工作が進められたのであつた。しかるに、間もなく關東準備會と關西準備會との間に意見の對立が生じて、全國的統一の雄圖はこゝに挫折した。而して關東側（新潟、富山、愛知、山形、山梨）の各團體は、七月に共同聲明書を發して愛國勞農同志會に合流し、その農民部を形成した。そして翌八月、愛國農民部は、左の如き綱領を決定したのであつた。――

綱 領

一、我等は皇國の民族的道義立國の大精神に則り全國民の聯合結束を計り以て國體明徴の實現を期す。

一、我等農山漁村民の生活安定と否とは皇國の興廢消長に關する重大要件たるに鑑み適切有效なる施設の下に全國農民の眞の經濟復興を實現すべく奮闘し以て國力増進に貢獻せんことを期す。

一、我國は反國體思想たる共產主義、社會民主主義を撲滅し、資本主義を根本的に革新し以て皇道の本義に基き國家機構の一新に協力邁進せんことを期す。

關東側と袂を分つた皇農關西側においては、その独自の運動方針に邁進することにした。即ち

先づ八月十五日に皇國農民同盟全國代表者會議を開いて「皇國農民團體統一に關する件」及び「關西地方勞農協議會に關する件」を可決して、統一運動の方針大綱を決定し、兼ねての勞農協同の素志を實現すべく、前に一言した如く、勞働團體側の新日本海員組合、總聯合大阪府聯合會、大日本勞働組合協會等、愛國勞働組合懇話會の關西派と手を握り、八月二十五日、關西皇國勞農協議會なる協同戰線體の結成に成功した。當日議せられた問題は、(一)農民戰線統一、(二)人民戰線紛碎、(三)勞働戰線統一、(四)維新政黨樹立、等であつて、役員としては、議長に新日本海員組合の赤崎寅藏、副議長に皇農の吉川賢一及び總聯合の今井武吉、書記長に大日本勞協の大橋治房を選んだ。當日發表せられた宣言は、政黨萬能的日本主義に對する批判を含むものであるが、その全内容は左の如くである。――

關西皇國勞農協議會宣言

比類なき日本國體の尊嚴に自覺せる勞働者農民は、我が皇國の歴史に省みて今や未曾有の國民精神の昂揚期に遭遇せるを機縁として、自らの負ふ歴史的使命を認識するに至れり。歴史的使命とは何ぞや、昭和御維新翼賛の使命である。資本主義の制度によつて階級分化を遂げたる國民の二大陣營を資本主義の革新によつて一元化し、以て一大國民的更生を期するにある。今日

愛國勞働組合全國懇話會近畿地方委員會、皇國農民團體によつて關西皇國勞働協議會を結せる所以のもの、また實に日本勞働者、農民の歴史的自覺に基くところである。由來我が皇國は肇國の古よりやむことなき生命發展を遂げて今日に至つたものである。思ひを茲に致して皇國の現狀を觀、現段階の政治的、經濟的客觀情勢を分析するとき、資本主義制度は既に全面的に體系化する政治勢力として國民の上に臨むに至つた。最早國民は個々の經濟的欲求すらも資本主義の革新といふ政治的目標に進むことなくして到達することを得ない見透しを持つに至つた。斯くの如くして資本主義制度は階級闘争を助長し皇國國體の尊嚴を害ふところとなつた。而して我等が皇國の現狀が資本主義によつて進路を阻まれるものを自覺するとき皇國發展の生産力の中樞を形成し、幾千年來皇運扶翼の基礎努力を繼續し來つた愛國勞働者農民の堪へ難きところである。

斯る時歴史的使命を持つ本協議會が結成せられたのである。かくて昭和御維新翼賛の主體として來るべき維新政黨の結成を促進すべき任務をもつものである。従つて本協議會の組織成員たる勞働團體、農民團體は組織の擴大強化と戦線統一を當面の任務とし、一國一黨一組合の基礎をつくり、目的を異にする既成勞働團體、農民團體に對しては其の轉向、分解、併合、淨化を

以て臨み、未組織勞働者農民を組織化し、皇國勞働者、農民の正しき思想統一を完成することによつて、亡國人民戰線を撃滅し進んで現狀維持の觀念を排し、不純なる政治意識を注入することによつて常に維新勢力を後退せしめつゝある政治ブローカー的存在を斷乎として粉碎し、強力にして純眞なる御維新の基礎工作を遂行することにより、關西皇國勞農協議會の使命に一路邁進せんことを期す。

かくて八月會の統一の意圖は、部分的なる實をしか結ばなかつたのである（註一）。

（註一）關西皇國勞農協議會の性質を知るための參考として、その主動力たる皇國農民同盟の前掲八月十五日の全國代表者會議（大阪五十支部百五十八名、兵庫十七支部三十七名、奈良五支部十一名、三重二支部三名、鳥取四支部一名、島根一名、東京一名、合計約二百名）によつて改正せられた綱領及び役員を記して置く。――

綱 領

- 一、われらは萬民共に皇國の礎たるを自覺し、日本精神に基く農村共同體の完成を期す。
- 一、われらは一切の能力を統合し生産力の組織的發展を圖り需要の遺憾なき充足を期す。
- 一、われらは日本精神と經濟の徹底的計劃化により、階級鬭争なき農村の實現を期す。
- 一、われらは土地制度を改廢して社稷を整備し農村を凡ての獨占資本の支配より免れしめんことを期す。

一、われらは農業の國營化協同組合の徹底化を期す。

一、われらは生活の確保發展のため必要なる一切の經濟的、文化的條件の具備を期す。

一、われらは都會中心の諸制度を改廢して都市農村の均衡を圖り農村文化の高揚を期す。

一、われらは建設動力たる基本組織體（——皇國農民同盟）の完成と共に特に將來農村の擔荷者たる青年育成の重大任務を自覺す。

一、われらは徳を磨き勞働を尊び相互徹底の精神を以て堅く相結び萬難に耐え此の綱領の實現を期す。

なほ、皇農同盟には前衛隊として皇國農民同盟義勇隊の組織があり、イタリー・ファシスト黨の如く義勇隊十誠を有してゐる。

第四節 國家主義青年分子の統一運動

一 統一運動のイニシアチヴ

二・二六事件後、怒濤の如く捲き起れる國家主義戰線統一運動に對し、最も純眞且つ傲感に反應を起したのは、青年分子である。國家主義陣營の宿命ともいふべき割據主義に對しては、かねてより各派青年分子の間に不滿の色が濃かつたのであるが、母體たる愛國團體がそれ／＼の方向において統一戰線の結成に乗り出すや、こゝに各派の青年分子の間にも母體間の統一運動の機運し、その第一歩として各派青年分子の統一運動を先づ行ふべしといふ聲が、勃然として起つてきを助成たのである。

京都地方には、かねてより古き傳統を有し中川裕を中心とする洛北青年同盟が頑張つてゐたが、これが中核となつて愛國青年運動統一のために、興國青年同盟、西陣青年同盟等と語らつて、純正日本主義團體共同闘争協議會を結成してゐた。純正とは、蓋し運動に對する青年の氣持ちを表明せるものである。六月頃、關西に愛國團體統一の機運熟し維新政黨準備會の成立が近づかん

とするや、青年分子も奮起して同月十三日、維新運動を有効に行ふためには小異を棄て、大同に就くのを必要を痛感し、今後の運動を展開するために、純正日本主義青年思想團體統一促進の提唱を全國の愛國青年團體に飛檄すべしといふ結論に到達した。その後、その具體的工作を進め、七月十日にはこの提唱を全國同志に送り、越えて翌八月二十三日には、京都に全國の愛國青年分子を集集して純正日本主義青年運動全國協議會結成準備會を開催するまでの運びとなつたのである。

二 關東側の動き

かゝる機運に呼應して、關東では、九月頃よりいち早く關東地方の青年分子の結集を計ることとなり、新日本國民同盟錦旗青年隊、愛國政治同盟維新青年隊、大日本生産黨青年部の三團體の青年分子が純正維新共同青年隊の結成を決定した。その結成準備會は、翌十月二十四日に執行はれ、右三青年團體のほか、直心道場、又新クラブ、維新寮、日本産業軍、日本國民軍等の有志が参加した。また正式参加をなさず傍聴したものには國民協會、大アジア青年聯盟、政黨解消聯盟、皇道會等があつた。

この日の準備會では、「我等は皇國內外の客觀狀勢と維新運動戰士の使命に鑑み、一切の情實と

利害を超越し、實踐的青年大衆運動を基礎とする維新戰線統一への段階として、『純正維新共同青年隊』の結成に邁進せん事を期す」といふ「申合せ」がなされ、その常任準備委員として、新日本國民同盟錦旗青隊の三木亮孝、愛國政治同盟維新青年隊の佐々木武雄、大日本生産黨青年部の影山正治のほか、直心道場の大森一聲、又新クラブの小黒將永、維新寮の牧野晴雄、日本産業軍の松下彦一、日本國民軍の四宮六郎ら八名が選ばれたのであつた。また京都派の提唱による純正日本主義青年運動協議會にも欣然參加することを決定した。なほこの青年統一運動は中心三團體の母體たる新日本國民同盟、愛國政治同盟、大日本生産黨が維新政黨準備會の中心團體であることからみても當然である如く、維新政黨準備會に代表を派遣することをも決議した。しかし、同青年隊（準備會正式成立は翌年二月）は、維新政黨準備會の政黨拙速結黨主義に全然賛成するわけではなく、この點については、青年独自の立場より、やゝ批判的であり、この矛盾は後に大きく激成されて行つて、翌昭和十二年四月の總選舉における棄權運動にまで發展し、更に同年六月に至つて、日本革新黨の結成のために政治革新協議會が解消するや、純正維新共同青年隊は、その内部的矛盾に耐え得ずして解散するに至つたのである。

かゝる點よりみれば、純正維新共同青年隊の傾向は、前述分類第一範疇たる議會主義に發足し

て第二の範疇に移したといふことができるであらう。

三 全國的結成なる

右は後の話であるが、かくの如く、關東側の支持も得られたので、京都の純正日本主義團體共同闘争協議會を中心とする純正日本主義運動全國協議會準備會は、いよく豫定の如く昭和十一年十一月三日、明治節の佳節を卜して京都にその正式結成大會を開催した。集まるもの全國八十三團體、百代議員。殆んど全國の國家主義有力青年團體が參集した。大會では全國協議會設立趣意書、宣言、規約が決議せられた。これによつてみれば、この全國協議會の目的は「純正日本主義青年運動の全國的統一」及び「維新翼賛のため純正日本主義青年の積極的共同運動を爲す」こと（規約第二條及び第三條）であつた。また、各地に青年の修練場として塾を設置し、人格識見の向上に務めることが決定されたのは、甚だ注目すべき事實であつた。加盟員相互の修練、人的結合を目的として各地に研究會、討論會、座談會等を常時開催することも決定せられた。

純正日本主義青年運動全國協議會は始め特に本部を置かず、京都を以て連絡事務所となしたが、後、東京の直心道場に本部が置かれた。昭和十二年四月の總選舉に、純正維新共同青年隊と共に

選舉權奉還運動を起し、白紙投票を主張したことは、後に述べる如くである。

結成當日決定せられた全國協議會の役員は、（北海道）林貞四郎、（東北）入江五郎、（關東）大森一聲、西郷隆秀、工藤定雄、影山正治、（東海）西村暢天、（中部）三浦延治、（北陸）太田幸一、伏木治一、（近畿）中川裕、徳田惣一郎、田島勝武、（中國）横田佐輔、（四國）泉田武、（九州）木本榮、田中靜、四宮九州男、（滿洲）橋本重雄の十九名であつた。

なほ、純正日本主義青年運動全國協議會の動向を如實に知るため、その設立趣意書と宣言とを左に掲げる。――

純正日本主義青年運動全國協議會設立趣意書

歴史は繰り返し、而も人間社會は刻一刻、向上へ創造へと向つて絶えざる進展を續ける。然し其處には常に自己の特權を守護せんとする現状維持派と眞に正しき人間の欲求を具現せんとする革新派との絶えざる抗争が展開され又幾多の人々が新しき時代への人柱として社會正義の尊き犠牲に殉じて行く。世界は今やこの現状維持派と社會革新との二大潮流の抗争渦中に狂騰してゐる。現社會機構の根柢をなす資本主義諸制度は其の包藏する内的矛盾の結果、今や行詰りの極に達し、斷末的狂奔を餘儀なくせしめられてゐる。

國際經濟の極度の逼迫も……畢竟、……現状維持派と……革新派との新舊勢力の争闘に外ならない。外來思想に蝕ばまれた……日本が此の渦中から恬然沒交渉たり得よう筈がない。

皇國日本……との抗爭を餘儀なくせしめられ、國內抗爭の矛盾を現出せんとしてゐる。

二月事件以後極度に緊迫した國內情勢に對して……自己防戦に備えた。而も加えて、歐洲動亂の要因をなせる人民戰線の餘波は、皇國日本にも浸蝕し、亡國の一連をも糾合整備して、これ又人民戰線の統一を目指して亡國的毒素の散布に餘念がない。

歴史の必然に逆行する……この二大敵の總攻撃を目前に控えて「祖國防衛、皇道宣布」の旗高くかざす日本主義陣營が安閑たり得よう筈がない。日本主義陣營の再整備、全國的統一に依る全面的力の結集が叫ばれる、これ必然の歸趨たり。「小我を捨て、大同につけ」この合言葉は農村から、都會から、眞正日本人の魂から迸り出る。

日本主義政黨、農民勞働者、學生諸團體が一路、大同へ！統一へと邁進しつゝある事は「祖國防衛」の爲め欣快に堪えない。而も歴史が教示し、先哲が喝破せる如く、維新聖戰の第一線に立つ者は、常に「青年」たらねばならない。

青年の結集！

……日本主義者の唯一の武器は即ち一點の私心なき純正青年の一大結集に俟たねばならない。我等全國の同憂同感の士相集ひて此處に「純正日本主義青年運動全國協議會」を創設し、日本主義運動の中核として、眞に正しき青年運動の羅針盤たらしむるの自負と自責とを以て、純正青年運動の全國的統一を期し、又全國に人間陶冶の道場を設置して、同志の信念的結合、自己修練に務め、或は、一大國民運動を展開して大衆を啓發し、友誼諸勢力との緊密なる融合統一の下に、日本主義運動をして、一大劃期的飛躍に發展せしめ、以て御維新翼賛に死力を盡くさん事を期す。

全國純正日本主義青年諸公！

我等は此處に觀念的大團結より雄飛して眞の青年的結集を謀り俱に天業恢弘の宏謨を翼賛すべき大使命遂行に挺身奉仕せんとす。

我等の微衷を諒せられ、絶大なる協力共戦あらん事を。

宣　　言

歐洲に於ける左右兩翼の思想的對立尖鋭化に起因する第二次世界大戰の危機、及び之を東洋に轉化せしめんとする老獪極まる諸種の陰謀陽策と、而して東洋自體の包藏する危險性とが相合

して、皇國日本を繞る國際環境は、今や深刻その極に達せんとしてゐる。しかも内には、歴史の必要に逆行し、國體の眞義と國民の生活とを犠牲に供しつゝ、所謂金融支配の最後の形態としての老廢矛盾機構を、（中略）維持せんと狂奔を續けつゝあるの現状である。謂ふところの庶政一新とは幕府當局の尊皇維新論に等しき矛盾に充てる彼等の斷末魔的呻吟の聲である。彼等は、皇國日本をしてこの脆弱なる老廢機構を内に抱いて以て未曾有の危局の前に立たしめんとしてゐる。噫かくて如何にして國命を無窮に彌榮へしめ、何處に祖業を恢弘せしむべきぞ。

二月事件以來、久しく内省と沈潜とを重ねたる我等が陣營内に、その再整備——全國的統一による全面的なる新興維新勢力の組織結集の叫ばるゝは、正に歴史的必然性に基づく之が解答である。聴け！農村から、都會から澎湃として義り起りつゝある「我執を去つて大同につけ」との絶叫を。これこそ大地を揺り動かし、全日本の鐵魂から迸り出づる天來の雄叫びである。愛國の赤誠に燃ゆる維新黨、農民層、勞働運動、學生團體等々の凡ゆる分野は、この天來の聲の導きのまゝに、一路、大同へ、統一へと邁進しつゝある。而してそれら各分野の運動を綜合すべき中心運動、核心體として、これに統一的なるイデオロギーを與へ、その方向を決定し、躍進力を添加するものは實に純眞なる青年層の働きでなければならぬ。

青年の結集！

青年の結集！

まことに皇國日本を救ふものは、かくして統一づけ、組織化されたる皇道國民の天業翼賛、維新奉公である。

我等はこの必要性と、その重大性とを深く自覺せる全國同愛同感の士とともに、茲に「純正日本主義青年運動全國協議會」を創設した。我等は眞によく日本主義運動の中核たるに愧ぢざるべく、正しく純なる遂養と行動とを以て、觀念的大同より血脈的融合への大飛躍を試み、俱に濃かに赤誠を波打たして、天業恢弘の宏謨奉翼の大使命に挺身奉仕せんとする。今、輝かしき出陣の門出に當つて敢て滿天下に宣す。

第五節 三六俱樂部を中心とする運動

一 小林順一郎大佐と三六俱樂部

日本の國際聯盟脫退及び海軍々縮條約廢棄により、一九三五—六年に日本を中心とする國際危機が起るべしとは、一九三二—三年頃より八釜しくいはれたところであつて、殊に日本の國家主義陣營においてこの危機が高調せられたことは、周知の如くである。この一九三五—六年の危機打破のため一九三三年（昭和八年）十月十五日、退役陸軍砲兵大佐小林順一郎を中心として三六俱樂部が組織せられた。

小林順一郎大佐は、陸軍士官學校第十三期生であつて、建川美次中將と同期である。長くフランスにアタツシエとして駐在し、フランス婦人を娶つて歸國した。事情あつて退役し、退役後はフランス特殊鋼のバテントを有つと傳へられ、そのために貿易會社を經營して産をなしたといはれてゐる。經濟問題に對する研究深く、曾て經濟「綱領」を發表したことがあつた。また「自衛」といふ雜誌を發行してゐたこともあつた。國家主義運動に對する深き關心を有し、その豊富なる資

金と、軍部に友人多きことのために、彼の運動は頗る有力であつた。

三六俱樂部は、小林順一郎大佐が中心となり、一九三五—六年の危機突破のために昭和八年（一九三三年）九月十五日に設立された團體であつて、三六なる名稱は、かゝる事情に基く。同年一九三三年十二月より「1936」なる月刊雑誌を刊行して「皇國の直面する非常重大時局突破の爲め、俱樂部員相互の私見の發表と其他憂國の士の意見中、同志の参考となるべき記事とを輯録」し、兼ねて「三六情報」なる俱樂部機關紙を發行した。後者は、後に廢刊されたが、前者は一九三七年一月より「2600」と改題せられた。蓋し、一九三六年の危機は去つても、國內には幾多の難關は横たはり、「言論界は徒に自由主義、民主主義、功利主義かを振廻はして益々人心を惡化せん」としてゐるので、「此の難局を打解し、少なくとも紀元二千六百年迄には昭和維新を成就し、明朗日本の姿を顯現せん」ことを期するためであつた（註1）。

（註1）「2600」には「次代工作參考資料」の傍題がある。以てその性質を察知し得るであらう。

三六俱樂部は、最初主として在郷軍人を中心として結成せられたものであるが、その後、一般常人の愛國者をも網羅することゝなつた。そして昭和十年、國體明徴問題に蹶起して岡田内閣に迫つたり、軍當局、在郷軍人團等に強硬意見を開陳したりなどして、世の視聽を惹いた。また二・二

六事件には種々デマを飛ばされたが(註一)、これは全く事實無根であつて、同俱樂部は、そのために迷惑を感じ、しば／＼その機關紙を通じて釋明したのであつた。

(註一) 地方支部員將校のため二・二六事件に關するニュースを送つた三六情報編輯主任吉見隆治が、出版法違反により罰金刑を科せられた事實はあつた。

三六俱樂部は、理事として陸軍大將大井成元男、陸軍中將菊池武夫男、同淺田良逸男、同兩角三郎、同二子石宮太郎、同等々力森藏、同四王天延孝、同少將松江豐壽、同松本勇平、海軍少將南郷次郎(註二)、陸軍砲兵大佐小林順一郎らの在郷軍人を始め、元公使堀口九萬一、貴族院議員井田盤楠男、同渡邊汀男、同井上清純男、宮下善吉、志賀直方、佐伯正悌、有馬成甫、吉見隆治等を頂き、堂々たる陣容であつた。俱樂部の目的とするところは、いはゆる第二種(非政黨的)統一運動であり、「庶政一新の爲め、民間の準備に努力し、且つ民間に於ける惡質の動搖を避くる」にあり、そのために會員の活動は頗る活潑であつたが、しかし、それは俱樂部員個人の活動であつて、俱樂部そのもの、團體的行動はあり得ないとされた。蓋し、「三六俱樂部は單に同志間の相互研究、聯絡協同の俱樂部に過ぎず、従つて統制ある一の團體ではない。各々独自の立場を保留しての談合であつて、一の意見を以て他を束縛することを許さぬものである。従つて外部に對し、俱

樂部としての團體的行動なるものは未だ曾て存在せず。各部員は各自の責任に於て、自己の所屬する他團體内に於て自己の所信のみを以て國事に善闘するといふ立て前のものである」が故である。尤も、「飽く迄も私心を超越したる眞剣なる研究論議は、遂には同志相互間の意見の一致を招來し、各同志の其各自の活動場裡に於ける確信ある奮闘は、外部より觀れば恰も異常の統制下に活動しあるものゝ如く感ずることは無理もないことである。」要するに、三六俱樂部は、結成者の主觀的意圖においては、「既成政黨の如き一の政治團體とは全く其本質を異にし、又他の如何なる愛國團體とも形式的に對立關係にあり得可からざるもの」なのである。(註二)

(註一)有名なる海の若鷺故南郷海軍少佐の嚴父であり、最近、講道館長になつた人である。

(註二)三六俱樂部の「聲明」では、自己を規定してかうもいつてゐる。――

三六俱樂部は、俱樂部員個人の爲めの存在ならず。眞に犧牲奉公を相誓ひたる同志の交りの俱樂部なり。故に如何なる場合に於ても、

(イ)自己の爲に他を利用することなし。

(ロ)自己本位の研究をなすことなし。

(ハ)自己本位の行動をなすことなし。

(ニ)私利を目標とし「自己の立場」を有利に導かんが爲に、或は言を左右にし、或は虚構の宣傳をなす

第五節 三六俱樂部を中心とする運動

ことなし。

(ホ)純眞なる同志の全く無條件の出資以外は受けず又使用せず。

三六俱樂部は、かくの如く、國家主義者の單なる社交團體の如く自己規定をなされてゐるが、その實質においては、有力なる行動團體として、殊に愛國陣營の統一運動のために貢獻してゐるのである。

三六俱樂部は、後、昭和十三年（一九三八年）元日を以て改組されて、瑞穂俱樂部となつた。瑞穂俱樂部規約第二條には、「本俱樂部の目的は國體の本義を益々明徴にし之に基き時局に處すべき重要對策を攻究し其の實現を期するに在る」と記るされてゐる。而して、それは、かゝる「目的を達せんが爲め、相集まれる私心なき同志の俱樂部」（大井成元）であり、「政治團體でも何でもなく、俱樂部員に對して團體としての拘束は一切存在せず」……「本俱樂部を恰かも一般政治團體其他の諸團體と對立し或は之と比肩すべきものゝ如く考ふことは大なる誤りである」のである。その中心目標は「國體の本義を闡明して建國の大理想を完成し、皇運を扶翼」するにあり、「我々は所謂右翼でもなく又固より左翼でもないものでありまして、國體明徴の大義の下に大業を修理固成するに當りまして、時弊は何であるか、行はるべくして行はれずに残つてゐるものは何で

あるかを能く詮議して肇國の精神に基き我々の考へを定め、行動をなしつゝあるものであります。……：されば我々は一部の人が故意に誤解しつゝある如く、決して異端者でもなくまた危険思想の持主でもないであります。我々は國體の本義に基き行動する以上矯激なる思想、或は外國式のフアツシヨ等とならんと欲してもなることが出来ないであります。……：若し不法行爲を以て我々の理想を實現せんとするならば、それは我々の自殺に等しいものであることは、我々俱樂部員同志が皆さう考へて居ることであります。我々は三六俱樂部の時代からこの大方針の下に發言も致し行動も致して参りましたが、世間の一部には甚だしい誤解もありました。彼の二・二六事件の際に於けるが如きは、（中略）我々の夢想だにしなかつた誤解でありました。我々は當時の情勢に鑑み左様の事件が起つては大變であるから、極力未然に之を防止し、速かに内外の難局を打開して一日も早く非常時對策の準備を爲し、國體精神の指導原理の下に舉國一致の實を挙げねばならぬと努力して來たのであります。……：若しその時、當局が假令全部でなくとも一 부분でも我々の精神を了解し以て事に當つたならば、二・二六事件は完全に防止し得たものと考へます。……：繰返し申しますが、我々は皇道復興、尊皇精神に基き行動して居るものでありまして、今日歐米で云ふ様な何々主義等から我々の言動を律してゐるものではありません。強ひて言ふならば我々

は國體主義とでも云ふのに當るのではないかと考へますが、決して一黨一派を作るものではなく日本國民に普く呼び掛けて居るのであります。」（『2600』昭和十三年三月號）

「従つて、本俱樂部に於て攻究せんとする處は國體の根本主は勿論のこと且つ軍事、政治、外交、經濟資源等凡ゆる場面に亘り苟も皇國の消長に關係ありと認むべき事項は如何に些細の市井事件たりとも之を問題」とするものであり、「昭和十年春貴族院で其戦端を開かれた菊池男も井田男も、井上男も悉く本俱樂部の常任理事であることは、既に何人も知ること」（瑞穂俱樂部の誕生）——『2600』、昭和十三年一月號）である。

右の如く、三六俱樂部は瑞穂俱樂部と改稱せられたが、世間では矢張り三六俱樂部乃至「三六系」なる言葉を用ひてゐるやうである。

二 愛國勞働農民同志會の結成とその發展

かくの如き三六俱樂部が、一つにはその理想顯現のために、一つには自己の大衆的基礎を有たんがために組織したものが、愛國勞働農民同志會である。

始め愛國勞働農民同志會は、昭和八年（一九三三年）十二月十七日に、埼玉縣川口市において創

立せられた。現在の會長松本勇平陸軍少將の記述に係る同會の沿革史によれば(註一)、川口市には個人經營の鑄物工場が四、五百軒あり、その従業員等の間へ、一九三一―二年頃より左翼思想が侵入した。そのために同市の若干工場に激烈なる爭議が起り、悲慘を極めたのみならず、その影響は、單に川口市のみならず、關東各地の工場に及ぼんとして、その鎮壓には、關係各官廳も手を焼く有様であつた。

(註一)「2300」、昭和十三年六月號。

當時は齋藤内閣であり、その陸相には精神家荒木貞夫中將が据つてゐた。荒木陸相は、「この情況に痛く心を惱まし、事態改善のために、黒木中佐を川口市へ遣はした。命を受けた同中佐は、「死力を竭して」各工場に日本精神を鼓吹したが、偶々、當時在郷軍人會川口聯合會分會長であつた工場主工兵中尉名古屋喜代造が大いに黒木中佐の所説に共鳴し、一方、鑄物爭議の「中心人物」であつた阿部己與午(現に愛國勞農同志會總務委員)も「翻然として其非なることを覺り、こゝに兩人を中心として、各工場主及び従業員を説得し、つひに日本精神を指導原理とする「勞資一體の會」を作り上げた。これが現在の愛國農働農民同志會の發端である。

愛國勞働農民同志會の創立大會には、荒木陸相自ら會旗を書いて之を授與した。その意圖は、

「此旗の下に全國に日本主義的な勞働農民の同志會を發展せしめよ」といふにあつたといふ。最初黒木中佐が會長となり、後、小林順一郎退役陸軍砲兵大佐がこれを繼ぎ、續いて昭和十一年（一九三六年）二月、現在の松本勇平少將が會長となつた。

二・二六事件後の沈滞せる愛國陣營の振作のために、關東及び關西において、愛國團體の統一運動が起つた。この機運を捉へ、愛國勞働農民同志會、即ち略稱「愛同」は、昭和十二年十月四日、川口市において更生第一回大會を開いて、新たな運動に乗りだすことゝなつた。當日可決せられた「全國に亘る純正日本主義團體の戰線統一に關する決議」は、即ち統一問題に對する愛同の意氣込みを示すものである。愛同は、その前後に結成せられた橋本欣五郎大佐の大日本青年黨ほどの精銳主義はとらなかつたが、第一種の統一運動、即ち拙速的戰線統一主義を排し、大衆團體をちつくりと堅めて行く方針をとつた。その豊富なる資金を以てする統一への努力はその効果なかなかり難く、さきに記した如く、先づ皇國農民團體結成關東地方準備會が愛同に合併せられた。愛同はまた、統一戰線成就の見地より、愛國勞働組合全國懇話會に加盟したが、愛同の最初の意向としては皇農全國協議會と愛勞全國協議會とを各々勞農の統一體とし、これを基礎として全勞農戰線の統一を計り、愛同がその中心たらんとする豫定であつたと傳へられるが、皇農の方は

關西側を逸し、愛勞全國懇話會の方も、近藤榮藏らの主宰する日本勞働同盟が、九月二十六日その第二回中央委員會において愛同への合同を決定し合流したがしかし懇話會の他の關東側のもは愛同に加はらず、産業勞働俱樂部、總聯合、東電愛國同盟などは戰線統一促進協議會を組織し、また懇話會關西側は、前述の如く關西皇農と共に關西皇國勞農協議會を結成し、懇話會を手に入れんとする愛同の最初の意圖は實現しなかつたとみられた。

しかしながら、その後も、續々農民團體及び勞働組合の來投があつた。昭和十一年秋には滋賀、三重等の農民運動の加盟があり、續いて同年末には、東方會代議士大石大の統率する土佐農民總組合（二萬七千）の參加があつた。

三 愛同と日本産業軍との合同

かゝる合同運動のうち、最も刮目すべきものは、今村等らの指導下に長らく日本主義勞働陣營内に特異の存在を誇つて來た日本産業軍と愛同との合同である。この合同大會は昭和十二年（一九三七年）十一月二十一日の愛同全國大會を機として開かれた。合同大會は、——
一、愛同の強化を通じて愛國戦線の統一へ！

一、皇道經濟を以て戰時體制を確立せよ！

二、擬裝舉國一致・人民戰線の打倒！

一、銃後を守る國民の生活安定！

一、皇民戰線統一の先驅愛同・産業軍合同結成萬歳！

といふ合同スローガンを掲げ、新役員を決定すると共に、新愛同の「信條」及び「本質」を規定し、「綱領」を再確認した。但し「信條」は舊愛同のそれと全然同一であり、役員もその主要なる顔振れは、愛同とほぼ同一であつて、たゞ日本産業軍の新加盟によつて、今村等その他の新顔が増したのみである。今その内容を記せば、「信條」及び「本質」は、――

信 條

一、我等ハ一君萬民ノ大家族主義ニ基キ道義國家ノ再建ヲ期ス

一、我等ハ物質的對立抗爭ノ禍根ヲ一掃シ以テ産業大權ノ確立ヲ期ス

本 質

愛國勞働農民同志會ハ日本主義ヲ實踐スル經濟人ノ團體ナリ

となつてをり、次ぎに、「綱領」は、左の如くになつてゐる。――

一、我れ等が茲に勞働者及び農民と名づくるは、知識勞働者、筋肉勞働者、農民等凡ゆる勤勞者を抱括す。

二、我れ等の思想、我れ等の動向、我れ等の勤怠は我が帝國の興亡安危を左右する最も力あるものなるの事實を前提とし、我れ等は之れに關する重大なる責任を自覺す。

三、帝國は世界に全く比類なき一君萬民の精神的大家族なり。

我れ等は此の建國の大精神に甦へり、國內に於ける總ての物質的對立抗爭を排撃し、進んで結束固き皇道日本の實現を期す。

四、我れ等は皇道日本の大義に則り、神を敬ひ、人を愛し、信義、禮節を重んじ、勤勉力行、日に進み、日に新に率先して他に比類なき美しき社會を現實化し、其光をして八紘を被はしめんことを期す。

總ての利害問題は、此皇道日本の大精神を、使ふものも、使はるゝものも、相互ひに理解する所に、常に一致解決點あるべきことを確信す。

五、我れ等は愛國の至誠を捧げて、祖國日本を強化し、護國の中堅たらんことを期す。

六、我れ等は、我が國體と全く相容れざるマルクス主義の徹底的克服を期す。

七、我れ等は、非常時日本の光輝ある打開の爲に、最も力ある結束の許に、適正なる國內革新の中心勢力たらんことを期す。

この「愛同の信奉する主義」について、松本會長はいふ。——「愛同は純眞なる日本主義を指導精神として居ります。日本主義は一體主義であります。日本國を一大家族と看做して日本人たる者の凡ては皆ともに働らき、ともに楽しみ、一君の下萬民おの／＼分に應じて國に盡し相互に助け合ひ、さうして生活に安んずべきだとする主義であります。」また愛同は「何を當面の目的とするか」について同じくいふ。——「此非常重大時に當り極めて必要な事は、舉國一致、全國民の精神的統一と努力の集中をもたすべく奔走することが最も大切であります。而して之を害するものは反國體的團體でありますが故に、當面の大目的は斯かる非日本的思想、感情、機構及運動を國內から一掃すること、即ち國內階級鬭争の禍根を爲すところの功利主義、民主主義、社會主義を奉ずる團體を斷乎として解散せしめ、純正なる日本主義のみを以て速かに全國民を結束せしめることなのであります。以上は綱領に明かに示してゐます。又信條はこれを總括的に示したものであります。信條の第二産業大權の確立を期すと云ふことがあります。物質的對立抗爭は假令道義的に解決せられたとしても生活の爲めには物質は極めて必要であります。此解決を如何に

するかは産業大權の確立なしには不可能であります。例へば一體産業不振となりたる場合に資本主は段々労働者を解雇して其生活を脅かすが如き、或は労働の諸條件に對し、嚴然たる大權を確立するが如き事でありまして、此確立により資本主も労働者も安心して産業に協力し得せしむる如くすることが極めて緊要であります。此の點は是非其目的を貫徹するやうにしたいと念願する處であります」(註一)と。

(註一)以上、松本會長の言葉は、昭和十三年(一九三八年)三月二日の瑞穂俱樂部第一回時局對策攻究會席上において述べられたところである。

愛同新役員の顔振れは左の如くであつた。――

顧問 陸軍中將菊池武夫、同建川美次、同等々力森藏、海軍少將植松練磨、陸軍少將林業、
陸軍大佐小林順一郎。

相談役 歩兵少佐牧野直三、松本徳明、大石大。

會長 陸軍少將松本勇平。

總務委員長兼農民部長中澤辨次郎。

委員 政治部長兼教育出版部長今村等、労働部長兼調査部長近藤榮藏、組織部長兼婦人部長

阿部已與平、青年部長兼法律部長今里勝雄、その他山本龍介、光吉悦心、岩内勇平、矢尾喜三郎、佐々木武雄、柄澤利滿、大野元次郎、毛利力之助、萩原貞一、小川孝、田中正剛、森登守、末永鳳吉、菅忠正。

右のうち、顧問植松海軍少將は、この陣營における新顔であるが、これは人も知る如く、さきに上海事變において勇名を轟かした陸戦隊指揮官「植松海軍陸軍大佐」である。

愛國勞働農民同志會と日本産業軍との合同大會は、左の如き合同聲明書を發して、天下にその態度を明かにすると共に、また愛同大會としての宣言をも發表した。その具體的内容は左の如くである。――

合同聲明書

愛國勞働農民同志會と日本産業軍とは、日本主義勞農運動戰線統一の希望に燃えて、茲に意義ある合同の完成を果たし、新たな愛國勞働農民同志會を組織した。

唯一絶對なる日本主義を奉ずる一切の日本主義陣營は、當然統一強化に向つて邁進すべきである。従つて兩團體の合同は聊かも他日本主義團體との對立補強を意味せず、戰線統一理想實現の一過程として勞農大衆の希望と歡喜を以て迎へられ、日本主義勞農一體組合の正しき發展

への方向を示す輝しき歴史的合同であると堅く信ずるものである。

日本主義團體の合同は單なる寄合世帯の構成ではない。眞の精神的歸一の上に、不斷の内部強化を通じて生成發展を遂げ、以て、力強く維新に翼賛し奉るべきである。

斯る意味に於て、吾等の合同も一面に於ては今や國難日本が要求する精神的舉國一致、思想動員への自發的參加である。吾等の産業報國の熱意と、捨身殉國の決意とは此合同に依り嚴たる統制下に一層の力となつて發揮するであらう。

右聲明す

昭和十二年十一月二十一日

日 本 産 業 軍

愛國勞働農民同志會

宣 言

昭和八年本會創立以來の杞憂は遺憾ながら事實として現はれ遂に今回の事變となつた。皇國は今や乾坤一擲の場面に臨んでゐる。

支那の恃むは最早自己の力ではない。彼等の恃むは其背景たる列國が何れ共同して日本に加

へ來るべき壓迫の力である。支那は其御蔭に依て最後の勝利を今尙ほ信じて抵抗を續けてゐる。是等列國も亦各々自己の到益を中心として支那の期待に背かざる如く準備と策謀とを繼續しつゝあることは國際聯盟並に九國條約國會議の實況に照しても極めて明白である。

九國會議に於ては英、米、佛、露は遂に日本と正面衝突した。今や彼等は「現下の情勢に處して日本に對し如何なる共同の行動をとるべきかを考慮せねばならぬ」と宣言し聞き捨てならぬ威嚇を開始した。

皇國として此際退かんか、是れ將に亡國である、進まんか、是等列國と場合に依りては將に一戰を辭せざるの覺悟がなければならぬ。皇國は今や將に此容易ならざる場面に臨んでゐるのである。皇國民は此事實を率直大膽に認識自覺し悲壯の決心を以て此大決戰の準備に全力を傾倒せねばならない。戰爭に到らしめずして列國の威嚇を斥け得るものは獨り此準備の威力あるのみである。

此準備なくして行ふ總ての抗議は殆んど顧みられ得ないものたることを忘れてはならない。又準備さへあれば如何なる大戰も如何なる長期戰も何等怖るゝに足らない。

要するに勞働者及び農民として、將た亦一般勤勞者として、現下の時局に處すべき第一の要

諦は各々自己の持場に在りて、異常なる決意を以て此國家の大準備に到る處協力することである。吾等は此責務を自覺すると同時に、爲政者に對しては、此戰時體制の完成、國內徹底強化の爲の斷乎たる施設を敢行すべきことを要望する。

昨年十月の大會に於て、吾等は既に此事を極めて熱心に要望した。然るに未だ其施設革新の緒にも入ることを得ずして本事變に突入したることを頗る遺憾とする。

而して其革新要項は數年以來吾等の屢々宣言し來れる所のものであつて、敢て茲に再言の要はない。併しながら此際特に緊急なることは、現經濟機構の根本を改めて、苟も國內に存在する全國民の所有經濟力、資源、設備の一切を、制限ある財政の制肘より離脱せしめて、國家として其最大限度の能率を發揮せしめ得べき我國獨特の純正日本主義經濟機構を確立すること、茲にマルクス主義に感染せる勞農組合を速に禁止して之を根絶せしめ、國內動搖の禍根を一掃することである。

又戰時國內に於て、一大家族國家内の同胞として、共に欣び、共に苦しむの精神を堅持せずして依然として弱肉強食に甘んじ、或は出征軍人の勞苦を顧みずして戰時成金を夢み、或は自己の利益の爲に國家の利益を無視するが如き者は、吾等は之を非國民として待遇する。

吾等は又政府が此際最も徹底せる手段を以て速に戰時不足品對策を定め、其配給の公正、並に物價騰貴防止に關しては頗る斷乎たる方法を採用し、同時に之に關して全國民に、重大なる道義的協力義務を自覺負擔せしむることを要望す。

今回日獨伊防共協定の締結は、皇國體と絶對に相容れざる共產主義排撃の爲に偉大の力を添へたるものであつて、吾等の衷心より慶賀に堪へざる所のものである。併しながら本協定を軍事攻守同盟と同一視して、之に信倚し、前述來の自主的國防を忽にするが如きことは、極めて危険である。吾等は防共聖業に對する獨、伊兩國の協力を感謝すると共に、現時局に對する緊張は之が爲に聊かも弛ましむることなく、全國純忠の士と相携へて勇敢に奮闘すると同時に、力強く要路を鞭撻して、終に未曾有の大難關を突破して、光輝ある飛躍日本の大勇姿を中外に宣揚せずんば止まざるの決意を有す。

右宣言す。

昭和十二年十一月二十一日

愛國勞働農民同志會全國大會

四 愛國勞働農民同志會の勢力

以上の如き發展過程を辿れる愛國勞働農民同志會の勢力は、昭和十三年（一九三八年）三月現在の數字によれば全國十七縣、會員八萬と號せられ、また、東京城北の岩内善作指導下の勞働團體約三十の加入も傳へられてゐた。その會勢の旺んなる、昭和十二年十一月の大會の代議員の顔振れは、松本會長の叙述によれば、「工場主あり、資本家あり、勞働者あり、地主あり、青年代表あり、婦人代表」あり、それら各社會層が「滿場を埋め極めてなごやかな光景を呈した」のであつた。その加盟團體は左の如くであると發表せられてゐた。――

長崎縣聯合會（勞働組合七、農民組合二）

福岡縣聯合會（勞働五支部）

山口愛郷聯盟（勞働）

徳島縣聯合會（勞働組合三）

土佐農民總組合

高知支部（勞働組合）

神戸労働同盟

播州一般産業労働組合

和歌山労働者同盟

大阪府聯合會(労働組合五)

愛同京都支部(愛國公正會)

京都労働支部

京都支部(舊産業軍)

更進合同労働組合

滋賀勤勞民衆同盟

興農自助會

愛知皇國農民組合同盟

岐阜皇國農民聯盟

三重支部

三重愛國農民聯盟

山梨愛國農民聯盟

神奈川聯合會（勞働組合三）

富山勤勞農民同盟

新潟皇國農民聯盟

東北皇國農民聯盟

茨城皇國農民聯盟

前橋支部

川口支部

本所支部

非公式加盟

城北勞働協和聯盟

山陰聯合會（農民）

旭川勞和會

昭和十二年一月、日本にいはゆる鐵饑饉起るや、愛同は川口市六百の鑄物工場のために起ち、

これを以て「單に國民生活の安定並に經濟國防上、殊に現下の非常時局に照して許すべからざることであるのみならず、國體思想擁護上よりしても斷じて看過すべからざる重大問題」なりとして、政府に善處方を陳情した。蓋し愛國團體として一寸風變りな運動であつた。

第六節 大日本青年黨の生誕

一 橋本欣五郎大佐の出馬

二・二六事件の善後處置として、寺内壽一陸相の手によつて一聯の肅正人事異動が行はれたことは既に述べた通りである。同年八月一日には、その最後のものとして三千名に亘る陸軍大異動があつた。この肅軍異動によつて建川美次中將、小畑敏四郎中將が豫備役へ編入され、平野助九郎少將が待命となり、柳川平助中將が參謀本部附に轉補せられた。

この時、わが橋本欣五郎砲兵大佐も待命となつた。彼は陸士第二十二期生にして陸大出の俊秀であり、ロシアには長く滞在してよくその事情に通じてゐた。「橋欣」の愛稱を以て呼ばれる彼の名は、種々の機會に、吾々の耳に親しかつたものである。當時三島野戰重砲兵聯隊長たりしこの

橋本大佐が待命となつたのである。何かやるであらうと人々は彼の出所進退に満腔の興味を寄せ
てゐたのであつた。

果然彼は、九月一日に三千枚に上る挨拶狀を諸方面に送り、自己の將來の抱負と信念とを述べ
た。その内容は次ぎの如きものである。――

橋本大佐の挨拶狀

謹啓殘暑未だ酷しく候處貴下益々皇國の爲御奮闘の段感激の至に奉存候

扱て小生從來現役軍人として心血を國運の進展に傾注し宏泰の彌榮を期し粉骨碎身乍憚多
國家的大業に貢獻せし處有之候も事未だ半途此處二十有六年の陸軍生活を去り豫備役に編入せ
られ全面的活動に努力すべく天意をうけ申候此時に際して驟つて我國家の現狀を觀るに國際關
係に於ては四面楚歌重圍に陷入せし狀態にして恰も歐洲大戰時の獨逸に彷彿たり加之國內亦亂
雜蕪雜にして統制を缺如し歸一する處を知らず皇國の將來實に憂慮すべきもの有之候。

故に吾人は雄飛一番舊來一般の通念より脱出し直に國家の總意を完全に 天皇に歸一し奉り
國力の最大限を遺憾なく發揮すべく國家體制を新定石に移すにあらざれば此の難局を切抜け光
輝燦然たる大和民族の歴史的使命を遂行する事絶対に不可能を確信仕候。

而して之が具現のためには吾人は忠誠一本和衡協力國家の難局に向つて赤誠奉公するの決意最も必要と存候。

神々も照覽あれ此意味に於て小生現役を去ると雖も一日の偷安を許さず眞に忠誠眞摯なる國民の戰線に伍し驚鈍を盡し國運の進展に奉公致す覺悟に御座候由つて茲に豫備役轉入御通知旁々小生日下の微衷を披瀝し今後倍舊の御友誼御協力の程唯々奉懇願候小生抱持する思想は左の如し此方針に據り邁進すべき決心に御座候へば御參考御高覽に奉供候 敬白

橋 本 欣 五 郎

橋本大佐の挨拶狀は、その次ぎに「飛躍的大日本國家體制」と題し、「一、精神的飛躍 二、經濟的飛躍 三、外政的飛躍 四、軍備的飛躍 五、政治的飛躍」の各項に亘る主張を説述してゐる。その内容はその後直ちに「橋本欣五郎宣言」——「飛躍的大日本國家體制大綱」と稱するパンフットとして天下に公表せられた。而してそれは、そのまゝ結黨式における大日本青年黨の宣言中に採り入れられたのであつた。

右の挨拶狀に示された方針を具體化すべく橋本大佐は積極的に新黨樹立に進んだ。國家主義團體は前々より長く期待せし橋本大佐の新黨計劃のことゝて、これを中心として、愛國戰線の一大

團結を計るべしと待望した。

二 橋欣黨の精銳主義

しかるに、橋本大佐の新黨は嚴密なる精銳主義をとり、既成愛國團體に對して批判的嚴正態度を以て臨んだのであつた。これには、主として愛國政治同盟の陶山篤太郎が參劃し、行地社の松延繁次や、齋藤首相暗殺事件の醫學博士今牧嘉雄らも謀議に與つた。かくして、千駄ヶ谷の明治神宮附近の故横田千之助邸を買收して本部となし、新黨結成工作を進めて行つたのである。

結黨式は十月十七日早朝、神嘗祭の佳節を卜して明治神宮において行はれた。黨員僅かに八名。黨員數からいへば、一九一九年一月、ミュンヘンにおけるナチス黨の結成にも比すべき淋しさであつた。蓋しそれは、愛國戰線統一運動の種類別の第二種に屬する尤なるものであつたといへよう。その所期するところは、既成愛國團體の未だ鋤を入れざる處女地帯よりいかりした優秀青年分子を求め、これを中核として愛國陣營の統一を實現せんとするにある。その志や雄且つ大であるが、それには種々の困難も伴ひ、また、この點について「相手にされざる」既成愛國團體の中には慊らず感ずる向きもあり、橋本大佐の出陣に愛國戰線の一舉的建直しを期待した人

々は少なからず失望したとも傳へられてゐる。

三 大日本青年黨の綱領

結黨當日決定せられた「大日本青年黨宣言」は、さきに公表せられた「橋本欣五郎宣言」——「飛躍的大日本國家體制大綱」と内容を同じくするものである。今これを左に紹介する。——

大日本青年黨宣言

世界ハ今ヤ、唯物的自由主義制度ノ行詰リニヨリ、茲ニ一大更新ヲ必要トスル歴史的轉換期ニ直面セリ。然ルニ世界各國ハ、何レモ舊國家生活姿態ヨリ未ダ完全ニ更生シ得ズ、其實力相伯仲シ巔然他ニ光被スルニ足ル體制ヲ有スル國家無シ。

此時代ニ於テ一步ヲ先ンジ、優秀ナル國家體制ヲ確立スルモノハ、正ニ世界ニ光被スルヲ得ベシ。

惟フニ八紘一字ノ顯現ヲ國是トスル我國ハ、即時其本然ノ發揮ニ依リ、國民ノ全能力ヲ擧ゲ天皇ニ歸一シ奉リ、物心一如ノ飛躍的國家體制ヲ確立シ、光輝アル世界ノ道義的指導者タルヲ要ス。

此意義ニ於テ左ノ新體制ヲ提唱ス。

一、精神的飛躍

我國體ノ尊嚴ハ無上絶對、普遍的眞理ノ顯現ナルコトヲ國民ニ感得徹底セシムルト共ニ、本體制ヲ以テスレバ、當然世界ノ道義的統一ヲナシ得ベキ確信ヲ信仰のナラシメ、且ツ現唯物的の自由主義機構ノ下ニ萎微シツ、アル我民族ノ純正明朗ニシテ不偏中庸・睿智的・武勇的・仁義的ナル高級特質ヲ進歩的形態ニ於テ再生堅持セシムルハ勿論、益々之ガ助長發達ヲ策シ、精神文化ノ中樞トス。

二、具體的飛躍

經濟ハ之ヲ營利主義ノ桎梏ヨリ開放シ、資源、勞力及技術ヲ價值ノ根源トシ、國家之ヲ統制管理ス。

生産ニ於テハ勞力、資源ノ存スル限り、調整シタル國家企業ヲ最大限ニ擴張シ、國民生活ヲ極度ニ向上セシムルヲ第一義トシ、飛躍的増産ヲ敢行ス。

勞力ノ能率ヲ最大限ニ發揮スル爲、近代科學ヲ極度ニ利用ス。

貨幣ハ資源勞力技術ニヨリ生産セラル、價值質量ヲ其準備實質タラシメ、國家之ヲ發行シ、單

ニ交易的價值ヲ有セシム。

貿易ハ國家之ヲ管理シ、原則上國家的必要範圍ニ制限ス。

三、外政的飛躍

我版圖内ニ於テハ緊密ナル有機的體制ノ下ニ、各民族ノ特質ヲ發揮セシメツ、制限的自治ヲ行ハシメツ、全體的二民族文化ノ向上ヲ圖リ、皇化ノ實體化ヲ行フ。

此方式ヲ以テ逐次世界ニ及ボス。

四、軍備的飛躍

本體制ノ實行ニ對シ、主義ヲ異ニスル諸國家妨害ヲ爲ス場合、隨時之ヲ克服シ得ルノ絶對的軍備ヲ完成ス。

軍備ノ主體ハ無敵空軍トシ、軍ノ航空機タルノ觀念ヨリ脱却シ、國家國民ノ航空機タルノ觀念ニ至ラシムルコト、恰モ古來我國民ノ日本刀ニ對スル信賴ト同様ナラシム。

五、政治的飛躍

政治ハ本國家體制ノ完成ニ全能力ヲ集中シ、何等ノ徒勞ナカラシムル爲、之ヲ完全ニ信奉スル全版圖ノ同志ヲ以テ其指導ニ當リ

天皇ニ責ヲ受ク。

右の宣言を「橋本欣五郎宣言」は説明して曰く、「唯物的自由主義的舊國家機構は、自己の體制維持の爲に二つの培養素を必要不可能とす。民族的搾取、階級的搾取之なり。」歐洲大戰は、この矛盾と罪惡とに判決を下したが、その結果「帝國主義的支配搾取より脱逸せんとする純正民族主義の勃興、資本主義的國家機構に反逆せんとする無産階級の舊機構よりの脱離並に舊世界支配國家間に於ける對立抗爭との激化を來せるのみ」であつた。英米佛の不安は勿論のこと、「自由主義を脱却せんとするナチス、ファッショは、國力を集中結束して國民的團結を鞏固ならしめつゝあるも、其期する所は、堪へ難き外壓に自己を防禦し反撥せんとするに過ぎず、何等明日に光明を期待し得るものなく、唯盲目的猪突を事とするのみ、而して亦、ソヴェート・ロシアや既に階級的第三インターナショナルの理念を離れ、寧ろ一國社會主義的自國結束、自己防衛を主とするに至る。」即ち「英米佛等は沈み行く夕陽、既に昔日の勢威なく、ナチス、ファッショは蒼空に懸る弦月、徒らに鋭く、蘇聯は宵の明星、光芒長しと雖も殘夜を照すのみ。」これらは「何れも太陽日本の曙光に浴して、初めて蘇生し得べし。」かゝる行き詰り崩壊する舊世界秩序を「統一し、世界秩序を再建する所以のもの、實に世界第二の開闢に非ずして何ぞや」である。

大日本青年黨は、「國民生命を維持開展せしむる爲には、其精神的中心確乎不動たるを要す」となし、「而して我大和民族の精神的中心は 天皇にして萬古不易なり」と信ずる。また「經濟は天皇の世界的光被具現の物質的基礎」であり、黨の「經濟的飛躍體制は、即ち 天皇歸一經濟」である。然るに現下の經濟にては、個人的自由主義經濟橫行して「甚だしきは國家を以て個人の利益追求の具に供する不逞の徒輩を生ずるに至る。」……「一方に於て資本主義の止場を主張するものに社會主義あり。生産手段の國有社會化を主張する點に於て資本主義に勝るも、其根本精神たるや、唯物主義個人主義の變形たる階級闘争主義にして、徒に人類社會を階級闘争の禍亂に導入せんとするもの」である。「我等大日本人の理想は、前二者と全く異なる世界觀に出發す。我等は我國體の本然たる八紘一字四海同胞の理想に基き、個人主義的營利機構を止揚し、全體主義的國家經濟を樹立し、國家生活の完成と世界文化建設に貢獻せんことを期す」ものである。特徴的なは、大日本青年黨の民族政策である。元來、青年黨は「分解の過程にある世界國家體制を、飛躍的大日本國家體制により再編成し、各民族各國民悉く其特質を發揮せしめつゝ道義本然の發現たる大日本國家に歸一朝宗せしむる」ことを「外政の根本方針」となすものであるが、それは「道義に立脚せる擗取なき新世界國家體制の建設を企圖する」ためである、かゝる見地より、日本版

圖内の各民族は、制限的自治を許される。「各々充分其特質を發揮せしめつゝ、更に大日本國家に統一せしむ。自治を行はしむると同時に是を制限する……各民族は可能の範圍内に於て自治せしむるも、其軍事外交の如きは國家之を掌り、又統治の主權者は天皇にして、各民族は相協力相自治して全體的國家主權の統治下に立つ。……自治は恣意に非ず。より大なる統一に向ひて、自己を練磨し充實し行くこととなり。……而して各民族は其文化の向上に於て前後優劣なく、所謂機會均等の原則に立ち、全體的に民族文化を向上し得べし。……これをみて、他の帝國主義下の諸民族も日本に來り投ずることを庶幾すべく、「外政の眞諦が皇化の實體化に在る所以」である。「我外政が、皇化の實體化により、世界人類をして悉く其恩澤を蒙らしむるを目的とする民族的インターナショナルとなすもの、實に道義的紐帶を以て分解乖離の世界各民族を再編成せんとするの謂なり」と。

次ぎに、「大日本軍備は、皇道を世界に宣布する神威」である。即ち「八紘を一字と爲し、地球上より國家鬭争、民族鬭争を除去し、眞正なる平和を招來せんが爲に、天皇親率の下、天軍として鍛鍊せられたるもの、之實に我軍備」である。而して、無敵軍備建設に航空機を主要視する所以は（一）廣義國防の見地、（二）緒戰戰勝の見地、（三）戰爭形式變化の歴史的見地、（四）飛行機發

達の見地より然るのである。

最後に、政治は、「天皇に集中歸一せる全國力を以て國家を統制運営する國家活動」であつて、「其發動は八紘一字、道義立國の皇謨となり、全國民は大御心を體して此の天業を翼賛し奉るを以て政治行爲の本分」とするものである。「我政治の根本精神は祭政一致、政教合一にして、巍々たる大理想を目指し天地の化育に參ぜんとする偉大なる文化建設活動」である。而して、「政治の大權は 天皇に在り。政權の發動は皆天意に則り、萬民之を翼賛す。天に二日なき如く、政治に二途なし。大御心に奉行する所以は、唯一絶對にして無二、彼此相對の境地を超越す。故に我國家に二つの政治意思なく、二つの政治團體あるべからず。舉國一致、唯一黨あるのみ。」

こゝに於てか大日本青年黨の主張する政黨の本質が明かにされる。

「政黨は最も深く政治の本體を明悟し、公平無私殉忠至誠の同志の組織する中核的指導團體にして、國民は原則上全部黨員たるべきも、常に中核指導部の指導を得て、其任務を果し得べきものとす。一國一黨の正に世界的規模に於て確立せしむべき所以なり」と。故に「二大政黨の對立、多數決主義に基く自由主義政治は宜しく之を排すべきものである」。

然らば、かゝる政黨の黨員は、いかなる性質をもつか？

「一國一黨の黨員は、本體制を信奉し、皇謨の翼賛に献身奉仕する選民を以て構成すべし。其民族の如何、社會階級の如何を問ふべからず。八紘一字の大御心に照せば、世界の全民族は總て之天皇の赤子なり。然るが故に我國家理想に祭り會ふ者、即ち大日本の皇道精神に覺醒し、其道を信奉し、本國家體制の實現に献身奉仕する者、之一國一黨の黨員たる有資格者なり。而して如何に大日本國民たりと雖も、以上の如き覺悟を有せざるのは黨員たるの資格なし。」

一國一黨の政治翼賛は、いかなる方法において實現せらるゝか？——「一國一黨實現せば、翼賛方法の立案、即ち政策案の討議決定は黨内に於て行ひ、其實施に當つては舉黨以て其指導を擔當し、任務を遂行すべし。斯くて、此黨は、黨を擧げて皇謨の實現に協力し、翼賛の實を盡し、我大日本天皇に對し奉り、忠誠以て責任を受くるもの」なのである。

大日本青年黨の容言、及び綱領の實際は以上の如くである。なほこれを數桁するものとして、青年黨には「本則」及び「黨員守則」と稱するものが定められた。左の如し。——

本 則

第一條 本黨ハ大日本青年黨ト稱シ本部ヲ大日本東京ニ置ク

第二條 本黨ハ皇業恢弘ニヨリ道義世界ヲ建設スルヲ以テ目的トス

第三條 本黨ハ黨ノ目的實現ニ献身奉公スル同志ヲ以テ組織ス

第四條 本黨ハ統領コレヲ統轄ス

第五條 本黨ハ黨務執行ノタメ別ニ細則ヲ定ム

黨員 守 則

一、黨員ハ宣言、主張ノ實現ニ挺身シ、他ヲシテ同化セシムベシ

二、黨員ハ忠節、禮儀、武勇、信義、質素ヲ旨トシ國民ノ儀表タルベシ

黨員の入黨宣誓式は、總て統領又は統領代理者の下に神前において行はれることゝなつてゐる。結成時における青年黨の役員は、統領が橋本欣五郎、書記長が松延繁次、總務部長が陶山篤太郎、調査部主任が西本喬、庶務部主任が藤本正義、組織部主任が大川兼一であつた。（現在は松延、陶山等は退き、來間恭、雨谷菊夫等が中心となつてゐる。）

第七節 時局協議會の結成

一 維新制度研究會の創立と愛國政治同盟の解散

小林順一郎の愛國勞働農民同志會及び橋本欣五郎の大日本青年黨の二大結成を得て、日本の國家主義戰線も統一の二大據點を得たわけであるが、各團體の利害の錯綜せる、また各團體の歴史、原則の相異せる、統一運動はなかく困難であつた。

かゝるうちにあつて、日本主義思想を確立し、以て日本主義陣營の統一に原則を與へるために、維新運動の道義的活動、自由主義政治形態否定をスローガンとする維新制度研究會なるものが結成せられた。これは、その發起人の顔振れ及び精神において、さきの二月會の繼續ともみらるべく、日本の議會制度の確立を目指したものであることが分る。即ち日本主義研究所の松永材、國民協會の赤松克麿、その他木島完之、前田種雄、津久井龍雄、富田鎮彦、森清人らが發起人となつて、昭和十一年十二月三日に創立式を舉行したものである。日本主義研究所、國民協會、大日本生産黨、日本精神研究協會、惟神館、新日本國民同盟、直心道場等、東京地方の國家主義團體の

代表六千餘名が參加した。そのなかには、大森一聲、宮崎龍介、倉田百三等の顔もみられた。

當日決定せられた役員は、委員長には松永材が就任し、常任委員に赤松克麿、木島完之がなり幹事には米持格夫、森本耕が、それ／＼就任した。維新制度研究所は、演說會、パンフレット等を重なる運動手段となし、自由主義政治形態否定、輸入的政黨政治絶滅、日本的議會制度等のスローガンの下に活動を行ひ、十二月中旬には東都の各所に政黨政治壊滅演說會を開催した。

維新制度研究會發會式の決議は、左の如し。――

決 議

庶政一新の基本的且つ先決的内容は國體原理を明徴して自由主義政治形態を改革するにある。現在の個人主義に立脚したる朋黨的政權爭奪の政治形態が我が一國一家の道義的全體主義と本質的に背馳し其の結果政治を荼毒し道義を破壊し、國運の進展に大なる障礙をなし來つた事は明白である。彼等政黨政治家は憲法擁護に名を藉り故意に憲法政治即政黨政治なりと妄斷して國民を欺瞞し功利的亡國的政治形態を維持すべく狂奔しつゝあるが、我が帝國憲法の精神は皇國獨自の議會制度の確立とその機能の發揮を要求し、斷じて輸入的議會中心政治と相容れざるものと確信する。今や内外の時局急益々迫を告ぐる時、我等同志は茲に立つて自由主義政治形態

絶滅のため一大思想運動を展開し、政黨政治家の猛省を促し、一方軍部をして皇軍の使命に鑑み舉軍一體の下庶政一新に邁進せしむべく鞭撻し、他方國民に正しき認識を與へ、純正なる國論を喚起し、以て維新運動促進に一臂の貢獻を致さんとするものである。我等は同心協力、一切の派閥感情を清算し、強正なる統一力を以て飽くまで初志貫徹に直進せんことを誓ふ。

以上の如く、いろ／＼と錯雜、複合せる動きを通じ、全日本の國家主義陣營は、統一への途を辿りつゝあつた。この機運を捕へて大同團結せられたものが、次ぎに擧げる時局協議會である。これは、緊密なる一政黨ではなく、緩やかなる協議機關ではあるが、興味の中心は、これを出発點として生み出さるべき新政黨にあつたわけである。

かゝる統一の機運を前にして、昭和十一年十一月三十日、小池四郎を首盟とする愛國政治同盟は解散した。昭和七年五月の赤松派の「日本國家社會黨」の結成以來、赤松一統の離脱、日本勞働同盟の分裂、八月の改名など苦難を重ね、殊に十一年二月の總選舉において小池四郎が落選して以來、悲運を啣つてゐたものであつたが、九月、幹部の有力者陶山篤太郎が大日本青年黨の結成に參劃し、日本産業軍また同盟を去つたので、つひに支へ切れず、一つには新黨結成への機運を助長すべく、こゝに發展的解消を遂げることゝなつたのである。その解散宣言書には、「新政

黨結成の機を促進せしめんとする發展的なる目的を以つて我が愛國政治同盟は茲に決然その組織を解體し一致、その大目的の達成に邁進すべく以つて宣言す」と悲痛なる決意を述べてゐる。

二 時局協議會成る

二・二六事件直後より昂揚し來れる國家主義戰線の統一機運は、十月下旬より漸くその具體的巨歩を進められるに至つた。即ち三六俱樂部の小林順一郎が中心となり、それに淡交會の江藤源九郎、大日本青年黨の橋本欣五郎、大日本生産黨の吉田益三、總聯合會の高山久藏、國體擁護聯合會の入江種矩らが、澁滞せる愛國陣營の氣運を打開して、大同團結を實現すべく、より／＼協議を進めたのである。その結果、十二月十五日、既成國家主義團體幹部の主要なるものを殆んど網羅する時局協議會なる聯絡機關が結成されたのである。その構成は個人加盟であつて、團體の自由は保障してゐるが、實質的に一の聯合體であることは否み難い。結成に際し、新聞記者に對し手交せられた説明書によれば、時局協議會(時協)は「現下の急迫せる皇國內外に對處する爲に……各層、各部門に於ける全日本主義運動の連絡、協調並に強化を目的」とするものであつて、その特異とするところは、「從來の革新運動者首腦者のみの連絡提携に依て生れたものではなく、……現

狀打開に腐心する國內各層全面に亙る有志の發意に依りて期せずして成立したものであつて、時局打開の一大國民運動の爲め相互間の緊要なる連緊協調を目的としたる點である。その根本方針は、「所謂日本主義運動者間に於ては事實上既に一致して居るのであつて、到底一時の糊塗的政策に依つては此難局の打開は不可能であり、結局根本の禍因に遡り、國體を明徴にし、教學、政治、經濟、外交等其他各般に亙りて其根基たる思想上の誤謬を匡し、先づ大義を明かにするといふことでならなければならぬ。約言すれば……速に内外に對處して皇道政治を確立するが爲めの常設的打合せ會と認めらるべきものである。」「從つて今後の動向としては、先づ國體の本義に悖る所謂功利主義、民主主義的思想に基く諸勢力清算の目的に向つて鋒を向けることゝなるであらう。」「しかしながら、「斯くの如き日本主義運動を右翼運動と呼び、其目標とする所を『ファッショ』と解するが如きは、世界に比類なき國體原理に副ふたる眞に我が國獨特なる運動であることを顧みざるものであつて實に思はざるも甚しきものである」と。

右の説明書と同時に「入會案内狀」なるものが發表せられた。それは、時協の意圖するところを、右説明書以上に卒直に表明したものであるが、その要旨は、「……數年以來、憂國の諸彦が各々盡忠の至誠を以て、或は團體とし、或は組合とし、或は個人として各方面に於て、時局打開の

爲に尠ならず御努力相成居候に拘はらず、大局上情勢の推移は必らずしも意の如く相成らざるもの有之、非常時は愈々深刻を加へつゝある今日の有様は寔に憂慮に堪へざる儀と奉存候、之には諸種の原因可有之と存候へ共、一には各層、各部門、各地方の御努力が其時機、其動向等に於て必らずしも相協調せずして全局に及ぼす效果十分ならざりしに由るもの尠ならずる儀と奉存候 目下の情勢は最早斯かる有様に放置し得べき場合には無之と確信罷在り、殊に世界に比類なき一大家族國家内の國民として皇運扶翼の爲に各々私心を去り、小異を捨てゝ大同に就き、互に短を補ひて和樂協同し、國難打開に邁進の活模範を示すべき日本主義者相互間に於ては此際一層大義に向て連絡協同の實を挙げ候様致度と被存候 右の如き理由に基き過般來同憂の人々相集り何とかして各層、各部門、各地方の有力なる各位間に於ける相互の御連絡、御談合の機關を設けてはとの議相起り候様の次第に御座候 勿論之は單なる連絡、談合の機關に有之、之に依り各團體或は各組合或は個人各位の獨自の御行動を聊かなりとも制肘すべき性質のものにては無之、却つて之が爲に各團體或は各組合或は個人各位の各々獨自の御立場に於ける御努力が全局上一層效果的なるを得ることを目的と致すものに外ならず候 又此目的達成の爲には本機關内に於て會員相互間の連絡事務に遺憾なからしむると同時に各位の御所見御交換の機會を勉めて屢々作らざる必要有

之、之が爲に特に調査部を設けて重要問題毎に主なる各位の御參集を煩はして十分に相互啓蒙の實を挙げ、且世話人に於て時局に處すべき各位の御提示案を取纏め、議案として適時御協議を相願ひ possible の範圍に於て意見の一致を求むる如く致すを實效的かと思考致居様の次第に御座候 勿論右の如き意味に於て、別項記載の如き規約の許に、今同時局協議會を設くる事に相成り、下名等が全く個人の資格に於て不肖を顧みず世話人として對て犬馬の勞を採ることに相成申候次第に御座候 何卒本趣旨に御賛同の上奮つて御入會の榮を得度此段謹んで御案内申上候」といふのであつた。また、その「案内狀」は、客員として承諾せしものとして、「公爵一條實孝、五百木良三、男爵井田盤楠、男爵井上清純、堀口九萬一、大山卯次郎、渡邊瀧太郎、建川美次、匣瑳胤次、内田良平、葛生能久、伯爵柳原義光、小林省三郎、安藤紀三郎、男爵菊池武夫、子爵三室戸敬光」(イロハ順)らの諸名士を挙げ、世話人として、「入江種矩、橋本欣五郎、長谷部照倍、渡邊良三、吉田益三、高山久藏、黒澤圭一郎、小林順一郎、江藤源九郎、赤崎寅藏」(イロハ順)の十名の名を連ねてゐた。

發會式において發表せられた時局協議會の規約は、時協の目的を規定して「時局協議會は速かに皇道政治を確立し急迫せる時局に對處する爲め各層各部門に於ける全日本主義運動の連絡、協

調並に強化を以て目的とす」とし(第一條)、このために會員は、「此主要目的達成の爲めに常に小異を捨て、大同に就き日本主義の美德たる和衷協同の精神を發揮するものとす」(第二條)となしてゐる。執行機關は「世話人會」であり(第三條)、世話人は「一、調査部を設けて各種原案の作成、二、會員總會の決議を現實化せしむる爲めの一切の事務、三、各會員間の連絡」を掌ることゝなつてゐる。

かくの如く、時局協議會は、發起者の言によれば「豫てより問題であつた所の日本主義運動間の全面的の常設連絡機關」である、而してこの日本主義運動とは同じ言によれば、「とりも直さず國體明徴運動である。」「元來日本主義といふことは、我が國獨特なる國體道義に律する主義といふことであつて、我が國は一君萬民、一大家族國家たることを的確に意識して、眞に家族的溫愛の情を以て、同胞相互間の關係を律するといふことの活模範をみづから示すに非ずんば日本主義運動者といふことは出来ない筈である。獨善排他、國內に對立を繁生せしむるといふことで斷じてあつてはならない。」「個人主義、功利主義(は)……同胞を悉く他人扱ひとなし、冷たき權利義務關係の範圍で自己中心にのみ事を考へるといふのである。斯くの如き反國體的思想を九千萬同胞より親切に取り去り盡さんとする運動が日本主義運動の大切な一面であるのではあるまい。

か。」然るに、「日本主義運動に盡力を標榜しつゝある多くの人士中に此事を顧みずし極めて偏狹に小異を捨てゝ、溫かく大同に就くことを(中略)拒ばむといふが如き事であつたならば、其事自體が甚だ非日本的であつて、斯かる人々は宜しく日本主義といふ看板を取除かるゝ必要があらうと思はれる。然るに従來第三者より觀る時、日本主義運動者相互間の關係には斯かる矛盾が甚だ尠くなく、夫れが今迄此大切なる運動の全局に少なからず支障を來してゐた譯である。」即ち、「數年以來全國各層に亙りて蜂起し來れる日本主義運動が、各部面に於て、各々自主的に力ある行動をなし來つたことは誠に結構の事ではあるが、各々が多少獨善的に流れて、排他相剋の憾なきに非ず、之が爲に入會案内狀にもある如くに、各部、各方面の努力が其時機、其動向に於て相協調せざりしこと屢々なりしのみならず、時として努力相殺の現象を呈して、全局的に所期の効果を擧げ得ざりしことは何人も遺憾とする所であつた。斯かる有様では結局打開の原動力たる昭和維新を要機を失せず斷行の大勢を造ることは到底望むべからず。然るに國際時局は愈々急迫を告げて來たといふ實に已むに已まれぬ情勢となつた譯である。此の情勢の理解と一般氣運の圓熟とが終に今回の時局協議會の結成といふ慶賀すべき事實を生み出したといふ譯である」と。

この時局協議會の廣範圍に亙れることは、その發起者の一人が、「同協議會の客員、世話人、並

に……會員の顔振れを觀ても其内の誰れかを通じて、全國各層、各部門の日本主義者（勞、農方面も含めたる）の大部分は本協議會の連絡内に一先づ入つたこととなるのであつて今日の時局に及ぼす影響の頗る重大なるものあるは言ふ迄もないことである」と自信してゐるのをみても分るであらう。

かゝる廣汎なる顔振れを網羅し、日本主義運動統一工作に一大進展を招來すべき抱負をもつた時協は、十二月二十一日、第一回會員總會を開き、世話人のほか各派百四十名の會員が顔を揃へ、客員一條實孝公、井田盤楠、井上清純、菊池武夫の各男、建川美次陸軍中將、小林省三郎海軍中將らも集まり、小林順一郎大佐、吉田益三、橋本欣五郎大佐が主人役となつて活躍した。第一回會員總會は、「全面的國民運動の第一目標は最も速かに既成政黨を清算して政界の最大禍根を一掃することである」として、左記要旨の如き聲明書を發した。――

聲 明

皇國內外の情勢は洵に容易ならざるものがある。特に皇國を中心とする急迫せる國際情勢に對し、一朝其舉措を誤らんか、國運の前途は、實に測り知るべからざるものがある。之が打開を旨指して深く其禍因に遡り、非常の決意を以て拔本塞源の措置を講ぜねばならぬ時機に際會

した。實は其時機すらも既に遲きの憾があるのである。

抑々内に充實強化なくして、如何にして堅實なる外交はあり得ようぞ。實は今日の如き一般情勢馴致の眞因も憂ふべき國內事情に根ざすものが頗る多いのである。即ち按本塞源の處置も國體の本義を明徴にし、國家活動の基本たる國內政治の是正を以て第一着手とすべきは論を俟たない。換言すれば日本主義を透徹せしめ、皇道政治を確立することが、總ての先決問題である。是れなくして對外問題の光輝ある解決は到底庶幾することが出来ぬ。然らば日本主義とは何ぞや。

苟くも愛國臣民として、一切を捧げて皇運扶翼に終始するは日本主義である。富貴榮達、放肆享樂其の事自身を以て行動究極の目的とするものは功利主義である。

皇國全體一國家たるの事實を明確に認識し、道義と相愛とを以て智能、材幹の推力となし、總ての物質問題をして之に隨從せしめんとするは日本主義である。……協同、和偕、明朗邁進、國家的飛躍の原動力は一に日本主義に胚胎する。故に日本主義と功利主義との間には妥協はない、抑々政策には互讓妥協を許すも、正邪順逆には妥協の片影すら容るゝべきものではない。天皇の臣民は全部が日本主義者でなければならぬことは必然の道理である。

憲法發布せられてより既に五十年に垂んとしてゐる。憲法は 天皇統治の大道であり、同時に皇運翼賛に參する臣道の軌範であり、肇國本然の日本主義を顯揚せるものなるに拘らず、之に格違すべき政治運用機關の現状は何事ぞ。

帝國議會は立法豫算等を通じて宏謨を翼賛すべき機關として、臣道躬行の神聖なる殿堂である。即ち階級利害の代表機關でもなく、政權爭奪の壇場でもない、……然るに現在我國の議會を觀るに、其職務運用の母胎をなせる既成諸政黨、勿論無產黨を含めたる此等の諸黨は悉く民主主義の主張に其發生の機縁を有し、……是等政黨が過去の日本に殃したる事實を見來れば、歴々として其然る所以を指點することが出来る。

功利主義に依りて結成したる政黨は單に議會の占領に甘んぜず、更に進んで行政、司法等の諸機關にも侵入して惡政の淵源となる。……

……彼等が政黨政治と誇稱する内容は同胞相剋であり、憲政常道と大呼する實質は政權爭奪の妥協條件を内規せんとする詐謀に外ならぬ。其精神は正に違憲であり、日本主義の蹂躪である。……

日本主義こそは、斯くて憲政確立の運動であらねばならぬ。斯くて一切政治の淨化と向上の

發酵素でなければならぬ。全的不安一掃の唯一無二の根源は此運動以外には斷じてない。

過去數年來の政局を向顧して、遺憾此上なきものは、義憤遺る瀬なき多くの人々が、秋霜の國法まで犯して自ら非合法の死地に赴きたる悲壯の事實である。此事實を何と觀て然るべきであるか。彼等は悉く功利主義的政治の支配に激して法を觀るの追がなかつたのだ。明かに既成政黨は功利主義的政治の大支柱として、彼等義憤の大因をなしたことは人皆周知するところであらう。然かも若し政界の現狀が今日の儘に續くならば、此深刻苛烈なる睨み合は永久に解消し難いものであることは自明の理ではあるまいか。何が故に解消し得ないか。日本主義は到底功利主義の前に屈服することが出来ないからである。

若槻(犬養?)内閣倒壊し、齋藤内閣成立して、以來今日迄の政局推移の蹤跡を仔細に點檢すれば、意識的か將又無意識的かは別として、尠なくとも日本主義と功利主義とを妥協せしめんとするか、乃至は其間に妥協點を見出さんとする政治であつた。然し其は不可能を可能となさんとし、火と水との妥協を策する徒勞に過ぎなかつた。國體の明徴は斯かる老嫗なる情實より生まるゝものでは斷じてない。日本主義が功利主義を掃蕩することによりて、日本主義に即する獨自の議會機能の全的發動となり、同じく行政司法の機能と相待ちて、國體と體合する政治の

更生、國策の遂行が生まれ、初めて難局は打開され、國民生活の安定も茲に求むることができるのである。

皇國が今や數ヶ國の武力と經濟力との侵攻に對抗し、形勢の危急、且に夕を測り得ざるものがある、此際、舉國一致は何物とも替え難い生命的條件である。だが、形式の舉國一致は益々國民不安の浪濤を高め、國民理想の昂揚を阻み、難關突破の前途に却つて暗雲を投ずるに過ぎぬ。眞實の舉國一致こそは、功利主義團體の一切を清算して、日本主義に基く安定勢力の結成の上に初めて其全貌を現はし得るものであることは明々白々の事理である。

時局協議會は實に此國家鎮護の安定勢力築成の目的の上に立つ。従つて既成政黨の清算を要求するは當然であるが、齊しく至尊の赤子たる個々の政黨員が、本來の日本主義に覺醒し來たるならば、是れ又溫き手を伸べて歡迎するに決して吝なるものではない。

時局協議會は全會員悉く如上の信念に全國忠良の國民を動員し、皇道政治の確立、純正護憲運動を日かけて直往し、渾然一如の皇道日本を完成し、悠久なる皇基を振張し、以て國難打開に向つて邁進せんことを期する。之が爲め第一着手として國內充實強化の至大障礙たる個人、民主、唯物、功利思想の上に立つ既成諸勢力清算の目的を最も速に達成し、以て皇道日本に歸

一せしめんとするものである。

時局協議會第一回會員總會

右第一回會員總會では、葛生能久が頭山滿翁の「方今邦家の危急は累卵より甚しく、朝野官民憂懼措く能はざる所（中略）、今や憂國の諸士相謀り時局協議會を設け、國體を明徴にし、協力一致君國の爲めに報效する所あらんとす。冀くば奮勵努力あらんことを」といふ熱意に燃ゆる聲明書を代讀した。

時局協議會は、その後、年の瀬も押し詰りたる十二月二十八日に、「時展協議會會務計劃要綱」なるものを發表し、その一において「時局協議會の本質」を規定し、「時局協議會は全國に亙り、各層、各部門の日本主義運動相互間に、此（軍における歩、砲、空等の諸兵科のその如き——著者）連絡を着け、相互の運動が全局的協調内に行はれ、全日本主義運動が各方面に於ける從來のバルチヂンの運動形態より脱却して、結果的に觀て統制ある有力なる一大國民運動たらしめんことを目的とするものである。従つて時局協議會の本質は飽く迄も此缺くべからざる常設連絡機關であり、同時に常設機關であることを忘れてはならぬ」といつた。これは、時協の非固定性、個人性を強調することによつて、なほ孤疑逡巡せる國家主義團體の加盟を改めて慫慂するためであつた。次

ぎにその二において「連絡機關としての活動」を敘し、三においては「協議機關としての活動」を述べてゐる。後者は主として調査部の仕事であつて、それは、政治委員會、經濟委員會、外交國防委員會、思想委員會、運動方針研究委員會の五委員會に分れてゐる。時協の世話人の顔振れは、前述の如くであるが、この時、實際の事務擔任者が定められ、事務局の事務主任に豫備陸軍中佐吉見隆治が、また調査部事務主任に豫備陸軍大佐佐藤鐵馬がなつた。後者は曾て陸軍の偉材として名のあつた人である。

調査部の運動方針研究會は、早速翌十二年（一九三七年）一月より活動を開始した。それには、世話人のほかに、今村等、今井武吉、新妻德壽、狩野敏、金子力三、吉川令三、八幡博堂、山崎常吉、近藤榮藏、寺田稻次郎、手島剛毅、赤松克麿、赤尾敏、西郷隆秀、佐野守義、佐藤慶次郎、佐々井一晁、薩摩雄次、佐藤正吾、三武錠史、柴山滿、陶山篤太郎、鈴木善一などといふ國家主義陣營の若き人々が殆んどオール・スター・キャストで委員として顔を並べた。一月十二日には、「日本主義運動に對する時局協議會の活動要領」なるものが決定せられた。それは、「根本原則は時局協議會會務計劃要綱に依るも、之が具體策として取敢えず」その活動方策を定めたものであつて、その内容は略左の如くであつた。――

- (1) 各方面の運動の現況を速かに掌握し、……資料を機を失せず提供すること。
- (2) 日本主義團體或は組合或は有力者相互間の協力一致の爲に進んで努力すること。
- (3) 各方面の運動目標、運動時機、運動方法が、完全なる相互協調に行はれ、第三者より観るときは全く唯一の一大國民運動たるの觀あらしむる迄に努力斡旋すること。
- (4) 其運動目標、運動時機、運動方法の選定が、皇道維新達成の爲に、現在の時局に照し、大局上最も效果的なる案に、全般を歸一せしむることに努力すること。
- (5) 本會の本質は飽く迄も……日本主義全陣營の常設連絡協議機關たるの本質を闡明にし、以て苟くも日本主義運動の全局を眼中に置いて之との連絡協調内に於て有効に活動せんとする分子は悉く本協議會の連絡網内のものとならざるべからざる如くし、斯くして日本主義全陣營の迅速なる強化擴大を圖ること。即ち本會の本質に特定の色彩を附して、日本主義團體内の對立團體の一たる如きことに本會を墮せしむることを嚴に慎しみ、以て本會をして眞に日本主義陣營の運動綜合機關たらしむることに努力すること。
- (6) 前項の目的達成の爲に協議會は原則として自ら運動の本體たることを避け、以て協議會其者の運動と一部の日本主義團體或は組合の運動とが相對立することあるが如き場合が決して

生ぜざる如く注意すること。

此の嚴たる限界内に於てのみ協議會は必要ある場合に、全局の運動強化の目的を以て、演說會、その他の運動をなすことを得るものとする。但、その行動は極めて慎重を要すること。

右の活動を「要機を失せず」に展開する爲に、地方連絡員を作り、出来れば地方協議會を設置することが必要とされた。また「調査部委員會一般要領書」中の一項として、「日本主義協議機關と功利主義或は自由主義協議機關との根本相異の點を相互に認識し、日本主義協議機關の好範例を貽す用意あること」といふ事項が可決せられた。

かくの如く、時局協議會は、國家主義團體間の名士を殆んど網羅し、日本主義運動統一のために絶大なる働きをなすものと世人に期待され、またその期待には根據あるものゝ如くであつた。しかるに、運動の進むに従ひ、時協内の各團體の運動方針の相違や幹部間の感情的對立等の障碍のため、昭和十二年に入りてより時日の經過するに伴ひ、漸くその活動が不隨的となつて來たのである。

三 時協反對派「大和聯盟」の結成

小林順一郎の三六俱樂部を中心とする日本主義陣營の大同團結たる時局協議會が結成せられんとするや、それに對して有力なる反對運動が起つた。それは、關西皇國勞農協議會と、愛國勞働組合全國懇話會の青年分子とである。前者には、その關東側組合を小林大佐の愛同に奪はれたるイキサツがあり、後者はその純理論より、時協の意圖する大同團結論に組みし得なかつたのである。彼等は時協成立以前より、これを以て「ファッショ獨裁政權確立の陰謀」なりとして攻撃してゐたが、いまや「公武合體反對」その他のスローガンを以て、時局協議會反對の猛運動を起したのである。皇國勞農協議會は、その機關紙「皇民戰線」を以て盛んに時協の「反動性」を爆撃し、そのために、一たん時協に参加を期待せられた有力者も、参加を躊躇し、反時協運動に加増せんとする勢ひを示したのであつた。

皇國勞農協議會派の時協反對の根據は何處にあるか？ それは一言にしていへば、いはゆるファッショ的既成團體と大衆的皇民革新團體といふ本質の異なる團體を合同せんとする時協は、不可能を強ひるものである。而かも時協の成立過程をみるに、それは極秘のうちに少數の者が策動し、その方法において大衆性を缺いてゐる。なかんづく、時局協議會は、「次期政權」への準備工作の色彩が甚だ濃厚である。従つて、日本主義大衆運動の正常的發展を庶幾するものは、かゝる：

：陰謀に反對せねばならぬといふのである。即ち彼等は、時協を以て、「反動的」なる「公武合體論」であるとなすのである。即ち、「農民戰線」によれば「……二・二六事件以後の戰線統一運動は、前期舊日本主義時代に於ける浪人型と大衆型の色別と同じく、いちゞるしく、統一されて行く陣營を色別した、それは何であつたか？ 且的にいへば……公武合體派と革新派——尊皇討幕派に色別せしめて行く動向であつた。……彼等は皇道政治を口にし、皇道化を唱ふ、それによつて日本主義陣營を自己の支配下に統一せんとするのである。それは明かに徳川幕府のとれる公武合體と軌を一にする、果たせるかな今次の大合同論の擡頭である。全日本主義陣營を打つて一丸となさんとする工作は時局協議會を構成せんとする委員の中の一部の人達によつて行はれた、それは秘密裡に運ばれ、獨裁的規約を以つて大合同を敢行しようとしてゐる。之こそ明かに、昭和の公武合體を實踐化そうとする最初の大きな計劃である。……誤れる獨善的獨裁は、明らかに大衆運動を、大衆の意思を、所謂皇民の意志を無視する處のものである。天下りの統一によつて總てを處理して行こうとする事は、大衆的運動家の承認し難い處である。明らかに成立過程を見て……人的構成を見ても、それが如何に『大衆運動の危機』であるかゞわかるのである。常任理事、理事……は大體舊型の日本主義者であり、或は世に兎角の評ある人達が混じてゐる、かゝる

人的構成要素をみたゞけても……眞實の皇民意識の上に立つて：行動し得るものでない事がわかる……玆に挙げられた人達は、日本主義のピンからキリ迄である。この老大なる時局協議時の結成の歴史的意圖は何處にあつたか？ 勿論それは……公武合體の漸進的實踐化にあるのだ」と。

かくの如き理由より時局に反對する皇農同盟の吉田賢一、總聯合關西派の今井武吉、末中勘三郎、新海員組合の松田喬平らは、より／＼協議を重ねた結果、つひに時協結成と同じ十二月十五日に、大阪において大和聯盟なる反對派の大同團結を敢行したのである。當日集まつたものには、勞働組合派としては、今井武吉、末中勘三郎、大橋治房、伊藤長光、山本龍介、三谷三平、坂本清三郎、樋口喜徳らがあり、農民組合派としては吉田賢一、西光萬吉、吉岡八十一、米田富、寺島宗一、駒井菊松らがあつた。出雲大社教副總監千家尊建も出席して司會した。結局、時局協議會反對のために大和聯盟を組織することゝなり、「一、廣く同志を求め、天業翼賛の政治的行動主體結成の爲め、國體の本義に基き、皇民大衆の實生活に即してその運動を展開する事。二、その必要上、事務所及び若干の世話人を置く事」といふ「申合せ」をなし、その世話人として千家尊建（大社教）、吉田賢一（皇國農民同盟）今井武吉（總聯合）の三名を挙げ、左の如き聯盟趣旨を決定して天下に發表したのであつた。――

大和聯盟趣旨

皇國が當面せる深刻非常時なる時局に照應して、眞に國體本義の顯揚を必要とすること今日の如く切實なるは、まさしく史上稀れに觀るところである。我等皇民は、等しく其の享けたる總てを擧げ、千歳一遇の覺悟を以て、聖事マツリコトに奉仕せねばならぬ。即ち皇國皇民皇産の理想實現の爲に、今こそその惟新なる赤子思想と奉還思想による御維新翼賛運動を、皇民大衆の實生活に即し、大衆的規模に於て政治的に展開すべく努めねばならぬ。茲に我等は建く同憂同志の加盟を希み、以て聖業翼賛の微衷を致さんとするものである。

思ふに大和聯盟は、多望ならんとした時局協議會反對の第一聲であつた。而して、それは、時協の蒙つた幾多の反撃の前哨をなすものであつたのである。

なほ昭和十一年末の大事件としては、十一月二十五日に日獨防共協定の發表があつた。社大黨始め無産黨團體は、これに批判的態度をとつたが、愛國主義陣營は舉つてこれに賛意を表した。その一例として、時協の井田盤楠の「新時代を解した日獨協定の認識」(『2600』、昭和十二年一月號)を擧げ得るであらう。

第八章 支那事變以前の統一運動

第一節 政局の動搖

一 庶政一新の要求

昭和十二年（一九三七年）に入りてより、日本の國家主義運動は、大體において、時局協議會を中心として進むべくみられた。勿論、その時協に對しては、關西の大和聯盟その他の有力なる反對者があるにはあつたが、一般的にみて、時協が全運動の中心たるべく期待せられてゐたのである。

一方、政局はどうか？ 二・二六事件の後を受けて成立した廣田内閣は庶政一新を唱へ、國民生活安定を包含するいはゆる廣義國防論を高調した。但し、その實行について國家主義者の意に満たぬ點多く、廣田内閣の誠意を疑ふの聲がしばしば挙げられた。二・二六事件によつて特に閣内に強力なる地位を占めた陸相寺田壽一大將は、一方において肅軍人事を敢行すると共に、十一

年八月、その一應の結末をみるや、九月二十一日永野海相を誘ひ、陸海軍共同案として行政改革、國民生活安定、對滿國策確立の三内容を有する庶政一新を政府に要求したのであつた。

廣田内閣は、右陸海軍共同の要求を受けて大いに衝擊を感じ、いはゆる四相會議及び五相會議を設けて、庶政一新につき議するところがあつた。右の共同案の末尾には、「議會制度」の改革に關し、「國運の進展ならびに議會の現狀に鑑み、議院法及び選舉法を改正し議會を刷新す」との條項があつたが、その具體的内容に關し、陸軍側の意見として、

一、日本の議會を現在の英國流の議院内閣制から離脱せしめ、米國におけるが如く立法、行政、司法三權分立主義を確立し、議會に多數を占める政黨が政府を組織するが如き、政黨内閣制を否定する。

二、政黨法とも稱すべき法律を立案し議會における政黨の行動範圍を規定する。

一、現在の政府對議會の如き對立抗爭を建前とした制度を改め、相互協力の日本精神に準據する、從つて議會には政府彈劾の如き決議をなす權限を持たせぬ。

一、貴族院の機能を改變し、經濟參謀本部を設置し之を衆議院に附置する。

といふ説が流布され、また、選舉法を改正して家長（戸主）乃至は兵役義務終了者にのみ選舉權

を與ふべしとの意見さへ抱懷されてゐるといふ説が立つた。

これは、議會制度の根本を否定するものとして、政黨及び政府を痛く驚かした。そこで、寺内陸相は、十一月六日の閣議において、陸相の所信は、

一、國體觀念を明徴にし我國固有の憲政の確立を希望し、議會の權限を縮小するが如き觀念は毛頭なし。

二、憲法に従ひ議會の權限を明確適正にし民意を正しく暢達する議會たらしめることを希望するに外ならぬ。

一、政治に關する意見に就ては陸海軍大臣を通じてのみ發言する從來の建前に何等變化なし。

一、巷間傳へられる議會改革に關する陸軍の言説なるものは陸軍は關知せず。

といふにありと釋明し、また、閣議散會後も左の如き「陸相談」を發表したのであつた。――

一、我國體の本義に基き飽くまで帝國憲法の神髓を發揮する如く我獨特の立憲政治發達に邁進すること。

二、帝國憲法所定の議會の權限に恪循し、その運用を適正ならしむること。

三、正しく民意を暢達し公正なる輿論と國民の智能を十分國政に反映せしめること。

しかるに政黨側は、未だこれらの釋明に満足せず、さきに設立されし議院制度調査會總會に寺内陸相の出席・説明を要求し、陸軍またこれを拒絶し、一時は兩者對立して、首相はその措置に困憊したが、結局、「懇談會」の形式をとつて陸相出席し、右の閣議における釋明と同趣旨の釋明を行ひ、且つ紛議の種となりし言説を發表せし軍務局員に對し、「適當の處置」をとれる旨を言明して、事態は收拾されたのであつた。

一方、廣田内閣は、陸海兩相より要求された行政機構改革案を作製することを迫られたが、その原案に關して、陸軍の支持する調査局案即ち總務院案と、四相會議及び法制局案、即ち總務廳案とが對立して、廣田首相をしてその裁斷に困惑せしめた。前者の中心點は、總務院の主宰者を無任所大臣たらしめ、また閣内に人事局乃至豫算局を設け、以て各省の完全なる統制をなさんと企圖するにあつた。

この行政機構改革問題は、庶政一新に對する廣田内閣の誠意を試すものとして期待されてゐたのであるが、昭和十二年一月二十一日、休會明けの第七十議會において、政友會代議士濱田國松と寺内陸相とが渡り合つて、前者の有名なる「君割腹せよ」の言辭があり、政黨と政府（軍部）との正面衝突が行はれた。

そも／＼第七十議會は三十億四十萬の「老大豫算」、日獨防共協定の締結による日ソ國交の險惡化、賴母木遞相の意氣込む電力國營案の提示等があつて、政黨の對政府意識が彌が上にも昂揚してゐたのであつた。

軍部は、かねてかゝる議會の態度を快く思つてゐなかつたのであつたが、再開日劈頭、濱田議員の言説をみて、これを不快となし、寺内陸相は閣議において解散論を主張した。内閣は取敢えず二十一日に、二十二日より二日間の停會を奏請したが、二十二日の閣議において、寺内陸相依然として解散を主張して止まず、永野海相の調停があつたが、結局廣田首相は同日午後辭表を奉呈したのであつた。

二 宇垣内閣の流産

廣田内閣の辭表奉呈の翌日、即ち一月二十四日午後八時四十分、後繼内閣の大命は宇垣一成大將に下つた。兼ねて總理たるの念願を有してゐたと傳へられる宇垣大將は、その宿志を果たすべく、政界及び財界の待望を擔つて組閣に着手せんとした。しかるに、宇垣大將は適當の陸相候補者を得る能はず、大將自身及び參謀今井田清徳らの必死の努力も効なく、死闘五日の後、二十五

日朝、宇垣大將は人命を拜辭するの止むなきに至つた(註一)。この間の事情は未だ世人の記憶に生々しいところであらう。

(註一)宇垣大將は、人命拜辭と共に陸軍大將を辭することを決意して、左の如き聲明を發表した。――
陸軍の大將は豫後備となつてもその地位を辱うしてゐる中は、この年になつても軍の前線に立つて三軍の指揮をせねばならぬ。しかるに組閣着手以來の自分に對する陸軍の態度を見るにこの狀態では三軍の指揮は到底出来ぬから辭表を提出した次第である。

三 林内閣の成立と國家主義團體の支持

宇垣大將に組閣の命下るや、國家主義團體は舉つてこれに反對した。なかんづく愛同、維新、共同青年隊等の反對運動が猛烈を極めた。陸軍の反對いよ／＼熾烈を加へ來たり、宇垣内閣の影ます／＼薄くなるや、時局協議會の建川美次中將らは、直接宇垣大將を訪問して、組閣斷念を忠告したりした。二十九日夜、後繼内閣組織の命は、全右翼陣營の待望する林銑十郎大將に下つた(註二)。林内閣は、陸相に板垣征四郎中將を、海相に末次信正大將を得んとしたが、成功せず、林内閣もあはや流産せんとしたが、結局、陸海軍の推薦する中村孝太郎中將、米内光政中將の兩

相を以て落着した。このために、組閣參謀長として内閣書記官長たるべかりし十河信二は林内閣より去つた。また政黨に對しては、「離黨」を條件とせるため、民政黨の永井柳太郎、政友會の中島知久平は得られず、たゞひとり昭和會の山崎達之輔の入閣をみたのみであつた。かくて林内閣は辛じて成立したが、政黨側とは正面から對立することゝなつたのであつた。

(註一)三十日、陸軍では左の「當局談」を發表して、政變に絡る世の誤解を解かんとした。——
今日陸軍の政治に關して希望してゐるところは寺内陸相の談話にある如く

一、我國體の本義に本づきあくまで帝國憲法の神髓を發揮する如く我國獨特の立憲政治發達に邁進すること

二、帝國憲法所定の議會の權限に恪循しその運用を適正ならしむること

三、正しく民意を暢達し公正なる輿論と國民の智能を十分國政に反映せしむること……

林内閣はこの藏相に結城豐太郎を迎へ得たことによつて一沫の人氣を得たが、成立以來、「日本獨特の立憲政治」を標榜し、「祭一致」のスローガンの下に、しきりに神文的聲明を發した。また同内閣は與黨なるものを全然もたなかつた。そこで國家主義團體においては、その大多數が既成政黨に代るべき林内閣の與黨たる意氣を示し、林内閣を全幅的に支持・鞭撻したのであつた。

林内閣は、その組閣參謀長として十河信二を迎へてゐたのをみても判る如く、大陸系の人々と

の關係が深かつた。また日本主義陣營としては、林内閣に期待する處頗る大なるものあり、同内閣の下に愛國戦線の統一を完成し、且つ維新政黨の設立を計らんと期待したのであつた。

しかるに、肝腎の中心的協同戦線體たる時局協議會の内部においては、依然として構成各團體の方針の對立、各團體幹部間の感情の齟齬等のために完全なる同一歩調をとるには至らなかつたのである。この不一致の中心點は議會主義及び大衆主義に關する意見の對立であつたとみられる。

この對立は林内閣による議會の解散、それに續く總選舉によつて激化したのであつた。

林内閣の下に再開された第七十議會は、廣田内閣辭職及び宇垣内閣流産の經緯に顧みて内省を強要せられた政黨側の自制によつて、頗るつきの不手際ながら、先づ／＼無事に乗切るべくみえた。しかるに、三月十六日に突如として民政兩黨は、勝手極まる「衆議院選舉法中改正法案」を上程し、混合改票、連座規定の緩和、第三者運動範圍の擴大、事前運動の緩和、繰上當選の廢止等を企圖した。これは政黨が喉元過ぎての熱さ忘れとして上下の非難を浴びたが、政黨は恬として顧みず、その牽制策として軍機保護法案以下政府提出の重要諸法案の審議引延しの戦術に出たのであつた。こゝにおいて政府は三月三十一日、政黨に誠意なきものとして政黨覺醒、議會政治廓正のため、斷乎として議會を解散した。いはゆる「懲罰解散」これである（註一）。政黨としては、

最後の土壇場における妥協を豫想してゐたのであるが、この「懲罰解散」を喰つて呆然たる有様であつた。

(註一) 政府發表の解散理由にいふ。――

「……最近議會に於ける狀況は極めて誠意を缺き、更に國防、國民生活の安定に至大の關係ある重要法案の進行を阻み、緊切なる時勢を澁滞せしめ果して眞に重大なる時局を認識し立憲の洪猷翼賛の誠を教せるやを疑はしむるのである。議會刷新の急務を唱へられる筈に故なしとせず、即ちこの際國民の公正なる良心に訴へ是非を天下に問ひ、よつてもつて帝國憲政の本義を顯現するの階梯たらしむると共にこの時期において、國民の堅實なる政治的自覺の確立を期待し……」云々と。

第二節 膺懲解散と議會派・反議會派の抗争

一 議會派の結束と日本政治革新協議會

國家主義陣營においては、各團體間の軋轢のために、折角成立せる時局協議會がその能率を發揮し得ざることは前に述べた通りである。時協の非活動性は、かくの如くその内部對立に主因を有することは勿論であるが、一には、それがルーズなる連絡・協議機關たる點にも原因してゐた。そこで、かゝる時協の傾向・本質に慊らざる派は、時協から蟬脱し、強力なる政治的共同闘争を展開し、その闘争過程によつて一大強力愛國政黨を結成すべしといふ考へを抱き始めた。

かゝる政治派・議會進出派は、昭和十二年一月末、即ち廣川内閣瓦解の頃より寄々協議を始めた。それは、具體的にいへば時協内の政治派たる江藤源九郎の淡交會、赤松克麿の國民協會、小池四郎の舊愛國政治同盟、入江種矩らの國體擁護聯盟、高山久藏の總聯合、橋本欣五郎の大日本青年黨等々の有志であつた。彼等は、林内閣の「祭政一致」主義を滿腔の熱意を以て歡迎し林内閣の日本主義化に全力を傾倒した小林順一郎大佐の愛同の動向にさへも不満であつた。

林内閣は二月二日に成立したが、新内閣は議會に臨む準備整はざるため、二月十日まで休會の繼續を要求した。しかるに、かゝる長期の休會を容認することは議會が自らをを軽くする所以であるとして、各派交渉會はこれを拒絶せしため、政府は出直して二月十日まで七日間の停會を奏請し、更らにその間の停會を以てするも對議會策の整はざるため、また／＼十一日より十四日まで四日間の再停會を奏請したのであつた。

かく、議會と林内閣とは最初より氣拙き對立狀態を續けた。再開後の議會は前記の如く猫の如く溫順なく林内閣に聽從したりとはいへ、その間何となく不氣味なる對立機運を孕み、解散不可避の形勢は、相當に濃厚であつたのである。

かゝる機運を看取した時協内の議會進出派は、かゝる時期に政治的足踏み狀態を續くるは不利且つ無意義なりとし、時あたかも東京市會選舉を前にして、二月二十四日、つひに日本主義政治革新協議會といふ、維新政黨確立を目的とする政治的協同戰線體を結成したのである。

政治革新協議會に参加したる團體は前述の如く淡交會、國民協會、舊愛國政治同盟、團體擁護聯合會、總聯合、大日本青年黨等々であつて、その組織は時協の如く個人加盟であり、團體加盟を避けたのであつた。その主張は大體において赤松派の理論に従つたものと推測された。――

政 革 主 張

一、既成政黨を打倒し日本獨自の立憲政治の確立を期す。

一、資本主義的經濟機構を改革して國家統制經濟機構を確立し、以て國策の遂行並に國民大衆の生活安定を期す。

一、民族解放並に資源衡平の原則に基き新世界平和秩序の創建を期す。

一、外交國策の遂行に必要な軍備の充實完備を期す。

一、一切の反國體的思想の殲滅を期す。

かゝる裡に、東京市會選舉は三月十六日に行はれ、政革系は議會進出の小手調べとして多數の候補者を立てたが慘敗に終つた。これによつて、ルーズなる聯合體の非能率性を體驗した政革は、ますます鞏固なる維新政黨結成の必要を痛感して、只管その方向に努力を傾注する決意を固めたのであつた。

二 反議會派の奮起と純正維新共同青年隊の運動

しかるに小林大佐の愛同及び吉田益三の生産黨を中心とする時局協議會の主流派は、かゝる議

會進出に反對し、純正維新共同青年隊、建國會、維新會等がこれに合流して、反議會主義運動を起したのであつた。

かゝる反議會派のうちで、一段目立つた存在は、青年層の動きであつた。さきに昭和十一年十月二十四日に、新日本國民同盟錦旗青年隊、舊愛國政治同盟維新青年隊、大日本生産黨青年部が相集つて純正維新共同青年隊準備會を結成し、越えて十一月二日、純正日本主義青年運動全國協議會成立するや、その一構成分子として加盟したことは、既に述べたところである。彼等は新日本海員組合と共に郵船會社不敬問題糾弾運動を展開し、また宇垣内閣反對運動には、愛同らと共に最も目覺ましく活動した。しかるに昭和十一年末頃より、國家主義陣營内における議會派・反議會派の抗爭漸く熾烈となり、その矛盾が表面化せんとするや、共同青年隊準備會は、不自由千萬なる準備會形態を脱して本格的なる運動を行ふため、休會明けの一月二十日の常任準備委員會において正式結成の準備を了し宇垣内閣流産し林内閣の成立せし後の二月十一日、紀元節の佳節をトして、いよ／＼正式結成大會を開催するの運びとなつたのである。

純正維新共同青年隊正式結成大會には、各團體の青年二百名内外が参加し、尊皇絶對、生命奉還、維新戦線の純化統一をスローガンとし、青年を結集することによつて維新運動の中核的組織

たらんと抱負に燃えたのであつた。當日、青年隊の隊誓及び綱領が決定せられたが、その内容は、かゝる青年運動に相應はしく、明快純乎たるものであつた。――

隊 誓

我等は軍人に賜りし勅諭の御聖旨を以て信條となし皇道維新翼賛の事に生死せんことを誓ふ。

また、その綱領は、

修理固成の神勅を奉體し皇道維新翼賛の爲左記諸項の貫徹を期す。

一、一切の反國體思想の殲滅

一、資本主義政治經濟機構の打破

一、維新運動の純化統一

といふのであつた。

正式結成なつた純正維新共同青年隊は、中央常任委員として、鈴木善一、片岡駿、奥戸足百、影山正治、關根喜四郎、白井爲雄、深澤源造、森山悟郎、三木亮孝、水口徳義、今瀬資裕、會田甚作、樺屋總一、小黑將永、大川兼一、井上國之助、大槻正秋、佐々木武雄、松下彦一、松丸松五郎の二十名を擧げた。共同青年隊は、その成立當初の事情が語るが如く、舊愛國政治同盟、新

日本國民同盟等維新政黨派を母體とし、維新政黨準備會にも代表派遣を決定したほどであつた。しかるに、青年の敏感さは、時日の經過に伴つて議會利用主義より議會ボーイコット主義に轉化し、正式結成の頃には、時協の非議會派と共に、反赤松派、反小池派の先頭に立つたのであつた。

三 總選舉戦における議會派・反議會派の對立

三月三十一日、林内閣が議會を解散するや、議會進出派の政治革新協議會は十三名の候補者を立て、大々的に議席の獲得に邁進し、その他の國家主義團體にあつても、例へば田中澤二の立憲養正會は十六名の候補者を立て、その他合計して、全愛國團體よりは四十數名に上る多數の立候補者を出した。

林内閣は、總選舉に對しては嚴正取締りを以て臨み、肅正選舉のために「自黨の一票、時局の打開」、「時局の認識、躍進日本」、「滅私奉公、政治の基調」なる三スローガンを國民に表示した。政治革新協議會は自ら林内閣の與黨を以て任じてゐたのであるが、總選舉に當り選舉對策として左の項目を掲げ、大々的に選舉戦に突進したのであつた。——

天皇政治の徹底

國體明徴の徹底化

國家統制經濟の確立による準戰時經濟體制の實施

大陸經綸の積極政策遂行

皇國團體を軌範とする議院制度の改革

行政機構の改革及教育制度の改革

醫療制度の改革及救貧制度の徹底

徹底的負債整理の斷行並當面の暫定的應急對策としての強制取立一時停止を緊急勅令を以て公布すること

財政立直し前提方策として國債並地方債の利子を年利二分に改訂すること

高度累進的財産課稅其他社會政策的課稅の制定

重要基本產業及大規模重要產業の國營並國家管理の斷行

金融國營の斷行並に貨幣制度の根本的改正

國家統制企劃に依る工業の地方分布並農山漁村の工業化

大陸移民の大規模計劃の遂行

國家總動員計劃の完成

一方、政改革反對派においてもまた白熱的選舉反對運動を展開した。愛國勞働農民同志會の牛耳る時協では、政黨排撃運動を起し、大日本生産黨また選舉排撃の聲明を發した。殊に青年分子の反對運動凄じく、純正日本主義青年運動全國協議會及びその中心分子たる純正維新共同青年隊は、選舉權奉還運動及び白紙投票運動の名の下に、全國的に總選舉ボイコット運動を行つた。その具體的政策の一例として、左に純正日本主義青年運動全國協議會の時局對策をみる。――

一、政治對策

- 一、既成政黨の解體を要求すること
- 二、民主霸道勢力の存續する限り幾度でも議會を解散せしむること
- 三、今次議會解散の理由を明瞭にし、それを強調せしむること
- 四、新政黨運動の徹底的撲滅を期すること

二、啓蒙運動

- 一、日本主義的國民啓蒙運動を果敢に展開すること
- 二、日本主義は現行議會に進出せざることを明瞭にすること

三、右の理由により議會進出をなさざると同時に、現行議會制度に於ては大政輔翼を完うし得ない國民的責務を恐懼し選舉權を謹んで奉還する事及びその精神に基く對選舉行動を執ること

以上の如き二陣營に對立したまゝ、日本の國家主義勢力は、四月三十日の總選舉に臨んだのであつた。兩者の抗争激烈を極め、全愛國戰線は、異常の混亂を來たした。昭和十年二月の神武會解散以來、國家主義陣營の底を流れてゐた議會進出派と議會反對派との對立・抗争は、この昭和十二年四月の總選舉において、つひにその最頂點に達したのである。

總選舉の結果は、林内閣の慘敗であつた。解散の意義が不徹底なりしたため大都會地の棄權甚しかつたが(註一)、民政黨百七十九名、政友會百七十五名、社大黨三十六名といふ數字で、その他中立を含む林内閣反對派は四百餘名に上り、林内閣支持派は昭和會(唯一の與黨)の十八名、國民同盟の十一名その他を合して僅かに四十餘名、愛國主義陣營一方の雄東方會も十一名を得たが、これは林内閣に反對を標榜してゐたのである。

(註一)棄權率は全國平均二割六分五厘(前回は二割一分三厘)で五分餘の増加。六大都市の平均棄權率は三割九分二厘(前回三割一分九厘)で七分餘の増加。その最も甚しきは大阪の五割一分五厘(前回は四割一

分)一割増加。東京三割九分一厘、京都四割一分四厘。最低は名古屋の二割九分八厘。

狹義の國家主義陣營では、改革のうち淡交會の江藤源九郎(再選、奈良、最高點)、郷軍同志會の中原謹二(再選、長野三區、第三位)、國民協會赤松克麿(新、北海道四區、最高點)、山崎常吉(新、愛知一區、最下位)、舊愛政の小池四郎(元、福岡四區、最下位)、椎尾辨匡(再、但し後に中立、愛知一區)、及び皇道會の平野力三(再、山梨、二位)、明倫會の今井新造(再、山梨、最下位)、立憲養正會の田中耕(新、長野四區、最下位)、長野農村更生聯盟の小山亮(再、長野二區)、即ち、改革五名、元改革一名、その他四名、合計十名の當選者を出した。東方會の中野正剛、大石大、その他中立(後に民政)の北吟吉等々も廣義の國家主義陣營に數ふべきであらう。

狹義の國家主義團體より十名の當選者を出したことは、前回の僅か五名に比して成功といはねばなるまい。獲得票數の如きも改革のみにて十萬三百二十票(十三名)、養正會は五萬三千四百二十二票(十六名)、その他十二萬五千六百九十一票、合計二十七萬九千四百三十三票を收め得た。山梨縣が平野力三、今井新造の二名、また愛知一區が椎尾辨匡、山崎常吉の二名の當選者を出したことは、特記するに足る。しかしながら社大黨が一舉にして三十六名を獲得し、最高點が比較的多かつたのに對し、國家主義陣營においては最高點者が赤松、江藤の二名、最下位當選が四名

を數へ、最下位を以て落選せしものは、政革の六名を始め、養正の十名、その他の四名合計二十名、立候補者の約半數を占めてゐるのは、國家主義運動が未だ大衆の間に理解せられざることを物語る現象として、注意すべきであつた。落選者のうち、有名なるものは政革の津久井龍雄（神奈川一區）、同陶山篤太郎（同二區）、同今村等（長崎一區）、養正會の田中澤二（群馬一區）、皇道會の稻富稜人（福岡三區）、皇國農民同盟の吉田賢一（兵庫一區、但し一萬一千九百八十一票を獲得す）、同清原一隆（西光萬吉、奈良、八千三十八票）、神洲連行會の望月源次（静岡一區）、滋賀勤勞民衆同盟の梅澤次作（滋賀、一萬一千四百十三票にて次點）等々であつた。殊に梅澤は、次點といふ惜しむべき成績であつた。

國家主義陣營の選舉成績は、右の如くであつた。社大黨の進出は、十一年二月の總選舉にもまして、愛國團體の反社會主義鬭爭熱を強く刺戟したといへよう。

一方、林内閣は、以上の如き慘敗を喫して流石に呆然たるものがあつた。そして、林首相以下諸相の屢次の強硬聲明や、閣内強硬派の進言や、また國家主義諸團體の再解散要求運動等々に拘はらず、五月三十一日、突然總辭職を決行するの止むなきに至つた。この林内閣の突如たる崩壊は、總選舉における内部的抗爭と相俟つて、國家主義陣營の戰線統一、維新大政黨結成の機運を

殺ぐこと頗る大なるものがあつた。林内閣の與黨を以て任じ、林内閣の日本主義化によつて愛國陣營の強化・再興を企圖し、議會と林内閣の正面衝突を見越して、政黨排撃運動を展開してゐたものは、こゝにその計劃の挫折を啣たざるを得ざる羽目となつたのである。

林内閣の瓦壞が日本の國家主義陣營にとつていかに大打撃であつたかは、辭職の翌六月一日に愛國勞働農民同志會がその機關紙「愛國勞働農民新聞」號外において、「林内閣終に國民を裏切る」との表題を掲げてゐるのをみても分るであらう。この號外は、「三十一日午後に於る突如たる林内閣の辭職は、如何に首相の聲明が美辭麗句を羅列するとも、……その醜惡たるや心ある國民の……を禁じ得ないところである。既成政黨勢力と正面衝突を演出し、昭和維新をしてその本舞臺に入らしめた點に於いて兎にも角にも非常時の意義を示したにも拘はらず、突如その歴史的意義を自から抹殺して、慌たゞしく退却した林首相は……永く記憶されなければならぬ」と憤激し、「退却の唯一の理由は、『苟も國內の相剋を許すべきときでない』といふことであるが、現狀維持派との『相剋』なき國家革新が在り得るや否やは小學生徒にも凡そ明確に答へられる問題である」とキメつけ、「何れにせよ、國民は林内閣の敗退を以て歴史の後退たらしめては斷じてならぬ」といつてゐる。なほ、この號外は、「維新勢力の結集に邁進せよ！」と叫び、「政府それ自體の

日本主義化を以て當面の目標とし來たつた日本主義運動の全陣營は此際總蹶起を以て林内閣の卑怯なる退却が残した戦線の缺處を即時に補填し昭和維新の戦線を先づ完備せしめねばならぬ。今こそが戦線統一大同團結の絶好の機會だ。『時協』を暫定的集合地として眞に強力なる一大維新勢力の結成にまで邁進せよ!』と述べてゐる。

次ぎに聲明は、來たるべき内閣の性質について希望を述べ、『妥協内閣の出現によつて『公武合體』派(現状維持派)の逆襲強化の危険は多分にある。この危険を克服する爲に吾々國民は林内閣の如きに多少とも信頼をかけた誤謬を再び犯すことなく眞正維新勢力の結集を唯一の目的として一路邁進の決意を固めるべきである。一切の革新勢力の大同團結——これのみが國民の對時局策である』となし、『國民の要望は依然として左の如くである。而してこれを承認しその實現に向つて努力せぬ内閣には飽くまでも吾々は反對し、それを打倒せずんば止まぬであらう』といつて、左の諸スローガンを掲げてゐる。――

一、一切の非國體的政黨勢力の打倒!

一、日本主義政府の出現要望!

一、國體明徴政策の實施に據る國民生活の安定!

一、廣義國防の充實！

一、金權獨裁政治の排撃！

なほ、愛同では、同じ六月一日、左の如き聲明書を發表して、自己の態度を天下に闡明するところがあつた。――

聲　　明

日本主義陣營は林内閣の敗退をして國家革新氣運の後退たらしめては斷じてならぬ。寧ろ此の機に當つて陣營の統一強化を敢行し以て政府の日本主義化に全力を傾注すべきである。

由來日本主義運動は左翼と對立して國家を分裂に導かんとするものであるかの如く傳へられるが、之は誤謬も甚だしきものであつて日本主義こそが眞の舉國一致の根本精神であり、その運動を通じてのみ眞の舉國一致は實現され得るのである。然るに従來の舉國一致は齋藤内閣に於て岡田内閣に於て將亦廣田内閣に於て既に充分立證せられたる通り日本國體の大義名分に據らず非國體的分子を無差別的に取入れた謂ゆる公武合體擬裝舉國一致なるが故に當然もろくも崩壊したのである。斯る擬裝舉國一致は幾回繰り返さるゝも結果は同一であつて時局を益々混沌せしめ國際危機を愈々深めるまでである。それ故に眞に時局を收拾しうる舉國一致は國體明

徴の大義名分に確乎として立ちその妨碍たる非國體的要素の排除を不斷に敢行するものでなければならぬ。この國體明徴運動を以て舉國一致を害する分裂抗争であるとする如きは嗤ふべき誤解であつて來るべき政府はそれが如何なる構成であらうとも以上の眞實を明確に把持し一觸即發の危機を眞の舉國一致を以て乗切る決意と能力とを具ふるものでなくてはならぬ。而して全日本主義陣營は此際直ちに小異を棄て大同に期し以て斯る政府の出現に協力すると共に絶えずそれを鞭撻して昭和維新の達成を一日も早く速かならしめねばならぬ。

右聲明す

昭和十二年六月一日

愛國勞働農民同志會

第三節 近衛内閣の出現

一 近衛内閣の本質と國家主義團體の態度

林内閣に對する國家主義團體の態度は、以上述べた如くである。しからば、その後繼内閣に對する彼等の態度は何うであつたか？

近衛内閣は齋藤内閣以來日本に續出した中間的勢力内閣のある意味における最後のものであるといはれた。かゝる説の當否はいま論すべき限りでないが、近衛内閣がかゝるものとして各方面の期待を擔つてゐることは争ふべからざる事實である。それは現在日本政治の「推進勢力」たる軍部の支持を得、國家主義團體またそれに支援を惜しまなかつたのであつた。

しかしながら、近衛内閣の成立當初においては、林内閣に對する彼等の期待が大であつただけに――またその敗退に對する失望が深かつたゞけに、近衛内閣の出現に對しては、必ずしも好意的ではなかつた。即ち、國家主義團體、なかんづく非議會派は、近衛政權を以て彼等のいはゆる「公武合體」的内閣となし、これに對し、冷淡なる批判的態度を以て臨んだのである。

いま左に、近衛内閣に對する國家主義陣營内の兩派の態度を知るべく、非議會派たる時局協議會の愛國勞働農民同志會及び大日本生産黨、並にその反對黨たる議會派、政治革新協議會所屬の新日本國民同盟の聲明書その他の文書の實際について考察するであらう。

二 非議會派の態度

先づ愛國勞農同志會は、その六月五日の「指令」において、「……その後の組閣工作を靜視するに及んで益々見透しの正しかつたことが立證された」ことを誇り、「要するに近衛内閣は林内閣に對する反作用として生れたものである點に疑ふ餘地はない」とし、「林内閣は非常時局の必然に導かれて徐々に吾等の主張に近づき來たり、……或る程度の改革をなさねばならぬ立場に辿りついた」といひ、林内閣後退の後を受けた近衛内閣は、「公自身が如何に革新の味方であらうとも、……その反動性は……客觀的事實の上に決定されてゐる」と斷じ、「『左翼』と同様『右翼』として危険視される吾々日本主義者陣營は一應背負投を喰つた」と述べ、「この現實を前にし、吾々は何を爲さねばならぬか？」と前提して、左の諸項目を舉示してゐる。――

一、情勢の變化に拘らず、愛同の大方針には何等變更の必要絶對になし、即ち勞働者農民勤勞

大衆の教化を通じて日本主義輿論の喚起を圖ると同時に政府の日本主義化に益々邁進すること。

二、その手段として既に展開されつゝある訪問運動を果敢に繼續すると共に、林内閣の場合に於けると同様、政府に對し國民の至當なる要望を傳達し、その達成の爲め鞭撻の勞を惜まぬこと。

近衛内閣は前内閣より一層「公武全體」色を回避することは出来ないのである。また閣内には首相はじめ一、二革新的主張を全然袖にすることの出来ない立場の者がゐる。この現状維持派にとつての弱點に巧みに執拗に喰ひ下ることが當面新内閣に對する吾々の戰術であらねばならぬ。小兒病的反對運動は策を得たものでない。

三、近衛内閣出現は日本主義陣營の統一強化をいよ／＼急務ならしめた。今回吾々が一パイ喰はされた形になつたのも實は強力な統一的活動がなされてゐないからであつて、若しも現状を續けるならば將來とも好機を常に逸せねばならぬであらう。愛同は独自の組織活動を進める間にも絶へず全日本主義陣營の統一強化を主とすべきである。

「改革」を中心として政黨を造らむとする試みがあつたことは事實であるが、愛同は日本主

義陣營内部の對立的傾向を強化するが如き組織方針には斷然反對であつて飽くまでも大同團結を要求する。然しながら大同團結は容易でなく、その眞の實現は所謂上部工作に任かせて置いたのではダメで、不斷に各地方に於ける實踐上の協力を通じてのみ可能とされるところであるが故に、愛同支部はそれ／＼の地方に於ける斯る協力の指導的中心たるべく努めねばならぬ。

四、物價騰貴を中心現象とする一般經濟狀勢には何等の變化はなく、近衛内閣の出現は寧ろ一層形勢の惡化を來たすものと豫想せねばならぬ。此際愛同地方支部は益々眞劍に大衆の生活問題を取上げそれが非國體的、功利的立場に於て社會民主主義運動によつて取上げられる危険を阻止すると共に、大衆の要望の正しき達成に努力すべきである。地方選舉戦は大體終了した。これから更に「日常闘争」の秋である。

同志諸君の健闘を祈る！

昭和十二年六月五日

愛國勞働農民同志會

愛同では、單に右の「指令」を發せしことに満足せず、更に進んで積極的に、左の如き「要請書」

を、近衛首相に向つて提出したのであつた。――

要 請 書

一、政府は國體明徴を本義とし、過去秕政の責任者たる既成政黨分子をして政治の樞機に參與せしめざる事。

二、政府は國民生活の安定並に經濟國防確立の爲め主要物價を統制し物價不足の場合に於ても價格を騰貴せしめざる爲め實効的政策を實行すること。若し物資不足を機として物價を釣上げ暴利を貪る如き者は國賊として重刑に處する事。尙政府は物資を供給する積極的產業政策を確立する事。

三、政府は農村を速かに更生せしむる實効的農村政策を樹立し直ちにその實行に移る事。

四、政府は直に勞働者の生活を保證し且つ國家の生産勞力を充實するに役立つ勞働政策を實施すると共に、物價騰貴に依つて激發さるゝ勞働爭議に善處すべく公正なる態度を以つて勞資問題の解決に當る事。

五、政府は獨占的經濟の犠牲となりつゝある中小商工業者の保護を徹底せしむる事。

六、政府は結局に於て現資本主義經濟機構が我が國體の本義に悖るところあることを確認し、

日本主義經濟制度の確立に向つて邁進する事。

七、政府は共產主義、社會主義、民主主義、自由主義等一切の反國體的思想に立脚する團體を解散せしめ且つそれらの運動を禁止すべく現行治安維持法を改革する事。

八、政府は非國體的分子の國政に容喙することを得ざらしむべく速かに現行選舉法を徹底的に改正する事。

九、政府は學校教育を改革し、國民思想の健全化を勵行する事。

十、政府は退嬰的外交を一掃し、直に東亞の平和を確保すべく強硬不動の態度を以て國際政局に對處する事。

時局重大の際内閣諸大臣閣下の御精勵を感謝すると共に右十ヶ條を勤勞國民の絶對的要望として御承認あらむことを懇請候也。

昭和十二年六月五日

愛國勞働農民同志會會長 陸軍少將 松 本 勇 平

内閣總理大臣 公爵 近衛文麿閣下

次ぎに、生産黨の對近衛内閣態度は、左の如くである。――

新内閣に對する我黨の態度

近衛内閣は成立したが、政民兩黨より各一名の閣僚を入閣せしめたる一點に於て、早くも林内閣よりすら一步後退の現状維持の本質を露呈した。

近衛公が多少にても一般世間より期待されたる所以は、公が眞に時勢を識る大器たるが故に非らずして、單に公が總理として亦大臣として未試験なりしが故であつた。然るに今、その組閣の結果を見るに、人的には廣田林内閣に閣僚たりし人物及び近衛公が新に銓衡したる少數の人物を加へたる純然たる現状維持勢力の合作であつて、革新勢力を完全に除外したる偽裝舉國一致内閣である。

斯かる内閣を以てしては、内外諸政の革新は到底期待し難きを以て、我黨は立黨の精神を愈々鮮明にして獨自の活動を行はんとするものである。

昭和十二年六月四日

大日本生産黨本部

三 議會派の態度

次に、近衛内閣に對する議會派の態度を示す例として、日本政治革新協議會の中堅團體たる

新日本國民同盟の聲明書をみることにする。――

新日本國民同盟の聲明

新内閣に對する國民の要望

現下皇國內外の時局は益々重大性を加へ國內對立相剋は恰かも維新前夜を思はしむるものであり、此秋に當り、近衛文麿公組閣の大命を拜し「凡ゆる對立相剋を排除せんこと」を聲明して組閣に着手す。現下國內の對立相剋は國內矛盾を一掃せざる限り必至のものにして之が解消は單なる人的配置等の如き彌縫的手段によつて斷じて解消さるべきに非ず。

惟ふに時局の非常時性解消、所謂國內の對立相剋解消の途は一に懸つて年來國民の翹望する所を果敢に遂行實現するにあるのみ、これ現下非常時局の客觀性とその史的意義の明示するところ、然らばその國民的要望や如何。即ち眼前新内閣の大任を拜する者、こゝに留意する所あつて夥くも左記諸項を必須條件とすべき也。

第一 新内閣の使命

一、皇國々體の本質を具現する所の眞乎 天皇政治の徹底、即ち國體明徴を徹底せしむる内閣たらざる可からず。

一、從つて日本民族當面の大使命たる皇國理想成達のための大陸經綸を遂行し國內改造を斷行せざる可らず。

第二 閣僚銓衡に關する必須條件

一、前項の使命を果すべき新內閣の閣僚は、至誠盡忠の士にして正鵠なる時局認識を有する眞の人材たらざる可らず。

一、既成政黨を代表する政黨員の入閣は、第三の條件を認識する者に非ざる限り拒絶すべし。
一、結城前藏相の（中略）留任を許さず。

第三 施政方針の三大眼目並に重要政策

三大眼目

一、天皇政治の徹底——卽ち國體明徴の具體的遂行。

二、國家統制經濟を軌範とする準戰時經濟體制の確立。

三、大陸經營の積極政策遂行に必要な國防の充實完備。

重要政策

一、帝國々體を軌範とする議院制度の改革、行政機關の改革及び教育制度の改革。

一、醫療國營並に公營制度の確立及び救貧制度の徹底。

二、労働者、農民、小市民救済及び母子保護等に關する徹底的社會政策制度の確立。

一、徹底的負債整理の斷行並に當面の暫定的應急對策として債權の強制取立一時停止等を緊急勅令を以て布告すること。

一、財政建直し前提方策として國債並に地方債の利子を年利二分に改訂すること。及び高度累進的財産課税其他社會政策的課税の制定。

一、物價騰貴に伴ふ暴利取締政策の徹底。

一、重要基本産業及び大規模重要生産業の國營並國家管理の斷行。

一、金融國營の斷行並に貨幣制度の根本的改革。

一、國家統制企劃による工業の地方分布並に農山漁村の工業化。

一、大陸移住の大規模計劃の遂行。

一、國家總動員計劃の完成。

右聲明す。

昭和十二年六月二日

新日本國民同盟

第四節 時協對政革の對立の公然化

一 對立の激化と橋本派の調停

これより先き、總選舉に五名の代議士を得た政治革新協議會においては、永年の宿望を達して意氣揚げる赤松克麿新代議士と江藤源九郎とが中心となり、日本主義單一政黨組織をいよく具體化することゝなつた。しかるに時局協議會を中心とする諸團體は、猛烈にこれに反對して政黨排撃運動の強化による戰線統一を策せんとした。而して、政革對時協の對立抗争は漸次その深刻性を増大し來たり、國家主義戰線の將來のため憂ふべき事態を招來せんとした。

そこで双方によき地位にある大日本青年黨の統領橋本欣五郎大佐及び顧問建川美次中將は痛くこれを憂慮し、國家主義陣營の大同團結のため、政革派の佐々井一晁及び時協派の前田虎雄らを語つて、調停運動に乗り出さうとした。政革側からは高山久藏及び赤松克麿がその相談に乗つた。橋本欣五郎の解決腹案は、日本主義各派勢力を結集したものを基礎とし、これに東方會、國民同盟及び政・民・社大よりの「轉向分子」を加へ、時協系もその潔癖性を棄て、この新黨結成運動に合

流し、建川美次中將を黨首とする單一維新政黨を創立するにあつたやうである。

この橋本欣五郎の妥協案に對しては、時協内に難色があつた。彼等は政黨紛碎の素志を斷じて、翻さかつたのである。加ふるに、かゝる新政黨の成功には、林内閣の支援、從つて同内閣の存続を必要條件としたのであつた。

二 全日本維新團體協同聖戰政黨排撃同盟の結成

しかるに、五月下旬には、林内閣の存在は、頗るその影が薄くなつた。五月二十四日、昭和會を解散した望月圭介が林首相に「考慮」を促し、首相も漸く辭職について考へ始めた二十八日、時協の反議會派たる愛國勞働農民同志會、純正維新共同青年隊、維新會、大日本生産黨、建國會、日本精神研究所等々は、政黨排撃を指導方針とする協同戰線體の結束を計るため、全日本維新團體協同聖戰政黨排撃同盟を組織したのである。その宣言及び決議は左の如くであつて、直接政革を對衆としてゐないが、その結成眼目は打倒政革にあり、こゝに時協の非議會主義と、政革の議會進出主義とは、依然と——しかも真正面より對峙するに至つたのである。

皇道政治道より離反せる民主主義的既成政黨並に亡國思想を根柢とする赤色無產黨は、單に存在價值の皆無なるのみならず、天壤無窮の國體を冒瀆し、國民思想上及び國民生活上に大累を貽すもの、今にして斷乎これが潰滅を敢行せずんば祖國の將來眞に憂慮に堪へず、茲に吾等は國民的至誠と情操とを以て同志相寄り相計り既成政黨並に赤色無產黨の排撃斷行を決定し、萬難を突破して所期目的を達成せんことを天地神明に誓ふものである。

決 議

一、反國體的既成政黨並に亡國的赤色無產黨（社會大衆、日本無產黨）の解消を期す。

二、皇國政治道を歪曲する自由主義思想の撲滅を期す。

三、西洋模倣の議會中心主義を排し天業翼賛の皇道議會の確立を期す。

以上の如く、改革と時協との對立が公然たる形態をとつた矢先き、その五月三十一日に全愛國陣營のホープたる林内閣が辭職したのである。改革と時協との對立にも拘はらず、否、その對立の故にこそ、橋本大佐、建川中將、江藤少將らは、單一政黨結成の希望を棄てず、六月一日には第二控室關係の諸派代議士を建川中將が招待して意見の交換を行ひ、出来れば新黨にそれらの代議士をも參加せしめんと劃策してゐたのであつた。その當日を前にして五月三十一日に肝腎の林

内閣の退却である。

こゝにおいて、時協側の反対と相俟つて、橋本欣五郎大佐、建川美次中將の居中調停による國家主義全陣營の共同戦線による大維新政黨の結成は絶望に歸し、橋本大佐、建川中將の兩者は手を引き、新黨運動を斷念して大日本青年黨独自の運動に邁進することゝなつたのである。

一方、大日本青年黨と共に政治革新協議會より敬遠されたる大日本生産黨は、六月二日、總務會を開いて、新黨樹立運動に對する態度を協議し、「維新勢力の一體化のために獨自の方針を以て積極的に活動する」ことに決定し、「現在進捗中の統一運動は幾多の缺陷を有するとは云へ十のものが五つになり或は三つになる結果、運動途中の一步前進であると認め、これが缺陷是正と大同の促進協力に努力し、黨獨自の方針を以て進む」(生産黨本部書記局ニュース)ことゝしたのである。

三 青年層の批判

以上の如き経過をとつて、時協の頑強なる非議會主義は、政革の日論見を紛碎するに至つたのである。しかしながら、この時協の非議會主義をすら手緩るしとなすものがあつた。それは、純

正維新共同青年隊に結集せる青年分子である。彼等は、時協を以て、公武合體的にして、維新運動を分裂墜落せしむるものなりといふ強硬なる聲明を發して、時協そのものに對して一矢を報ひた。これは、思想的には關西の大和聯盟（時協反對派）の影響を受けたものとみることが出来るであらう。それは、また同時に、時協の幹部派と青年派との對立でもあるのである。しかれども、この純眞なる純正維新共同青年隊そのものゝ内部にも矛盾相剋があつた。それは、主として構成各青年隊の母體の動向との撞着である。表面の華やかなだけに、青年隊の内部對立も甚だしく、六月十一日、改革の新黨樹立決定によつて、その爆發點に達したゝめに、つひに六月二十一日、内部事情の矛盾、愛國陣營内の急變、近衛内閣による客觀狀勢の變化等々の理由の下に、聲明を發して、突如解散したのであつた。これによつて、關東方面の愛國陣營は若武者を失ひ、一抹の寂寥を加へることゝなつたのである。

第五節 日本革新黨の成立

一 改革の解消と新黨結成の成功

時局協議會の非議會主義の固執と、林内閣の倒壊とのために、建川義次、橋本欣五郎らの調停運動挫折したとみるや、議會進出派たる政治革新協議會では、淡交會、國民協會、新日本國民同盟、舊愛國政治同盟などの政治團體、日本勞働組合總聯合、新日本海員組合などの勞働團體が、いよ／＼その素志の貫徹のために、新黨を結成して廣く天下に訴へることゝなつた。而して、その前提として、一應、「青年黨及び生産黨を除く」改革を解散して新黨運動を具體化することゝし、近衛内閣成立（六月四日）直後の六月十一日、改革擴大委員會を開いてその發展的解消を敢行したのである（註一）。

（註一）この改革の新黨樹立決定のため、前述の如く、純正維新共同青年隊はその内部矛盾を激發されて解散し、また、總聯合では、舊大日本勞働組合協議會（舊國社黨系）の連中が脱退した。

改革は、解散を決定すると同時に、新黨結成のために、淡交會の江藤源九郎、國民協會の赤松

克麿以下の世話人を定め、江藤がその委員長に就任した、そして、江藤代議士始め世話人の努力の結果、六月三十日、數十名よりなる新黨組織準備委員會を組織し、つひに七月八日の委員會において、七月十八日を期して日本革新黨なる新黨を樹立することが、正式に決定せられたのである。

二 結成大會の舉行

結黨當日には、全國の加盟及び支持團體の代議員四百三十名が集まり、舊政革所屬の代議士江藤源九郎、赤松克麿、小池四郎、山崎常吉の四名が顔を並べた（但し郷軍同志會の中原謹二代議士は不参加）。結黨スローガンとして場内に掲げられたのは、「天皇政治徹底」、「即時戰時國家體制の確立へ」、「資本主義打破」、「暴戾なる支那軍閥を膺懲せよ」、「日本革新黨結成萬歳」等であつた。時あたかも北支に蘆溝橋事件の突發した翌日のことであつたから、全場内には暴支膺懲の意氣溢れ、準備委員長江藤源九郎少將の挨拶にも、「年來吾人の憂へて來た非常時態は目前に在る、支那との紛争を何人が單なる紛争と見るであらう、吾等の奮起邁進すべき秋である」と結んであつた。

議事は、解消團體代表として、新日本國民同盟の佐々井一晁、國民協會の赤松克麿、舊愛國政治同盟の小池四郎、愛國革新聯盟の伊藤信司の挨拶に始まり、支持關係團體代表として總聯合の高山久藏、愛國從業員總聯盟の露久保賢治、皇國農民自治聯盟の石橋彌らの挨拶があり、續いて三木亮孝の結黨宣言朗讀があつた。それは、――

結 黨 宣 言

久しき待望の日が遂に來た。全日本主義陣營の精銳を網羅して我國最初の強力なる日本主義大衆政黨日本革新黨は茲に生誕したのである。革新日本の夜明けは正に斯の黨の生誕と共に始まることを我等は強く天下に宣言する。

今や北支の風雲は愈々險惡の度を濃くしつゝあるが、北支の問題は全支の問題であり、全支の問題は之を繞る歐米列強就中英國とソ聯とに係はる最も深き問題である。北支事變の發展は竟に對英米對ソの關係を急迫化する虞なしとせず、事態は頗る重大なりと言はねばならぬ。而も國民多年の要望たる國內維新の大業は未だ其の緒にも就かず、大衆の貧苦窮乏は日と共に深からんとするの狀に在る。此の秋において政權の衝に當る近衛内閣は纔かに舉國一致の美名に隠れ其の存在を保持するを以て能事畢るとなし、政黨財閥、自由主義言論の庇護の下に辛うじて

眼前の時局を糊塗するに止まる。廣義國防は狹義國防に轉落し、高物價は庶民の生活を徒らに窮迫し、對外危機の深化に比例して國民肚裏の心情は漸く懷疑と享樂との捕虜たらんとしてゐる。斯くして革新運動の分野は空しく非國家的社會主義政黨の蹂躪に委られつゝある。

日本革新黨は斯かる日本の現狀を打開し強靱なる國民運動の壓力によりて速かに内外の革新を斷行せんとするもの、國體を尊崇すること最も篤しと雖も假而非愛國運動の反動性に同せず、勤勞の同胞を信愛すること最も深しと雖も俗流無產黨の非國家主義に與せず、飽までも純正なる日本主義に立脚して稜威の世界的發揚と國內的光被とを期せんとするものである。

思ふに滿洲事變突發して日本主義運動の急激なる擡頭を見てより今日に至るまで時日にして幾許ならずと雖も運動の過程に幾多の迂余あり曲折あり、觀望して佇立すれば感慨眞に無限なるものがある。今次の北支事變は滿洲事變以來の、我が大陸國策の總決算を意味するものであるが、之に呼應する國內維新運動の總決算もまた必然こゝに敢行せられざるを得ない。之を行ふものは誰ぞ、即ち我が日本革新黨である。此の黨の傘下に集まるもの孰れも純忠精銳の傑士のみ、多年に亘る闘争の體驗と新しく胸裡に湧沸する敢死の決意とを以て茲に大同の陣を張る。天下何事か成らざるを憂へん、天下何物か従はざるを惧れん。

全國同慶の士よ、擧つて我が日本革新黨の旗下に來り投ぜよ！

昭和十二年七月十八日

といふのであつて、時協一派を「似而非愛國運動の反動性」といふ言辭を以て示唆してゐる。右宣言可決後、赤松克麿の説明になる綱領が可決された。その内容は、左の如くであつて、さきの改革のそれと大同小異である。――

綱 領

國體の本義に基き眞日本の顯現を期す

一、個人主義及社會主義の政治形態を排し日本独自の立憲政治の確立を期す。

二、資本主義經濟機構を改革し國家公益並に國民生活安定を目的とする國家計劃經濟の樹立を期す。

一、民族協和及資源衡平を原則とする新世界秩序の創建を期す。

一、國家保全並に國策遂行に必要な軍備の充實完備を期す。

一、日本精神を昂揚し雄大剛健なる國民文化の振興を期す。

その他、黨則並に本部財政に關する件（神田兵三）、政策決定の件（佐々井一晁）、對支問題に關

する件（津久井龍雄）、非常時國民運動に關する件、健全生活運動展開の件（倉田百三）、近衛内閣に對する態度並に第七十一議會對策の件（小池四郎）、戰時國家體制即時確立に關する件、物價暴騰對策確立に關する件（佐々井一晃）等を可決し、また緊急動議として九州の菊池勇から北支皇軍慰問の件があつた。さきに大正十年頃勞働總同盟神戸聯合會の指導者として川崎造船所ストライキに活躍し、後ある不測の事故により第一線を退いた久留弘三が司會者として大いに活動してゐたことが目を惹いた。

黨則については、格別記すほどのこともない。支部は二十名以上と規定せられた。政策は左の十項である。――

十大政策

一、日本獨目の立憲政治並に行政機構の確立

英國流の個人主義的憲政常道論及び社會主義的階級政治形態を排し議會をして大政翼賛の審議機關ならしめ政權爭奪なき全體主義政治體制を確立すること……

二、常時戰時一體化を基本とする國家計劃經濟の確立

三、日滿產業經濟一體化の確立

四、國家財政並に地方財政の根本的立直し方策の確立

五、國防の充實並に國家總動員計劃の完成

六、皇道を基調とする世界政策の確立

白色民族の國家利己主義に基く世界秩序を是正し、有色民族を解放し眞に民族協和と資源
衡平を基調とする新しき世界平和體制を樹立すること。……

七、日本主義教育制度並に教育方法の確立

八、日本主義國民文化の再建創造

九、國民體位向上のための諸方策の決定

十、國民の窮乏匡救方策の確立

小作地の國有による耕作權の確立。肥料及重要農具の國營。勞働者の最低生活基準の確保。
勤勞國民負擔の租稅輕減。中小商工業者並に農山漁村民に對する無擔保低利金融の擴大。

徹底的負債整理の斷行等。

北支皇軍慰問の緊急動議においては、

暴戾支那軍閥脅威のため日夜奮闘せらるる皇軍將士に對し、我等感激感謝に堪えず、我等舉國

一致銃後の守りたらん

七月十八日

日本革新黨結成大會

なる電文を送り、獻金六十六圓七十三錢を得た。また對支問題については――

決 議

蒋介石政權は以夷制夷の傳統的方針に立ち多年に亘り國民大衆に抗日意識を植えつけた結果、今や全支に澎湃たる抗日運動が起り、これに對し我が皇軍は正當防衛のため斷乎これに應戦し且つ對支派兵の已むなきに至つた。惟ふに我等は飽くまでも日支親善を希ふものなるが、支那民衆を煽動せる蔣政權並にこれが統制下にある支那軍閥を膺懲するにあらずんば、到底日支親善の實を擧ぐることは不可能である。蔣政權並にその與黨たる支那軍閥を打倒して支那國民を正しき東洋意識に立ち歸らしむることは日本國民の責任である。我等は對支派兵の目的を完全に達成するまで舉國一致支援の熱烈なる國民運動を展開しなければならぬ。

との決議文を可決し、戰時國家體制即時確立、物價暴騰對策確立についても、

政府は時局の推移に鑑み速かに常時戰時一體化の國家體制を確立すべし、同時に應急的物價暴騰對策を講ずべし

といふ決議文を決定した。

三 日本革新黨の内容

日本革新黨に参加したる團體は、同黨の發表によれば、「一、解消參加團體」が前述の如く、「イ、新日本國民同盟 ロ、國民協會 ハ、舊愛國政治同盟 ニ、愛國革新聯盟」の四團體であり、「二、支持並に關係團體」は、「（農）皇國農民自治聯盟、（商工）日本中小商工聯盟、（勞）日本勞働組合總聯合、東電愛國同盟、中部港灣勞働組合、愛國從業員組合總聯盟、新日本海員組合、全國製氷從業員組合、郵船BC俱樂部、日本產業軍報產會、胞愛會、勞働向上會、水道工進會、紙函工從業員組合、木舞業組合、日本織物從業員組合、（商工）東京武道具組合、（勞）日本產業報國聯盟、愛國木材同志會、帝國木材研究會等々であり、愛國勞働組合懇談會の構成分子の多くを收めてゐることが分るのである。

結黨式に決定せられた本部役員は、

總務委員長 江藤源九郎（但し後に病氣辭任）

黨務長 赤松克賢

總務委員 佐々井一晁、小池四郎、山崎常吉、高山久藏、津久井龍雄、石橋彌、神田兵三、赤崎寅藏

政策委員長 佐々井一晁 主任・西本喬

産業勞働委員長 高山久藏 主任 松下彦一

農村委員長 石橋彌 主任 會田甚作

商工委員長 小池四郎 主任 萩原勝次郎

財務委員長 江藤源九郎 主任 中島荒治郎

教學文化委員長 倉田百三 主任 稻垣稔

議員會會長 小池四郎 主任 會田甚作

選舉對策委員長 神田兵三 主任 石塚幸次郎

國民保健委員長 久留弘三 主任 伊藤信司

黨務局主事 久留弘三

組織部長 大槻正秋 機關紙部長 西本喬 宣傳部長 森本耕

青年部長 三木亮孝 庶務部長 半谷玉三

であり、そのほか中央委員として、

本部十名、東京三十七名、北海道十一名、宮城二名、新潟五名、群馬一名、長野三名、千葉九名、埼玉二名、山梨五名、神奈川十二名、愛知四名、岐阜二名、三重三名、奈良一名、京都一名、大阪十名、兵庫七名、山口二名、高知一名、福岡五名、石川一名、福島一名、合計百三十五名、

が挙げられた。また機關紙としては「日本革新新聞」をもつた。

正式結黨なつた日本革新黨は、先づ三府二十八縣に亘つて、支部及び支部聯合會を組織するプランを立て、また、東京における運動の第一聲を七月二十一日、日比公會堂に挙げたのであつた。

かくて、日本國家主義團體の約半ばを網羅して、議會進出主義を奉ずる維新政黨、日本革新黨は、その獨自の闘争を展開すべく、船出したのであつた。

第九章 支那事變と愛國運動

第一節 事變による激動

一 蘆溝橋事件の突發

日本の國家主義團體の等しく憂へてゐた國際の危機は、全く意外の方面に勃發した。それは、國內的には一九三六年（昭和十一年）二月の二・二六事件であり、對外的には、一九三七年（昭和十二年）七月七日の蘆溝橋事件を契機とする支那事變の勃發である。

蘆溝橋事件は、七月七日夜、吾が支那駐屯軍の豐台駐屯部隊が、北平西南約三里の蘆溝橋附近において夜間演習中、同地駐屯の王哲元の第二十九軍第三十八師（馮治安師長）に屬する支那軍から射撃を受けたことに端を發する。日本は、最初局地解決主義を堅持して和平方途の發見に努めたが、その努力効を奏せず、つひに七月二十七日、交渉は完全に決裂して、北支は戰雲に包まれ、ついで、八月九日、上海虹橋飛行場附近において、大山機關大尉慘殺事件起るや、戰火中支

に飛び、つひに全面的日支衝突となつたものである。

現在の日支事變が、單に蘆溝橋事件のみによつて起つたものでないことは、絮説を要しない。それは、國民政府成立そのことに遠き因を有し、近くは一九三六年末の西安事件、及びこれに發端する國共合作と、それに基く抗日政策の極端化とにある。従つて、問題を日支兩國に限るもの因つて來たるところたるや深く且つ大である。況んや、支那の背景にあるイギリス、ソ聯、フランス、アメリカ等々の諸國の存在に眼を遣る時、吾々は、問題の重大性及び廣汎性に異常の覺悟を要請されるのである。

二 國家主義團體の奮起

支那事變が國家主義團體に多大の刺激を與へたことは、いふを俟たない。事變の目的達成のためには、政治的にも經濟的にも、また社會的・文化的にも、必然に近代的國家主義への移行を招來せずには措かない。それは、好むと好まざるとに拘はらず、日本の當面する客觀的必然性である。これは、他面よりいへば國家主義團體の理想實現の秋であり、この機にして起たずんば、國家主義者たることを誇稱する意義と面目とが存しないといはねばならぬ。

蘆溝橋事件起るや、國家主義各團體は、直ちに暴支膺懲と當局鞭撻及び皇軍の慰問・激勵の運動を起し、それ／＼聲明を發してその態度を明白にした。殊に日本革新黨の如きは、事件直後に結黨式を舉行したことゝて、その結黨宣言にも北支事變（當時は未だ北支事變の段階であつたのだ）に言及し、北支問題は全支問題であり、全支問題は結局歐米列強——なかんづく對英ソ問題であり、北支事變の發展は將來において對英ソ關係の緊張を招來する可能性ありとして見透しの正しきことを示し、轉じて、國內維新斷行の必要を説いたものであつた。また結黨に當つて江藤委員長の黨員に與へた辭においても、「北支事變を契機として日本は愈々英米露の重圍に絆々として迫られてくる。又國內に於ては現狀維持派の強力な制壓の下に苦しみ悶えてゐる。生長せんとする新日本、それは二重の壓力を突破すべき荊荊の道を辿らねばならない」といふ覺悟を述べてゐる。

越えて七月二十四日、江藤委員長は北支へ視察に赴き、二十九日、天津より、政府、陸海軍部當局及び黨本部に兵力急派要請の無電を發したりして、大いに活動を示した。また黨としても、諸般の事情に鑑み、八月十四日、左の如き「對支政策三原則」なるものを發表して、事變に對する黨の方針を明確にしたのであつた。――

對支認識の根本的確立——蔣政權を打倒して正しき親日政權へ！

戰時財政經濟政策の斷行——資本主義制度を改革して戰時國家體制へ！

時局に對する國民の態度——出征兵士家族支援、國民精神の昂揚

右の三原則については、それ／＼具體的な説明が與へられてをり、殊に、第二項及び第三項については詳細なる對策が指示されてゐる。革新黨は、また、同時に、「國內思想戰」に關する指令を發表し、その闘ふべき對象として、左の「團體及び言論機關」の名を具體的に擧げて挑戦したのは、特徴的であつた。――

一、日本無產黨及び之を支持する一切の勞農團體

二、社會大衆黨及び之を支持する一切の勞農團體（特に日本海員組合）

三、××××、××其他自由主義的色彩を有する言論機關

四、共產主義、社會民主主義、自由主義の思想傾向を有する人民戰線評論家（大森義太郎、猪

俣津南雄、山川均、戸坂潤、×××、鈴木茂三郎等）

このほか、革新黨は、九月三十日には、「民族の大事業遂行に當り一切の反國體思想を殲滅」するために、國民精神總動員運動に關する聲明書を發し、一方、赤松黨務長を上海の陸軍特務部へ

送つた。

日本革新黨のほか、時局協議會の中堅團體たる愛國勞働農民同志會は、七月十三日に對支聲明書を發してその對支強硬政策を發表し、また大日本青年黨も、八月一日、當局に對して進言書を提出して、一、即時動員出兵應戰すべし。二、國家總動員の國家體制を急遽實施すしとの要請を表示し、愛國勞働組合全國懇話會も、七月十六日（註一）左の聲明書、決議及び申合せを決定するところがあつた。――

聲 明 書

暴慢なる支那は日に兇暴の度を加へ、遂に北支事變は益々重大化するに至つた。

されば全國民の一致協力を熱望されつゝある時、愛國勞働組合全國懇話會は舉國一致の精神に基き、皇國の威力を内外に發揚し、以て東洋永遠の策を樹立すると共に國民思想の統一に準據する革新政策の實現を要望し、次の如く決議す

決 議

一、共產主義者、社會大衆黨等の一切の反國體思想の殲滅を期す

一、事變を利用する暴利行爲の排除

一、各出征組合員に對し後顧の憂ひなからしむるやう、政府、勞資共に協力すること

申 合 せ

右を各組合に指令して實行を期す

昭和十二年七月

愛國勞働組合全國懇話會

(註一)この聲明書を決定した第七回常任委員會には、新日本海員組合新妻德壽、總聯合山高久藏、皆川利吉、東電愛國同盟矢ヶ崎靜馬、大谷津峰一郎、日本産業勞働俱樂部大久保秀治らが集まつた。

次ぎに大日本生産黨も、七月十七日に、左の如き聲明書を發表した。――

日支問題に第三國の干渉を許さず

支那の暴戾に對し、我國が舉國一致、皆を決して起つに至るや、從來支那の抗日方針を、ソ聯と共に背後より支持煽動し來つた英國は、俄然干渉の鋒鏑を現はして米佛を誘ひ、我國の決定的對支行動を阻止す可く、ロンドンを始め事發現地、東京、ニューヨーク、パリ等に於て種々の形式を以て策動しつゝあるものゝ如し。

英國の所期する所は、其の老成なる對支投資と其の掌中に在る支那金融機關及び之れを中心とする諸多の自國權益擁護のため、日本の對支膺懲を極力中止せしめむとするにあらむも、英國が斯く自國權益の尊貴のみを知つて、之を擁護せむが爲には支那四億民衆の眞の福祉を省みず、却つて我國が國民政府膺懲に依つて支那四億の民生を救はむとする生命的重大天職を遂行せむとするを敢へて妨害するは、天人共に許さざる功利主義、利己主義にして、東洋平和の攪亂行爲なり。

英國にして言ふが如く支那及び東洋の和平を眞に希求するとせば、宜しく東洋禍亂の根源除去に向つて協力せざる可からず。即ち支那國民政府の隣邦に對する理不盡なる挑戰態度の是正及び斯かる方針に拍車をかけつゝある背後勢力の支那撤退、換言せば英國自身及び米・露等白人帝國主義列強の即時東洋引揚げこそ、東洋平和、日支問題根本解決の第一必須前提なることを悟徹し、速かに英國自身善處するを要す。

然も英國の老獪なる、自國のみを以てしては我國の決意の動かす可からざるを知悉せるを以て、不法にも名を九ヶ國條約に藉り、米佛露等をも之れに引入れて共同干涉を試みむと暗躍しつゝあるものゝ如し。此の英國の奇怪不信なるゼスチュアと示威工作に怖れて我民族意志を寸

秒にても動搖せしむる如き分子の我朝野に一人も現はれざらむ事を望むと共に、我等は我政府の對外態度如何に拘らず、一億國民の名に於て斷然英國或は爾餘の第三國の策謀を峻拒、粉碎、擊退す可きことを誓ふ。

我對支行動は、我生命的要件及び東亞全局の安定が支那の二十年の排日教育の結果、脅かされたるに對する當然の自衛權發動に外ならず。之れに對して好意を以てせると惡意を以て爲さるゝとを問はず、第三國が不當なる干涉容喙を爲す事は第二の三國干涉、第二の聯盟干涉にして、全世界一丸となつて我れに迫るとも我等日本國民の斷じて許容し得ざる所なり。

我等は友邦英國を始め、米露佛の列強が、我國の正當なる對支自衛行動は、獨り日本の利益たるのみならず、支那四億民衆の指導を誤る國民政府の打倒を遁じて支那國家を救ひ、延いて東洋平和の基底たらしめむとする義俠行爲にして、結局歐米各國共同の利益なるを確認せむ事を要望して止まざる次第なり。

敢へて中外に聲明す。

昭和十二年七月十七日

以上の諸團體のほか、明倫會、皇道會等も、それ／＼聲明書を發表し、暴支膺懲の態度を明かにしたが、かうした國家主義團體個々の動きとは別に、各派の協同戰線運動の機運が起つた。これは、事變の性質と、國家主義團體のよつて立つ原則からみて當然のことではあるが、事變直後、三六俱樂部系の井田盤楠男、井上清純男、小林省三郎海軍中將、大日本青年黨の橋本欣五郎大佐、愛國社の岩田愛之助らが發起人となり、「暴支膺懲、國難打開舉國一致運動」が起された。そして七月十五日には發起人會が開かれ、その第一歩として、七月二十四日に對支問題有志大會を開催することに話が定まつた。その目的は、それを皮切りとして、全國民的な猛運動を展開せんとするにあつた。

七月二十四日には、豫定の如く對支問題有志大會が開かれ、各派の代表者が出席して、盛大なる經過をみた。而して、當日左の如き決議が満場一致を以て可決せられたのであつた。――

決 議

一、吾人は帝國政府をして萬難を排し支那現政權に對し斷乎徹底せる膺懲を加へしめ、苟くも我れに反抗的行動を敢てする一切の禍根を支那全土より一掃し以て速かに日支兩國民衆の康寧、東亞安定の基礎を確立し世界の恒久平和を顯現せんことを期す。

二、吾人は第三國の容喙が支那當局をして、以夷制夷の依存心を増長せしめ益々今次の事態を惡化紛糾せしむるものたることを認め、日支紛争に關し斷じて其介入を許さざらむ事を期す。

昭和十二年七月二十四日

對支問題有志大會

また時協系の各團體は、これとは別に北支事變對策懇談會を作り、七月十六日に、その委員たる愛同の小林順一郎大佐、同佐藤鐵馬、薩摩雄次、白井爲雄らは、在京國家主義團體各派を網羅する暴支膺懲國民大會を開くこととした。この大會には、その前景氣として各所に演說會が開かれたが、いよく九月二日、一條實孝公を議長とし、黒龍會の葛生能久、國體擁護聯合會の入江種矩、愛國社の岩田愛之助を司會者として、實に盛大極まりなき各派聯合の暴支膺懲國民大會が芝公園において開催された。當日、可決せられし宣言及び決議は、左の如くである。――

宣言

支那の狂暴殘虐は愈々出で、愈々甚だしく、其の罪天人共に許さざる所なり。

今や皇軍は之に對して斷乎膺懲を加へつゝあり。而して事繋りて東亞全局の安危に存す、須ら

く不動、不退轉の決意を堅持し億兆一心以て目的の貫徹に邁進せざるべからず。

吾人は茲に暴支膺懲國民大會を開き、人類共同の敵たる共產黨並に之れが傀儡たる政權軍閥其他一切の抗日侮日の禍根を支那本土より一掃し、以て日支兩國民の康寧共存と、東亞和平の基礎を確立せんことを期す。是れ皇道日本の天職にして皇國臣民の使命なり。敢て國民の決意を宣明す。

決 議

一、吾人は日支事變に當り、各種前途の多難を豫測し、億兆一心不屈不撓、以て飽く迄膺懲の貫徹を期す。

二、吾人は抗日侮日の禍源たる南京政府を打倒し共產黨を驅逐剿滅し以て東亞和平の確保と、支那四億民衆を救済するの徹底實現を期す。

三、吾人は支那要人等が慣用する傳統的甘言巧辭の奸策を警戒し姑息不徹底なる和平工作を排す。

四、吾人は第三國の容喙が、常に日支間に於ける紛糾を増大し來りたる過去の事跡に鑑み、日支紛争に關しては、斷じて其介入を許さず。

昭和十二年九月二日

暴支膺懲國民大會

三 思想戰の強調と人民戰線打倒期成同盟の活動

支那事變の進展と共に、いはゆる全體戰に關する國民の認識が深くなつて行つた。全體戰とは、いふまでもなく、軍事戰、政治戰、經濟戰、思想戰を綜合せる戰爭を意味する。これらの戰爭の諸形態のうち、その何れにおいて失敗するも、それは終局的勝利の確保を困難ならしむるものである。

思想戰は、對内的思想戰と、對外的思想戰とに分けて考へることができる。而して國家主義團結の特に留意すべきは、この對内的思想戰即ち銃後における國民思想の淨化問題である。

國內的思想戰については、事變勃發以來、政府も國民精神總動員運動を起して國民精神總動員聯盟を作り、講演に、ラヂオに、出版にも、種々苦心を拂つてゐる。國家主義團體も、大局的には、この政府の線に沿つて、對内的思想戰の戰士としての自己を認識してゐるのである。

國家主義團體の遂行する思想戰の主要目標は、國內の社會主義、共產主義、及び自由主義であ

る。別項の如く、事變以來、各無産團體は、一齊に轉向して、國家的主義傾向を示した。しかし、國家主義團體は、これを以て「偽裝轉向」と看做し、また自由主義者らの動きを目して、人民戰線運動と斷じ、飽くまでその打倒を追求せずには止まないものであつた。

十一月十五日、社會大衆黨は、國家主義に轉向した。しかるに、大日本青年黨顧問建川美次中將は、これを以て最も危險なるカモフラージュと認め、時局協議會において、社大黨と無産黨との態度こそ「戰爭勃發の當初において反戰運動を遂行する事は危險であり、寧ろ戰爭終末に於て人民の疲勞困憊を利用し之を國內戰に轉化すべきである、とのコミンテルンの戰術」を採用せるものであつて、邦家にとつて危險この上もないから、かゝる人民戰線一派の具體的倒滅運動を開始することを提案した。

そこで、時局協議會では、建川美次中將の提案に基いて、時協を中心とする人民戰線打倒期成同盟を組織し、續いてこの人戰打倒期成同盟の主唱によつて、十二月十六日に、日比谷公會堂で、國家主義各派有志の聯合による人民戰線打倒大演說會が開催せられた。場内には、偽裝轉向の社大黨即時解散、赤色日本無産黨即時解體、國際勞働機關即時脫退のスローガンが高く掲げられ、影山正治、建國會の赤尾敏、生産黨の鈴木善一、革新黨の神田兵三、總聯合の高山久藏、青年黨

の建川美次、愛同の小林順一郎らが出演した。會は、「社大日本無産即時解散要請書」及び「國際労働會議脱退に關する要請書」を決議し、これを政府に提出した。

第二節 無産團體の轉向

一 轉向の客觀的必然性

支那事變は、日露戰爭以上の大戰爭であり、その目的貫徹のためには、全國民の文字通り一體に結束せる支援を必要とする。従つて、從來の階級鬭争的立場に立脚せる各種無産團體が到底以前通りの國內相剋的存在を續けて行くことの不可能なるはいふを俟たない。

さきに滿洲事變が日本國內の社會情勢に及ぼした影響の一つとして・吾人は無産團體の轉向を擧げた。同事變によつて日本國內の政治的・社會的空氣は一變した。しかし、それは社會を全面的に動かすことが出來ず、事變前に比して微溫的なりとはいへ、各種無産團體（政黨及び勞農組合を含む）は、依然として階級的對立の原則に依據してゐたのである。

しかるに、昭和十二年七月に勃發した支那事變は、到底かゝる悠長なる態度を認容することを許さなかつた。かくて客觀的情勢に迫ら轉向をれて無産團體は徹底的轉向をするに至つたのである。

二 社大黨の急轉向

無産團體の轉向中、最も世の注意を惹いたのは社會大衆黨のそれである。同黨内には以前より田所輝明―龜井貫一郎―麻生久の一線を貫く國策派が存在してゐたが、この派は、支那事變後、ますますその活動力を増大し、黨内の壓倒的支配勢力となつた。その結果、表面化したものが、昭和十二年十一月十五日の第六回大會における轉向の公式表示である。當日全國より集まつた三百五十一名の代議員のうちには、中央の情勢に暗く、突如たる方向轉換の宣言に對して、直ちに適應し得ざる人々もあつたかに傳へられたが、この大會によつて、こゝに完全に社大黨は、最廣義における社會主義の黨より國家主義の黨に變質したのである。この社大黨の變質は、日本今後の國家主義運動にとつて重大なる關係をもつものであり、また國家主義の本質に關する研究上、多くの問題を選んでゐるのであるが、問題が餘りに生々しく今直ちに早急なる結論を下すのは差し控へることゝして、たゞ、本大會によつて決定せられたスローガン、新綱領、政策變更、及び宣言を掲げることゝしたい(註一)。

(註一)社大黨の轉向に對しては、右翼團體は一齊にこれを「擬裝轉向」として攻撃した。これに關する大

日本青年黨の統領代理建川美次中將の批評は前に述べたところである。また社大黨東京府聯世田ヶ谷支部長の吉川末次郎が、一層の轉換を要求して「社大黨解黨期成同盟」創立を發表したこともあつた。

社大黨第六回大會の會場に掲げられたスローガンは、左の如くであつて、それが既に従前の大會スローガンと色彩を異にしてゐることを人々は知り得るであらう。――

スローガン

眞の舉國一致達成の爲めに！

戰時社會政策の實現

國民經濟の計劃化

舉黨一致！ 勤勞報國

次ぎに新たに採擇せられた綱領は左の如くである。――

新綱領

一、我黨は國體の本義に基き日本國民の進歩發達を圖り以て人類文化の向上を期す。

一、我黨は勤勞大衆を代表して資本主義を改革し以て産業の計劃化と國民生活の安定を期す。
政策の變更は、左の諸點である。――

一般政策中(三)のイ、ロ、ハを削除し左記を追加す。

イ、廣義國防の徹底

ロ、通商、移民、資源利用の自由

最後に問題となつた轉向宣言は、左の如き内容のものである。――

宣　　言

軍國の秋酣にして、國をあげて殉忠の精神に燃ゆるの時、我が黨第六回全國大會の開かれた事は、誠に重大なる意義ありと信ずる。我等また奉公の志を新にし、外は皇軍將兵の武勳に酬い、内は銃後國民の請託に答へんとす。

今次日支事變の緣由並に經過に就ては、茲に絮説するの煩を避く。然れども我等はこの事變を通じて日本國民が更に大なる躍進をとげ名實共に極東民族の盟首として人類文化の向上に資せんことを希つて止まず。これ衷心より舉國一致に参加する所以である。

惟ふに、國家興亡の關頭に於て、常に和衷協力 of 精神を發揚するは、日本國民の貴き傳統にして、三千年の文化はよくこの精神の把持するところである。而して、その由つて來る原因を尋ねるに、衆と共に憂へ衆と共に喜ぶ建國精神の表はれである。これを支那興亡異變の跡と對比す

る時、民族の中より湧き上る愛國の熱源を補強することのいかに重大なるかを痛感せざるを得ない。非常時局に際し、我が黨の使命愈々重きを加ふるもの、かゝつてこの點にありと確信する。我が黨十餘年の苦節は、漸く認められて議會の第三黨となるに至つた。然し乍ら、黨の掲ぐる高遠の理想よりすれば今日の狀態は未だその序曲に過ぎない。内外を貫く革新の要望に答へ、資本主義の改革を達成し、國民生活の安定を實現するは、むしろ今後の活動に待つ。自肅自戒、舉黨一致苟も黨運動に瑕瑾あることなからしむるは、今日以後に於ける我等の任務であらう。我等がこゝに綱領を改正し、政策を現實化し、國民大衆と相携へて國難に赴かんとする所以もまたこゝに存する。

今や、大政に参畫し、國策を指導するは、我等の叫びにあらずして現實の任務となつた。各國々民大衆の蒙を啓き、國民外交の實をあぐるは、ひとり我が黨の獨壇場である。舉世の眼は我等の肩に注がれてゐる。我等の覺悟また自ら新なるを要する。

建設的言論の尊重眞！

正なる舉國一致の達成！

銃後國民生活の安定！

資本主義の改革！

こゝに重ねて決意と抱負とを披瀝し、以て時代の重責に任ずるの用意を中外に宣明する。

昭和十二年十一月十五日

社會大衆黨第六回全國大會

二 労働團體の動向

次ぎに社大黨の基礎をなす労働組合及び農民組合は如何？、先づ日本労働總同盟と全國同盟との合同による全日本労働總同盟は、事變勃發後の十月十七日の年次大會において、「遠く時艱の前途を見極めつゝ刻下の急務に應ずべき大乗的なる労働運動の基準」を左の如く「宣明」した。

一、我等は今次事變中の勞資紛争を擧げて平和と正義の手段に訴へて解決し、進んで全産業に亘り同盟罷業の絶滅を期す。

二、我等は銃後生産力の増進と産業平和を確保するために、官民共同による非常時産業協力委員會の即時設置を期す。

三、我等は現下及び將來を貫く労働國策として、労働者團結權の法認並に産業及び労働の統制の即時實現を期す。

かくの如く、全日本労働總同盟は、その支持政黨より一步早く、時局に鑑みて轉向を表示したのであつたが、轉向の限度に關しては、現在なほ社大黨との歩調が、必ずしも完全に一致せず、昭和十四年夏の分裂もその遠因はこゝにあつたのである。

全日本労働總同盟及び日本海員組合を中心とし、日本における組織労働者の約八割を占める日本労働組合會議では、事變直後の特別議會に、左の如き、産業報公の建議を提出したのであつた。

戰時體制下に於ける産業平和促進に關する建議

雇傭者は産業報公の精神に従ひ労働者は労働報公の精神を貫き戰時體制下に於ける産業平和を確保することは刻下の急務なりと信ず、政府は速に戰時體制の遺憾なき實行を期する爲左の方策を講ぜられむことを望む

一、政府指導の下に産業平和委員會を組織し積極的に産業平和を圖ること

二、労働紛議、労働爭議等に因りて産業平和を害することなからしむる爲政府は原因となるべき事象の艾除に努むること

三、労働報公を堅持する労働團體をして積極的に戰時國策の遂行に参劃せしむるの途を拓くこ

と

右建議す

日本労働組合會議の一組織單位たる同會議神奈川地方協議會においても、七月二十三日の關東地方調停官會議に、左の如き意見書を出した。――

労働爭議防止に關する意見書

要 綱

労働爭議調停法を改正し、一般産業にも強制調停を行ひ、調停と和解によつて、解決し得ざる事件に限り之に最終的裁斷を下し、以て勞費の利己的鬭爭を終熄せしむるため、夫々労働、企業、消費三者を代表する陪審員を參加せしむる産業労働裁判所を新設する事。

次に、社大黨派有力農民團體たる全農即ち全國農民組合は、人民戦線檢舉事件に若干の關係者を出したが、かゝる事態に鑑み、昭和十二年十二月二十九日に、左の如き轉向の聲明書を發表した。――

聲 明 書

我等は過去の運動方針を再檢討し小作組复合型を放棄して銃後農業生産力の擴充と農民生

活安定の爲めに、勤勞農民全體の運動に再出發せんとす。

其の第一歩として國體の本義に基き反共產主義、反人民戰線の立場を明確にせる社會大衆黨を支持し、黨支持の全農民團體との統一を許り、進んで産業組合、農會その他大衆的農民團體とも提携し、戰時戰後の農業國策の確立に積極的協力をなさんとするものである。

三 左翼派勞農團體の轉向

いはゆる社會民主主義團體の轉向表明は、大體以上の如くである。從來より國家主義的原則の上に立つてゐた日本主義勞働團體及び皇國的農民團體が戰時體制下における舉國一致、爭議の絶滅を高唱したのは固よりである。では左翼派の無産團體はどうか？

いはゆる合法左翼政黨として立つてゐた日本無産黨は、人民戰線檢舉によつて解散を命ぜられたので、轉向も何も問題とならなかつたが、この系統に屬する勞農團體は續々と轉向を聲明して、政府の戰時政策に協力することゝなつた。そのうちの主要なるものを拾ひ舉ぐれば、先づ日本交通總聯盟及びその中樞團體たる東京交通勞働組合である。この兩團體は、八月二十二日、交總常任委員會にて三反主義産業協力方針へ轉向し、「産業に協力し團體協約を結び、以て紛争議の最少化

を期すこととし、越えて十月十日の東交大會において、東交並に交總の轉換が正式化せられた。而して、その運動方針は、爭議について左の如くいつてゐる。――

從來やゝともすれば陥り易く誤解され勝ちであつた闘争激發主義的傾向を克服清算し、産業協力の指標の下に組合本來の健全なる任務に就かんことを明かにし、當面次の如き具體的活動をなすものである。

一、産業協力、市電更生の實踐

……産業協力の實踐は市電更生の重要な要素であるが、今日他交通機關の發達と老大なる負債で經營難に在る市電の根本的更生の爲に當局にも反省を求め、從來の如き對蹠的關係に於いてははたなく協力の上に立つて更生に努力する。この爲の一方法として今日當局側の設置せる市電更生審議會を充實せしめ従業員代表を參加せしめん事を求める。

二、勞働條件の維持改善、團體協約の締結

……我々は先づ今日の勞働條件を最低のものとして維持し、徐々にこれを改善向上せしむる爲に活動する。この場合生計の變動の調査、全國重要都市、大工場、進んでは諸外國の進歩的勞働條件の調査等を參考とし合理的なる改善を主張し、つとめて紛爭議の事態を發生せし

めず、目的の達成を期す。この爲に當局との間に團體協約を締結する方針を採る。

右の如く、東京交通労働組合は、事變直後に轉向の第一步を踏み出したのであつたが、越えて昭和十三年二月二十五日に再度轉向聲明を發して、その態度を更らに明確にした。次ぎに七月九日、東交は市電當局、内務省、商工省、鐵道省、警視廳等の監督各官廳の意見を叩き、その意見に従つて組合としての東交の解消は取止めるがこの點は今日なほ堅持してゐる、決意を新たにして労働報國に邁進することを決定した。而して、八月二十七日には市電産業報國會の結成式が九段の軍人會禮において舉げられた。このことはガソリン節約といふ國策の線に沿つて、市電利用者の激増した折から、日本としては重大な現象であらう。

東交と並んで長年左翼的指導精神を奉じ來たつた東京市従業員組合も、昭和十三年三月二日、方向轉換を斷行した。

なほ交通労働者關係としては、昭和十三年六月四日に、大阪市電愛國同志會が皇國勤勞同盟に加入した事實が舉げらるゝであらう。

左翼的立場に立つてゐた農民組合についていふと、例へば北日本農民組合は、人民戰線運動被檢舉者を出したゝめ、昭和十三年一月十九日、左の新行動綱領を發表して、組合の轉向態度を明か

にした。

一、北日本農民組合はわが國體觀念を基調とし國情に即したる上下協和の日本傳統の精神を以てその行動とする

一、農民自重、共存共榮の徹底

一、勤勞による生産擴充と合理的生産並に分配

一、非常時農村政策の徹底と完全なる社會立法の制定

一、合理合法の遵守と漸進的改新の遂行

一、反國家主義思想の撲滅（共產主義マルクス主義思想並に急進的破壊行動排撃）

一、國家非常時局に積極的協力し、且つ國民精神總動員の強化を圖る

一、軍備の整備と英ソの東洋侵略の防止と抗日蔣政權の打倒

嚴密なる意味における左翼團體ではないが、關東水平社が昭和十三年三月二十三日、群馬縣太田町において解散式を斷行したのも、時局に鑑みてのことである。

四 無産團體轉向の實績

右に述べた無産團體の轉向は、昭和十三年、事變第二年に入つてより、勞働組合方面においては産業報國聯盟の結成となり、また農民組合方面においては農村報國聯盟の組織となつた。こゝにおいてか、勞農團體の轉向はその最高の組織體制に到達したといひ得るであらう。また、これらの團體の轉向は、單に言葉の上のものではなく、日常の實際行動を通じて立證せられたのである。それについては、献金その他の銃後奉仕活動においても看取せられるが、なかんづく著しきは勞働爭議の激減である。即ち、支那事變勃發以前、換言すれば昭和十二年六月までは、件數一千四百五十五件、參加人員十八萬一千五百三十一人に上つた數字が、同年十二月には件數四十四件（前年同期百二十六件）、參加人員一千二十一人（前年同期五千三百五十三人）となつた。誠に驚くべき減少振りといはなければならぬ。

なほ爭議の是非については、國家主義勞働團體間にも意見が分れ、日本産業勞働俱樂部らは徹底せる勞資協調——即ち勞資一體論をとり、これに反し愛同の如きは皇産主義をとり、勞働者の闘争手段としての勞働爭議の妥當性を認めてゐるのである。

第三節 大日本青年黨における變動

一 大日本産業労働團の結成

日本における國家主義團體の二大潮流たる時局協議會と日本革新黨との間にあつて、獨自的存在を續けてきた橋本欣五郎の大日本青年黨では、事變後の八月二十二日に、その支持團體として大日本産業労働團を組織した。これは、經濟方面における黨の活動の基礎となるものであつて、黨内の労働者及び技術者を結成したものである。労働者のみの組織たる單なる労働組合とは異なり、技術者をも包括したる點に特色を有し、イタリ―流の被使用者のコルボラツイオーネの如きものである。産業労働團自身では「陛下の労働者技術者たる日本産業人としての強烈な信念の下に結合組織する」といつてゐる。その組織の基礎は、神奈川縣下の日本産業軍の一部と(註一)名古屋の中部労働聯盟とである。役員は、橋本欣五郎大佐が團長、陶山篤太郎が理事長、伊藤長光が主事となつてゐる。同團の組織的特徴は、職場主義をとらずして、住居主義をとり、「地域別組織の方針をとつて、愛國労働者の綜合的地域的結合を計る」となしてゐることにある。同團の信條

及び戰時行動綱領左の如し。

我等の信條

- 一、我等は 天皇を中心に奉戴する一大家族國家の皇民なり。
- 一、我等は 天皇の勞働者たる本分に基き日本産業の飛躍的興隆を計るものにして賃銀の奴隸に非ず。

- 一、我等は我が産業界より利己主義を排し企業全従業員の一致和樂による經營を實施す。

戰時行動綱領

- 一、勞働者の赤誠で資本家を引づれ。
- 一、出征應召兵家族に實收賃銀全額支給。
- 一、軍需工場従業員の戰時手當支給。
- 一、愛國勞働者の解雇禁止。
- 一、團員の戰時組織化及訓練。
- 一、軍需工業の收用法による國營即行。
- 一、重要産業の國家統制及國營。

一、資源國營及販賣の國家統制

(註一)日本產業軍の主力は、既述の如く愛國勞働農民同志會へ合流した。

二 統領橋本欣五郎大佐の應召出征

かくの如く、産業方面における活動の足場を得て飛躍せんとする大日本青年黨は、その秋、統領橋本欣五郎砲兵大佐の應召出征をみるこゝとなつたのである。大佐は勇躍大陸へ渡り、兼ねて現役時代に鍛え上げた野戦重砲兵團の指揮官としての腕を振つた。現地における體驗により、徹底的反英主義者となつたらしいが、しかも國內問題に對する關心は忘れなかつた。その一例として吾は雑誌「大陸」昭和十三年八月號に、橋本欣五郎會談記をみることが出来る。それによると、橋本大佐は相變らず當るべからざる元氣であつて、訪問記者の國民精神總動員の話を聞き、「さうやたらに役人ばかり増やして、いつたいどうする氣だ。僕は以前一番嫌ひなのは財閥だつたが、今一番嫌だと思ふのは官僚である。官僚ほど嫌な奴はない。偉さうな顔をして、彼等は結局何もしない。事實何もできないのだ。」：「結局支那は、日英ソ三國で分割することになると僕は思ふね。……：「僕は速戰速決主義で、長期應戰には反對だよ。君モハメットの『右手に劍、左

手にコーラン』といふのを知つてゐるだらう。あれは何も劍とコーランとを兩手にもつて進むといふ意味ではないのだ。まづ劍で打ちのめしておいて、相手が参つたといつたら、こんどはコーランを示すんだよ。』……「宣撫班もいゝ、しかしその前にまづ相手を徹底的に参らせる必要がある。特に支那人にはそれが大事だ」といつてゐる。以て、大日本青年黨統領橋本欣五郎大佐の支那事變觀を察知し得るであらう。

三 留守部隊の發展

橋本統領留守中は、同黨顧問建川美次中將が統領代理となつて、青年黨を率ひることゝなつた。中將は青年黨の量的並びに質的發展を企圖し、黨員に對し、「……日本が今回暴支膺懲に立ち上がつた目的を完全に達成しようとすれば、國內の政治と經濟の制度を青年黨が平素主張してきた様に改革するのが必要である。日本國民全體の思想も我が黨が掲げてゐる方向に向はざるを得ない。それが大日本の發展に最も適切である。……故に黨の主張をなすだけ多くの國民に訴へて出来るだけ多くの黨員と同志を得ることが急務である。そして青年黨が速やかに大勢力となり革新勢力の柱石となることを期する。……」と述べてゐる。十月十七日神嘗祭、結黨一週年の日に第一

回大會を開いたが、その時、左の如き新しき黨政策が決定せられた。

政 策

教 育

一、皇道精神の徹底的涵養 二、無政府主義、社會主義、唯物的自由主義思想及び邪教の撲滅
三、教育制度の機會均等化と公費教育の擴充徹底 四、教職員資質の向上と優遇 五、封建的
賤視觀念と民族的偏見の打破

政 治

一、元老制…… 二、華族制度…… 三、天皇政治に即應せしむべき内閣制度及び行政機構の
改革 四、選舉法の改正 イ、大選舉區 ロ、有權者年齢の低下 ハ、選舉公營と選舉肅正の
徹底 五、貴族院の改革 六、反國體政黨の解散及び政黨法の制定 七、資本家本位の諸法令
撤廢

財 政

一、相續稅 所得稅等の高率累進課稅 二、綜合財産稅の創設 三、生活必需品の消費稅撤廢
四、奢侈品の高率課稅 五、鐵道運賃、郵便料金及び國營專賣品の値下げ 六、地方獨立稅の

廢止 七、國債利子の支拂猶豫

金融

一、金融機關の國營 二、小口金融機關の普及 三、支拂不能借金に對する猶豫令の制定 四、取引所法の改正 五、高利貸の嚴罰

産業

一、生産の飛躍的増大 二、重要産業の國營（重工業、鑛業、肥料、セメント、砂糖、紙、紡績、燃料、ビール等） 三、貿易の國家統制 四、保險業及び信託業の國營 五、公益企業の國營又は公營 六、配當制限法の制定 七、産業に對する近代科學の應用獎勵 八、物價統制法の創設 九、水産業の保護統制

勞働

一、勞働者の教育養成 二、生活賃銀並に給料の保證 三、國家分擔による失業保險制度の確立 四、健康保險法の改正 五、勞働時間の制限法制定 六、飯場制度の廢止 七、勞働組合法の制定

農村

一、耕作權の確立と小作法の制定 二、農業損害保險の創設 三、開墾、荒蕪地處理強制法の制定 四、農村都市施設の均衡化 六、農民の國營的移住 七、農村の國家管理による工業化
社 會

一、恩給制の改正 二、養老年金制 寡婦孤兒年金制の確立 三、醫療の國營又は公營 四、國民健康保險組合法の制定 五、公傷者並に家族に對する國家の保護 六、特殊疾病の強制醫療
法制定

外 交

一、八紘一字の皇道外交確立 二、弱少民族の解放と其の皇化 三、亞細亞同盟の結成 四、
外交軍備の一體化

軍 備

一、國民皆兵制度の徹底 二、廣義國防 三、無敵空軍の建設 四、軍人及傷疾軍人遺族の待遇改善
イ、入營、戰傷死、廢疾兵士の待遇改善並に其の家族及び遺族生活の國家保證
ロ、
除隊兵の職業保證

右の政策中でも、なかんづく産業に關する諸項目が、戰時體制の進行と共に、漸次實現せられ

つゝあることは、注意すべきである。なほ、右第一回大會における大日本青年黨の黨員は二千六百五十一名。入黨志願者は一萬三千五百名。準黨員は二萬九千七百名。支部は五。赤誠分團八。赤誠團一。地方地區連絡事務所三十七と發表せられた。

第四節 電力國家管理案の登場と

國家主義團體の態度

一 管理案の意義

昭和十三年となり、事變第二年の新年を迎へるや、第七十三議會は、電力國家管理問題を議することゝなつた。これは、世間周知の如く、さきの廣田内閣の頼母木遞相時代より發案されてきたものであつたが、廣田内閣は、この大問題を解決し得ずして倒れた。近衛内閣は、長期應戦といふ立場よりするも、統制經濟の強化を強要せられてゐることは、いふまでもない。また一つには、政治問題として頼母木遞相時代よりの懸案たる本問題を何とか片をつける必要に當面してゐたのである。

電力國營問題は、國防整備の必要上、「豊富低廉」なる電力を供給するといふことよりも、統制經濟の強化——即ち重要産業の國有化といふより廣汎なる點よりして、重大視すべき問題である。

換言すれば、それは今後起ることあるべき一聯の重要諸産業の國有化の第一歩といふ點に、問題の重要性が存するのである。

二 國民大會の開催

近衛内閣の永井柳太郎遞相の電力國家管理案は、頼母木案よりすれば、確かに一步退却であつた。國家主義團體は、擧つてこの點を非難した。(但し、「帝國新報」の如く反對する團體もあつた。これは、同社の特殊なる地位に基くのである。)しかるに、この一步後退せる永井案に對してすら、電力資本家側の裏面における反對運動は甚だ熾烈なるものがあり、案の運命は必ずしも樂觀を許さなかつた。こゝにおいてか、國家主義團體は、起つて猛烈なる電力案支持運動を行つた。

二月二十七日には、日本革新黨青年有志三十名が午後五時よりピラ十萬枚を各方面に撒布し、また十名の突撃隊が同夜青山會館において催された政・民合同院外團大會に出向いた。一方、三月十七日夜には、日本革新黨代議士その他各派の電力案賛成代議士の組織せる「電力國家管理案期成同志會」が、日比谷公會堂に演說會を開き、後これを「國民大會」に変更して、革新黨所屬の代議士山崎常吉、赤松克麿らが、鈴木正吾、吉植庄亮、椎尾辨匡、小山亮、道家齊一郎らの諸代

議士と共に熱辯を振つた。二月二十七日のビラ及び三月十七日の決議文の要綱は、左の如くである。

一、國家總動員法によりて全國民の永久武裝は成る！

二、戦争の勝利と國民生活の安定は總動員法によりて確立す！

三、皇國飛躍の國民的大行進！

この鐵蹄下に現狀維持派を蹴散らせ！

昭和十三年二月二十七日

日本革新黨青年有志

決議文

我等國際情勢の重大危機に鑑み國防の完璧と國民生活安定の基礎たる電力國家管理の即時斷行を期す。

昭和十三年三月十七日

電力國營斷行國民大會

三 各愛國團體の支持

次ぎに、この電力案に關する國家主義諸團體個々の態度は何うであつたか？ いまこれを具體的に知るために、これら諸團體の發表せる文獻を左に掲げる。蓋しこれらの文獻は、電力案支持運動の理論的根據を示す資料といふべきものである。さきに指示した賴母木案に對する愛國勞働組合全國懇話會の聲明書（昭和十一年九月十一日發表）を併せ讀めば、興味更らに深きものであるであらう。――

愛國勞働農民同志會の聲明

電力管理案に對する我等の所信と態度

不公平なく勇躍して總てを捧げよ！

戰時國力の統制は平時の統制とおのづから其趣を異にするものがある。曠古の難局に直面した皇國民は今や戰時體制強化の爲めに、凡ゆる方面に於て、此戰時統制に應ずるの用意がなくしてはならぬ――否單に消極的に之に應ずるのではなく、各々が積極的に此統制下に入り、其統制強化に協力するの覺悟あるべきである。之が爲には各部に於ける利害問題の取扱は自然第二

義的となり、全般的目的達成の爲めの局部の犠牲は各々其局部にある者が、義勇奉公の精神を以て進んで欣諾するの慨がなくてはならぬ。勿論其際に於ける義務の負擔は成し得る限り國民に平等公正ならしむることに努むべきも現實の問題としては夫れは程度問題以上たることは出来ない。特に第一線に忠死する勇士及び其家族の負擔する義務の大きさには國內に於て之に比肩すべき多くのものはないのである。

要するに義務負擔の不公平に對し、各自が不平を言ひ始めたならば國內は却て混亂せん。結局に於て統制強化の爲めには、全國民は恰も斯かる第一線勇士の如く他を顧みることなく、常に自ら持つ所の總てのものを何等の不平なく皇運扶翼を念願して全體目的のために勇躍して捧ぐるの心構へを皇國九千萬の同胞全部が把持することが戰時體制強化の根本基礎要件である。朝野の有力者は此際みづから之が先頭に立ち、全國民に其活模範を示すことにして頂きたい、是れが吾等の第一の願望である。

全體觀に立つて國家理想に邁進せよ

戰時有形無形の全國力統制強化の實現に方りては特に全體觀に立脚して各部門の利害は常に之に従屬せしむることにしなければならぬ。例へば一つの經濟問題統制法可否の論争を過度に

激化せしめて政界全般の統制を破壊せんとするが如きことは禁物である。斯かる行爲は其部門に關して、如何に相當の理由ありとするも、是は恰も一兵科の者が其兵科的着眼に固執して敵前に於て敢て軍全體の統制を紊り之を弱化せしむるのと同類である。此事は戰時體制下の國民としては特に慎むべきことであらうと信ずる。現在第一線に於て全軍の將士は作戰指導の可否如何に拘らず欣然として悉く進んで其統制下に身命を捧げてゐるではないか。

國內問題は之れ程迄に成らずとも各自の心掛けとしては之を理想として邁進したいものである。殊に況や斯かる際に於て一部門の統制問題の可否の論争が表面美辭を弄しても實は當事者或は當事者自體の利害觀念を出發點としてゐるものであつたとしたならば而も其人々が國民の範たるべき財界、經濟界、政界の中堅有力者の大部であつたとしたならば、皇國の爲に眞に痛歎措く能はざるものがあらう。

皇國の財界、經濟界の要人、又之れと利害相通する政界の大部が此非常重大時局に際しても斯くの如く、尙ほも自己に不利なる統制或は自己の不合理と信ずる統制を大局的見地よりして欣諾の心構がないとするならば實に由々しき大事と謂はなくてはなるまい。

反省すべし 此臆面なき利害闘争

現下電力管理問題を繞る業界要人の言動並に之れと利害相通する財界、政界要人の言動は、まさに此憂ふべき状態を呈し議論の乾く筈なき電業經營の技術的問題の論争に全般を没頭せしめて大局觀を失し斯かる局部の利害問題を以て敵前に於て大政争をも醸さんとしつゝある有様は、到底吾等の見聞に忍びざるものがある。過去幾十年の間思想的に國を過らしめ、國內に於ける幾多悲しむべき事變の禍根たりし元兇的思想を彼等は此際に臨んでも尙ほ臆面もなく忠勇なる全國民の前に展開しつゝあるかの如き感に打たれざるを得ない。吾等は決して事を好むものではない。然れども斯かる重大時局に直面して斯かる有様は到底默視する譯には行かぬ。依つて先づ禮を盡して斯かる人々に衷心よりの反省を求め相共に戰時全國民の動員と其統制強化に協力を懇願する。

『官僚獨善』を盾に業者の自己の撞着を見よ

戰時の國內統制強化の實現の爲には、詔命を奉じて政務施行を擔當する政府の斷乎たる處理を前提としなければならぬ。従つて戰時政府は多少の無理のことでも斷乎押し通し得る位に強力のものなるべく又全國民は斯く強力ならしむることに協力すべきであらうと信ずる。

即ち官僚獨善を排するの口實の許に政府の此強力なる出動と其統制を排するは甚だしき自己

矛盾である。

抑々過去に於ける官僚の弊は、單なる制度の弊ではない。主として官界要人の養成を甚だしく誤つた結果である。依つて此際に於ては官吏任用令を改正して、官僚人の本質を十分に是正することは頗る急務なるも、之を理由として官の強力なる統制を拒否せんとするが如きは明に無政府思想に通ずるものがないではない。戒心を要する。

思ひ切つて處斷し戰時體制に邁進すべし

吾等は社會主義者の如く經濟統制即ち官公營の如き聯想を有するものではない、又經濟革新即官公營の如きことを考へてゐるものでもない。吾等が維新を叫ぶは政治、經濟、教育、外交等其總てのものの指導精神を、皇國體の本義に悉く立脚せしめ、制度の如き形の問題は全く之に従屬せしめて其革新を要望するのである。功利主義、自由主義的觀念をもつて政治を左右し、これを腐敗せしめ來れる過去の一切を清算せしめんとするものである。

産業人、財界人、政界人、官僚等々が悉く皇國體の本義に目醒め過去の功利的唯物論的指導精神より百八十度轉換して共に虚心坦懷に相協力して事に當り常に最善の途を講ずるならば、官、公民營各々其處を得て、長短相補ひ遺憾なく皇運扶翼の爲に協進し得るに到るであらう。相

共に私心なきが故に意見の相違はありとするも貴重なる協力を破るが如き私的鬭争はなきに至るであらう。併しながら斯かることは現在に於ては、單なる理想目標であつて腐敗其極に達したる過去の情力下に於て急速に現下の非常時局を打開せんとするためには過渡的に思ひ切つたる處斷も相當に必要であらう。

殊に四十億圓を超過する大資力を擁し偉大の力を以て最も神聖なるべき皇道政治に携はる者を全面的に亘りて隠然腐敗せしめ來れる最大なる禍根の一たりし電力業は事業そのものの技術的考慮を離れても此際其過去の責任者より取上げてこのおそるべき禍根を一掃し政界肅正の資となすの必要があらう。吾人として今日に及んで過去の責任者の言ひ譯、或は改心に耳をかすためには彼等の隠れたる道義的罪惡が年月的にも又本質的にも餘りにも多大に過ぎる。

殊に況んや國民生活と最早分つ事の出来なくなつた電力業の如き公共的大工業は本質的にも公共化すべきであつて、他の一般事業の如く政府の單なる監督下に於ける民營に放置するといふが如き事は必ずしも首肯出来ないものである。

凡ゆる妥協排撃 政府案絶對支持

前項の理由に依り吾等は今回政府の現案になれる電力管理案には必ずしも同意してゐるもの

ではない。寧ろ其不徹底を責むるものである。併しながら前述來の大局的見地に立つて、之れに對する反對論者の過般來の功利的言動を更に重大視してゐるものである。彼等が今日、自己の威力を信じて第二義的理由をかざして敢然政府と戦ふと到る處に豪語しあるが如きは斷じて許さるべきことでなく吾等の特に憤懣に耐えざる處である。斯くある以上吾等は重大職責ある現戦時政府に向つて其嚴たるべき權威保持の爲に一寸たりとも退却せざることを要望する。斯かる場合に於ける中央權力の威嚴失墜の影響する所は内外共に實に甚大なるものがあることを忘れてはならぬ。此意味に於て吾等は最早現政府案の妥協的修正を許さず、絶対に之を支持せんとするものである。

右聲明する

昭和十三年二月

愛國勞働農民同志會

大日本生産黨の「電力案に對する態度」

多年懸案の電力統制案は頼母木通相以來幾多の迂余曲折を経て遂に現内閣に依り今次第七十三議會に提案さるゝに至つたのである。抑々電力國家管理の問題は準戦時體制確立上不可缺の

問題にして支那事變發生以前既に決定解決すべきであつた。

然るに今日に至るまでこれが解決を見る能はざりし所以のものは一つに電力財閥の功利的、非國家的反對を押し切り得ざりし歴代内閣の非革新的現状糊塗主義と利害因縁關係の惡弊に依るものと斷ぜざるを得ない。

吾人は現内閣が反對と相剋を覺悟の上で該案の通過實現を企圖する決意に對しては一應の敬意を表するに吝なるものではないがその内容に對しては甚だ之を不滿とせざるを得ないのである。即該案の内容を爲す電力管理法案、日本發送電株式會社法案、電氣事業中改正法律案等を通觀するに、その原則は依然民有國營に置き、何等維新的政策を含有せざる骨抜き法案なりと斷ぜざるを得ない。

若し眞に現内閣が反對、相剋を覺悟の上で革新政策の斷行を意圖するならば何故に萬障を排して明確徹底せる根本的革新方策を提出し、且つこれが貫徹に萬全を盡くさざりしや。

本黨は既に結黨當初より電力國家管理の急務を提唱し國體の本義に基く『國有國營論』』『皇有國營論』を強調請し來つたのである。

皇國體の原理よりして特に電力問題の如きは斷じて營利の對象として私有化さるべきではな

此の意味に於て吾人は皇道經濟確立の根本條件としては金權奉還を目的とし、電力に關してはあく迄國有國營の原則に立脚せる眞統制の實現に向つて猛進し來つたのである。

又水力の開發事業は國家産業の動源にして國力の興亡を左右する重要な基力である。故に一條の河川と雖も雨量と地勢とを考慮しこれを國家産業に活用せねばならぬのである。

然る一會に社の營利、一局部の利權としてこれを許可利用せしめ、國家の活勢力を壟斷せられ運用力を著しく減殺する虞れありとせば國家の重大なる損失と言はなければならぬ。

水力は天與のものにして國力の動源なれば民間の自由に委せず國有國營の主旨を以て開拓すべきものである。

幸ひ皇國は水力に恵まると天賦の國家なれば電力を國家産業に活用し國運の發展と人類の幸福に貢獻せしむべきである。

若し夫れ現内閣が之をしも實現し得ずとするならば、本黨は維新奉行の聖使命遂行の上に於て重大なる決意をしなければならぬものと思考する。

更に電力財閥の諸公にして若し利己私益にのみ踞踏して皇國の大局をも省みず、敢て非違を

貫かむとするに於ては、神威照々必ずや憂國同胞の徹底的糾弾の標的となるであらう、而して國民たるもの宜しく政府案の足らざるを補ひ一意至誠奉公の信念を以て進むべきである。

内外正に重大、國內維新の緊急なるの秋、一切の利害私情を超越し、億兆一心萬民戮力以て革新の大道に精進せむことを。

右敢て滿天下に聲明す。

昭和十三年二月一日

大日本生産黨

日本革新黨の「聲明書」

近代戰の科學的進歩は、國防の根本方針として、平戰時一軌化計劃の下に國家の全力を最も有効且つ綜合的に統制發揮せしむることを要求して已まない。従つて國家總動員計劃の遂行こそは、年來一日の遲滯を許さざるものがあつたのである。然るに歴代内閣の無能無責任なる、遂に今日まで之が實現に努力しなかつたことは眞に怠慢といはざるを得ない。

幸にして、現内閣は、今期議會に之を提案せんとしてゐる。今之の要綱を見るに、綜合的單一根據法として、寔に要諦を盡したものである。惟ふに全國民中一人として反對あるべきでな

い。

然るに既成政治勢力乃至財界方面にあつては、自利我慾に急なる、既に政府に向つて之が不提出を要望し、或は骨抜的修正を希望してゐると聞く、何たる非國民的心事ぞ！

今や、支那事變は、英ソを背後勢力として長期抗日を決意せる蔣政權と其等軍閥の討滅を期して戦ひ抜かねばならない秋が來た。更に事變後の經綸に遺憾なきを期すべきのみならず、今後の複雑なる我が國際關係に鑑み、一日も速かに戰時國家體制の確立を急務とする今日、何の論議の餘地あらんや、政府は宜しく牢固たる決意を以て絶對無修正通過を期すべきである。

本案の成否如何は、實に年來國民の翹望已まざる國家革新に對する礎石の成るか成らざるかの分水嶺をなすものである。故に全國民は舉つて之が反對勢力の紛碎に當らねばならない。我が黨員一同は、あらゆる一切の手段を盡して本案成立に協力せんことを期するものである。

右聲明す

昭和十三年二月八日

日本革新黨の「聲明書」二

日本革新黨

第七十三帝國議會の重要法案の一つたる電力國家管理法案其他が政民兩黨の修正案により電力會社を利し、國家の負擔を大ならしめ、且出資價格の不當なる水膨れを招來せしむるに至りたるは電力國策の將來に多大の暗影を投じたるものと認む。政府又度々不退轉を國民に聲明せるに拘らず、此の種の根本的修正に同意せんとするは吾人の了解に苦しむ處である。我黨は此際極力政府原案を支持して政府の猛省を促がさんとするものである。

昭和十三年三月七日

日本革新黨の「要請書」

日本革新黨本部

議會々期將に盡きんとするに當り貴族院に於ける電力管理案の審議を見るに、私利に走り國益を忘れたる俗論の恣に壓倒する處となり、殊に公正會(註一)の態度たるや特に許し難きものあるを痛惜せざるを得ず。もし假りに公正會の強いて主張する所に従ひ配電をも包含せしむるとすれば、新會社の資本金は優に三十數億に上るべきは明白なり。之全く難きを強いるもの、名を案の修正に藉りて、體よく電力管理案を葬り去らんとする卑劣極まる陰謀たらずんばあらず、況や配電を國家管理するも何等新會社を利する所以に非ざるは勿論、直接民衆と接する事

業を國家管理するの得策ならざるは言を俟たざる所、苟も貴族院議員たる者の篤と熟知するにも拘はらず、強いて之を強調せんとするは是が非でも本案を葬り去らんとする電力業者の憎むべき意圖を努めて代辯せんが爲めに外ならず。

政府は宜しく本案提出の本意に鑑み、斷乎彼等を膺懲するの毅然たる決意をなすべきものなり。

敢て要請す。

昭和十三年三月二十四日

日本革新黨

(註一)公正會には、革新黨の對立團體たる瑞穂俱樂部(舊三六俱樂部)の幹部が存在す。

勤王維新青年隊の「聲明書」

今や日本が東亞の安定勢力として、その崇高なる民族的歴史的使命を遂行すべく、之れに反噬挑戰し來れる蔣政權に對し、徹底的に膺懲の斧鉞を加へ、更に背後にありて不斷に極東の和平を攪亂しつゝある英・ソ二大勢力を支那全土より驅逐掃蕩し、以て東洋恒久平和を確保し、進んで皇道アジア聯邦の一翼として明朗支那建設の聖業を達成せんとして列強の重圍に陥り、

未曾有の對外危局に當面せる秋、國內諸機構の根本的革新による綜合國力の充實強化と、無敵國防の確立とは、焦頭爛額の急務にして、これが實現と否とは、皇國の安危を左右し、アジアの興廢を決すべき重大問題と謂はねばならぬ。

曩きに、庶政一新を標榜せる廣田内閣が、電氣事業の本質的使命と、その國家的重要性に鑑み、之れが實現を企圖せる『電力國家管理法案』は、今次事變の發生に伴ひ、倍々その急務性を確信され、現内閣は、戰時經濟體制確立の國家的要請に應じ、再び之れを今期議會に提出するに至つた。

該法案の如き革新政策の實現は、當面せる對外危局を克服し、皇國本然の世界的使命を達成する爲めに必要な國內整備の斷行を聲明せる現内閣が飽く迄その目的の貫徹に努力すべきものであり、之れに對する銃後國民の全副的支持こそは、酷寒の大陸に、野戰攻城奮戰力闘しつつある皇軍將士の勞苦に報ひ、尊き殉國の英靈に應ふべき所以にして（中略）、皇道經濟樹立の見地よりすれば甚だしき徑庭を有する……彌縫策なりと雖も、維新經濟體制の全的確立への過渡的任務として、全國憂國の士の即時これが實現に協力邁進すべき課題である。（中略）

今や大君の大御稜威の下、皇軍の歩武は敵首都を攻略し、謬妄不逞なる反噬をなし來りたる

支那軍閥並に現政權は、邊境に遁逃屏息し、防共親日、新興支那生誕の黎明を贏ち得たりと雖も、これらの背後にありて東洋の平和を蹂躪し、第二のスペイン化を策謀せる英・ソ白赤二大帝國主義の極東侵略政策の銳鋒は、これが傀儡たる蔣政權を驅つて長期抗戰の妄圖に出でしめ東亞禍亂の元兇やうやくその相貌を露出し來らんとする時、これら兩勢力の魔手を粉碎して四億民生の康寧を保持し、支那をして本然の姿に復歸せしめ日支共存の實を擧げ、皇道文化を四海に光被せしめんとする人類史未曾有の轉換期にして、しかもアジアの運命累卵の前夜に直面し、（中略）青年の熱血を沸騰し國難克服に死を賭して直往敢進せんとするものである。

右聲明す

昭和十三年一月二十八日

中央青年俱樂部

勤皇維新青年隊

第五節 日本革新黨のその後の活動

一 黨組織の整備

昭和十二年七月に結成した日本最大の愛國「政黨」たる日本革新黨は、その後、着々と運動を進め、日下九月には「戰時公益統制の第一歩」として「生命保險國營化の斷行」を要望し、次いで十月十五日には、「社會大衆黨に與へる公開狀」を發表して、社大黨黨員大衆に訴ふところがあつた。また、組織活動も着々と進み、同年十一月三日には革新黨の「中央部隊」としての「東京支部聯合會」の結成大會が舉げらるゝに至つた。大會は「一、戰時國家體制即時確立。一、蔣政權打倒、支那民族解放。一、暴戾英ソ勢力擊滅。一、銃後日本魂總動員」のスローガンを掲げ、「戰時運動方針」、「皇軍慰問使派遣」等々十四件の議案を終了し、役員として、會長倉田百三、副會長小笠原靜雄、栗山力、書記長森本耕、幹事磯祐知、皆川利吉、新妻德壽、三木亮孝ら十六名、評議員野口榮治ら三十六名を決定した。越えて昭和十三年二月十二日には京都府聯合會が組織せられ、三月十七日には副聯合會長（聯合會長空席）を菱野貞次、幹事長を邊見爲男、書記長を佐々

木民三郎とし、その他の専門部長をも決定して陣容を整備した。

二 フィリッピンへのメッセーヂ

革新黨はまた、支那に、江藤源九郎委員長を始め、赤松克麿、西本喬等々を派遣して皇軍慰問、特務部の應援等々に努むるところがあつたが、昭和十二年十二月二十七日には、總務委員小池四郎代議士を國民使節の資格においてフィリッピンに派遣し、左の如きメッセーヂを比島大統領及び比島國民に送るところがあつた。――

メッセーヂ(註一)

親愛なる比島の獨立の將來に關し、我日本は異常の好意ある關心を以つて常に幸多かれと祈つてゐるものであります。日本は今聖戰(註二)を戦ひつゝあります。諸君は今次の支那事變をその對岸から正視して、共產主義を撃滅せんとする日本、東洋有色民族の骨までしやぶらうとする白魔英國を、はち切れる程の實力を以て土俵の外に寄り切らうとする(註三)颯爽たる日本に我が事の如く聲援と拍手とを送るべきを、吾々は期待してゐました。處が事實は誠に意外です。諸君の有力な新聞の多くは、斯うした大局的な雄大なる意圖を汲取る事を忘れ、反つて日

本が後進支那を侵略するものと見て取り、今の支那の運命が變ては明白の貴國比島の運命なりとして、日本の敗北後退を祈り、或は日本が支那に事を構へた以上武力的にも經濟的にも日本は當分支那以外に力を用ゐる餘力がないだらうから日本の比島攻略は少くも二十年は先きに延びたとして僅かに喜んだりしてゐます。この事實は將來とも運命を共にすべき東洋獨立兩民族の間柄として誠に不可解千萬な事でもあり、亦悲しむべき事でもあります。

日本は世界の共產化を人類の不幸なりと確信してゐます。アジアの資源と文化とを東洋民族の協力によつて開發發展せしめ從來の如く白色人種の驅使する水牛たるに甘んじてゐた最大の屈辱を拭ふ爲めに(註四)、日本は力を以つて立上つたのです。更にかゝる聖戰の先頭に立つて戰車となり、爆撃機となるものは(註五)、一億の人口と近代の實力を整備した我日本を措いてないと堅く信じます。支那がこの信念を輕蔑し執拗に排撃したればこそ、今回の事變が起つたのです。其處に何の侵略、何の帝國主義がありません。この信念に双向ふものは洋の東西を問はず、その何國たるの別なく、全力を擧げて打ち碎いて行くには日本は斷じて躊躇するものではありません。

聞く處によるとマニラの民主主義同盟(註六)は日本を侵略國なりとして、之れを排撃すべし

と決議されたさうです。その事は論ずるに餘りに小なる問題ですが、諸君に心から勧告したいのはデモクラシーの再検討です。デモクラシーは斷じて貴國の如き後進民族の新興發展(註七)に役立つ原理ではありません。日本は既にデモクラシーを揚棄しました(註八)。個人や階級の利益を捨て去つて、先づ全體の力を強化しつゝあります。

吾々の信念を理解して頂く爲めには兩者直接の接觸以外にはありません。吾々は進んで貴國を訪問しませう。そして又諸君の陸續たる來朝を心から歡迎致します。來つて親しく雑音なしに吾々の眞意を體得して頂き度く敢て閣下並に諸君に告ぐる所以です。

昭和十二年十一月二十四日

日本革新黨

(註一) To the President and people of the Philippine Islands と題するこのメッセーヂの英文テキストが、日本革新新聞(昭和十三年一月一日)號に發表されてゐる。それによれば、英文と邦文とは必ずしも一致してゐないところがあるやうである。

(註二) a holy war

(註三) ...forcing Great Britain to give up her past evil practices of exploiting Orienta
Yellow races...

(註四) は單に Believing that the resources and civilization of the Orient must be expanded by the efforts of the Oriental peoples, Japan has risen to remove the Occident's influence out of Asia となつてゐる。

(註五) は、單に To undertake this holy war... となつてゐる。

(註六) The Democratic League of Manila...

(註七) "your country which has to make new racial progresses and expansions...."

(註八) の一句は英文には缺如。こゝと次ぎの一句とに當るところは、It is necessary to forget individual or class interest and to unite to strengthen the power of the whole となつてゐる。

三 國民總動員法案に對する態度

第七十三議會の國民總動員法案に對しては、國家主義團體は、勿論、滿腔の賛意を示した。日本革新黨は、いふまでもなくその例外でなかつたのみでなく、進んで該法案に對する賛成の理論的根據を積極的に示したのであつた。即ち革新黨は、國際情勢の緊迫が總動員法の即時發動を必要としてゐると説き、「政府は議會に於て、總動員法案は即日發動するが、運用は今直にこの事變に適用せずといつたが、工業動員法、資金統制法等に代る部分は既に繼續的に發動適用されてゐる

のである。だが、これだけでは叙上の國際情勢に對應した適切なる措置とは認められず……今日より之が準備にかゝることが絶対必要である。物的動員にせよ、人的動員にせよ、國家總動員計劃の實施は、そら戦争だ、そら事變だと騒ぎかけてから施行得るものでなく、十分の調査と準備の下に徐ろに動員すべきものである。それ故に、總動員法案にして誤謬を含むとすれば、それは平時と戦争を一元的に取扱はずして二元的に取扱つたといふ處にあるといひ、「總動員の施行が必然に維新を促進する」所以を説いて、「……されば、好むと好まざるとに拘はらず、總動員計劃の即時施行は現代文化の無上命令であり、國際情勢も亦その促進を要求してやまないのである。然るに、幸ひなるかな總動員法の施行は、同時に國家維新の促進となるのである。こゝに永年翹望された夜明が来る。即ち總動員法の施行は積極的には、物的及び人的資源の開發調整となつて、生産及び配給機構の全的統制並に擴充、人間能力の適能採用並にその養成が開始されると共に、消極的には社會病弊の芟除が行はれずにはゐられない……（中略）かくして初めて『生きた政治』を布くことが出来るのである。總動員法本來の精神は、飛躍的國家體制の確立にある。しかも、この體制確立の基礎工事は、窮乏國民の救済より着手されねばならぬ。こゝに皇道維新の要諦が有するを覺える」と述べてゐる。

四 新黨運動への體勢

第七十三議會も終はり、櫻咲く春ともなつたので、四月十日、日本革新黨においては、麹町公會堂に擴大中央委員會を開いて、重大時局に對處する運動方針を議することゝなつた。中心問題の一つは、「革新的一大政治勢力の結成」——即ち新黨問題であつた。全國より參集する中央委員百三十名、江藤委員長の「告辭」、久留弘三の一般活動報告、大槻正秋の組織報告、神田兵三の選舉報告、中島荒治郎の會計報告等々の内容よりなる本部報告、小池四郎の議會報告、佐々井一晁の時局情勢報告等々があつた後、赤松克麿の説明によつて「當面の運動方針」の件を議し、左の如き内容のものを可決した。——

當面の運動方針書

今や國家は未曾有の重大時局に直面し、外に對しては大陸政策を遂行し、内にあつては國家體制を全面的に改革すべき必要に迫られてゐる。大陸政策に於ては、皇軍の忠勇果敢なる行動によりて抗日容共政權は日々その運命を締められつゝありといへども、今後の建設工作に至つては極めて多難なる前途を思はしむるものがある。思ふに對外政策と對內政策とは外面的には

二つなれども實質的には一つである。即ち強大なる國力と高度の文化とを有する國家體制を以てするにあらざれば、到底徹底したる對外政策を遂行するは困難なるが故に、一切の國策は第一次的段階として國內改造より出發せざるべからざるは論を俟たぬ。而して國內の現勢を見るに、現状維持派と革新派との二大勢力は依然として對峙狀態を繼續し、政情は混沌たるものがある。若しこのまゝの政治的貧困狀態を以て推移せんか、國家の前途誠に深憂に堪へざるものがある。斯くの如き國家の現狀に當面して、革新を志す我等の第一に要望する所のものは、國家革新の推進力としての一大政治勢力の結成である(註一)。この新勢力の出現により、混沌たる現狀を打開し、立憲的過程を通じて國家體制を自由主義より全體主義へ移行せしめ得ることを確信する。今や新勢力の出現は時代の必至的要求となつて現はれつゝあるが、我等は此の要求實現のため積極的促進運動に努力すると共に此の新勢力の進歩性と健全性を確保するため有らゆる精神的用意を有しなければならぬ。茲に於て我等は責任の重大なるを痛感する。我等は只漫然と他動的に新勢力の出現を待望すべきでなく、むしろ最も正しきものが生れ且つ最も正しくそれが發展すべく大なる役割を演じなければならぬ。この觀點に立ち我等は次の方針を當面に於いて採るべきことの妥當なるを認むる。